

山 岳



LXXVI

好日山荘

田に田に、心は冬山。

まず、行きたい山を探す。自分好みの山を見つける。

あとは登りたいという欲求から、

自然に具体的な計画が生まれてくるものだ。

初めての冬山は、北八ヶ岳あたり。

初雪の便りも届いたという。

エーデルワイス・マークの

海野治良(東京・銀座) **好日山荘** 大賀寿二(大阪・福岡)

全日本登山とスキー用品専門店協会加盟

■東京銀座店 東京都中央区銀座3-5-7平104 ☎03(561)3600・(567)9031・スキーストック☎03(561)0966
■大阪店 大阪市北区曽根崎1-2-8F530 ☎06(364)0933代 〇梅田店 大阪市北区曽根崎2-7-2F530 ☎06(315)7985代
■セルシー店 豊中市千早中央(セルシー1階)〒565☎06(833)0123 ■大阪三越店 大阪・北区三越新館2F ☎06(203)1331代
■福岡店 福岡市博多区須崎町1-1 ☎092(281)3440・(291)6211

山
岳

第七十六年

山岳 第七十六年 目次 (一九八一年度)

イタリヤの山の本……………	フオスコ・マライーニ	一
ラファイル・ダニバガシヴィリイのインド・ビルマ、 その他のアジア諸国の旅・一七九五—一八二七	(牧野文子・訳) 金子民雄・訳	三
カンチエンジュンガ北壁(一九八〇年春)……………	川村精一 坂下直枝	四
——無酸素登頂の記録——		
厳冬期バルンツェ峰登頂(一九八〇年)……………	北海道大学 山岳部・山の会	六
パンワリ・ドワールとヴァスキ・パルバット(一九八〇年)……………	中江啓介	四
ガネツシュ・ヒマールV峰(一九八〇年春)……………	長尾 悌夫	一〇
ラムジュン・ヒマール北稜(一九八〇年春)……………	柏木恒造	一七
ジユトマル・サール登頂(一九八〇年)……………	杉本忠男	二五
アマ・ダブラム北壁初登(一九八〇年秋)……………	福島比佐雄	二四
シヴリン北壁(一九八〇年)……………	藤田正幸	二〇
☆ ☆ ☆		
遊戯三昧……………	戸田直樹	二九

人間テイルマン・その生涯

田口二郎 一四七

上高地の一夜

池田常道 一四〇

——ノエル・E・オデル氏に聞く——

☆

追悼

大木 操氏 (中村純二・春田俊郎)、小池新二氏 (島田 巽)、吉阪隆正氏 (関根吉郎)、磯野三郎氏 (池田知幸)、松本節子氏 (山崎金次郎)、三谷忠一氏 (梅木秀徳)、西山正二氏 (大森薫雄)、滝浪善一氏 (山本朋三郎)、井田英彦氏 (立花種則)、長尾幸七氏 (中島正夫)、若林祐治郎氏 (望月達夫)、武藤清次氏 (河上鏡治)、鈴木祐幸氏 (藤原隆太郎)、武藤 晃氏 (森田 茂)、Thomas Rago 氏 (三辺夏雄)、村上金吾氏 (村上 力)、竹中 昇氏 (牧野内昭武)

一七一

☆

図書紹介

三田幸夫著『わが登高行』(織内信彦)、望月達夫著『折々の山』(川崎精雄)、G.B. Schaller 著『Stones of Silence』(児玉 茂)、H.R. Fletcher 著『A Quest of Flowers』(春田俊郎)、S. K. Deinen 著『カラコルム探検史』(吉永定雄)、金子民雄編『ヘディング著書目録』(東節義美)、高木泰夫編『ヒンズークシユ、カラコルム研究誌』『ヒンズークシユ、カラコルム登山探検誌』(岩坪五郎)

二七三

会務報告 (一九八〇年七月〜一九八一年六月)

三〇四

英文梗概

卷末

写真・図版

イタリアの山の本に関するもの

写真 6 枚

ダニベガシヴィリイに関するもの

図 C 1 (a) ~ (b)

カンチエンジュンガに関するもの

写真 P 1 (a) ~ (e)、図 C 2 (a) ~ (f)

バルンツェに関するもの

パンワリ・ドワールおよびヴァスキ・バルバットに関するもの

ガネツシュ・ヒマールV峰に関するもの

ラムジュン・ヒマールに関するもの

ジユトマル・サールに関するもの

アマ・ダブラムに関するもの

シヴリンに関するもの

フリークライミングに関するもの

ノエル・E・オデルに関するもの

追悼 写真——大木 操氏、吉阪隆正氏、磯野三郎氏、松本節子氏、三谷忠一氏、西山正二氏、

滝浪善一氏、井田英彦氏、長尾幸七氏、若林祐治郎氏、武藤清次氏、鈴木祐幸氏、武藤

晃氏、Thomas Rugo 氏、村上金吾氏、竹中 昇氏

写真P 2 (a)、図C 3 (a)

写真P 3 (a) } (d)、図C 4 (a) } (b)

写真P 4 (a) } (b)、図C 5 (a) } (b)

写真P 5 (a) } (c)、図C 6 (a) } (b)

写真P 6 (a) } (c)、図C 7 (a)

写真P 7 (a) } (d)、図C 8 (a)

写真P 8 (a) } (e)

写真P 9 (a) } (g)

写真1枚



イタリアの山の本

フォスコ・マラーイーニ

イタリアの文学の中に山が現われてくるのには、二人の偉大な人の名を挙げなければなりません。その一人は、一
二六五年から一三二一年まで生きていたダンテです。そしてもう一人は、一三〇四年から一三七四年まで生きていた
ペトルルカです。ダンテが確かに山に登ったかどうかはわれわれに分からないのですが、恐らく彼は若いときから、
人里離れた山に登ることを試みたに違いありません。ダンテの書いた『デイヴィーナ・コメディア』邦訳名「神曲」の
第二部の煉獄篇、これは浄火篇と訳されているものもありますが、その篇の第四章の一三行から三三行中の山の登り
坂などについて書かれたものに、ダンテはきつと山に登ったのに違いないと思われる表現がされています。たとえ
ば、いろいろ書いてある山の登りの中で、最も険しいところを形容して、ダンテはこういっています。

岩だらけのところをわれわれは登った。

そこはどこもかしこも険しく、辛うじて人間が通れるほどのもので、

その険しさは、足ばかりでなく手も足も使わなければならなかった。

と、こう詩人ダンテは、とても険しく登りのむずかしい、チムニーのよじ登りを試みるときの感じを、的確に表現しています。

一方ペトラルカのほうは、彼が確かに山登りをしたことが分かっているのでして、一三三六年四月二六日に、南フランスのデルフィナートにある「風の山」という名の山の頂上に立ったことが知られています。その山は、せいぜい一九〇〇メートル位の高さの山ではありますが、その時代には、これは大したことだっただであらうと思われまゝ。中世の人は、山は悪魔や化け物の住んでいる恐ろしいところだと、そう思っていました。ペトラルカは、この馬鹿馬鹿しい迷信の障害を乗り越えたばかりでなく、彼の生きていた時代に、何世紀も先んじて大自然に触れ、彼のものとなつた生々しいその経験から、風景の美しさについての思考を彼は作品に表現しています。この登攀のあとまもなく、ペトラルカは彼の山行の詳しいことをラテン語で手紙に書いて、一人の友人に送っているのです。この手紙は有名で、それで彼の登山のことがわれわれに分かっているのです。

また一三一三年から一三七五年まで生きていたボツカッチョの書いたものの中にも、山でのことを取り上げているのを、われわれは見つけることが出来ます。但しこの作者は、その当時の迷信や幻想をそのまま伝えていっているのです。

ですが一四五二年から一五一九年まで生きていたレオナルド・ダヴィンチは大変違つていて、彼の限らない好奇心は彼を各方面に、その探究心を押し進めさせましたから、画家で設計家であるのと同じ程、科学者でもあつて、山にも興味を持っていたのでした。いくつか彼の覚え書があつて、それによると彼の登つた山が思い当たりまゝ。確かバース山、すなわちモンバースといひます。それにいつ登頂したかは分からないのですが、たぶん四六三三八メートルのモンテ・ローザ山麓にある低い山のことなのでしょう。あの有名な彼の絵の「岩窟の処女」や「モナリザの肖像」の背景ばかりでなく、レオナルドの多数の絵には、崖とか荒涼とした自然に寄せる偉大な中国の画家にも匹敵する情熱がうかがえますし、それに山の風景を、彼が驚くばかりよく知っていることが、その絵の中に示されています。

また一六世紀に、非常に興味深い、そしてこれは恐らく唯一のものと思われる山の記録が残されています。それは一五〇四年から一五七六年まで生存していたフランチェスコ・デマルキという人が、一五七三年に、二九一四メートルのグラン・サツソに登頂したときの登攀について詳細に述べてあるものです。この山は、アブルツツオ州のアブルツツイ山塊の中心にそびえていまして、アッペンニーノ山脈中の最高峰です。同様の他の人の記録に、やはりグラン・サツソに、これは一七九四年に登頂したのがあります。この記録は、オラツィオ・デルフィコという人が書いたものです。

一八世紀末には、誰もが知っているように、ヨーロッパで、自然や山についての新しいことがいろいろと詳しく報道されました。文学のほうでは、一七二二年から一七七八年まで生きたルツソーのような人たち、科学では一七四〇年から一七九九年まで生きたデ・スツスールのような人々、画家では一七七五年から一八五一年まで生きていたターナーのような人々は、古典の世界のものからも、中世のものからも、すっかり異なった新しい光の中で山々を眺めた人々によってもたらされたロマンチズムによって、その大部分が活気づけられた広汎ないろいろなムーブメントの最も輝かしい先端をゆく人たちでした。

一八五四年には、イギリス人のウィルスがウエッターホーンに登ったということがあつたりして、本当のスポーツ的な活動としてのアルピニズムの本格的なこれが始まりとなりました。そのころまでに、アルプスの山々が沢山登られてはいましたも、それらはいつても、科学的探検であつたり、または地勢、地形を实地に見て、それを知る目的のものでありました。ウィルスのこの登行は、一つの山の頂上に上がるということを本当の楽しみとした最初のもの、またいいかえれば、最初の山岳登攀の一つと考えられます。

一九世紀の中ごろといえますと、イタリア人の民衆一般のエネルギーは、そのほとんどすべてが、自国が外国の占領から自由になること、そして半島が一つの独立国家に統一されることに向けられておりました。一八七〇年にロー

マが占有され、そしてこの永遠の街に首都が移され、一つの長い苦しい歴史の経過を経て、それから完全な幸運がこれに続きました。この困難に満ちた騒然とした十年位の間、イタリアの若者たちは、自分たちの山を探検する時間もなければ、そういうことに心を向けることも出来ませんでした。その代わりにイギリスのアルピニズムは、このときその黄金時代を迎えていました。そして、スイス、フランス、ドイツなどが、かなり早くからこれに続きました。

そういう時代であったのですが、一八六三年の末に、一八二七年から一八八四年まで生きていたクインティエーノ・セツラの功績で、クラブ・アルピーノ・イタリアーノ、すなわちイタリア山岳会が創設されたのが思い出されます。この人は、国の高官であったばかりでなく、アルピニズムに情熱をもやした人で、しかも強いアルピニストでした。そのイタリア山岳会の始まりから、会の会報が一八七〇年から一九一〇年まで発行されました。これはちょうど、日本の明治時代（明治三年から四三年）に当たります。この会報には、イタリアのアルピニズムに関する大きい企てなら、何でも豊富に、そのすべてが載っていました。一八八二年にイタリア山岳会は、「リヴィスタ・メンシール」、すなわち月刊誌の発行を始めたといわれています。これは今日でもいまだに活気があって、しかも一〇〇年も続いています。考えられることですが、こんなに長い時代のうちには、本文、挿絵その他の多いときもあれば少ないときもありました。ですが全体としてみて、連続一〇〇巻は年によって一年に二度の月刊ということもあって、一〇一卷位なのですが、アルプスでのもの、またカラコルムやヒマラヤ、アンデスなどの他国の山でのものについても、イタリア・アルピニズムの活動はすべてこれに載っています。ちょうど大百科事典のようなものになっています。一八八二年から一九五四年までのイタリア山岳会の「リヴィスタ・メンシール」の大変よく出来ている一般索引が、P・ミケレッティ編で一卷にまとめられて出版されているのを思い出します。

イタリア山岳会の出版のことを話していて、また別に、やはりイタリア山岳会の重要な文献を集めた「イタリア山岳案内」というのが継続出版されているのを思い出します。これは一九三四年に始められた全集でして、これが完成

しますと四九巻になるはずで、全イタリアの山々をそれに網羅することになるでしょう。アルプスはもちろん、アツペンニーニ、シチリアの山々、それにサルデーニヤの山も、イタリア全山が含まれます。図と写真とをふんだんに入れて、どの山の登攀にも完璧な構想が得られるようにするものです。今のところ、もうすでにそのうちの三三巻が出版されています、それらは、モンテ・ピアンコ（＝モン・ブラン）が二巻、アルピ・ペンニーネが二巻、モンテ・ローザ、それからドロミティが八巻、それにイタリア半島、アルピ・アプアーネ、グラン・サツソなどに関したもので、特に重要なものが既刊されています。

イタリアで本格的に山の文学といえるものは、ガイド・レイが彼の傑作の「イル・モンテ・チェルヴィーノ」（＝マッターホーン）を出版した一九〇四年に始まったということが出来ます。この有名な著作は、各国語に翻訳されました。この著作は、アルプスでの最も美しいこの山の登山史についての精密な記録であるのと同時に、各ページに、真正正銘の诗情にあふれたものが、アルピニズムの感情が、崇高な筆致でつづられ解説されています。一八六一年から一九三五年まで生きていたガイド・レイは、人間のいろいろな心の動きを、あるときは悲劇的に、あるときは壮観に、またあるときは感動的に、この尋常でない山の征服に読者が同行出来るように、不思議な方法で物語るすべを、彼はよく知っていたのでした。

一八九七年から一九一一年までの間に、当時のイタリア王の従兄弟でアブルツツイ公のサヴォイア・ルイージ・アメデオの探検や登山が、数多く、いろいろとありました。常に豊富な成果をもたらすよう組織されていたアブルツツイ公の探検行や登山行の話は、ただ単にスポーツ的であつたばかりでなく、科学的でもありました。そしてその行動は、医者、フィリップポ・デ・フィリップピによって書き残されました。このフィリップポ・デ・フィリップピという人は、後に非常に有能な地理学者に変わった人です。当時のイタリアの山岳文学のうちの主なもののいくつかは彼のものです。アラスカの「セント・エライアスへの探検」は、一九〇〇年にミラノで出版され、「北極探検」は一九〇二年

に出ました。中央アフリカの「ルーエンヅリ」は一九〇八年にミラノで、「カラコルムと西ヒマラヤ」は一九一二年にボローニヤで出ています。

デ・フィリップは、それ在一九一三年から一九一四年の間に、非常に重要なカラコルムへの探検隊を組織しました。このときの企ての報告書は、第一次世界大戦のせいで発行がずっと遅れて、ようやく一九二四年になってからボローニヤで出版されたのですが、題は「ヒマラヤ・カラコルムとトルキスタン支那へのイタリア科学探検隊の歴史」というのでした。このときの探検の科学成果については、大冊で一五冊ものものが、一九二三年と一九三五年の間に出版されました。これは、バルテイスタン、カラコルム、それに現在では新疆ウイグル自治区といわれているところなどについての地理、地質学などの百科事典をなしているものです。

デ・フィリップの最も有能な協力者は、地理、地質学者のジオット・ダイネツリでした。彼は、一九一三年から一九一四年へかけてのデ・フィリップの探検隊の科学部門の報告書はかなり多くの部分を書いた著者でもあります。ダイネツリは、そのうえ、深く探索して、その地方にたびたび大胆に探検行したことを彼の著述の中で物語っているものに、一九二四年にフィレンツェで刊行した「カラコルムの国々と人々——西チベットでのキャラバン生活」という図入りの二大冊本があります。これは本当に残念なことなのですが、デ・フィリップとダイネツリ、それに、彼らの沢山の協力者たちが、大変な情熱を燃やして幅広い沢山の目標について調査、研究したものが、すべてイタリア語で書かれているのです。そのために、その多くが、いわば世に隠れたままになっていることです。つまりヨーロッパの他の国々の言語ではあまり知られていないのです。それで研究や探検の成果のすぐく沢山のものが、何年も何年も、国際的なアルピニストにも地質学者たちにもほとんど知られずにいるのです。

やはりこの同じ時代に、C・カルチャーティ（およびマリオ・ピアチェンツァ）の重要な著作の「カシミール・ヒマラヤ」が一九二四年と一九三〇年に出版されましたが、これは一九一三年の輝かしい探検行に関係のあるものでし

て、この探検行のときに、七〇八六メートルのクン峰の登頂征服があつたのでした。その時代としては、これは非常に重要な企てでありました。

一九世紀の終わりから二〇世紀の始めの間に、ヴィットリオ・セツラの莫大な数にのぼる写真の活躍がありました。このセツラは、イタリア山岳会の創立者のクインティノー・セツラの従兄弟です。このヴィットリオ・セツラは、アブルツツイ公の探検隊にもたびたび同行したばかりでなく、たとえばダグラス・フレッシュユフィールドのような当時の偉大なアルピニストたちの探検隊にも同行しましたし、世界の著名な大きい山々のすばらしい記録を白黒写真でわたしたちに残してくれました。彼の撮影した写真は、今日もなお、ときどき出版されています。彼の写した写真のネガのコレクションは、ピエツラ市にあるイタリア山岳会の「フォトテカ」という写真博物館に、他の山々の写真の沢山の材料と一緒に保管されております。

一九一四年から一九二一年、一九二二年の間は、またまたイタリアの若人たちのエネルギーが、戦争という出来事や、それに続く政治闘争のほうに向けられていました。この悲劇的な時代のものでは、本当に記憶に残る山の本としては、たぶんこの人のものだけではなからうかと思われませんが、パオロ・モネッリの「空に向く靴」〔訳注〕というの一冊あります。この本の中で著者は、山岳戦での彼自身の経験やオーストリアでの捕虜のときの経験を、深い人間性をもつて、生き生きとした筆致で書いています。

一九二〇年から一九四〇年までの二つの戦争の間のほぼ二〇年間というのは、各分野に、イタリアのアルピニズムが輝かに花開いたのが分かります。その中には、西アルプスでの岩や氷の大登攀のクラシックなものもあれば、ドロマイトでの岩登りもありまして、中でもテイタ・ピアズの登攀、リツカルド・カッシンの、エミリオ・コミチの、ま

（訳注）山岳兵の靴先が太陽のほうに、すなわち空に向くということは、戦死を意味する。第一次世界大戦のときの山岳部隊での慣用語であつた。

たはジュスト・ジェルヴァズッテイの、ガブリエーレ・ボツカラッテの、そのほか多数の登攀がありました。この短なお話の中で、その名は並べきれない位です。

そして数多くのこうした山の活躍が、山岳文学の豊かな開花に反映しました。その中には研究とか認識、批判などの段階のものもあれば、個人的な思い出をつづったもの、または幻想的に書いた本もあるというふうにいるろでした。そのうちの興味あるものを挙げてみますと、一九一四年にトリノで発刊されたアドルフォ・ヘスという人の「アルピニストの心理についての分析」は、何故われわれは山へ登るのか、とか、困難で危険で、しばしば生命さえも危いのに、そして積極的に何か価値のあるものが得られるというのでもないのに、多くの男や女を山にひきつける魔法のような不思議な力は一体何なのだろう、という、常に当面する今日的なテーマについてのものとして、どこの国でも出ているこの種の本の一冊です。またこの時代の多数の著者のうちに思い出される人に、「彼らは山を語る」という山岳アンソロジーを出したアントニオ・ベルテイがいますし、それにドロミテイ案内では、ジウゼッペ・マッツォッテイがいます。この人は山への愛着と軽妙なユーモアとを混ぜて一つにすることに成功していて、彼の教冊の本は、今日でもいまだに大変読みやすいものとして読まれてつづけています。このマッツォッテイの著書のうち思い出されるものに、一九三一年の「モンテ・ローザ山塊の庭」、やはり一九三二年の「歩いた山」、一九四六年の「山への紹介」、同じく一九四六年の「アルピニズムと非アルピニズム」、一九四八年の「大山壁」などがあります。

また偉大なアルピニストでもありましたし、なかなか達者な著述家でもありましたのは、ガブリエーレ・ボツカラッテでして、記憶に残る一番美しい何冊かのうちの一つに、一九三九年ミラノで出版された「山での長居としばし」というのがあります。非常に生き生きとしたジャーナリストであるヴィットリオ・ヴァラーレという人は、特に彼の書いた多数の記事を一冊にしたものが広く一般の人々に読まれ、アルピニストの世界を知らせることに貢献しました。それから一九六五年には、ミラノで、「一九二九年から一九三八年までの第七級の戦い」というのを出版しまし

た。

純粹の山岳文学といえますか、物語とか小説とか、日記その他そういったものは、イタリアでは、フランス、スイス、ドイツなどでそうしたものが幸運な目にあっている程には、うまくいっていないのです。けれども二つの大戦の中間の時代に思い出されるそうした本の著者が、何人かあるにはあります。そのまず第一に、もともとはドイツ語を話すアルト・アディゼ人(衆)の一人のルイス・トレンカーをここに挙げましょう。高地アディゼ地方では、ドイツ語とイタリア語の二カ国語が話されています。彼は有名な俳優でアルプス・ガイドで、そのほかいろいろのタレントなのです。彼の本で一番知られているのは、ドイツ語で書かれた「燃える山」という本でした。ですがイタリア語で書かれていて、一番知られているのは、一九四九年出版の「山のわれわれ」という彼の著書です。その他の人で名を挙げますと、アッテイリオ・ヴィリリオがあります。この人は、アルプスやアルピニストのいろいろな題材で小説や物語を沢山書いて、すごく成功しました。一九三〇年代一九四〇年代には、一八五八年から一九四四年まで生きていたジューリオ・クジの何冊もの著作にめばしいものがありました。クジは、登山家で哲学者で神秘論者で、それに詩人で、変わった性格の人物として、ラテン語系とゲルマン語系との両方の世界に通じている人でした。その特に目立つ彼のロマンチズムのせいで、恐らくヴィリリオに最も近い人だと思われます。クジは、ジュリー・アルプスの並ぶ人ない歌手でした。ジュリー・アルプスというのは、全アルプス山脈の一番東にあるアルプスで、彼の愛したトウリエステからそう遠くない山々なのです。

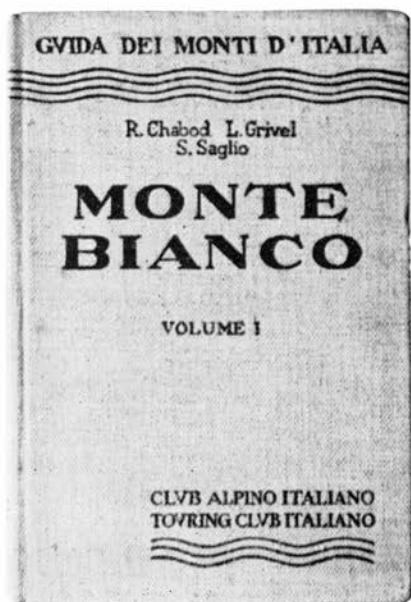
まだこの時代に関するもので、少しあとになってから、第二次世界大戦後に出版されたのですが、テイタ・ピアズの本がいくつもあります。テイタ・ピアズは、ドロミティの有名な登山家でした。彼のもののでここに挙げたいものに、一九五二年ボローニャで出版の「アルピニズムの半世紀」というのがあります。それから一九六一年トリノで出

(訳注) イタリア北部アディゼ川上流地方生まれ。

版された「ジュスト・ジェルヴァズテイのアルプス登攀」というのがありますし、一九六一年ボローニャで出版した「英雄的アルピニズム」という題でまとめられているものには、あの偉大なエミリオ・コミチの書いたものが入っています。

一九二四年からそれ以後はアルプスに、イタリア人のアルピニズムが復興したのでしたが、それと同時に、イタリアからは遠い世界に探検することも、とても盛んになりました。アメリカの南端に、またはテッラ・デル・フォークやパタゴニアに、非常に活躍した人は、アルベルト・デ・アゴステイニ神父でした。この人のもので、一九二三年にトリノで出版した「テッラ・デル・フォークへの私の旅」、一九四九年にミラノで出版した「アンデス・パタゴニア」、それに一九五八年トリノで出版の「テッラ・デル・フォークの三〇年」というのがあります。またさらに一層変化に富んだ、冒険的な、しかも精力的な山岳歴を持っていたピエロ・ジリオオーネは、アンデスからカラコルム、グリーンランド、日本では穂高などの山々にとりふうに、その足跡を残していて、何冊かの本を出しました。それには、一九三七年トリノで出版した「アンデスからヒマラヤへ」、一九五四年ミラノで出版した「アピ山上のヒロイズムの悲劇」、一九五九年トリノで出版した「北極から南極へ——旅と冒険」などがあるのを思い出します。

この時代の、そして第二次世界大戦へかけての山岳に係のある活躍に浮かび出てくる二人の大人物の名は、アルデイト・デジオとジウゼッペ・トゥッチです。地理・地質学者であるアルデイト・デジオは、カラコルムや西ヒマラヤについてのデ・フィリップやダイネツリの伝統を、非常な名譽を感じて受け継ぎました。デジオの著書で一九三六年ミラノで発行の「カラコルムへのイタリア探検隊・一九二九年」は、バルトロとその付近一体の氷河の全域についての知識としての基礎的な著述です。デジオはその後、イタリア探検隊長として、一九五四年にK2登頂に成功しました。このときのことを、彼は一九五四年ミラノ発刊で「K2征服」に書きました。デジオはこのほかたびたびの旅行で集めた材料で、沢山の仕事をまとめて出版し続けました。最近も、カラコルムの北に接したシャクスガムの谷

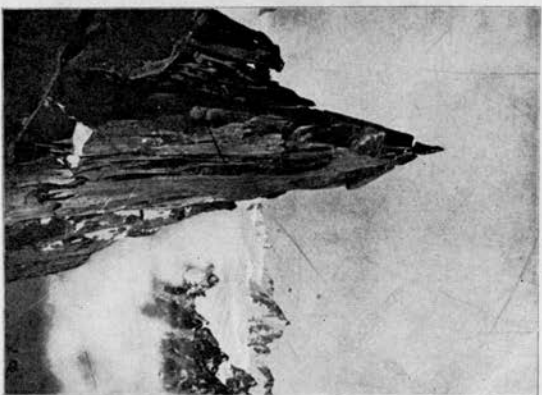


GUIDO REY

IL MONTE CERVINO

PREFAZIONE DI EDMONDO DE AMICIS
ILLUSTRAZIONI DI EDOARDO RUBINO

ULRICO HOEPLI - EDITORE - MILANO



GUIDO REY ALPINISMO ACROBATICO

S. LATTES & C. EDITORI

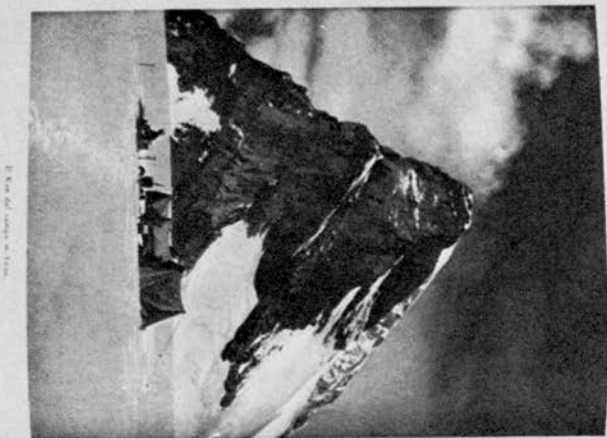
SPEDIZIONE MARIO PIACENZA

HIMÁLAIA CASHMIRIANO

RELAZIONE DEL DOTT. CESARE CACCATI
SULLE NOTTE ORBINALI, BOREALI E AUSTROPOLARI

APPENDICI SCIENTIFICHE
DI BORELLI, CACCATI, DELLA BIRIA, LONG, BRIGNON, ROCCATI, ZAVATTARI

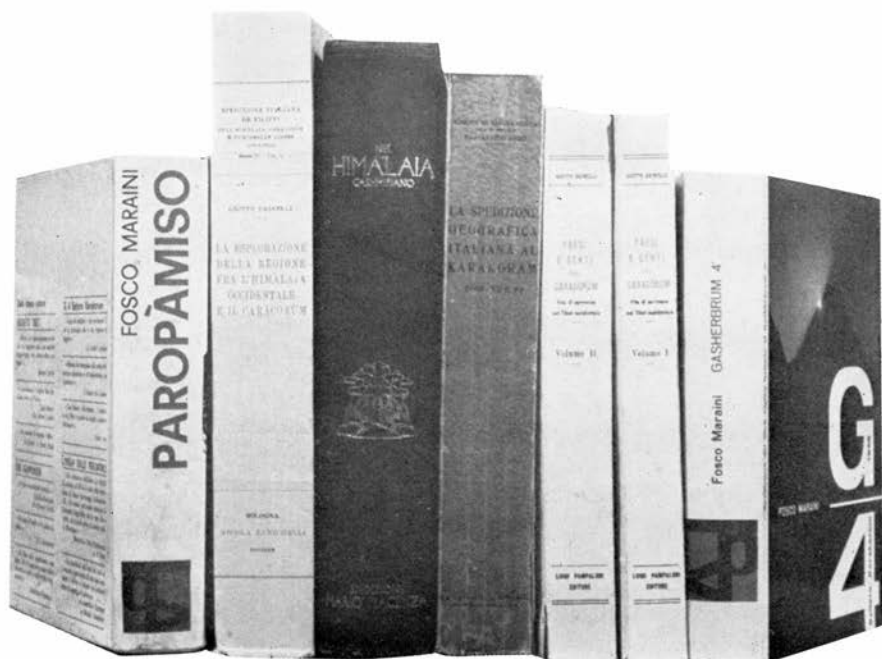
ILLUSTRAZIONI DI MARIO PIACENZA



Il Kien del campo di base.

- 1930 -
RIZZOLI & C.
ANONIMA PER LIBRI DELLA SPOA
MILANO

ピラチェンツァ『カシミール・ヒマラヤ』



イタリア隊遠征報告書

々の山と氷河についての彼の調査、研究が出版されました。

デジオが地理、地質の分野に足跡を残した人となりますと、ジウゼッペ・トゥッチは偉大な人文主義者で、アジアのいろいろの宗教と文明に造詣深い学究でありました。彼の活躍は、本当はアルピニストのものではありませんでしたが、チベットでの彼の踏査したところは訪れる者もないところでしたし、たびたび高度の高い峠道を越えたのでした。それはそれとして、文化の純粹探究の彼の最も有名な仕事は、一九三二年から一九四一年までにローマで、七巻もの「インドテイペイカ」となって出版されました。それに一九四九年にはやはりローマで、「チベットの絵巻物」と題した本が三巻出版されました。それから、彼の最も注目すべき旅行関係のものには、一九三三年ローマで出版された「西チベットでのトゥッチの科学的使命の記録」というのがあります。一九三七年ミラノ刊の「未知のチベットの聖者と山賊」、一九五二年ローマで刊行の「ラサとその彼方」、一九五三年ローマで刊行の「ジャングルとパゴダ」、一九六〇年バリでの「ネパールでのマツラ(訳註の発見)」などがあります。ジウゼッペ・トゥッチの著述は、常に貴重なものとなっていて、アジア文明の調査研究を深く掘り下げたい人々のためにむろん役立つばかりでなく、ヒマラヤの山々へ出掛けて行こうとするアルピニストたちのためにも貴重なものなのです。アルピニストたちが通る道々にあるラマ教の寺々、昔の芸術的記念物などに会って、それらをよく分かりたいと思う人々にも役立ちます。

このようにして第二次世界大戦のわれわれの時代に近づいてきたことになりましたが、この年代になりますと、イタリア・アルピニズムの歴史のうちに頭角をあらわす何人かが目立つようになりました。まずその第一にリツカルド・カッシンは、国際的ベテラン・アルピニストで、ときに氷や岩の上で活躍し、またときには世界のいろいろのところでの探検隊の隊長として、常にリーダーシップをとって半世紀もの間活躍し続けました。彼よりはずっと若い人ではワルテル・ボナッティが、僅かの年数の間ですが、かつてなかった程のアルピニストとしての最もめざましい経歴を

(訳註) ネパールのカトマンズ谷の一時代(一三八六—一七六八年)の王朝の名。

残したのです。この人たちとともに沢山ほかのアルピニストたちも思い出されますが、ここでその名前だけに限らず挙げてみますと、カルロ・マウリ、チェザレ・マエストリ、それからアレッサンドロ・ゴニーヤなどがあります。一九七〇年代の数年間には、このときとばかりに、アルピニズムの分野で遂に全然ライバルなしの人が出現したのは、ラインホルト・メスナーです。

先に挙げたルイス・トレンカーの場合と同様に、もうこの人は二代も経ているのですが、高地アディゼ人で、但しこの人はボルツァーノに近いフーネスの生まれですが、彼もまたゲルマン系とラテン系の世界の両方に平衡を保った文化に身を置いています。ジューリオ・クジーに関してもそうなんです。

以上に名を挙げた第一級のアルピニストたちは、ほとんどどの人もよくものを書く人たちでありました。カッシンは、彼の驚異的な活躍の概要を報告しています。グランド・ジョラスからラヴァレドやバディレの山々に登ったこと、ガッシャブルムからアラスカのマッキンリーに登ったことなどを一冊にして、大変成功しました。一九七七年には、ミラノで「アルピニズムの五〇年」というのを出版しました。ポナッティは「大いなる日々」というのを一九七一年にミラノで出版したり、またそれ以前一九六一年ボローニヤ刊、のちに一九七八年にボローニヤで再刊になった「わが山々」という題のは、いろいろの言語に訳されたりしてよく知られ、彼のスペクタクルな登攀が一層人々によく記憶されるようになりました。カルロ・マウリは、情熱と躍進的気風とをもって、ことに成功した自伝を書いて、主に若い人たちに語りかけようと思いました。これは、一九七五年にミラノで、「冒険が生甲斐であるとき」という題の本になって出版されています。チェザレ・マエストリは、一九六一年ミラノ刊の「よじ登りは私の得手」という著述の中で、びっくり仰天するような垂直の岩でのアクロバットの技術の秘密を明かしています。一方アレッサンドロ・ゴニーヤは、山で最大の困難にあった者の心理面での生きのびるわざと、その問題点を、深く掘り下げようと試みました。この本は、一九七五年にミラノで、「探索のアルピニズム」となって出版されました。

賞讃に値する一方の位置を占める者に、ラインホルト・メスナーがいます。彼は地上の大きい山々を登って、それと同じ位によい書物を早くやすやすと書く人だといえます。近年の彼の書いたものは莫大な数で驚異的でした。そのうち記憶にのぼるものでは、一九七四年ミラノ刊の「第七級」とか「不可能な山を登って」とかがあり、また一九七三年ミラノで出版の「マナスル」、一九七六年にボルツァーノで出た「岩上の人生」があり、一九七七年ミラノ刊では「二つの八千メートル峰——ローツェからヒドン・ピーク」、一九七七年ボルツァーノ刊の「寂寥とした円形劇場」、一九七八年ボルツァーノ刊の「世界の壁」、一九七八年ボルツァーノ刊の「冒険的アルピニズム」、一九八〇年ノヴァラ刊の「独りのナンガ・パルバット」、一九七九年ノヴァラ刊の「エヴェレスト」、それにアレッサンドロ・ゴーニャと協力した、すばらしい写真の入ったK2についての一卷が、これは間もなく出版されるはずです。

ここに挙げた本の題名は、近年の多くのアルピニストたちの行動、その印象、またはそれについての思考などをよく反映しているものです。だがまた一方に、これまでもあったし、今もあるし、また今後も続けられるであろうものに、すぐれたアルピニストたちではないけれども、山で貴重な活躍をした有能な学者たち、また山の詩人たちが、かつていたのでしたし、今も沢山おられます。そこで思い出すのは、セヴェリーノ・カサラという人の名です。極く最近この人は亡くなりましたが、彼はドロミティに愛情をそそぎ、大変な情熱でわれわれにドロミティを語り伝えたのでした。よじ登るためのところ、またはアルピニズムのジムナジウムのためるところとしてドロミティを取り上げるばかりでなく、ドロミティに生きドロミティに住んでいる人たちの豊かな伝統の中でのその雰囲気や、またしても現代の消費生活の侵入によって消滅させられていく高山文明の創り出したものなどが、その文中に見られます。この人の多数の著作のうち思い出されてくるのは、一九四四年ミラノ刊の「ドロミティでの自由登攀」、一九四七年ミラノ刊の「ドロミティの太陽へ」、一九七五年ミラノ刊の「エミリオ・コミチの登攀技術」、一九六五年ボローニャ刊の「すばらしい山々」、一九八〇年ミラノ刊の「ドロミティの山々の黄金の書」などです。

もう一人ほかに、山岳書多数を作り出した著者は、最近亡くなったマリオ・ファンテインです。一九二二年に生まれて昨年一九八〇年に死にました。ファンテインは、ノート、付録、関係書、地図、写真などを豊富に用意し、組織的に、世界の山々についての本を二〇冊以上も出し続けました。彼の最初の重要な本の中に、K2への探検隊の思いの出の大切な部分を記したものがありません。それを取り入れて、一九五八年にボローニャで出版したのが「夢みたK2」です。これに続いて、アルピニズムの歴史についての、最良の摘要を二冊書きました。その一つは一九六五年にボローニャ刊の「ヒマラヤ巨峰初登頂記」で、これには一九五〇年から一九六〇年の一〇年間に、地上の大きい山々の山頂の征服された、各国の魅力に富んだ初登頂史が物語られています。それともう一つは、一九六五年ボローニャ刊の「一八六五年から一九六五年までのチェルビーノ（マッターホーン）」でして、これには最もすばらしいこの山での人の命の一〇〇年が要約されています。その他の数多い彼の本の中で思い出されるものに、一九六七年ボローニャ刊の「世界の山々に登ったイタリア人たち」、一九六九年ボローニャ刊の「グリーンランドの山々」、一九七八年ミラノ刊の「ヒマラヤとカラコルム」、一九七九年ミラノ刊の「アンデスでの一世紀間のアルピニズム」、一九八〇年ボローニャ刊の「トゥアレグ、タッシリ、サハラ」などがあります。ファンテインの書いた本のうち何冊かは、直接英語で出版されたものもありました。そのため、旅行者やアルピニストたちに、広く国際的に知ってもらうことが出来ました。そのうち一九七五年ニューデリー刊では、「おとぎの国ネパールとエヴェレスト・トレッキング」があり、まだそのうえ、ネパールのマニ・リンドウについての研究や、シエルパについての一冊もあります。

大変有益でよく書けていると思われるものに、アルフォンソ・ベルナルディによって書かれた歴史的にまとめられている一九六三年ボローニャ刊の「大マッターホーン」だの、一九六五年と、一九六六年とにボローニャで出た二巻ものの「モン・ブラン」だの、それからまた一九七一年にボローニャで出た「大チヴェッタ山」があります。ここでフォスコ・マラーイーニの何冊かをも思い出すことが出来ます。一九六〇年バリ刊では「ガツシャブルム第四峰——カ

ラコルムの峻峰登頂記録」、それに一九六一年のやはりバリ刊の「パロ・パミソ」があり、そればかりでなく一九八〇年には、ノヴァラ刊の「ヒマラヤ」というのに、他の人と共著で執筆しているものがあります。

それから少なくとも二〇年の間、世界各地で登山活動に打ち込んだ人は、ミラノ人で工業家のグイド・モンツィーノでした。この人の探検行のいくつかは、いつも目的と人とが幅広く組織されています、その出版は、なかでも挿入写真などが豊富で、どれも推奨できるものでした。一九五八年にはミラノで出た「パタゴニアでのイタリア」、一九六六年ミラノで出た「グリーンランドでの登山隊」、一九六一年にはやはりミラノで出版の「カンジユト・サール」、それに一九七三年にミラノ刊の「エヴェレスト・イタリア探検隊」などが挙げられます。

ここで純山岳文学の本のことにちよつと話を戻してお話しますが、イタリアでは、この種のもので、すなわち高山の旅や探検、物語の関係のものとしては、大変貧弱なことをもう一度知ってもらわねばなりません。サンドロ・プラーダという人は、高山の周辺の詩や物語を集めて出版をしたのですが、さほど成功は得られません。彼のもので思い出されるのには、一九四四年トリノ刊の「エンロサディーラの山道」、一九五一年ポローニヤ刊の「人々と山々」があり、一九四七年ミラノ刊では「高山の寂寥のすばらしい物語」というのがあって、これは一九七七年レッコでその新刊が出版されました。また限られた読者に非常に尊重されたのは、スピロ・ダツラ・ポルタ・ジディアスの著述でして、たとえば、一九五二年ポローニヤ刊の「ロサンドラ谷のけものたち」、一九六三年ポローニヤ刊の「私のそばの山」、一九六七年ポローニヤ刊の「岩に潜む花たち」、一九六六年ビアンカ・デイ・ベアコ(訳注)と共著でポローニヤ刊の「永遠のギリシャの山で」などです。

高山の谷々に住む人たちの民間伝承というふうなものに情熱を燃やしてそれらを集めている人たちのうちでは、まずその第一人者に、「アルプスとアルプス前山」の著者であるアウレリオ・ガロツピオが挙げられます。この著述は、

(訳注) 非常に有名な女性アルピニスト。

今のところその五冊目が出ていますが、やがて沢山の冊数のものになるはずのものでして、現在急激に消滅しつつある一つの世界についての真の百科事典を読者に提供するものとして、期待されています。このガロツピオはまた、アルプスの谷々の地方の歴史の著作にも手をつけて沢山書いている著者です。

英語、フランス語、ドイツ語それに日本語の国々に関する山の本を読むイタリア人は極く少数で、限られた人ただけです。山の本についてのこの困難な事情の中で、出版社は少なく、それも専門化されています。そこで大いに認められていいのは、膨大なアンソロジーなどを出版してこの分野に貢献しているポローニヤのザニケツリ出版社です。同じことがいえるのは、ミラノのダロリオ社、それにやはりポローニヤのアテジヤ社です。それから小さい出版社では、イヴレアのプリウリ・エ・ヴェルルツカ出版社とポローニヤのタマリー出版社とがあつて、両社ともほとんど山の本だけの専門出版社となっています。このプリウリ・エ・ヴェルルツカ社は、実にいろいろのカタログを持っていますし、一方タマリー社は、山岳団体または登山活動の各方面のための案内に役立つ一般ポケット用のものを専らやっております。

イタリア山岳会の月報「リヴィスタ・メンシーレ」のほかに、イタリアでは、沢山定期的に出版されている山岳出版物がありまして、それにはイタリア山岳会各支部のものもありますし、またそれに属していない別個のものもあります。ですが、国家的に重要な唯一のもので、レベルの高い編纂のされているものでは、一九七〇年からトリノで発行になっている「ラ・リヴィスタ・デツラ・モンターニヤ」すなわち訳して「山岳雑誌」があります。週刊誌の「ロ・スカルポーネ」すなわち「山靴」は、いろいろの山岳会支部やいろいろの地方のアルピニストたちの間で集められた内容のもので、何年も続いて出ていましたが、これは今では「ノテイツイアリオ・デル・クラブ・アルピーノ」すなわち「山岳会ニュース」に編入されて、半月ごとに刊行されています。

それからイタリア山岳会の大部分の支部が、それぞれ山の本の図書館を持っています、その一番大きいのがイタ

リア山岳会国立図書館で、トリノ市バルバルー通り一にありますが。蔵書はほぼ一万冊位の豊富さで、世界中の定期刊行物も沢山あって、日本のものもいくらか、「山岳」とか「山と溪谷」などがあります。

山岳文学に興味を持っているイタリア人のアルピニストの多くは、イタリア山岳著作者集団（G I S M）というのに加盟しています。これは、一九三四年から設けられました。このグループは、不定期にですがアンソロジーの刊行もしています、そのほかアルプスの芸術、文学などの雑誌「山」というものも出しています。

このほか、山の文学、山の本というのには直接関係がないのかも知れませんが、山岳活動に関する興味をかきたてるのに非常に役立つとか、またはとにかく山に結び付いているとかで、もう二〇年以上も前からなのですが、トレントで、毎年の行事として四月末から五月始めにかけて、「アルピニズムと探検のフィルム・フェスティヴァル」というのが開かれております。

（牧野文子訳）

編者注・本稿は、昭和五十六年三月十日第十二回「山岳図書を語る夕べ」で牧野文子氏が講演されたものである。

本文中で紹介された本の原著書名リスト

- Bollettino. Club Alpino Italiano, 1870-1910.
- Rivista Mensile. Club Alpino Italiano, 1882-.
- Rivista Mensile del CAI, 1882-1954. a cura di P. Michelotti.
- Guida dei Monti d'Italia, 1934-.
- Il Monte Cervino. Guido Rey, 1904.
- La Spedizione... al Monte Sant' Elia. Filippo De Filippi, 1900 Milano.
- La Spedizione polare artica. Filippo De Filippi, 1902.

- Il Ruwenzori. Filippo De Filippi, 1908 Milano.
- Karakorum e Himalaya Occidentale. Filippo De Filippi, 1912 Bologna.
- Storia della spedizione scientifica italiana nell' Imalaja Caracorum e Turchestan Cinese. Filippo De Filippi, 1924 Bologna.
- Paesi e Geni del Caracorum; Vita di carovana nel Tibet Occidentale. Giotto Dainelli, 1924 Firenze.
- Himalaja Cashmiriano. C. Calciati (e Mario Piacenza), 1924, 1930.
- Le Scarpe al Sole. Paolo Monelli.
- Saggi sulla Psicologia dell' Alpinista. Adolfo Hess, 1914 Torino.
- Parlano i Monti. Antonio Berti.
- Il Giardino delle Rosa. Giuseppe Mazzotti, 1931.
- Montagna presa in giro. Giuseppe Mazzotti, 1931.
- La Grande Parete. Giuseppe Mazzotti, 1948.
- Introduzione alla Montagna. Giuseppe Mazzotti 1946.
- Alpinismo e non Alpinismo. Giuseppe Mazzotti, 1946.
- Piccole e Grandi Ore Alpine. Gabriele Boccialatte, 1939 Milano.
- La Battaglia del Sesto Grado 1929-1938. Vittorio Varale, 1965 Milano.
- Berge in Flammen. Luis Trenker.
- Noi della Montagna. Luis Trenker, 1949.
- Mezzo Secolo d' Alpinismo. Tita Piaz, 1952 Bologna.
- Scalate sulle Alpi. Giusto Gervasutti, 1961 Torino.
- Alpinismo Eroico. Giusto Gervasutti, 1961 Bologna.
- I miei Viaggi nella Terra del Fuoco. Alberto Agostini, 1923 Torino.
- Ande Patagoniche. Alberto Agostini, 1949 Milano.
- Trent' Anni nella Terra del Fuoco. Alberto Agostini, 1958 Torino.

- Dalle Ande all' Himalaya. Piero Giglione, 1937 Torino.
 Eroismo e Tragedia sul Monte Api. Piero Giglione, 1954 Milano.
 Dall' Artico all' Antartico; Viaggi ed Avventure, Piero Giglione, 1959 Torino.
 La Spedizione Italiana al Karakorum, 1929. Ardito Desio, 1936 Milano.
 La Conquista del K 2. Ardito Desio, 1954 Milano.
 Indoitibetica, 7 volumi. Giuseppe Tucci, 1932-1941 Roma.
 Tibetan Painted Scrolls, 3 volumi. Giuseppe Tutti, 1949 Roma.
 Cronaca della Missione Scientifica Tucci nel Tibet Occidentale. Giuseppe Tucci, 1933 Roma.
 Santi e Briganti nel Tibet ignoto. Giuseppe Tucci, 1937 Milano.
 A Lhasa ed oltre. Giuseppe Tucci, 1952 Roma.
 Tra Giungle e Pagode. Giuseppe Tucci, 1953 Roma.
 Nepal, alla Scoperta dei Malla. Giuseppe Tucci, 1960 Bari.
 Cinquant' anni di Alpinismo. Riccardo Cassin, 1977 Milano.
 I Giorni Grandi. Walter Bonatti, 1971 Milano.
 Le Mie Montagne. Walter Bonatti, 1961, 1978 Bologna.
 Quando il Rischio è Vita. Carlo Mauri, 1975 Milano.
 Arrampicare è il mio Mestiere. Cesare Maestri, 1961 Milano.
 Un Alpinismo di Ricerca. Alessandro Gogna, 1975 Milano.
 Il Settimo Grado, Scalando L' Impossibile. Reinhold Messner, 1974 Milano.
 Il Manaslu. Reinhold Messner, 1973 Milano.
 Vita tra le Pietre. Reinhold Messner, 1976 Bolzano.
 Due Otomila, dal Lhoise allo Hidden Peak. Reinhold Messner, 1977 Milano.
 Arena della Solitudine. Reinhold Messner, 1977 Bolzano.
 Pareti del Mondo. Reinhold Messner, 1978 Bolzano.

- L'Avventura Alpinismo. Reinhold Messner, 1978 Bolzano.
Nanga-Parbat in Solitaria. Reinhold Messner, Novara 1980.
Everest. Reinhold Messner, 1979 Novara.
- K 2. Reinhold Messner (con Alessandro Gogna). 1981.
Arrampicate Libere nelle Dolomiti. Severino Casara, 1944 Milano.
Al Sole delle Dolomiti. Severino Gasara, 1947 Milano.
L'Arte di arrampicare di Emilio Comici. Severino Casara, 1957 Milano.
Montagne Meravigliose. Severino Casara, 1965 Bologna.
Il Libro d'Oro delle Dolomiti. Severino Casara, 1980 Milano.
K 2, Sogno Vissuto. Mario Fantin, 1958 Bologna.
I Quattrodici 8000. Mario Fantin, 1965 Bologna.
Cervino, 1865-1965. Mario Fantin, 1965 Bologna.
Italiani sulle Montagne del Mondo. Mario Fantin, 1967 Bologna.
Montagne di Groenlandia. Mario Fantin, 1969 Bologna.
Himalaya e Karakorum. Mario Fantin, 1978 Milano.
Le Ande, un Secolo di Alpinismo. Mario Fantin, 1979 Milano.
Tuareg, Tassili, Sahara. Mario Fantin, 1980 Bologna.
Wonderland of Nepal and Everest Trek. Mario Fantin, 1975 Delhi.
Il Gran Cervino. Alfonso Bernardi, 1963 Bologna.
Il Monte Bianco, 2 volumi. Alfonso Bernardi, 1965, 1966 Bologna.
La Grande Civetta. Alfonso Bernardi, 1971 Bologna.
Gasherbrum 4 Karakorum. Fosco Maraini, 1960 Bari.
Paropamisso. Fosco Maraini, 1961 Bari.
Himalaya. Fosco Maraini, (con altri), 1980 Novara.

- Italia in Patagonia. Guido Monzino, 1958 Milano.
Spedizioni d' Alpinismo in Groenlandia. Guide Monzino, 1966 Milano.
Kunjut Sar. Guido Montino, 1961 Milano.
La Spedizione Italiana all' Everest. Guido Montino, 1973 Milano.
I Sentieri dell' Emrosadira. Sandro Prada, 1944 Torino.
Uomini e Montagne. Sandro Prada, 1951 Bologna.
Meravigliose Storie di Solidarietà Alpina. Sandro Prada, 1947 Milano, 1977 Lecco.
I Bruti della Val Rosandra. Spiro Dalla Porta Xidias, 1952 Bologna.
Accanto a me la Montagna. Spiro Dalla Porta Xidias, 1963 Bologna.
Tra le Rocce nascono i Fiori. Spiro Dalla Porta Xidias, 1967 Bologna.
Sui Monti della Grecia Immortale. Spiro Dalla Porta Xidias, (con Bianca di Beacco), 1966 Bologna.
Alpi e Prealpi. Aurelio Garobbio, 5 volumi.
La Rivista della Montagna. Club Alpino Italiano, 1970-, Torino.
Notiziario del Club Alpino. Club Alpino Italiano (ogni 15 giorni).



ラファイル・ダニベカシヴィリイのインド、

ビルマ、その他のアジア諸国の旅 一七九五—一八二七

金子民雄・訳

一七九五年⁽¹⁾三月一五日⁽²⁾、私はグルジア王イラクリの命により、次の使節と同行してインドへ出発した。すなわち、マドラスに富裕なあるアルメニア人⁽⁴⁾が住んでおり、毎年、イラクリに贈物を送ってきたのである。その報酬として、王は彼にロリの大きな村を贈り、地券を彼に渡すよう私に命じられた。私はこのアルメニア人を捜し出せなかった。なぜなら、彼は私の到着する前年すでに死んでいたからである。私は当時、マドラス⁽⁶⁾にいた彼の息子の手に、王から預かった地券を届けた。

私がグルジアを去ってから、六日間の旅の末に最初にとどまったのは、ハアルツェハ⁽⁷⁾の町であった。この町はトルコ人の支配するところだった。疲労のためと、この町を物珍らしく眺めるため、当地に数日滞在することになった。しかし、私にはなんら記するに価するものを見つけ出せなかった。なぜなら、周辺はさほど大きくなく、ここには眺

めるだけの壮大な建物もなかったからだし、住民たちも中程度の暮し向きで、彼らの主な職業は、この町で豊富な果物の売さばきであった。

アハルツェハを発ち、南東のトルコ領土を横断する旅をしてから二〇日間して、私はアルズルム⁽⁹⁾に到着した。アハルツェハから前述の町まで、道は高い岩がちの山地と高峻な丘陵の真中を走り抜け、その壮大な眺望はあらゆる旅行者の注意を惹く⁽¹⁰⁾。ただし私は、この自然の素晴らしく壮麗な光景を、満喫することはできなかった。アルズルムの町はかなりよいところであった。これはアハルツェハよりもずっと大きかった。そこには崩れそうな住居はなく、期待することもできない。なぜなら住民たちはきわめて企業心にとみ、富裕で、家屋の華美をお互いが競うことに努めているからである。このために沢山のすばらしい建物がある。街路のいたるところにある井戸は大理石で舗装され、すばらしく仕上げられ⁽¹¹⁾、この町を大変美しくさせている。その富にもかかわらず、ひどい薪^{たぎ}の欠乏に悩まされているので、住民たちは薪の極端な不足に遭い、止むなく家畜の糞⁽¹²⁾で家を温めなくてはならない。その他の必需品に関する限りでは、たとえば局地的にはなく少なくとも一番近い町からなら、いくらでも豊富に供給される。

しばらく滞在してから、私はムシ⁽¹³⁾へ出立した。ムシはアルズルムから一二日行程のところにある。ムシは大きな町ではない。ざっと三〇ヴェルスタ（一ヴェルスタ一〇六七メートル）いったこの町の郊外に洗礼者ヨハネの墓があるが、この墓に偉大なキリスト教の予言者の遺体が埋葬されている。この墓地の向う側に、美しい鐘楼のある、洗礼者ヨハネをたたえて建立されたすばらしい教会があるが、この山頂にある教会と敷地とは素敵な眺めである。この山頂の数カ所に、治療によくきく水の湧く泉⁽¹⁴⁾がある。前にふれた教会で礼拝する修道僧たちは、料理されたサラチンスク⁽¹⁵⁾を供される以外にも食べない。

私は洗礼者ヨハネの墓に参拝して、さらに旅を続けた。八日後、私はアルガナ⁽¹⁶⁾と呼ぶ町にやってきた。この町は銅鉱石で知られており、トルコ人たちがここで大量に採掘していた。この町は高い山の上であり、たまたま気候はきわ

めて気持がよく、健康的であつた。住民たちも衣食住の不足に悩むことはない。

前述の町から九日間の旅行をして、私はファラー⁽¹⁷⁾の町へと出立した。これは非常に大きな町ではないが、広い溪谷になつたチグリス川の畔にある。この町も最近に襲つた地震で廢墟になり、最早存在していない可能性が多分にある。

数日間は、興味をひくものはないにひとつなく、私は到着するのに七日かかつてマルティン⁽¹⁸⁾まで旅をした。この町は山の上であり、その高度を、土地の住民たちはニヴェルスタ⁽¹⁹⁾あると信じている。水に関しては、マルティンはきわめて貧しく、当地ではまったく良水が得られない。そこで外国人は水を携帯していかななくてはならず、なぜなら土地の水は健康を害するからである。一般的にいつて、マルティンの住民は暮しに困窮している。当然、土地が高いことからして、果実も、その他のなくてはならない植物もここでは成育しない。

ここにこれ以上とどまる必要もなかつたので、私は古いすばらしい町であるティクラナケルトへ旅を続けたが、この町はいまティヤルベキール⁽²⁰⁾と呼ばれている。これはチグリス川の畔にある。この周囲には高い塔のついた強固な石の壁があつたが、現在では、これらの構造物の廢墟だけしか見られない。この町はその大きさと、その周囲の美しい光景で名高い。そこには果物の実る樹木がおびただしく成育し、住民たちは果物できわめて活発な交易をいとなんでいる。気候は農業に適しているので、それゆゑ、農民の労力はつねに豊富な収穫でむくわれている。

残念なことには、こんな美しい町なのに、住民たちは悪意に充ちていることだ。彼らは外国人は申すに及ばず、お互い同志も憎み合っている。親切心という情愛と優しさとは、彼らの心にはまったく異質なものである。この町でも富裕なものはユダヤ人で、彼らの数は大多数にのぼる。

ここから私は一五日の旅の末、ニネベに行った。この町はいまムソールと呼ばれている。これはすばらしく大きく、そしてすぐれた建物に囲まれているが、数もきわめて多く、有名な町ということができよう。これは土地の名で

シャツトと呼ばれている川の畔にある。この川について行くと、その快適な光景に称賛を禁じ得ない。ティクラナケルトのように、ここは果物が豊富であるが、その住民はティクラナケルトの住民とは似てもつかない。なぜなら、彼らは大変に親切で、寛大であり、彼らの中の多くは裕福である。婦人たちは美しいといつてよいだろう。人々はアラビア語を使用するので、ここに住むキリスト教徒はこの言葉を崇拜している。

前述の町にしばらく滞在したのち、私はさらに旅を続けてバビロンに行った。この町はいまバクダットと呼ばれている。ここはすばらしく大きく立派で、頑丈で立派に建造された壁で囲まれている。人口もきわめて多く、人々の多くは大変に富んでいる。彼らはヨーロッパ人やその他の国民と交易をしている。彼らの行儀作法から判断すると、彼らが自分たちを誇りにしており、多くの時間を自分たちのために割いていると私は言わざるを得ない。全体にいって、彼らは客あしらいがよく、情深い。町はシャツト川の両側にあり、そのうち一方側を大、他方側を小と呼んでいる。この川を横断して、町の一方側から他方側へ行くと、強い鎖で互いに縛りつけた小舟の上に、頑丈な橋ができてゐる。土地ではこの橋をチシルと呼んでいる。純粹のバビロン人の他に、その他沢山の人々——インド人、ペルシア人、トルコ人、アルメニア人、ヨーロッパ人がいる。この町には英国人の所有する荷揚場がある。彼らはそこに「バリオズ」と呼ぶ一人の管理者を持つている。これらの役人の一人は、他の場所から手紙を受けとり、それを受信人に送り、ここから他所へ手紙を発信する。

バビロンから私はバスラへ道をとリ、一五日でそこへ到着した。この町はペルシア湾の浜辺にある。眼路のとどく限り、ぶどう園と果樹園で、呆れるほど多量の果実が産する。氣候が恐ろしく暑いため、健康には有害で、土地の水も同じくどうしても適していない。それは飲料には向いていないし、いわんや外国人にとつてはなおさらである。土地の住民はこれに不満をいつているけれども、私の思うには、彼らもずつと昔から当然これを使って今日まで来たことだった。前にもふれた町のように、主管理人は英国人である。「バケット」と呼ばれる船は、ここからボンバイ

The Route Map of Rafail Danibegashvili



2nd Journey
 3rd Journey
 X Conjectured place of Shipwreck

chart1-(a)

に航海し、月に一度、英国から管理人の手紙を運んできて、次に彼から英国への手紙を運んでいく。この町から川で海に出るには三日の旅である。

バスラから船は、私と一人のアラブ人の旅行者とを、海港の町マスカットへと運んでいった。この町のほとんど両側には、きわめて高峻な山々がそびえ、その峰はまったく荒れていて、そのため飢えの町と呼んでもよいくらいである。たしかに、もしもバグラとボシエル⁽²⁶⁾があらゆる必需品をここに供給しなかつたら、この町に住むアラブ人は、食糧では困窮したことであろう。この町の首長は「ヘイマーム」⁽²⁷⁾と呼ばれる。彼はいつも裸で、体を覆うのに前の方に小さな布片をつけている以外は、なに一つ身にまもっていない。住民の前に彼が現われると、彼らは彼の前に跪^{ひざまづ}き、彼の手に畏敬をもって接吻する。この光景を目のあたり見た見た外国人は、同じように彼を敬うようになり、各々自分の流儀でそのようにする。

当地の暑さは極端に酷しいので、気候はまったく健康によくない。生活必需物資がひどい不足にもかかわらず、住民の大半は裕福である。例外なく全て火を崇拜する。

私はマスカットを出航し、二三日後、ボンバイ⁽²⁸⁾に上陸した。位置からして、ここは主要な英国の港と呼んでよいであろう。船はここからシナ、ペルシア、インドへと出航していく。ボンバイが享有するいま一つ有名なことは、最もすばらしい英国船がここで建造されていることである。この町の波止場はヨーロッパ風の波止場に見習って、ポルトガル人によって造られた。英国人たちは、この波止場を、ポルトガル人と領土を分割した折に手に入れたのである。野菜と果実に関しては、この町はたいして豊かであるということにはいかないが、その不足分は、パンカラに豊富にあるもので補っている。パンカラの住民たちは、ボンバイの住民と交易をいとなみ、この町になりによるにもまして果

実と野菜とを運んでくる。この町はとくにその商人で有名で、彼らは恐ろしいほど金持である。一般に、あらゆる土地の住民たちは拝火教徒で、彼ら自からを「ヘカベル」あるいは「フアールス」と呼んでいる。

ボンバイで、私はセイラン島にあるコルンプの町へ航海する英国船に乗った。われわれはこの旅を一八日でやりとげた。以前、コルンプはオランダ人によって統治されていたが、いまは英国の領有に帰している。白檀、丁香、しょうずく（しょうが科）、肉桂といった沢山の種類の珍らしい樹木が、この町の周囲に成育している。ここから東方へ旅をし、私は大洋に面したマナルの町に到着した。この町には大量の真珠が三年に一度獲れる場所がある。気候はひどく暑く、住民の皮膚はそのため真黒である。あらゆる生き物のうちの賢明なる造物主である神を崇拜する代わり、彼らは牛と水とを敬う。彼らは足に動物の皮をつけることはあがない難い罪であると、愚かにも信じて、深靴も短靴も履かない。彼らは体も頑丈で、多くは天寿を全うするまで生きる。彼らは動物も仲間のうちとして崇拜し、食用のために動物を屠殺したりはしない。それゆえ、動物を食用にすることは、彼らなりの勝手な考えで、人肉を食うことと同じだと考えている。こうした理由から、彼らの食料はただ植物と果実だけである。

前述した町から、私はボンドチェリイ、すなわちコスト・マルヴァールの町へ向けて出航した。この町は以前、フランス人によって統治されていたが、いまでは英国人の手に渡っている。ここはヨーロッパの町を模型にして建てられている。住民のほとんど大部分はフランス人で、彼らは古顔と呼ばれている。この周辺の町のように、現住民は拝火教徒で、黒い皮膚をしている。

ここから私は、陸路をとってトラクバーの町へ旅した。その町まで三日かかって到着した。この町はごく最近、英国人の所有に帰した。ここは二つの部分に分けられている。海岸にあるところでは、住民たちはヨーロッパ人で、彼らの皮膚はわれわれと同様に白い。が、町の中央部にある他の部分には、原住民が居住し、彼らの皮膚は一般に黒く、本質的に偶像崇拜者である。当地では、コルンプと同じ言葉が話されている。

トラックバーで私はしばらく過した。それから有名なマドラスの町へ出発した。ここはその住民からティナバトヤン⁽⁴⁰⁾と呼ばれている。前述の町と同じように、ここも二つの部分に分れている。ヨーロッパのキリスト教徒は海岸に近接して居住しており、一方、本来の町、すなわち中央部には、原住民が住んでおり、彼らは一般に黒い皮膚をしていて、偶像崇拜者である。海に面してこの町にはすばらしい砦があり、住民はこれをファネット・ゲオルギと呼ぶ⁽⁴¹⁾。ここでは現地でファン⁽⁴²⁾と呼ぶ葉を噛む習慣があり、彼らは終日、この葉を噛むことにすっかり耽^かけている。この葉を噛むと鮮紅色になり、これを噛んだ人の唇や口は血だらけのように見える。これらの雑草はマドラスに大量に生えていて、最もありきたりの植物とみなされるが、この葉はすばらしく気持よい香りがする。この雑草はごく一般的なものなので、英国人はその使用に税金を課しているため、歳入は約五〇万にも達する。外国人もこの雑草をなによりもすすめられる。気候はきわめて暑いので、住民たちは一年を通じてまったくにも身にまとってはず、きわめて目の細かい布で作った着物を着ているが、これとてわずかに厳しい気候のときだけである。この町にはおびただしいほどの珍しい果物があるが、そのうちの一つにパイナップルがある。水も良質で、土壌も肥沃である。この町から約三ヴェルスタいったところにセント・トーマスの墓地があり、ここから六ヴェルスタのところには砂漠があるが、ここにこの伝導者がかつて住んでいて、いまはすばらしい教会⁽⁴³⁾のある僧院が建っている。

マドラスに短期間滞在し、他の町を見たいと思ったので、私はベクー、すなわちランホーン⁽⁴⁴⁾行きの船に乗った。しかし、われわれが海に出るとすぐ、恐ろしい暴風雨が突発した。海はもり上り、立ち騒ぎ、船は波の前に突進して、免れ難い運命でわれわれを威^{おど}した。この嵐のため、ベクー到着前に、ムシリイ・バンダール⁽⁴⁵⁾の町に無理矢理錨^{いかり}を下ろすはめになった。そこで私は岸に行き、嵐で被害を受けた船の舵が修繕できるまで、仲間と数日間ここに滞在した。とうとうわれわれは出航し、一五日間かかってベクーの町に到着した。この町は川⁽⁴⁶⁾で二つの部分に分けられている。このうちの一つは新しい町、いま一方を旧い町として知られている。住民の皮膚は白く⁽⁴⁷⁾、彼らの顔の特徴はシナ人に

よく似ていることだ。彼らの一般の飲食物はサラチンスクまぶと魚である。彼らはパンを食用しない。町はハヴァバルマイ(48)と呼ばれる古い現地族によって統治されている。彼らの司祭の住居はラマ、あるいはブラーマ(49)と呼ばれ、町から約一ヴェルスタのところにある。ラマの僧房は非常に尊敬を受けていて、国王より死刑を宣告されている罪人でも、彼の家にいけば安全である。多くの裕福な商人がこの町に住んでいる。ベクーの周囲には大森林があり、ここから英国人は船に適した材木を得ている。この町で、英国人は船を建造している。ポムバイは船舶の建造で有名であるが、最良の材木はここからもたらされる。町はホバルバイ(50)と呼ばれる一人の官吏によって治められており、当地に着いたどんな外国人からも一ニルピー(51)ずつ徴収する（ニルピーは一銀ルーブルと同価）。土地の総督は、他の周辺の町の場合と同じく、毎年、国王に報告を提出する義務があり、彼はハヴァアと呼ばれる町に住んでいる。ベクーは、ハヴァアから三カ月行程のところにある。この町に行き着くためには、旅行者は沢山の川を渡らねばならない。彼らの元首の面前での総督の態度ほどばかばかしいものもない。そればかりか神としての彼に話をしなくてはならず、彼の面前では、彼らは坐することも立つこともできない。そこで床の上に腹ばいにならなくてはならない。国王が彼らにご下問をすると、彼らは平身低頭して答えねばならないのだ。(52)ある日、私は彼らが船を建造しているところに出向いてみた。私は沢山の船がそこで建造されているので、さぞそこは広々としたところだろうと想像したが、意外に大きくないので、知ってびっくりした。このまわりには囲いを結び、大変汚い。私がここを訪問したことは幸運でもあり、不運でもあった。幸運だったのは、このとき国王のための船を建造していたことだった。これは見学するのに興味あることだった。この船には純金を張っており、内部は高価な材木をはめ込んでいた。私の訪問の不幸な面は、この珍らしい光景を十分に眺める前に、群衆にとり囲まれ、捕われ、牢獄に曳きずって行かれ、首を刎ねるぞとおどかされたことだった——なぜだったのか。

私の罪は建造中の船に近寄ろうとして、泥で建造を妨げたということだった。私は愚かなことに、この船のために

とつておいた幾枚かの板張りを踏みつけて歩いてしまったのだ。もし金持ちの故に当地でよく知られたアルメニア人がいなくなったら、私は危うく命を失うところだった。彼は私のために仲裁の勞をとり、係官に私にはなにも知らずにやってしまったことを信じさせてくれた。この町は、大量に持ち込まれるルビー(56)で名高い。実際のところ、これらの寶石を採掘する権利を享有する商人たちもきわめて制限があり、もし彼らが豌豆えんどうより大粒の石か、水より澄んだ石を発見した場合、町の総督に引き渡す義務がある。そして総督は、これを国庫におさめる。小さな石は売ってもよろしい。この規約はきわめて厳格で、これを破つたものは生命を失う。銀と錫すずもまたここで採掘されている。象はおびただしくおり、象牙の交易も盛んである。英国人たちは幾度も繰り返してやってみたものの、この町を掌中に入れるころろみは成功しなかった。(56)造船所はよく出来ており、敵は近より難く、四囲が防御されている。町を貫通して流れる川にはワニが沢山いる。

ベクーから私は一団の旅行者に加わり、コルカダ(57)への航海に上つた。この航海は最初のうちこそ大変に楽しかったが、それは海が穏やかだったからだ。しかし、一八日目に暴風が吹き荒れ始め、恐ろしいほどの浪で毎度死におびやかされた。長い間、われわれの船は泡立つ波浪と闘つたが、とうとう浪に屈服してしまい、完全に分解してしまつた。難破によつて、多くの者が生命を失つた。しかし、天祐のおかげで、三人の仲間と私とは、船にしばつてあつた小舟に突進し、生命だけは助かつた。この小舟で一九日間というものの波に漂い、たびたび陸地を望んだが、うじゃうじゃいるワニと、森から聞こえるライオン(58)の吼り声とに氣力を沮喪させられてしまった。——そして、あえて海岸へ行く気にはなれなかつた。この間中、われわれは草と竹の新芽とを除いては、なにも食べるものがなかつた。その愛苦しいまでの自然も、われわれには無情で、深い印象を与える光景も、海岸から聞こえてくる楽しげな小鳥の鳴き声

も、われわれの体験した恐怖心をぬぐい去ってはくれなかった。恐怖はいたるところでつきまとい、最も不幸なことは、人の気配をさらに見かけなかったことだった。とうとう、静かになったのでわれわれも落着いた。そこでゆっくりと前方へ進み、遂に海の方から心地よい微風が吹いてきたので、キカイア⁽⁵⁹⁾という川に入った。そこで小舟をしっかりと岸につけ、だれも見かけることもなく、ほとんど真夜中までここにいた。と、突然、遠くに明りを見つけた。われわれはすぐそこに走って行き、そのすぐ近くまで寄っていくと、その明りは一人の漁師がそのそばに立っている小舟からもれてくるものだった。彼は明らかに魚を獲っていたのだった。彼はわれわれの様子をうかがうやいなや、小舟に突進し、たちまち視界から艘ぎ去ってしまった。われわれはまた見知らぬ場所においてきぼりされてしまい、心は悲しみで一杯だった。しばらくして、いま一つ別の明りがどこか近くでぴかりと光ったので、いま一度、元気になった。これは小舟に明りをつけたいま一人別の漁師であった。われわれは彼の方へ忍び寄った。しかし、われわれが一言発するやいなや、びっくり仰天して川の方へ走り去った。われわれは彼の後方から、われわれもお前と同じような人間なんだと声をそろえて呼んだ。それで正気にかえってか、彼はわれわれのところへ戻ってきた。われわれは自分たちの冒険の数々を彼に詳細に語って聞かせると、彼はわれわれを伴い、彼の村へ連れて行ったので、そこで八日間滞在した。八日目にわれわれは案内人としてこの漁師と共に村を発ち、二日後にバハール・カン⁽⁶¹⁾の町に着いた。その司令官は英国人であった。われわれは彼のところへ出頭した。彼はわれわれを非常に親切にもてなし、新しい衣服を用意してくれ、彼の家に数日とめてくれた上で、旅行に必要な品々を全て提供してくれ、英国船でカルカダの町へ送ってくれた。神の加護のおかげで、われわれは無事に一日で到着した。

カルカダは非常に美しく、むしろ壮麗な町である。ここには沢山の裕福な人たちがいる。またガンジス川の湾⁽⁶²⁾にわたった岸辺にある。ここには沢山のアルメニア人が住んでいる。彼らは金持で贅沢な生活を営んでおり、外国人と繁昌した交易に従事している。インド人に加えて、彼らは全て一般に偶像崇拜者か、また回教徒の原住民で、英国人、フ

The Route Map of Danibegashvili In India

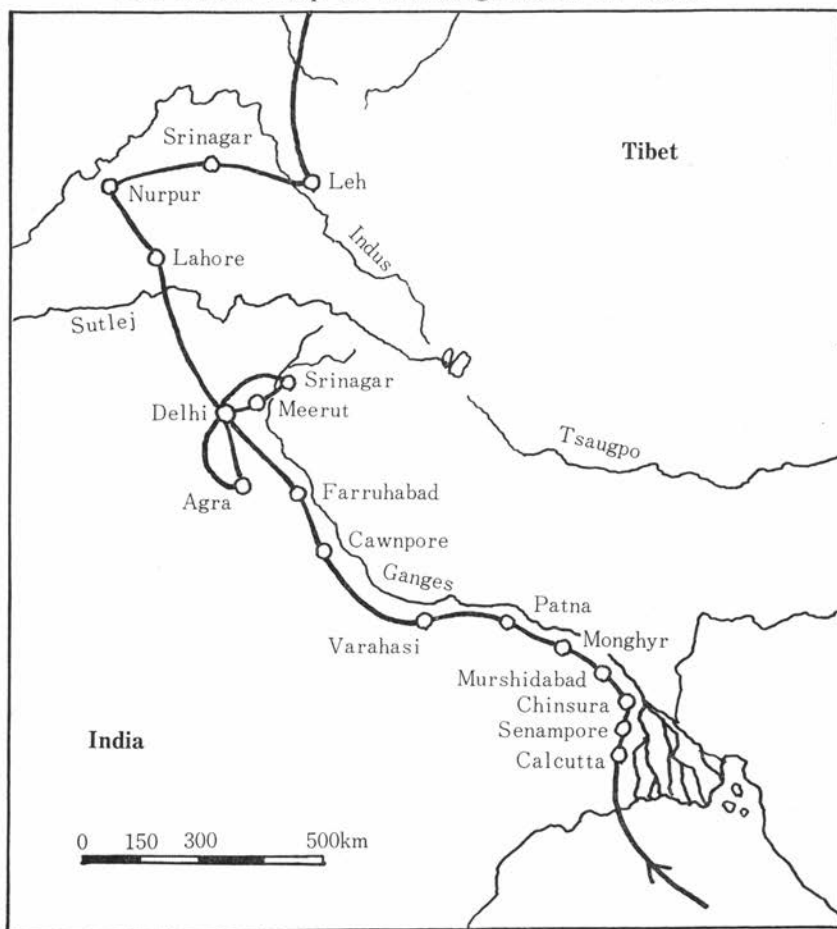


chart 1-(b)

ランス人、その大部分はポルトガル人である。彼らはお互い同志で交易し、だれにも税は支払わない。この町の司令官は英国人で、土地の住民たちは彼をラートと呼んでいる。⁽⁶³⁾ 彼は全インドを統治している。彼が管理する英国会社は、毎年の歳入が約五〇〇万ルピーにのぼり、この金額がごくわずかしか残らないのも、支出があまりに大きいからである。おびただしい数の現地軍には、この総督から支払わねばならない。

気候はきわめて暑く、水は非常に悪い。この理由で、雨が降ると住民たちは飲料用の降水を集めるため、大桶を持ち出す。恐らく、土地の水も飲用には適しているにちがいないが、インド人たちが死体を焼いて水に投げ捨てる風習があるため、水の中で腐敗した屍体から不快な匂いがあり、そのため用いないのである。インド人と回教徒、それに原住民はただサラチンスク黎^ミと魚しか食わず、パンは知られていない。一般に、彼らの言語はパンカラの町で話されているのと同じである。インドには約一五万の英国軍がおり、現地軍は黒と呼ばれている。しかしながら、インド軍は英国軍と同じくよく訓練されている。各白人兵は、月々肉とブドウ酒に加えて七ルピーの給料をもらっている。同額の金を黒人兵ももらっている。大尉は二五〇ルピーである。大佐は一五〇〇ルピー、秘書官は二〇〇〇ルピーである。総督は一万ルピー、医師は二〇〇〇ルピーである。騎兵は馬の維持費をもらった他に月々三〇ルピーである。一カルカダ・ルピーは二ルーブルにあたる。この町の海岸には古い城砦⁽⁶⁷⁾があつて、この周囲にヨーロッパ人が居住し、現地人は南側に住んでいる。前に述べたガンジス、すなわちガンガ川は三方でこの町を囲んでいる。この川にはワニとカメが一杯いる。町には沢山のすばらしい建物や非常に裕福な人がおり、英国人はこの町を第二のロンドンと呼んでいる。たつぷりここで過してから、私はさらに先に旅行し、ある日、シラムプールの町に到着した。⁽⁶⁸⁾ ここはカルカダから約二〇ヴェルスタ離れている。ここは商業中心地といつてもよいであろう。かつてはデンマーク領に属していたが、いまは英国人によって占拠されている。土地の住民はヨーロッパ風の家を建てて住んでいる。

シラムプールから私はチチラの町へ行った。ここはカルカダより約四〇ヴェルスタ離れている。かつてはオランダ

人によって統治されていたが、いまは英国人に属している。⁽⁶⁹⁾

チチラから、私はマルシタバット、すなわちマスタバット⁽⁷⁰⁾へ旅し、四日で到着した。ここはカルカダより約一五〇ヴェルスタあり、インドのナボブ⁽⁷¹⁾の邸宅がある。ここからインド固有の言語圏⁽⁷²⁾になる。町は英国人によって統治されているとはいえ、ナボブはまたすばらしく大量の歳入をとっている。彼はこの町本来の支配者と考えられている。

前述の町を去って、私はムンキール⁽⁷³⁾に進路をとり、六日で到着した。この町はある山麓のガンジス川の畔にある。住民はだいたい職人である。ここには赤木と黒木とが成育している⁽⁷⁴⁾。ここから私はアジマバットの町へ行った。別にファトナ⁽⁷⁵⁾として知られ、ガンジス川畔にある。気候はすばらしくよい。住民は必要とする一切の必需品を手に入れる。水は井戸から汲み上げられ、川水は死体を河に投げ入れるので、悪臭があつて有害のため、飲料には適さない。この町はアジムチャンというあるインドの皇子によって創設されたという。このためこの町はアジマバット⁽⁷⁶⁾と呼ばれる。土地の習慣、これはきわめて残酷なものであるが、男女年齢を問わず、びっこや虚弱なものは、もし祭司がお前は死の突鼻にあると宣言さえすれば、柩の中に入れられ、ガンジス川に運ばれ、膝の深さの水に入れられてしまう。そのうち、水が喉のあたりまで流れ込むと、へキナ・ナライン、すなわち「神よ」という言葉を発する。この光景は身震いせずには見られない。もしこれら不幸なものうちだれかが死ぬと、その死体はちよつとわずかな火の上にかざされてから、川中へ投げられてしまう。もし元氣をとり戻したりしたら、祭司はこの者に、神に触れてはならぬ好ましからざるものだと言ひし、こうしてこの者は町で生活する権利を失ひ、ガンジス川の対岸に、このような不幸な人間のため特別にあてられてある村へ、移らねばならない。インド人は、この村をムルドンキ・クラム（死者の村⁽⁷⁷⁾）と呼ぶ。英国人も、この村の住民からはどんなことがあつても、インドの習慣によって、彼らは死者と看做^{みな}されていふ理由から、税金はとりたてない。

アジマバットを去つて、私はガンジス川を渡り、一七日でバナリスの町に着いた。当地の氣候は前にふれた町より申し分なく、きわめて健康的で、沢山の尊敬すべき老人たちがいた。町は非常に良好な状態にある。そこには多くのすばらしい、貴重な石造りの建物があるからだ。この町は「聖なる町」として、インド人からあがめられている。そのため、家族やあらゆる富を残して、長生きした裕福なインド人たちは、余生を支えるに足る量の金を貯え、妻や子供たち、あらゆる縁者に別れを告げ、この町で死ぬつもりで出かけて行く。この偏見はきわめて深く根ざしているので、彼らに従えば、たとえかかる苦しみを受けねばならぬものであつても、この町で死ぬものはだれにも、来世のあらゆる苦しみから救われるというのである。土地の住民はことごとくだいたいは偶像崇拜者である。彼らは牛に大変敬意を表し、たとえその尿であろうとも用いる——顔に塗りつけたり、汚れた容器を浄めたりするのだ。ここから約一二〇ヴェルスタにラクナホルの町があるが、ここにインドのナボブが住んでいる。ここにクルドというおびただしい人がいる。前記のナボブの年間の歳入は約二千万に達するが、彼は英国の臣民で、この地位は彼に金の一定量をもたらす。この町から約二ヴェルスタのところに、二千名の英国兵士が駐屯している。ナボブと前述の軍隊の司令官との間には、調和のとれた相互感情がある。

ラクナホルの町から三日間の陸路の旅でカンベールの町に行つたが、ここには英国軍の大部隊が屯営していた。この町はすばらしく、かつよく防備を施した港と言つてよいであろう。ここには沢山の船が入港する。あらゆる生活必需物資が手に入るところとして名高い。

ここから四日間の旅の後、私はファラハバットの町に着いた。当地の氣候は良好である。ここに一人のインド人のナボブと沢山の回教徒や、偶像崇拜者が住んでいる。英国人は一発も撃たずに、この町を占拠した。町は自発的に彼ら

に降ったので、英国人は一種の給料として月々一万六〇〇〇ルピーずつナボブに支払っている。

フアラハバトの町を発つてから六日目に、私はメレド(83)に着いた。ここはいま英国人に属し、きわめて多くの英国軍隊がいる。この町から私は首都といつても差しつかえないデリーに行つた。ここはまたシヤカチナバットと呼ばれている。なぜなら、ここにはインド王のシャール・ジャールハンによつて創設されたものだからである。その壮麗なモスクと美しい家で名高く、それらの家は大変に数が多い。宮殿は上から下まで金鍍(ツギキ)金されている。モスクの一つはチュマ・メチエトと呼ばれ、純金で覆われ、大変に高いので、町から二ヴエルスタ離れたところからでも望まれる。川畔にはチマナと呼ばれる紫色した石で建てられた小さな砦があるが、その全体が少しもつぎ目がないという不思議な技術で建てられている。この砦の中ほどは、同じような不思議な技術で建てられた、純粹な大理石の宮殿になっている。宮殿の小さいながら愛らしい庭園は、芳香のある樹木、丁子(モウシ)とか柘榴(ズク)とか、その他のものが一杯植えられ、年一度、一般に公開されている。この庭園の中ほどに大理石を敷きつめた一つの井戸がある。それは深さ五キュービト（キュービトは約一七・二インチ）、幅一四キュービトあつて、完全に丸い。彼らの王はいつもここで水浴をする。私がこの町に滞在中、ガリの支配者は、私に通交税収税吏の事務所を呈供してくれた。この事務所に対し、王は私に月に二〇〇ルピーの給料を報酬としてくれた。英国人がこの町を占拠したとき、彼らは壮麗な宮殿を王から奪い、この損失に対する賠償として王に月々十萬ルピーの年金を与えた。

メラトから約三〇〇ヴエルスタのところマウント・シリナゴール(85)があり、そこにガンジス川の水源がある。大きな定期市がそこで毎年開かれる。インド人たちは、五〇〇〇ヴエルスタも離れているところに住んでいる人たちですら、この市場に出かけて行き、ガンジス川の水を礼拝する。これらの巡礼者たちが参詣に出かけるとき、回教徒たち

は様々な商品を取り引きしに行く。五〇万人もの人たちがこの市を訪れるといわれている。礼拝にきたインド人たちは、英国人に一ルピーの通行税を支払わねばならない。これに対し、英国人はガンジス川を礼拝する受取り証か切符を与えるのである。きわめて印象的な儀式がとり行なわれ、交易がその後続く。これはまる一カ月間も続くのだ。

私は前記の町にかなり永いこと住み、それからファディフル⁽⁸⁶⁾に出発した。そのすばらしい建物と商人で知られた裕福な都市で、これら商人たちは途方もなく豊かな人たちである。住民の全ては偶像崇拜者である。町をとりまいて七つの土塁壁があり、この先は、やはり町であるが、水を張った濠になっている。この濠はほぼ六キュービトの広さがある。昔、この町はムガル帝国の首都で、その宮殿は現在もここに建っているが、ほとんど完全に破壊されている。英国の臣民になりたくなかったことから、土地の人は彼らの中から一人の支配者を擁立し、住民たちの自由を奪わずに統治した。土地の住民が私に言うに、かつて英国人がこの砦を攻撃したとき、彼らは土で濠を一杯に埋めて、町の壁に様々な仕掛けを置いたのだという。しかし、彼らがこの上に足を踏み出すや、たちまちくずぐずになった土の中に沈んでしまい、成功しなかったのだという。一般の人々はこれであまく味をしめ、砦の壁の頂上に登り、手にした武器で大多数の英国人を殺害したのだった。女たちは、夫たちの武勇に鼓舞されたものの武器は扱えないので、煮えたぎった油を敵の上にあびせた。この戦闘で、英国人は彼らの最も高貴な将校たち四〇名と二万名の兵隊を失った。そして多くの攻撃の後、きわめて不面目ながら、彼らは自分らの目論見を放棄せざるを得なかった。この戦争での英国軍の司令官は名をリク⁽⁸⁷⁾といった。

ファディフル⁽⁸⁸⁾から、私はラホールへ行った。ラビ川畔にある相当大きな、富んだ町である。気候は素敵な上、健康的で、土壌は豊かで肥沃である。様々な絹や毛織物が生産されている。住民たちは一般に偶像崇拜者である。沢山の外国人がこの町に住んでいる。非常に美しい建物があり、そのうちで最もすばらしいものはムガル帝国の壮麗な宮殿で、ここにかつての王が住んでいた。

フアディフルから四〇日の旅で、ナルポール、すなわちフアール(89)の町にいたった。この町は山の上にあった。この町に入って私の目に映った最初の光景は、悲しみと感動であった。一人の偶像崇拜者が死に、その死体でいままさに火葬に付されようとしていた。その後が続いて次のような儀式があった。屍体は華美に飾り立てられた柩におさまられ、火葬に際しての習慣が行なわれる場所へ運ばれた。この死人には二人の妻がいて、彼女たちはすばらしい高価な衣裳を身につけ、この柩の後方を歩いていて、この行進が指定された場所に到着するとすぐ、人々は火葬用の薪まきを積み上げ、その上に彼らは棒を置き、さらにその上に死体を安置した。この残酷な土地の風習によって、夫への愛情のあかしのために、この妻たちは火中の亡き夫と共に、自分を故意に犠牲にしないでならなかった。この目的のために、二人の立派に衣裳をまとった婦人たちは、火葬の薪の上の亡き夫の死体の両脇に坐を占めた。司祭はこの上にたっぷり油や燃え易いものをふり注ぎ、それから突然、まわり中から火を發つた。これら二人の罪のない犠牲者は、彼女らの夫の死体と共に、炎の餌食となった。薪まきのまわりに立った人たちは、柩とこの二人の不幸な婦人たちが灰になるまで様々な楽器を演奏し始めた。しかし、妻たちは非人間的儀式とは思っていなかったにちがいない。たとえ彼女たちの親戚や友人たちが、子供たちのためか、あるいは夫の残した財産のいづれかのために死んではならないと説得したところで。しかし、彼女らがひとたび決意し、薪まきの上に身を投げようと炎に近寄つたら、恐怖のあまり逃げ出したいと思っても、もう引き返えすことはできない。薪まきの周囲の役人たちが、別の死——劍でもって彼女らをおびやかすからだ。この場合、不幸な人たちは、もう生きる価値がないものとして、これを避けることができないのだ。(90)

ナルポールの近くに、低く火のちよろちよろ出た石英質の山があり、断え間なく燃えている。この山頂にはやはり一つの泉がある。アクバール・シャー、いわゆるインドのムガル帝(91)は、この火を鎮火させようとした。そしてこの目的のために、泉から火の燃えているところまで水路を掘っていくことを命じた。しかし、これは全て無駄となった。彼のこころみは成功しなかった。インド人は全国津々浦々から、この山を参詣しにやってくるので、その数はと

きに二、三〇万人に達し、これは毎年に及んだ。この火はジャワラ・ムヒと呼ばれ、⁽⁹²⁾ 聖なる神、慈悲をかけたまうを意味する。

私は全ヨーロッパ人に知られた、有名なカシミールの町を見たいと思った。そして私の好奇心を満足させるために、私はナポールを出発してから、相当長い旅の末、この町に到着した。この町はラダワ川の畔にある。ここはインドでは雪の降る唯一の町であるが、雪はなんら害を及ぼさない。

ここには沢山の小さな川があつて、人々はボートに乗る。ここから全國民に知られたシヨール（肩掛）が生産される。この町とその周囲には、シヨールを織るざつと二万四千の織機がある。

総督は、この製品から年々三〇〇〇ルピー受けとつてゐる。彼の印なしでは、ただの一枚のシヨールも売れない。総督の受ける歳入は、年間にざつと合計百万（ルピー）にのぼる。この町の住民の大半は回教徒か偶像崇拜者で、一般に彼らは悪意があり、不親切で、貧しい。総督はカール国王の臣下である。私はこの町が長さほぼ一〇〇ヴェルスタ、幅四〇ヴェルスタにのぼると言われた。一般に、家屋はとても立派とはいえない。住民たちはだいたい黎^{きび}油、レタスを料理したものを食べてゐる。金持はミルクとチュホン・バター⁽⁹⁶⁾を入れた茶は飲む。気候はよく健康的で、水もすばらしい。英國人はこの町を非常に手に入れたが、彼らのこころみはどれも成功しなかつた。⁽⁹⁷⁾ 町には約二万艘のボートがある。

カシミールの法律の一つは、もし盗人が最初の罪で捕つた場合には、その右手が切り落されることになつてゐる。二度目の罪を犯したら、腹を引き裂いて開き、ラクダの上のせて、市場の広場で公開することになつてゐる。そして、彼が死んだ場合には、橋から吊り下げられる。

カシミールの郊外は見る目にも楽しい。町の周囲の山々は輝くような新緑に蔽われる。町にはおびただしい数の運河があり、中央には周囲が一九ヴェルスタもある湖水がある。⁽⁹⁸⁾ この湖水の近くに一つの山があつて、その上に石造り

の砦が建造されている。湖水の水は非常に澄んでいて、湖水は大変深い。金曜日には、人々は湖水にボートを艘ぎ出さず。カシミールの住民は貧しいながら陽気である。金持は自分の黄金や銀を地中に隠し、この隠し場所は友人たちにさえ秘密である。だから、彼らが死ぬと人に知られずじまいになる。家を再築したりしたとき、黄金や銀が銅製の壺の中で見つかったりする。もし汗が親切なら、黄金や銀をつけて所有者に土地と一緒に与えてくれるが、もし悪質だったりすると、あらゆるものを自分の宝庫に入れてしまう。カシミールの人々の着ている着物は、われわれの祭司の着ているものと似ている。そして、男も女も同じだ。

カシミールからセミポラット砦⁽⁹⁹⁾までの道は、三千ヴェルスタあり、大変に平らである。イルティシユ川から三千ヴェルスタにわたって広がるキルギス草地⁽¹⁰⁰⁾は、同じようにまったく平坦である。五〇〇ヴェルスタにわたってカルムツク族⁽¹⁰¹⁾の国を横ぎって走る道は、山がちである。平坦な土地は、シナ国境地帯⁽¹⁰²⁾からトルファンに到るまで、二〇ヴェルスタにわたって広がっている。トルファンからバクシー⁽¹⁰³⁾に到る一〇〇ヴェルスタは同じ高さの国土である。バクシーからヤルカンドに到る千ヴェルスタは平坦である。ヤルカンドよりシナ国境地帯のコキアール⁽¹⁰⁴⁾の国土は、一〇〇ヴェルスタにわたって平坦である。コキアールからチベット⁽¹⁰⁵⁾までの二千ヴェルスタはむき出しの岩がちな荒々しい土地である。道は山の間の峡谷を通ってのびている。ここに一条の川が流れている。この国土は無人地帯で、隊商はチベットからカシミールに行くときにはオート表⁽¹⁰⁶⁾を持っていく。そこには岩がちな山地⁽¹⁰⁷⁾が二〇〇ヴェルスタにわたって目に入るほか、なにもない。カシミール国境地帯から、平坦な土地はカシミールの町⁽¹⁰⁷⁾まで二〇ヴェルスタにわたって広がっている。

カシミールを後にして、私はチベットの町に向かって出発し、そこに二〇日で到着した。町は丘陵の上にある。その周囲には岩がちな山々が屹立し、オート表⁽¹⁰⁸⁾を除いてはなにも育たない。土地の住民は貧しいために、これらのオート表を挽いて、粉とミルクとを混ぜこれにバターを加えて料理する。この混合物が彼らの唯一の食糧である。当地の

習慣の一つは最も邪悪で、常識に反する。もし家族のうち三人か四人の兄弟がいると、彼らは一人の婦人を娶って、彼女を妻として共有する。こうした結婚生活で子供が生まれると、長男の名前を付ける。かくして彼らのうち、こういったものだけが父親として尊敬される。ここには茶の木が沢山成育している。シヨール用の羊毛はラサの町からもたらされる。当地にもたらされるあらゆる柔らかな商品は、羊で運ばれるが、羊は運べる限りの荷を背負される。そしてここからはカシミールまで、商品は馬の背で運ばれる。カシミールから受け取った商品の税金から、土地の総督は約一〇万ルピーの年間の歳入を得ている。この町の総督はカロンと呼ばれ、カシミールの総督に従属している。

当地よりカシミールまで約二〇〇ヴェルスタあると考えられている。道は非常に岩がちで、旅行者はこれに不平を言う。いくら不足なものがあっても、この町はカシミールの町の余りもので十分まかなえる。

チベットには、ロシア製の金の縫いとりをした絹のよい市場があり、これらはよるこんで人々に買われている。これらの人々をチャバという。ラサから、これらの人々は大量のモヘア織り（アンゴラ山羊の毛）をチベットへ持っていく。そして、ここから彼らはカシミールへ出かけていく。ラサからチベットへの旅は三カ月かかる。

インドには、気候が暑いいため、おびただしいほどの様々な昆虫がいる。へびもほとんどの家にも住みついている。だれか家の中でへびを見つけ、とくに子供たちのために、安全にそれを除去しようと思つたなら、へび捕りの上手な人間を雇えばよい。こういった人は沢山おり——このような仕事に、ごくささやかな金を支払えばよい。男は特別な仕方でフルート（横笛）を吹き始め、ある言葉をぶつぶつ唱える。家の中のへびは男のところへはい出してくる。男は手に鉄の輪をもっていて、へびを捕えると、疲れ切るまでへびをぐるぐるふり廻わす。そうしてから籠の中へ入れ、森へ持って行って、それを放してやるのである。

チベットを出発して、私はヤルカントの町に着くまで四〇日間道をたどつた。これはきわめて退屈な旅だった。なぜなら、私のたどつた道は不毛だったからだ。恐ろしく深い峡谷と高い山々、そのうちのいくつかは氷をかぶり、耐

え難い悲しみを抱かせた。この感情はますますひどくなったが、それもそれはこれら場所が無人地帯(11)だったからだ。かくて、出来る限り一刻も早く、ここから抜け出ようというのが、私の唯一の願ひであった。とうとうヤルカンの町の町は、私の目の前にぼーっと現われた。町の周囲の樹々の繁みは旅人にとってよろこびであり、慰めの光景である。

私はこの町にかなり永いこと滞在した。土地の住民から聞いたところでは、五〇年前、この町はジנגギス・ハーンの後裔のタタール人に支配されていたといい、今日でも住民は回教法に従っているが、町はシナ人に属(12)している。町にはアナバン(13)と呼ぶ司令官の下に、二千人以上のシナ人兵士と、商業に従事する約三千人のシナ人がいる。気候は申し分ないが、水は汚い。どの建物をとつても立派だといえるものはない。それに住民も並の暮しぶりだ。季節について言うならば、当地の気候は申し分ないと言つたものの、これほどひどい秋というものをどこでもお目にかつたことはない。ほとんど秋を通して、空は曇っている。どこから飛んでくるのかだれも知らない奇妙な埃(14)が、雨のように降り、これが秋の間中なにもかにもすつかり陰気にさせてしまう。非常によく起ることだが、大気中のひどい湿気で、土地の住民はコルピット(15)と呼ぶ赤っぽい昆虫が現われる。この虫に刺されると、ほとんどいつも致命的である。

この埃が雨の代わりに降れば、来年は豊作だということを住民たちは知っている。しかし、もし雨が降れば、来年は非常な不作になることを意味している。こうした事件が起らないよう、彼らは特別の祈願をする。この埃は非常に厚く降るので、太陽の光さえも通さず——ときに七日か八日もの長いこと続く。この埃はきわめて細いため、ごく小さな穴でも通つてしまう。

シナの総督であるアナバンは現地語が喋れず、回教徒の中から通訳をつけている。彼は現地地でベクと呼ばれ、その職務にたつぷり給料をもらっている。この職務の他に、ベクは現地住民の訴訟で判決を下す権利を持ち、ある一定の期間、総督の裁判所にいることを義務づけられている。そして総督のいるところでは、彼の足下に立つことも坐るこ

ともできないが、彼は跪ずいて、自分の課せられた裁判の処理を総督に伝える義務がある。そして、総督から決定を受けると、裁可を受けるためこの決定を、王に送付しなくてはならない。

この町の他に、シナ人はフダン、ガシギール、アハスー、ドウロバン、イリを支配している。⁽¹⁸⁾この各々の町には、ヤルカントの総督の場合と同じ役所をもった一人のシナ人の総督がいる。イリ、すなわちグルジアには、沢山のシナ人がいる。一万人以上いるといわれている。この町のシナ人はひどく怠け者だ。日なが一日タバコを吸う以外なにもしない。その上、彼らは傲慢ときている。土地の住民は、通交証を持たずに町を出ることはできない。なぜなら、非常に沢山の官吏がいるからだ。これもシナ人の我俣になれた手段の一つである。

ヤルカントを去って一三日目に、私はアハスーに到着した。ここは小さな町であるが、沢山の大きな建物がある。ここに一つの峡谷があり、二つの部分に分けられる。一方はシナ人、いま一方は回教徒である。そして、相互間の商取引きは盛んである。気候は健康的で、裕福さはまずまずといったところだ。

アハスーから、私はトルファン⁽¹⁹⁾の町へ三日間の旅をした。ここは小さく、見苦しいところだ。住民たちは大変に貧しく、それにここで書きしるすものはなにもない。ここより二〇ヴェルスタで国境になるが、この国境でこの国とキルギス人の⁽²⁰⁾国とに分ける。

トルファンを発つてから、私はセミパラットへの三カ月間の旅をした。これは非常に楽しい旅であった。なぜなら、私はカルムック、キルギス、コザック、その他の沢山の様々な人々に会えたからで、彼らはいつも放浪して歩き、テントで生活している。彼らのだれも農業をせず、牛や馬乳で生きている。これから彼らは凝乳を作るのである。彼らの主な富は家畜からなる。牧畜が彼らの唯一の仕事だ。商売でも彼らは金というものを使わない。その代わり、彼ら、物々交換をする。彼らは、永久的な住居を持たず、牧草がよいところならどこでも全家畜をとどめる。このため、しばしば点々と居場所を変えるのだ。旅行者にとっては、彼らに遭遇するのはきわめて危険である。なぜな

ら、彼らは盗賊だからだ。セミ・パラットの町はイルティシュ川の畔にある。この川はこれら野蛮な人々の国とロシア本土とを分けている。

セミ・パラットから、二千ヴェルスタに及ぶ平坦なキルギスの国を通過してコーハン⁽¹²⁾に到る。コーハンにはタタールの汗^シがおり、五万の軍隊を擁している。

コーハンより平坦な土地を一五〇〇ヴェルスタいくと、ブハラに到る。ブハラの国王^{キヤ}は六万の軍隊をもっている。ブハラより、アフガン王国の首都カーブルまで、一五〇〇ヴェルスタあるが、道はいくらか山がちである。アフガン王は五万名以上の軍隊をもっている。

カーブルよりペシャウル⁽¹³⁾まで、道は岩山の間を一〇〇ヴェルスタ走っている。

ペシャウルより三〇〇ヴェルスタで、カシミールあるいはインド王国⁽¹⁴⁾の首都ラホールに到る。

セミ・パラットから私は、オムスクの砦まで駅馬で七日間を旅した。そこで私は、グラゼナツ⁽¹⁵⁾將軍に会見できる名誉をもった。公平にいつて、彼は非常に尊敬に値する。彼は愛情をもつて旅行者を遇した。多くの国々をめぐり歩いたが、私はこれまでどこでも彼のような官吏に一度として出会ったことがない。彼は自分の保護下に置かれた人々に寛大で、親切であると同様に、近くに住む野蛮な人々には惧れられていた。彼の名前をいうだけで恐怖で驚かせたし、そうした理由から、旅行者は恐れずに旅ができるのだった。

オムスクよりマカルヤに到着するまで、私は永いこと旅をした。そこに到着すると、大多数の様々に異なった人々が、あらゆるところから大きな市⁽¹⁶⁾へ集まってきた。私はこれほどまでの市をどこでも見かけたことはない。どの商人の心をも喜びと満足で充し、情深く、賢明なるアレクサンドラの御名がどこでも発せられていた。

とうとう、神の御加護により、私はモスクワを見る幸運にめぐまれた。

私の心は、永いことこの名高く、古いロシアの首都を一目見たいものと切に願っていた。そしてとうとうこの願

が充され、私の満足は十分に達せられた。わが目で壮大な建物を眺め、巨大な教会や塔、おびただしい住民、富、知る限りの壮麗さ、そして——あらゆるもののうちで最も貴重なもの——私は、はるか遠い国々においてすら噂でのみ聞き知っていた啓蒙、優しさと親切さ、厚遇と誠実さを知ったのだった！ 私のモスクワ到着での最初の願いは、皇帝の祖先によって造営された、皇帝陛下の宮殿を参観することであつた。

わが保護者の取りもちによつて、私は自分の好奇心を十分満足させた。かくして、私は宮殿内に入ることを許可され、そこで沢山の寶石や、金や銀、美しく装飾された玉座や、皇帝陛下の祖先の目の眩むばかりの王冠を見て、私はこの世のあらゆる宝石はことごとくここに集められたものと想像した。そしてこのことは、ロシアの君主(帝)の御子としての畏懼いぐをもつてわが心を充し、恐れながら沈黙する。

原 注

(固有名詞、とくに古い地名などにはロシア語綴りとローマ字で記しておいた。両者の表記はかならずしも一致しない。——訳者)

(1) ラファイル・ダニベカシヴィリイが一七九五—一七九六年にかけて行つた、彼の最初の旅行に出発した日付。不思議なことに、彼は第三回(主要)の旅行(一七九九—一八一三年)の出発日と目的についてはなにも記していない。この第三回の旅行記述が本書の内容になつてゐる。

(2) これはダニベカシヴィリイの第一回の旅行の出発日。この旅行家は一七九九年の秋、本書でふれている主要(第三回)旅行に出発してゐた。

(3) カルトリとカヘティ(東グルジア)の王イラクリ二世は、ダニベカシヴィリイを彼の第一回の旅行に派遣した。

(4) マドラス在住の富裕な商人ヤコブ・シャハミルヤン(またはシャミール・アガ)は、一八世紀の後半世紀の有名なアルメニアの愛国者だつた。彼はイランのイスファールハン近くにあるジェルファの村に生まれ、水夫として人生を歩み始めた。のちに彼は自分の運を求めてインドへ出かけ、マドラスに腰を落着けた。ここに滞在した永年の間、彼は巨万の富を蓄え、インドの

クロインス王（前六世紀、巨大な富をもったと信じられるリディアの王）として知られるようになり、一七九七年に七四歳で没した。彼の夢は、一六三九年にトルコとイランに分割されてしまったアルメニアを一目ながめ、独立させることだった。そして彼は、この目的を達成するために多大な精力を注ぎ込んだ。彼は、グルジア王イラクリ二世（彼は、周知の通り、アルメニア人に保護を与え、あまつさえエレヴァン汗国の首都であるエレヴァンから、ペルシア人を追い出してしまった）が、苦難からアルメニア人を救い出した人と見なしていた。政治的、経済的取引きで、富裕なアルメニア人がグルジア王に行なった奉仕に対し、イラクリ王がシャハミルヤンに与えた行為はいまも生き続けている。

(5) タシリ (Tashiri; Tashiri) の古グルジア州の町ロリ (Лори; Lori) のこと (この町はデベト川 (Debet; Debet) の盆地にあった)。ダニベカシヴィリイは全部の州を心に思い浮べていたが、イラクリ二世はここに帰還したアルメニア人を定住させるつもりだった。現在、この地域はソヴェト領アルメニア共和国の一部になっている。

(6) これは明らかに、ダニベカシヴィリイがイラクリ王の息子——デオルギー三世王によって、一七九九年に派遣された第三回の旅行を指している。

(7) アハルツェハ (Axartexa; Akhartsikha) (正しくは、アハルツィハ (Axartse; Akhartsikhe) は、南グルジアにある町。ダニベカシヴィリイの当時、ここはトルコ領に属し、地域都市であった。一八二八—一八二九年の露土戦争の終結後、グルジアに返還された。

(8) トルコの占有のため、ダニベカシヴィリイは南グルジアを指していつている。ここは一六—一七世紀にオスマントルコによって支配されていた。——この領土はメスヘティ (Mescheti; Mesheti)、ジャバヘティ (Javakheti; Davakheti)、タオ (Tao; Tao)、クラルジエティ (Krapdjeti; Kardjiet)、ラジスタン (Lajistan; Lajistan) の各州からなる。

(9) 最近の地図ではエルズルムとなっている。ここは北トルコのユーフラティス川の上流部に位置する。

(10) アハルツィヘからエルズルムに至るルート上で、ダニベカシヴィリイはエルシェット (Arshet; Arshet)、アルジャン (Arshin; Arshyan)、その他の山脈を眺めたにちがいない。これは北アルメニア・タウルス山系の一部をなし、同じくトランスカスピアン高原の火山高地を構成している。

(11) 井戸はないが噴泉があり、それらはアジア領トルコの街路や町の広場で目にすることができる。

(12) キズヤク (Kizyak; Kizyak) ——家畜の糞で作る燃料のこと。これは現在でも樹木のない多くの地方では、広く利用されている。

- (13) ムシ (Mysh; Mush) 東アナトリアの町名。ヴァン湖 (Van; Ban) の西にある。
- (14) グラク (T'rak; Glak) あるいは聖カラペット寺院 (とアルメニア人には知られている)。アッシリアの僧侶グラクによって建立され、トルコ領アルメニアでは政治的に大きな役割を演じた。
- (15) サラチンスク黎^{きよ} 米に付けられたロシアの古名。
- (16) アルガナ (Arghana; Arghana) 現在の南トルコのエルガニ (Эргани; Ergani) のこと。今日まで、ここで銅が採掘されている。
- (17) ファラー (Fara; Fala) は、町名としても存在しない。
- (18) メルティン (Mertin; Mertin) マルティン (Mardin; Mardin) シリア・アラブ共和国との国境近くの南東トルコにある。
- (19) メートル法に換算すると——二・一キロメートルにあたる。実際にマルティンの町のある高度は一五〇〇メートルより高くない。
- (20) ティヤルベキール (T'yarbekir; Tyarbekir) トルコにある現在のティヤルベキール (Диярбекюр; Diyarbekir)。
- (21) ムソール (Mysor; Musol) モスール (Mosyr; Mosul) のこと。著者はシャット (Шат; Shat) でチグリス川を表現している (アラビア語で川を「シャット」、ペルシア語で「ディグラ」と呼ぶ)。
- (22) ダニベカシヴィリイの時代、バクダットはオスマン帝国の一部だった。
- (23) チシール (chirp; chisir) より正しくは、ジスール (джиср; d'jir) アラビア語) といい、浮き橋の意味。
- (24) バスラ、南イラクの町名。
- (25) パケット (paketo; pake) 郵便船のこと。
- (26) バグラ (Bagra; Bagra) とボシェルノ (Бошерно; Bosherno) とは、各々バスラとブシールの町に比定されそうである。
- (27) イマーム——スィラムの神政国家における最高支配者の称号。
- (28) ボムバイ (Bombai; Bombai) ——ボムベイのこと。
- (29) パンカラ (Pankara; Pankala) ——ペンガルのこと (注65参照)。
- (30) カペール (Kaber; Kabe) またはファールス (Фарс; Fars) ——パーシイ教徒のこと。前四—七世紀にインドに定住し、ペルシア人から伝わったゾロアスター教の信者。

- (31) コロンブ (Korymb; Kolumb)——コロンボ、セイロン (現在のスリランカ) の首都。
- (32) マナール (Manar; Mannar) アダム橋の諸島 (インドとセイロン島の間にあるサンゴ礁の島々) の一島にある町名。
- (33) 古代から、北西セイロンはその真珠で名高かった。『黒い住民』という表現で、ダニベガシヴィリイはタミール人を表わした可能性はきわめて大きい。彼らはセイロンの都市人口の大きな比重を占めていた。今日までセイロン人の四分の一は、南インドから移ったタミール人である。
- (34) インドでは、牛への崇拜は今日でも行なわれている。牛肉を食べることはゆゆしい罪悪である。
- (35) ボンドチェリイ (Bondchery; Bondchery) またはコスト・マルヴァール (Kost-Malvar; Kost-Malvar)——インド東海岸にあるボンディチェリイ (Bondjheri; Pondichery)。一六七四—一九五四年までフランスの植民地だった。一七九三—一八一六年まで英国人に統治された。
- (36) これは明らかにタミール人を別に表わしたものである。
- (37) トラクバー (Trakber; Traker)——ボンディチェリイの南にあるトランクェバー (Trankebar; Tranquebar) この町を英国人は一八〇一年、オランダから占有した。
- (38) ヒンズー教を信仰する人々をヨーロッパ人たちは、偶像崇拝者と呼んだ。
- (39) タミール語のこと。
- (40) ティナバトヤン (Tinatagan; Tinabayan)——現地民の住むマドラス郊外のチナパタナム (Chinnappatanam; China-pappatanam) のこと。
- (41) マドラスにある聖ジョージ砦のこと。Panet Georgi.
- (42) パン——ダニベガシヴィリイのいうファン——は、キンマの葉のような葉味。歯で噛む。
- (43) ネストリウス教徒は、使徒トーマスが最初にキリスト教をインドへもたらしたと考えている。伝説によれば、彼は、現在マドラス郊外のミラプス (Mirapusc; Milapusc)——マイラポール (Maizaryp; Mylapore) に埋葬されている。ダニベガシヴィリイは一五四七年にポルトガル人によって再興され、この使徒の墓所とその近傍にある聖トーマス寺院について語っている。
- (44) ランホーン (Ranxun; Ranoon)——ビルマの現在の首都ラングーンのこと。ベクー (Beky; Beku) 南ビルマの王国だったペグー (Tery; Pegu) のこと。
- (45) ムシリイ・バンダール (Myuzir-Bandar; Mushii-Bandar) ずなわち〈漁港〉——別名、インド東海岸のキストナ・デル

タにあるマスリパタム (Macympitaram; Masulipatam) の事。

(46) ラングーン川のこと。マルタバン湾に注ぐ。

(47) ビルマ住民はモンゴル族である。ダニベカシヴィリイは明らかに、ただ白人種と黒人種とに區別している。

(48) ハヴァバルマイ (Khabapmai; Havabarmi)——ハヴァ (Xava; Hava) かアヴァ (Ava; Ava) あるいはバルマ (ブルマ) (Birma; Barma) の二語で混成されている。アヴァはビルマの古代都市の名称で、この廢墟跡はマンダレー近くのイラワジ川の上流部にある。ここにダニベカシヴィリイは狭い意味でビルマ人——現在のビルマの北部に定住する種族——を指している。一七五二年から一八八五年までビルマに続いたコンバウン朝は、この種族から興った。

(49) 仏教徒 (チベットではラマ教徒) とヒンズー教徒 (インドではブラーマン) のこと。

(50) ビルマは産出するチーク材で名高かった。その材木は建船者がしきりに捜し求めるものだった。ラングーンから、ダニベカシヴィリイの航海時代におけるチーク材の大規模な輸出は、ビルマと英国の事業によって強固となった。

(51) ホバルバイ (Xobapbai; Hovabai) とは、明らかに称号でも正式の名称でもないが、ビルマ族に対する官吏 (ラングーンの総督) の關係を明らかにする言葉である。(注48参照)。

(52) 国王の前に平身低頭するようビルマ人に要求されている。『ばかばかしい』屈辱的な作法についてふれたダニベカシヴィリイの記述と、彼の生命を危ふく犠牲にしかねたダニベカシヴィリイの災難についてのこれから先の話は、〈生ける仏陀〉と自から称して、コンバウン朝の典型的な代表者であるボダウパヤ (一七八一—一八一七) の支配を浮き立たせる専制政治と見事に調和している。

(53) 一八世紀末と一九世紀初葉、ラングーンは重要な造船の中心だった。

(54) ビルマと英国の事業は、コンバウン朝の下で、ラングーンに大規模で勢力のあるアルメニア人の植民地のあったことを確信させる。すなわち、アルメニア人の植民地は、ラングーンで最も勢力のあるものだったからである。そこには独自の教会があり、アルメニアの商人のうち幾人かは、高級な港湾官吏や廷臣 (Sykes, M.: An Account of an Embassy to the Kingdom of Ava sent by the Governor-General of India in the year 1795, London 1800 参照) だった。

(55) 硬玉——寶石であるルビーのこと。ビルマ産のルビーはマンダレーの北東にあるモゴク (Morok; Mogok) で、古くから発見されていた。

(56) 英国のビルマ征服は、主にラファイイル・ダニベカシヴィリイがこの国を訪れてから以後に完成された (一八二四—一八二

- 五、一八五三、一八五五年の戦争の結果。
- (57) コルカダ (Kolkata; Kolcda)、あるいはカルカダ (Kalkata; Kalcada)——カルカッタのこと。
- (58) 実際、これらはトラのことで、トラは一九世紀末まで少なくともビルマのアラカン海岸あたりをうろついていた。あらゆる大きな猫——ライオン、トラ、白ヒョウ、ヒョウ——とは、一般にライオンと呼ばれた。
- (59) ビルマでは二、三の河川をキカイア (Kikay; Kikay) という。ダニベカシヴィリイはこの川についてふれ、その河口はバハール・カン (Bahar-Kann; Bahar-Kann) の町から二日行程ほどあるといっている。彼のいうキカイア川とは、間もなくそのデルタ近くのカラダラン川 (Kaladan; Kaladan) の一支流と合流する。
- (60) ランタンをつけて釣をするのは、ビルマを含めて多くの国々に広まっている。
- (61) バハール・カンで、ダニベカシヴィリイはアラカン (Arakan; Arakan) の町を意味させている。アラカンはかつてビルマの西海岸にあった。その他の名称はダグナワディ (Danawadi; Dagnawadi)、『ムローング (Mroong; Mroong)』、『ムロハウン (Mrohan; Mrohan)』である。
- (62) ガンジス川の湾——これはガンジス・デルタの一支流ホーグリー川 (Hughly; Hooghly) が注ぐ、ホーグリー湾のこと。
- (63) ラート——ヘロード (卿) の変型したもの。一七九八—一八〇七年、東インド会社はウェズリー卿によって指導された。
- (64) 英国東インド会社のこと。
- (65) ベンガル語、すなわちベンガリを意味する。実際、彼の言っているのがベンガル州であるなら、ダニベカシヴィリイはパンカラ (Pankara; Pankala) を町として信じていたことになる。パンカラはバンガラ (Barrara; Bangala)、『すなわちベンガル (Bengal; Bengal) の名が地方にあって変型したもの。』
- (66) 〈黒い軍隊〉という表現で、ダニベカシヴィリイはセポイ (インド人の傭兵) を現わしている。兵隊は英国当局者によって、地方的に補充されている。
- (67) ウイリアム砦。一六九七—一七〇二年にカルカッタの英国人によって建設された。
- (68) シラムプール (Sipamyp; Srampoor)——カルカッタの北にあったセラムプール (Serampyp; Serampore)。ダニベカシヴィリイは間違っている。セラムプールは一八四五年までデンマークに属していた。
- (69) チチラ (Chira; Chichra)——現在のチンストラ (Chinsura; Chinsura)。セラムプールの北にあった。チンストラについては、ダニベカシヴィリイは誤りを犯している。チンストラは一八二五年までオランダ人に統治されていた。

- (70) マルシタバット (Marshatabat; Marshatabat) あるいはマスタバット (Maxutabat; Mahsutabat) —— ムルシタバット (Murshidabad; Murshidabad) のこと。以前は、マスサバット (Maksusaбат; Mahsusbat) といった。
- (71) ナボブ (Nabab; Nabob) —— ナワブ (Navaб; Nawab) は、この場合、ベンガルの支配者の称号で、英国人に指名されたもの。一七六四年以降、彼は実権を失った。
- (72) ヒンディー語である。
- (73) ムンキール (Munkir; Munkir) —— モングイル (Monghyr; Monghyr) のこと。
- (74) 赤い木と黒い木 —— 高価な家具、内装飾、その他に利用された貴重な材木であった。赤い木は、インドではサバン (Caesal-pina sappan) といひ、黒い木とは、黒檀 (Ebony) のことで、堅く、重く、長持ちする材木である。
- (75) アジマバット (Azimabat Azimabat) あるいはファトナ (Fatona; Fatona) —— ガンジス川の右岸にあるパトナ (Patna; Patna) のこと。
- (76) パトナ —— 前三世紀にパタリプトラ (Patalliputra; Patalliputra) と呼ばれていた古代の町。ムガル帝国の王だったアウラングゼブの孫であるアジムは、一七世紀の末葉にパトナの太守に任命された。この町はアジマバットと呼ばれ、一九世紀中葉までこの名称が残っていた。
- (77) この儀式についての記述は、一〇世紀のフランスの医師で旅行家だったフランソワ・ベルニエ (一六二五? — 一六八八) によってなされている〔近東よりインドへ旅行し、ムガル帝国の侍医となり、帰国後、見聞録として、Histoire de la dernière revolution des Etats du Grand Mogol, 1670〕。
- (78) バナリス (Banaric; Banaris) —— ベナレスのこと。
- (79) ラクナホール (Laknahor; Lakhnare) —— ガンジス川の支流グムティ川の右岸にあるラクノウ (Lakhnay; Lucknow) の町。ダニベカシヴィリイの訪問当時はアウドの首都であり、領地として英国人により従属的な公国であった。英国の官史 (駐在官) はアウドのナワブのアドバイザーだった。
- (80) ダニベカシヴィリイは明らかに、アウドの主要な農民階級、クルミを意味している。あるいは〈クルド〉はもしかすると一般の人々を意味する。
- (81) カンベール (Kamber; Camber) —— ガンジス川の右岸にあるカウソール (Kantur; Sawnpore) のこと。
- (82) ファラハバト (Farakhat; Farakhat) —— ファルハバット (Farkhabat; Farukhabat) のこと。アウドに頼って

- た公国。一八〇一年に英国へ移譲され、一八〇二年にファルハバットのナワブは、自分の権威を棄て、英国人から年金を許された。
- (83) メレド (Meret; Mered) —— ミレード (Mirud) の名。シャチナバット (Shakhinabat; Shahinabat) —— ジャジナバット (Shakhjanabat; Shahjanabat)。一七世紀にデリーはムガル帝の支配者シャー・ジャーハンの名譽をたたえて命名された。チュマ・メチエト (Чума-Мечет; Chuma-Meche) —— ジャマ・メスジ (Жама-Месджит; Jama Masjid)。すなわち、大モスクのこと。チャナ (Чана; Chana) —— ジェマナ川 (Жамна; Jamma) の名。
- (84) 明らかに印刷上のミス。デリーのことにちがいない。デリーは一八〇三年に英国人に占拠された。しかし、以前はムガル帝の空虚な支配の下に残続していた。
- (85) ダニベカシヴィリイは明らかにスリナガールを指していつている。ここはガルワールのヒマラヤ南麓にある、北インドの重要な宗教的・商業的・政治的中心である。一八九四年、ヒマラヤで生じた地崩れのため、ゴハナ湖が形成されたとき、ここは完全に破壊された。ソロモン・イオルダニシヴィリイ (ダニベカシヴィリイの本の一九五〇年グルジア版の編集者で注釈者) は、カシミールにあるスリナガールと、ダニベカシヴィリイのいうヘシリナゴール (Сиринатор; Srinagor) と誤って同一視している。このことはヘカシエミール (Кашемир; Kashmir) として、いたるところで言及している。
- (86) ことによると、ダニベカシヴィリイはトゥガラク朝のフィールズ・シャーの宮殿の廢墟跡である、パンジャブのフェロゼプール (Фирозпур; Ferozepur) の町をいつているのかもしれない。フィールズ・シャーは一三五一一一三八八年に、デリーのサルタン領を支配した。ジェラード・レイク將軍麾下の英国分遣隊は、一八〇三年にフェロゼプールに入った。しかし、その町の占拠する困難さ、英国人が蒙った大きな損害についてのダニベカシヴィリイの得た情報は、明らかに大げさになっている。一八〇三年から一八三六年までの期間に、この町は土地の皇族 (ナワブ) によって統治された。ダニベカシヴィリイのファディフル (Фадифур; Fadirur) をどこであるか同定することはむずかしい。彼の記述のいくつかは、アグラ近傍の町バハラトプール (Бахаратпур; Bharatpur) がやわらした。
- (87) リク (Лик; Lik) —— ジェラード・レイク將軍 (Gerard Lake) の名。第二次英・マラタ戦争 (一八〇三—一八〇五年) で、デリーとアグラを占領した英国の司令官。
- (88) ラホールはいまのパキスタン、西パンジャブ州にある。この宮殿は一六二二—一六二七年に、ムガル帝国の支配者ジャハーンギールによって建造された。

- (89) ナルポール (Hopnop; Narpot)——アムリトサールの北東一五〇キロ、ヒマラヤ山麓のカングラ地域にあるスルプールのこと。ファール (Fap; Far)。
- (90) ヒンズー人によれば、夫の死は妻の罪障によって生ずる。それ故、寡婦は夫の死体とともに生きながら火葬にされた。その残酷な儀式はストスイー (Strisee) と呼ばれ、一六世紀に早くもアクバール帝によって禁止させられた。しかし、一九世紀まで実施され続けた。このような公けの火葬の最後のものは、一八七〇年に起った。
- (91) アクバール・シャー——大ムガル帝のアクバール (一五五六—一六〇五) のこと。
- (92) ジャワラ・ムヒは、カングラ地区の天然ガスの噴出する寺院。この名称は「女神の口」を意味する。
- (93) ダニベカシヴィリイは、カシミールの首都スリナガルに当てている。スリナガールの町にたいするカシミールあるいはカシミールの名称は、この他の著者も用いている (ロシアの旅行家フィリップ・イエフレモフ (Филипп Ефремов) は、「カシミールの村」を記述している)。一六七〇年、フランソワ・ベルニエによれば、一七世紀にはカシミールの首都は州全域と同じ名称が用いられていた。
- (94) スリナガルはジェルム川畔にあり、ダニベカシヴィリイが明らかに信じていたような、ラビ川の畔にはなかった。ジェルム川とラビ川とはともにインダス川の支流である。
- (95) 一七五六年、大ムガル帝国の崩壊した後、カシミールはアフガン人によって支配された。一八一九年、シーク人によって征服された。
- (96) 融けたバター——ギー (Ghee) という。一九一七年のロシア革命以前、エストニアはロシア語でチュホンチ (Чухончи) と書いた。
- (97) 英国人は一八四八年にカシミールを手中にした。
- (98) ジェルム川の渓谷中にあるブラール湖である。
- (99) セミポラット砦——カザフスタンにある現在のセミバラチンスクの町である。
- (100) キルギス草地——カザフスタンの草地と沙漠地帯。アルタイ山脈とタルバガタイ山脈から南ウラルまで広がる。
- (101) カルムック族——キルギス、オイラート、ときには今日ではウイグル族として知られている名称。
- (102) ここでいう国境とは、ロシア帝国とシナとの間のもの。
- (103) バクシー (Bakshi; Vaksi)——恐らく、新疆のアクスー (Akcy; Aksu) の町であろう。さらに本文では、「ダニベカシヴィ

- リイはこれをアハスー (Ахсу; Akhsu) とした。
- (104) コキアール (Кокпар; Kokpar) —— コクヤール (Кокяр; Kokyar) のこと。カルガリックの南、テイズナフ山脈の北斜面にあった。
- (105) 〈チベット〉とは、ダニベカシヴィリイが小チベット (ラダク) のレーの町に用いた名称。この町はフィリップ・イエフレモフと一八世紀のアルメニアの旅行家で商人だったグリゴリとダニラ・アタナソフ兄弟 (Братья Григорий и Данила Атанасовы) によって同じように呼ばれている。
- (106) これはクンルン (崑崙) 山脈とカラコラム山脈を横断するキャラバン・ルートである。
- (107) スリナガール周辺 —— カシミール渓谷のこと。
- (108) レー周囲の主要作物としてのオート麦の記述は、ダニベカシヴィリイのグルジア語のオリジナル版をロシア語に訳したときの不正確な翻訳によるもので、誤りである可能性が大きい。大麦はレー周辺にも成育し、ダニベカシヴィリイがこの作物のことを心に描いていたことは十分推測される。
- (109) この集団結婚の形態は、スコットランドの社会学者 J・F・マクレナン (J.F. McLennan) によって一妻多夫と呼ばれたものである。フィリップ・イエフレモフはこの習慣を見て驚いたが、チベットの記述の中でこれに言及している。一妻多夫は依然としてチベットで行なわれている。
- (110) (Ласа; Lasa) あるいは (Ласса; Lassa) —— ラサ (Лхаса; Lhasa) のこと。チベットの首都である。
- (111) カロン (Калон; Kalon) —— ダライ・ラマの評議会 (Kashag) のこと。この評議会は一八世紀にシナ皇帝の乾隆帝によって創設された。
- (112) チャバ (Чаба; Chaba) —— ラダクの遊牧民 (Чампа; Champa) のこと。ロシアの商品は一八世紀の初めから、チベットに輸出されていた。
- (113) レーからヤルカンドのルート上で、ダニベカシヴィリイはカラコラムと崑崙山脈を横断した。このルートについては、ロシア参謀本部 (一九〇三年) のノビツキー少佐 (В.Ф. Новичкин) によって詳細に記述されている。ノビツキーによれば、高度一、三〇〇—一、八、五五〇フィートの高度に二〇の峠があり、そのうち六つは夏季でも氷雪がみられる。
- (114) ヤルカンドの回教徒の住民たちをいうのに、ダニベカシヴィリイはウィグルを指している。
- (115) アナバン (Анабан; Anaban) —— より正しくはアンバン (Амбан) —— 新疆とチベットのシナ中央政府の代表者のこと。

(116) レスの塵——沙漠（この場合、タクラマカン沙漠）から飛んでくる風で運ばれたもの。これは沙漠の緑りにそってあまり、土壌を肥沃にする。

(117) コルビット (Korbitt)——多分、危険な病気を運ぶ、羽虫。

(118) フダン (Худан; Hudan)——ホータン。ガシギール (Гашгир; Gashgir)——カシユガール。アハスー (Ахсу; Akhsu)——アクスー。ドウロン (Дурон; Duroban)——トルファン。イリ (Или; Ili)——クルシア。

(119) トルファン (Турфан; Turfan)——ウチ・トルファンのこと。

(120) キルギスの名称は、カザフとも用いる。

(121) コーハン (Кохан; Kohan)——ウズベキスタンにあるコーカンドのこと。ダニベカシヴィリイの当時、ここはコーカンド汗国の首都であった。

(122) ブハラの藩王 (エミール) のこと。

(123) ペシャワール (Пешавр; Peshaur)——パキスタンのペシャワールのこと。

(124) インド王国——この場合、シーク王国のこと。

(125) グラゼナツプ (Г.И. Грязев) (一七五〇—一八一九)、すぐれたロシアの將軍。

(126) 毎年、定期市はニジニノフゴロツト（現在のゴリキ市）近くの、マカレエフ (Макаревич; Makaryev) の地域中心地で開かれていた。一八一六年に、この市の建物は火事で焼け落ちた。一八世紀の終りから一九世紀の初めにかけて、トビリシの商人たちはしげしげとこの市へ出かけて行ったものである。

(127) 東グルジア (カルトリ・カヘティ王国) は、一八〇一年にロシアへ帰属したので、グルジア人だったダニベカシヴィリイは、第三回の旅行から帰途、ロシアをわが祖国とみなした。

ロシア側資料

（オルレンブルグ国境委員会議長ゲー・エフ・ゲンスの備忘録より）^①

グルジア貴族州書記ラフアイル・オシポビッチ・ダニベコフの話^②

ダニベコフは……一七九五年に、グルジアからベルシア、インド、チベット、シナ・トルキスタンを横断してロシアへの旅を完成させたが、一八二二年の初めにいまひとつ別の旅行を行った。アストラハンよりカスピ海を越えてマゼンデルアンへ航海に出、それからテヘラン、イスファールハン、シラーズを経由してアブシールへ行き、そこで彼は英国船に身を投じて、ボンベイへ向けて出航し、それから陸路ラホールへ行き、カシミール、カールを通ってブハラへ行った。そこからキャラバンを伴って旅し、一八二七年の七月早々にオルスク砦に到着した。彼はムーアクロフトをマルヤン・ムルクルヤンと呼んでいる。この英国人はインドからカルミールへ旅をし、それからチベットへ行き、そこで彼はとどまり、献身的で信頼できるインド人を一人ヤルカンドへ派遣した。シナ人はこの使者を疑い、彼をとどめたが、それ以上の問題も起さずに旅をさせた。

チベットから、ムーアクロフトはカシミールに戻り、そこからカールへ、さらにブハラへ行った。彼と一諸にいま一人別の英国人と、英国人とインド婦人との間に生まれた一人の医師、それに東インド会社の七〇名のインド軍がついていった。カールとバルフとの間で、彼はハザザにとどめられたが、彼が携帯していた大型鏡で、彼らを駆逐した。彼はブハラの総督に三千ドユカを贈り、町に入る通行許可を得た。そこで彼の気前のよさの故に、彼はすばらしい招宴を受け、馬とら馬（ら馬には五〇ティラーほど支払った）を購入し、汗に鏡を贈り、帰途についた。ムーアクロフトと彼の仲間たちは、ターバンを巻いて完全にアジア人の衣装をまといっていた。

インド産の馬は小さくて、怒りっぽいため、インドの英国人は馬不足だった。彼らは多くの馬をベルシアで購入し、それを海路アブシールからインドへ送った。

一八二六年の初め、英国人はバルトプール（バラトプール）の町を占拠したが、ここはデリーの近くにあり、アクタラバット（これは誤記。アクバラバット、すなわちアグラのこと）から約一〇〇ヴェルスタある。この藩王は大変に富裕で、彼の財産は征服

者の掌中に落ちた。

一般的にいつて、英国人はますます強固にインドを侵すにいたっている。サトレジ川は彼らの手に入り、パウルプール^⑥（ムルタ^⑦とアトクの間にある）に、彼らは二万の軍隊を擁している。そこでラジート・シン、あるいはライ・シンと名のるシーク人の支配者は、首都をラホールに定めているが、英国人に包囲されている。

彼がたとえ十万の軍隊をもち、一八一五年に自国の王を裏切った、フランス人の將軍を手元に置いて正規軍を召集したところで、彼はこの国であまりにも強くなってしまうている英国軍と闘うことはできない。

〈注〉

- ① ИЗ ТЕТРАДЕЙ ПРЕДСЕДАТЕЛЯ ОРЕНБУРГСКОЙ ПОГРАНИЧНОЙ КОМИССИИ, Г. Ф. ПЕНСА.
- ② Рафаила Осиповича Данилоскова.ロシア人はタニヘルフと呼ぶことが多かった。
- ③ プシールのこと。
- ④ ムーアクロフトとトレベックの旅は一九紀初葉のアジアで行なわれた最も伝説に富んだもので、彼らはバルフで熱病で死んだという。彼らの記録はウイルソンによって編集されて出版された。
William Moorcroft & George Trebeck: Travels in the Himalayan Provinces of Hindustan and the Panjab; in Ladakh and Kashmir, in Peshawar, Kabul, Kunduz and Bokhara, from 1819 to 1825. 2 vols. London 1841
ムーアクロフトの旅は不明な点が多いので、このダニベカンヴィリイの記録はきわめて貴重である。なお、ムーアクロフトの旅については拙著『中央アジア探検小史』（三省堂 一九七八年）に若干ふれてある。
- ⑤ Мурьян-Муркрян (Murjan-Murkryan)
- ⑥ Панджяпур (現在のパキスタン) のバハワルプールのこと。
- ⑦ Панджяпур州のムルタンとアトク。ダニベカシヴィリイはバハワルプールの位置をアトクとムルタンとの間として間違っている。
- ⑧ ラジート・シン（一七九七—一八三九）、シーク王国の創設者。

ラファイル・ダニベカシヴィリイについて

金子民雄

一八世紀から一九世紀の初めにかけて、広くインド、ビルマ、中央アジアを旅した、コーカサス地方の出身者ラファイル・ダニベカシヴィリイの生涯については、これまでロシアを除けばほとんど紹介されてこなかったように思う。このグルジアの旅行家で、外交官でもあったダニベカシヴィリイという人物は、いまなお疑問の多い旅行家であり、一部の旅行記を除けばごく断片的な旅行記録が発見されたままで、詳しい全貌は依然として霧の中につつまれたままである。彼がそれほど大きな旅行を行っていないが、いつ生まれ、いつ没したのかさえ分っていない。また彼の家族関係のこと、幾度南アジアや中央アジアの旅に出かけたのかも不明で、ただわずかに彼の旅行目的がなだったかが知られているにすぎない。

これほど謎に充ち、旅行記録が不完全のまましか遺されていないのかかわらず、彼の旅が注目されたのは、なんといつても一九世紀のごく初期のころの良質なアジアの旅行記録が現在きわめて乏しいこと、その内容が大変豊富で、旅行した土地の地理や住民の風俗習慣等がこと細かく記述されているからであろう。ともかく、彼は旺盛な旅行家であった。現在はずきりしているだけでも、彼は前後五回の旅行を行っている。第一回（一七九五—一七九六年）、第二回（一七九七—一七九八年）、第三回（一七九九—一八一三年）、第四回（一八一五—一八二〇）、第五回（一八二二—一八二七）であり、この他にまだ旅していた可能性があるという。これは当時としては驚くべきことだった。

ラファイル・ダニベカシヴィリイは、ロシアでは一般にダニベコフという名で通っていたが、彼の家系についてはこれまた不明な点が多く、よく分っていないという。ただ一族は一八世紀の中葉からずっと、コーカサス地方の都邑トビリシに住んでいたものらしい。彼の先祖のうち数代は、グルジア王から外交契約にもとずいて商用でインドと交易をしていた。彼の父親はオセフ（イオシフ）といい、イラクリ二世に任せ、インドとの交易上の特権は、父親から受け継いでいたもようである。また彼の母親は、たまたま一八〇三年にトビリシでの人口調査の記録のなかで、カソリック名をアンナ・ローザとして見えている。またダニベカシヴィリイの兄弟のイオシフの名も、この同じ記録のなかに見られるという。ダニベカシヴィリイの先代たちは、トビリシ周辺でグルジ

ア王カベルシア皇陸から所有地をもらっていたというから、豊かな家系だったのであろう。

ダニベカシヴィリイがはつきりと旅行家、外交官、また商人としての生涯を歩め始めたのは一七九五年からであるが、これはこの前の記録がいまだ見つかっていないからだけで、あるいは父親に連れられて、遠いアジアの国々を旅していたかもしれない。マルコ・ポーロが父や叔父と一緒にアジアの旅に上ったように。

現在、種々の記録から判明しているダニベカシヴィリイの旅行のうち、最初の二回の旅行は、イラクリ二世の命によって行なわれたものだった。しかし、残念ながらこの間の事情は、ごく簡単な彼のメモ以外に知られていない。この旅行目的は、どうやら当時、インドのマドラスに住んでいた、富裕なアルメニアの愛国者だったシャミラ（シャハミルヤン）に、イラクリ二世の證書を運ぶことだったらしい。シャハミルヤンを通じて、国王はグルジア—アルメニア独立王国を建設しようという、かなり遠大な希望だったらしい。ところが長い旅の末、ようやくマドラスに行ってみたら、彼はすでにこの世の人ではなかった。一七九七年に死去していたからだ。そのためせつかくの使命は果し得なかった。また第一回旅行は約二年続いたものの、この旅ではっきりした場所はただトビリシとマドラスの二地点しか知られておらず、途中でどこをどうたどったのか分らない始末である。

次の第三回旅行、これが彼の人生を通じて一番長期で、かつ重要な旅であり、本書で訳出されたのがこの旅の成果である。しかし、この旅行の背景はちよつと複雑で、いくらか説明が必要であらう。今回の旅では、彼はゲオルギ八世から證書を与えられ、インドへ派遣されたのであるが、このときのグルジアの政治情勢は第一回・第二回の旅行当時とは一変していた。なぜなら、当時カジャール朝のベルシア皇帝アガ・モハメッド・ハンは、ロシア寄りを強めるイラクリ二世を懲罰するために、一七九五年にグルジアに侵攻したからである。すでに老齢なイラクリ二世は到底これを撃退できる状態になく、トビリシはペルシア軍に占拠され、兵火にあつて焼亡してしまつた。この三年後の一七九八年、イラクリ二世は死去し、長子のゲオルギ八世が王位を継いだ。しかし、彼はとても軍事的・行政的能力には欠けていたから、ロシア皇帝パーヴェル一世に保護を願い出、そこでツァーは軍隊と大使をグルジアに送つて、一七九九年にはグルジアは完全にロシアの支配下に置かれてしまつた。このような状況下で、ダニベカシヴィリイは第三回の旅に上つたのである。

この旅はなんと一四年間も続き、行程は二万キロにも及んだ。交通が不便で、道中も危険が多かつたから、旅は想像を越す苦難

なものだった。ところが彼の旅行記類からでは、どこをたどったか正確なルートがあいまいで、これを明らかにするには、ごく最近まできわめてむずかかった。これはダニベカシヴィリイが現地地名を開き違えて書いてあったり、当時は存在したがいまは消滅してしまった地名が混在していたからであつた。しかし、この旅行でとくに興味を引くのは、彼がヒマラヤ西端部、カラコラムを北に越し、東トルキスタンのヤルカンドに出たことであろう。このダニベカシヴィリイの旅については、ヘディンがかつて追求したことがあつたが、これはグルジアやロシア以外で紹介されたものとしてはかなり古いものに属する。しかし残念ながら、この当時（一九一一年）には、まだダニベカシヴィリイの詳しい報告が見つかっていなかったもので、ごく簡単なものにすぎなかった。第四回の旅行は、彼自身の署名のある資料が、オムスクの文書館で発見はされたものの、これは旅行を知るには不十分であるらしく、詳細は不明である。

第五回旅行は一八二二年から五年続き、これはトピリシからではなくロシアから旅を始めた。彼はアストラハン経由でカスピ海を渡り、さらにペルシア湾からボンベイへと船でインド洋を横断した。この旅行が他の場合とちよつと違つてゐるのは、インドからラホールを抜け、スリナガール、カーブル、プハラを経て、オルレンブルグに出たことであろう。彼はインド、パキスタン、アフガニスタン、西トルキスタンを旅したことになるのだつた。そして彼はオルレンブルグで、たまたまゲー・エフ・ゲンスに会うことがあり、このときダニベカシヴィリイが語つた聞き書きが遺されていて、一九六四年にソ連のインド学者イー・ヤー・リュステルニクによつてオルレンブルグ文書館で発見された。このメモがとくに貴重なのは、英国のアジア旅行家ウイリアム・ムーアアクトフトのプハラでことがふれられていることであろう。ムーアアクトフトはバルフで熱病で死んだといわれる大変謎の多い人物であつたが、ダニベカシヴィリイの記録は短いながらこの不運な旅行家の知られざる一面をよく伝えている。この資料は付録として加えてある。

ダニベカシヴィリイは、これまで判明している限り二八年間もの間、遠いアジアの諸国を旅して歩いた。彼は旅行から帰つたのちの晩年は、ロシア人としてロシア本土で人生を送つた可能性が大きいという。そして彼の死んだのは推定で一八二七年以降になるであろうという。しかし、彼の業績はともかく大きかつた。ロシア市民としては、恐らくビルマを訪れた最初の人物にならうという。そればかりでなく、彼の書いた旅行日誌は、いまだでは数少ない一八一―一九世紀のトルコ、インド、中央アジアの珍らしい記事が紹介されていることであろう。彼は母国語としてのグルジア語の他に、アルメニア語やロシア語、その他のアジア語にも通曉

していた。

ダニベカシヴィリイの旅はたしかに異常と思えるものであるが、しかし彼の旅した当時、すなわち一八世紀から一九世紀の半ばごろまで、グルジアとインドとの間には通常の交易が行なわれていたことである。グルジアに住む商人たちは、はるかなインドと何世紀にもわたって交易に従事していた。インドはグルジアから輸出される羊毛、ろう、石けん、その他の商品の替わり、紙、薬品、武器、火薬、染料、香料、宝石、カシミール織物が輸入された。その点、ロシアはインドとあまりに距離が隔っているため、交易はほとんど不可能に近かった。ただ一七—一八世紀にかろうじてアストラハン経由で、交易が行なわれているにすぎなかったが、一九世紀に英国がインドを支配するにつれ、これも事実上不可能となった。ロシア人でビルマを訪れた人もごくわずかで、一九世紀中期以後にも、せいぜいパシノ^②、ミナイエフ、デリング、ジルムンスキーぐらいの旅しか知られていない。それだからこそ、彼ら以前のダニベカシヴィリイの旅の価値は大きかったといえよう。

ダニベカシヴィリイの旅行記録が、一応本としての体裁で出版されたものは、これまでに私の知る限り五回ほどあるが、グルジア版は未見である。ダニベカシヴィリイの新しい資料が近年次々と発見されてきたので、後の版になるほど完成度が高いと思われる。ともかく一番最初に出たものは、グルジア語からロシア語に訳され、一八一五年のモスクワで出されたものという。

Данибешвили, Рафаил : Путешествие в Индию грузинского дворянина Рафаила Данибешвиева. Перевод с грузинского, М., 1815.

次に一九五〇年にグルジア語でトビリシで出版された『インドの旅』がある。この後の一九六一年に別のロシア語版がモスクワで出された。

Путешествие Рафаила Данибешвили. Очерк, комментарии и библиография д-ра географических наук Д.И. Маруашвили, М., Географиз, 1961.

この後さらに、一九六三年にはトビリシ版が出された。編集ノート、小伝をエル・マルアシヴィリイが書き、資料、ルート・マップもつけられている。

Данибегашвили, Р.: Восемнадцать лет в странах Азии. Путешествие Рафига Данибегашвили. Перевод, редакция, примечания, библиография и очерк Л. Маруашвили с приложением архивных документов и маршрутных карт. Изд. Г. Гордледзе, Тбилиси, «Саბчота Сакарветло» 1963.

トビリシで出されたトビリシ版を元本にモスクワ版にしたのが、ここで訳した底本だったらしい。編集ノート、小伝は同じエール・マルアシヴィリイが書き、付録資料、ルート・マップがこれに加わる。

Путешествия Рафига Данибегашвили в Индию, Бирму и Другие Страны Азии 1795-1827. Ответственный редактор академик ф. ф. Давитая, очерк, комментарий и библиография доктора географических наук Л. И. Маруашвили, Москва 1969.

わが国では親しみのないダニベカシヴィリイのインドやカラコルム、中央アジア方面の研究は、むしろこれからであろう。しかし、彼の生国であるグルジアでは、多くの研究者によっておびただしい数の論文が、これまでに発表されている。ただこの研究論文のほとんどがグルジア語で、他はロシア語で書かれたものばかりであり、これらはわが国では見られる状況にない。ダニベカシヴィリイについては、かつて簡単な記事を書いたことがある^③。

この小文は、マルアシヴィリイのすぐれたダニベカシヴィリイ小伝にほとんどよっている。感謝の意を表したい。

〈注〉

- ① Hedin, Sven: Southern Tibet. Vol. III. History of Exploration in the Kara-Korum Mountains. Leipzig 1922. (『カラコルム探検史』上、水野勉訳、一九七九年、白水社 第十二章「イエフレモフ、ダニベク、その他の人びと」参照)
- ② パシノについては拙著『中央アジア探検小史』(一九七八年、三省堂)のⅧ章、「英露の秘密代理人 バトラーとパシノ」に詳しく簡単ながらふれてある。
- ③ 拙文、「コーカサス出身のアジア旅行者ラファイル・ダニベカシヴィリイ」(『山書月報』一九八〇年五月号)

カンチェンジュンガ北壁（一九八〇年春）

——無酸素登頂の記録——

川村精一
坂下直枝

許可取得まで

七七年秋、成功裡に終わったジャヌー北壁の遠征から一年経って、我々の高峰への憧憬は再び大きくふくらみ始めた。小川信之と私は会うたびに次の新しいヒマラヤの課題について話し合っていた。ジャヌーより高い八千メートル峰、新ルート、新しいスタイル、すなわち無酸素とか少数精鋭によるアルパイン・スタイル等が二人の一致した意見だったが、その対象となると、小川はアンナプルナI峰南壁の新ルートからのアルパイン・スタイル、私は四々五人によるカンチェンジュンガ北壁と異なっていた。

私は一九三〇年のアルパイン・ジャーナル24号や、F・S・スマイスのカンチェンジュンガ・アドベンチャーの写真を彼にみせながら説得した。「北壁に出るまでの氷壁は難しいが、我々の技術なら十分可能だし、七七〇〇メートル以上はインド隊が北東稜經由でトレースしているので心配ない。また、これまでの経験から酸素も攻撃用・非常用

合わせて数本で十分だろう」というと「資金を集めるのが難しいから個人負担の範囲で実行可能なアンナプルナが、我々には格好の目標ではないか」と彼は述べ、なかなか結論は出なかった。

その後しばらくして、小川から連絡があり、小西のほうでもカンチ遠征の計画をもっていて、スポンサーがほぼ内定しているという。これなら文句なくカンチに集中できるということになり、計画は一挙に本格化した。

さっそくカトマンズ在住の会員、高久に七九年プレの許可状況を探ってもらったところ、すでに北面はダグ・スコット率いる英国隊が許可を取得し、我々には全く可能性のないことがわかった。八〇年プレに変更して申請したが、七八年四月、ネパール観光省よりカンチはすでに西独のヘルリヒコツファー隊に許可済みのため不許可という連絡があった。

計画は完全に暗礁に乗り上げた格好となった。小西、小川、私の三人で、現地交渉によって許可をなんとかとるか、八一年に延期するか、あるいは他の山に振り替えるか、色々話し合った。が、いずれにせよ許可の確約もないわけで、所詮日本ではらちがあかぬ。現地へ行つたほうが早いということで、七月に私がカトマンズに飛んだ。

さっそく登山局長に面会し、カンチェンジュンガの許可再考をただした。

① 一山一隊が原則である。②カンチェンジュンガ周辺はポーターが不足きみで特に難しい。ちなみに今春のポラード、スペイン両隊はキャラバンがほぼ同時だったため、ポーター代が通常の数倍にはね上がり、ストライキと食料不足等、大きな問題があったので、二隊に許可を出すことはできない。他の山に変更してはどうかというアドバースだった。

その日はホテルに引きあげ、じっくり対策を考えて、翌日再度登山局に赴いた。そして、昨日登山局長のあげた理由に対し、自分の意見を述べた。

これまで自分の知る限りでも、七〇年のエヴェレスト、アンナプルナI峰、七二年のマナスル、七六年のマカルー

等、過去に四回、二隊に許可した実績があり、カンチが昨年解禁になったばかりで、事前に計画できなかった特殊事情も踏まえて、よろしく再検討していただきたい。また、自分は同山群のジャヌーに二度行っており、あの周辺のポーター事情や地理には詳しいつもりだが、西独隊と同ルートをとるのは、最初の八日間だけでその後は完全にルートが違う。前半部は部落もかなり多いし、食糧も問題ない。しかし、二隊の無用のトラブルを避けるため、我々は彼らの二〇日前か二〇日後にキャラバンを出発させる用意がある。これならば全く問題の起る余地がないと思うが、と地図を拡げて説明したところ、そのような約束を守るのであれば、ヘルリヒコツファーさえOKすれば本省も許可を出そうということになった。さいわい、彼はエヴェレスト登山のため近日中にカトマンズ入りするので、直接交渉してみなさいという。

勇躍ホテルに帰り、私の滞在期間中にヘルリヒコツファーがカトマンズ入りできぬ場合を想定し、さっそく手紙をしたため、西独に送った。そして、手紙は本人と行き違いになることを考えて登山局に、彼が訪れたらこの件を話してもらうことを局長にお願ひし、コピーを渡した。ついでに翌七九年のタムセルク、カンテガの許可を確認し、八六年のエヴェレストのブックキングも行なった後ホテルに帰ると、東京から電話が入った。

「昨日小川さんが亡くなりました」

死因もはつきりしないという。異国で聞く彼の死は本当に信じられないことだった。せっかくカンチの許可がとれそうなのに。一番喜んでくれる人だったのに。無念の一語に尽きた。

三日後、ヘルリヒコツファーに会えぬまま帰国した。その後も再度登山局長とヘルリヒコツファーに手紙を書いた。十日、口約束ではあるが、ヘルリヒコツファーがOKしたという内容の手紙を登山局長から受け取った。そして十二月十六日、カトマンズの高久からの電報でついに正式許可が下りたことを知ったのだった。それは、会のチーフ・リーダーで、同志会最強といわれた今野和義が一ノ倉沢で墜死した数日後のことだった。

プランニング

年が明けて計画は本格的に動き始めた。隊員の決定は二月に行なわれ、小西隊長以下八名が決まったが、川村は神戸在住、若手の鈴木、湯田は春のタムセルク、カンテガの遠征隊長として準備に忙しかった。遠征の推進役であった小川の突然の死による痛手はあまりにも大きかった。そのプランクを埋めるべく小西は一層精力的に動いた。

小西隊長から、ルートは予定通り北壁とし、無酸素による全員登頂というかなりラジカルなプラン（当時メスナ、ハーベラー、エングルの三名と二名のシェルバがエヴェレストに、ロスケリーら三名がK2に無酸素で登頂していたが、これはあくまで酸素を使った隊員によるサポートが期待できる登山であったため、全員の無酸素登山とは質的に異なる）が隊員に呈示された。この登山のポイントは八六〇〇メートル前後にあるセラック帯における雪崩やブロックの崩壊の危険をいかに避けるかであった。

一方で、ヘルリヒコツファー隊との少々やっかいな約束があった。キャラパンの混乱を避けるため、二月十日前後にダーラン・バザールを出発するということから、自動的に、ベース・キャンプ到着に二月末となり、登山にはまだ早すぎる時期になることだった。このような条件から、約一カ月の高所順応のためトレーニング・ツアーをしてみたかどうかという考えが生まれてきた。すなわち、二月下旬グンサ到着後、付近の四〜五千メートルの無名峰に登ってからベース・キャンプに入り、付近の六千メートルぐらいの容易な無名峰で順応を行なう。そして四月一日から登山を開始して、セラック帯を順応した体で一気に突破し、危険を避けるとともに八千メートルへの順応を比較的容易に行なおう、というプランだった。

帰国して間もなく、ダグ・スコット、ジョー・タスカ、ピーター・ボードマンの三名が北稜より無酸素で頂上に立ったとのニュースが入った。我々にとっては、いささかショックではあったが、実に見事で完璧な登山といえた。

そして七月、そのタスカーが来日し、講演会や三ツ峠と一緒に岩登りを楽しんだりして、カンチェンジュンガの写真や詳しい情報を得ることができた。そして何よりも、タスカーが、肉体的に我々とそれほど変わらないという印象を与えてくれたので、無酸素登山に向けて我々の大きな自信となった。

秋に入り、準備は順調に進み、毎日新聞社、毎日放送、車両競技公益資金記念財団、キャラバン社の後援も着々と決まっていた。

総予算は約二千万円、個人負担金は一人一〇〇万円となった。八人のメンバーのうち湯田はカンテガの負傷がなおらず、代わりに石橋の回復も思わしくないので、当初の計画から一人欠けた七人の編成となった。

十一月、高所順応ツアーのための登山局よりの許可、キャラバン・ルートの偵察、シエルパ及びエージェントの決定、通関、同行する報道陣のための酸素買付け、ホテルの予約等をするために、私がネパールに入った。

高度順応ツアーの必要性については、折よくメスナーが登山局に来ていたので彼にルートについての感想を述べてもらい、六千メートルのセラック帯が危険なことを登山局長に納得してもらった。そして、無名峰に限るという条件で高所順応ツアーを承諾してもらった。シエルパは、英国隊についていたアン・プルバをサードとする一名。エージェントは、英国人マイク・チェニーのシエルパ・コーポラティブ社にした。ここは実に親切で、細かいサービスをしてくれた。

帰国後、遠征につきものの装具、食糧の依頼、集荷梱包とあわただしい一カ月が過ぎた。日本から送る隊荷は一・五トン、すべて空輸とする。坂下と鈴木は一月五日に先発隊として、小西、深田、川村、大宮、坂野（医師）の五名と報道陣三名は二月二日、本隊として出発し、遠征は始まった。

（坂下直枝）

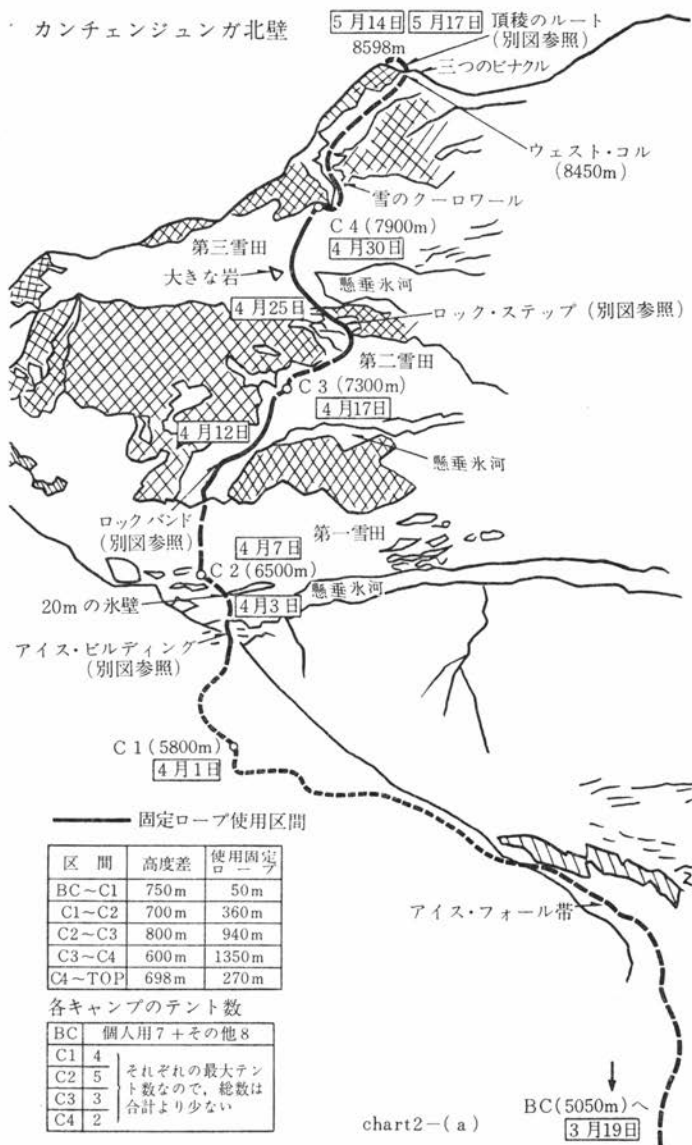
北壁に見参

二月十一日早朝、バスとトラック二台をチャーターし、ダーラン・バザールへ向かう。十四日約一九〇名のポーターとともにここを出発し、一五日間のキャラバンを開始した。まだ冬の名残りが感じられる三千メートルの稜線は寒く、朝夕は羽毛服が手離せない。朝陽に輝くマカルー、チャムラン、遠くにはこれから向かうカンチェンジュンガとジャヌーも望め、すばらしい光景を満喫する。トラブルもなく、二月二十七日、最奥の村グンザへ着いた。休養とこれから始まるトレーニング・ツアーの準備のため二日間滞在する。この辺りもまだ冬が去らないのか、毎日のように雪が降った。

三月一日から三日間は、四八〇〇メートルのナンゴラへ全隊員で高所順応トレーニングに出かけた。つづいて一〇日間の予定で、三月五日、次のトレーニング・ツアーへ、グンサのポーターと出発。カンパチェンからジャヌーのベース・キャンプを往復後、ロナークへ移り、ここを拠点としてのキャンプ・サイト裏から続いている尾根上の無名峰で高所順応を行なう。六千メートルのピークへ登った後、十三日、ベース・キャンプ予定地のパンペマへ日帰りで出かける。

初めて見るカンチェンジュンガの北壁は谷の奥深くにあるため、四年前に見たジャヌーのそのように圧倒的な迫力こそ感じられなかったが、さすがに八五九八メートルの風格がある。しかし技術的な難しさはそれほど感じられないので、この壁なら無酸素でも登れるという確かな自信を胸にグンサへと下る。

三月十八日、グンサを出発。途中カンパチェンに一泊し、十九日に五一〇〇メートルのパンペマにBCを建設。予定ではネパール・ギャップの六五〇〇メートル地点までトレーニングで登るはずだったが、ゴッゴと唸りをあげて吹き抜けて行く風を目のあたりにすると、手軽に登る気にはなれない。まだ寒気もきびしく、高所トレーニングには



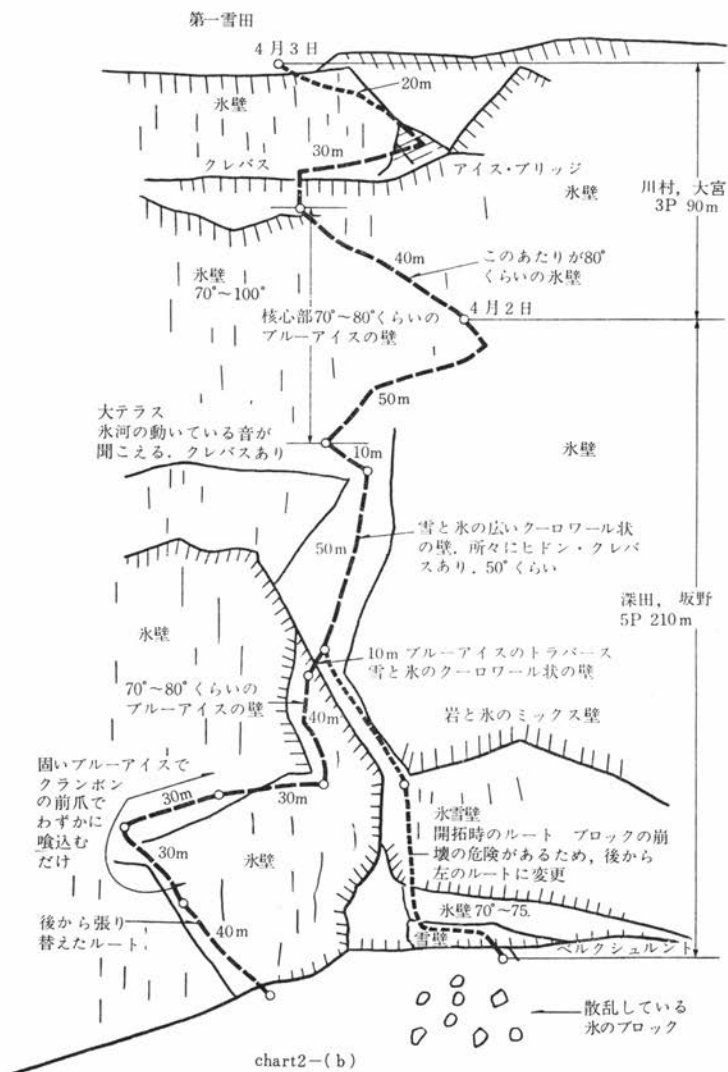
適当でない判断し、三月二十七日、五四五〇メートル地点から引き返す。ベース・キャンプでミーティングを行ない、二十九日から北壁の攻撃を開始することに決定。隊員六人を三つのペアに分け、三日間動いて一日休むというローテーションを組んだ。小西隊長はフリーな立場で行動し、全体の指揮をとる。登攀のキーポイントは六千メートルから始まるアイス・ビルディングとその上にあるロックバンドと思われた。ここは固定ロープが必要となる。標高差約三千メートルの北壁は三つの雪田によって区切られ、我々はそこにC2、C3、C4の三つのキャンプを出す予定でいた。C4から先は前年の英国隊ルートと同じくウエスト・コルに達し、南西壁（ヤルン氷河側）をトラバースして頂上に向う。

アイス・ビルディング

小西隊長とシエルバがあらかじめC1へのルートを偵察し、見通しもついていたので、深田Ⅱ坂野はいきなりC1へと高所順応に向かう。川村Ⅱ大宮、坂下Ⅱ鈴木の両パーティは、ルート整備と順応を兼ねて後を追う。さして問題となるような個所もなく、モレーンを越えて一時間三〇分くらい氷河を歩くと、アイス・フォールに着く。段になった所を縫うように登ると、上部雪田に飛び出す。途中何カ所か口を開けているクレバスを渡り、雪原を登りきると、C1直下のアイス・フォールの下に出る。頭上におおい被さるセラックの間を通り抜けるとC1予定地の大雪原へ到達だ。まだ完全に順応していない我々には、長くて辛い登りだった。どこからルートを引けばよいか見当もつかない。四月一日、二日間の雪嵐もやみ、深田Ⅱ坂野と三名のシエルバはC1を建設し、翌日からのルート工作に備える。ここは雪崩や落石からは比較的安全な場所だ。

四月二日、深田Ⅱ坂野は三名のシエルバをつれて北壁最初の難関、アイス・ビルディングに取付く。高さ二〇〇メートルはあると思われる懸垂氷河の末端は、近づくとつれて頭上におおい被さり、威圧的に立ちただかる。遠くに見

アイス・ビルディング



えるマカルー、ローツェ、エヴェレストの高峰が一時の安らぎを与えてくれる。取付は今にも崩壊しそうなブロックが頭上にひっかかっている、精神的な圧迫をうける。他にも目を移すが適当なルートは見当たらない。ブロック崩壊を懸念しながら登り出す。ベルクシュルントを越え一〇メートル近く雪壁を登り、垂直の五メートルくらいの氷壁を越えると緩斜面の雪壁に出る。雪と氷のクローワール状の壁にロープを伸ばし、一五〇メートルで比較的安全な雪の大テラスへ。核心部はこのテラスから始まる。七〇〜八〇度はあると思われる氷壁が続いている。氷壁の弱点をついて右上へとダブル・アックスで登り、五〇メートルロープが伸びきった所で時間切れとなる。

翌三日は深田パーティが引き続きルート開拓、川村パーティはルート整備と順応、坂下パーティはC1入りの予定であったが、深田が前日の行動で雪盲になり、川村パーティと坂野がルート開拓にあたることになった。ユマールで前日の最終地点まで登る。両手に持ったアイス・アックスとハンマーを交互に振り、確実にクランポンの前爪を氷に喰い込ませて左上へ四〇メートル登り、核心部が終わる。両足の間から取付が見えて、高度感満点だ。ここから途中アイス・ブリッジを渡り、五〇メートルでC2地点へと続く広々とした第一雪田に出る。ヒドン・クレバスが心配だが、他に問題はない。

四日、深田パーティとサーダーはC2予定地へと登って行った。川村パーティと坂下パーティはアイス・ビルディングのルート整備で、核心部の固定ロープに沿って大きなステップを切る。垂直に近い氷壁にぶら下がってアックスを振るのは辛い作業だが、一日で終えることができた。C2予定地へ達した深田パーティも格好のサイトを定めて帰って来た。

五日、深田パーティはベース・キャンプへ下山。川村パーティと坂下パーティはC2予定地への順応。アイス・ビルディングの取付へ向かうと崩落した氷のブロックが散乱している。心配が現実となって、忘れかけていた恐怖感が頭をもたげて来た。もう少し安全なルートへ固定ロープを張り替えなくては、と話し合う。息を切らせてアイス・ビ

ルディングを登り、その終了点からロープを結び合う。

緩やかな第一雪田を三〇分歩き、一五メートルの小氷壁を越すとC2予定地も近い。スノー・ブリッジを渡り、背後を氷壁に守られた雪の台地に達した。ここが予定地（六五〇〇メートル）である。下山の途中、坂下ニ鈴木でアイス・ビルディングのルードを安全に左寄りに変更した。こうして五日間にわたってC2へのルート開拓・整備・順応を行ない、四月七日、C2が建設された。

ロック・バンド

北壁の登攀を開始してから、風は強いが天候は安定していて、快晴が続いている。ローテーションは一人の落伍者もなく順調に流れていた。八日からC3へのルート開拓が続行された。北壁の全ルート中、最も困難と思われるロック・バンドの突破には結局五日間が費やされた。

ロック・バンドは標高差二〇〇メートルのミックス壁で下から見た限りではどこにでもルートを引けそうだがと思ったが、いざ取付いてみるとルートは限定され、トラバースの多い複雑なものになった。

小西隊長とシエルバが壁の下までトレイルをつけ、登攀用具をデポ。その後を受けた川村パーティは九日、十日の二日間で核心部を抜けた。壁は手強く、一日二、三ピッチしかロープを伸ばせなかった。取付の氷壁を左にトラバースし、右上へと登り、八〇度の氷壁からダブル・アックスで右上すると氷のテラスに達した。続く二日間、深田パーティ・坂下パーティが上部のスラブと氷壁を登り、第二雪田に抜け出る。そして、シエルバが安全に登下降できるように三日間かけてステップを切り、固定ロープを張り直す。十六日には小西と深田パーティが第二雪田にロープを固定して七三〇〇メートルのC3予定地へ達し、翌十七日、C3建設。

全隊員のコンディションは良好で、高山病の症状を訴える者は誰一人いなかった。少人数パーティなので、一人で



Plate 1-(a) : カンチェンジュンガ北壁全景 実線は山岳同志会ルート、破線は前年の英国隊ルートを示す。

N Face of Kangchenjunga with Sangaku doshikai (solid line) and British routes are marked.

(by H. Kawamura)



Plate 1-(b) : アイスビルディングの取付きへ向う。
Towards Ice-Building. (Kangchenjunga)

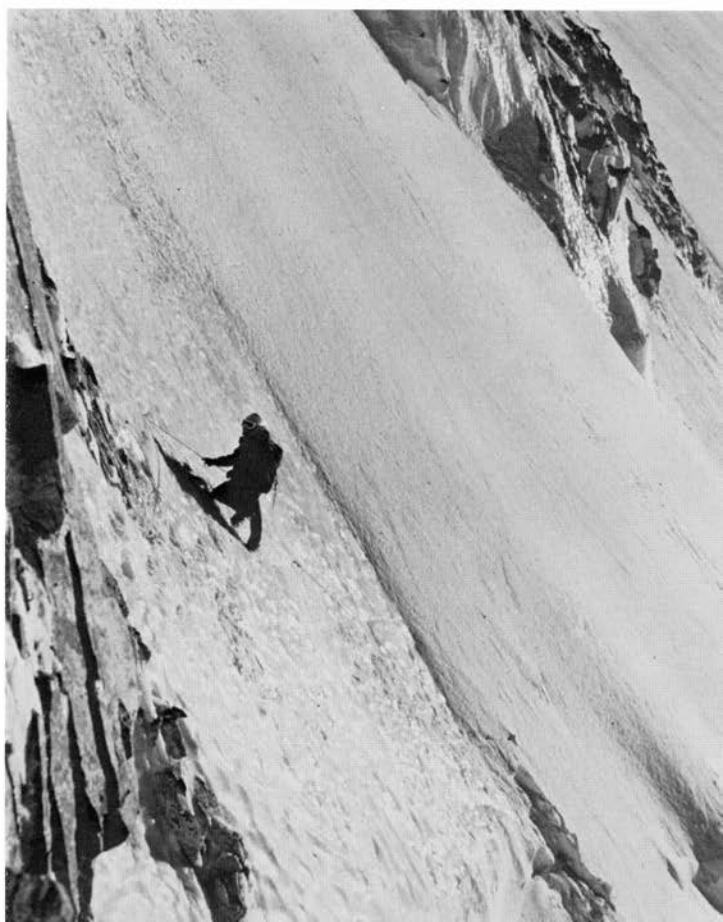


Plate 1-(c) :
ロックバンド下部氷壁を登る。
Jumaring up the ice wall
of the lower rock-band.
(Kangchenjunga)



Plate 1-(d) :

ロックバンド中間部を登る、後方は第二キャンプ (6500m)。

Jumaring up the middle section of the rockband in N Face of Kangchenjunga.



Plate 1-(e) :

ロックバンド上部ミックス壁。
The mixed face of the upper
rock band in the N Face of
Kangchenjunga.





Plate 2-(a) : 7000m附近の難所、風と寒気に悩まされながらのこの難所の突破が成功の鍵となった。

Break through this knife ridge at 7000m point under a severe wind and coldness was the key to the Summit.



Plate 3-(a) :

ヴァスキ・バルバット東壁登攀ルートとビバーク地を示す。

E Face of Vasuki Parbat with the route and bivouacs marked. (by K. Nakae)

Plate 3-(b) :

BCから見たヴァスキ・バルバット (6792m)
左が北壁, 右が西壁。

Vasuki Parbat (6792m) seen from BC.
N Face on the left and W Face on the right. (by M. Namura)





Plate 3-(c) : パンワリ・ドワールの頂上に立つ小林隊員。

Kobayashi on the Summit of Panwari Dowar. (by K. Nakae)

Plate 3-(d) : サトパント北壁 (7075m)。

N Face of Satopanth (7075m). (by K. Nakae)



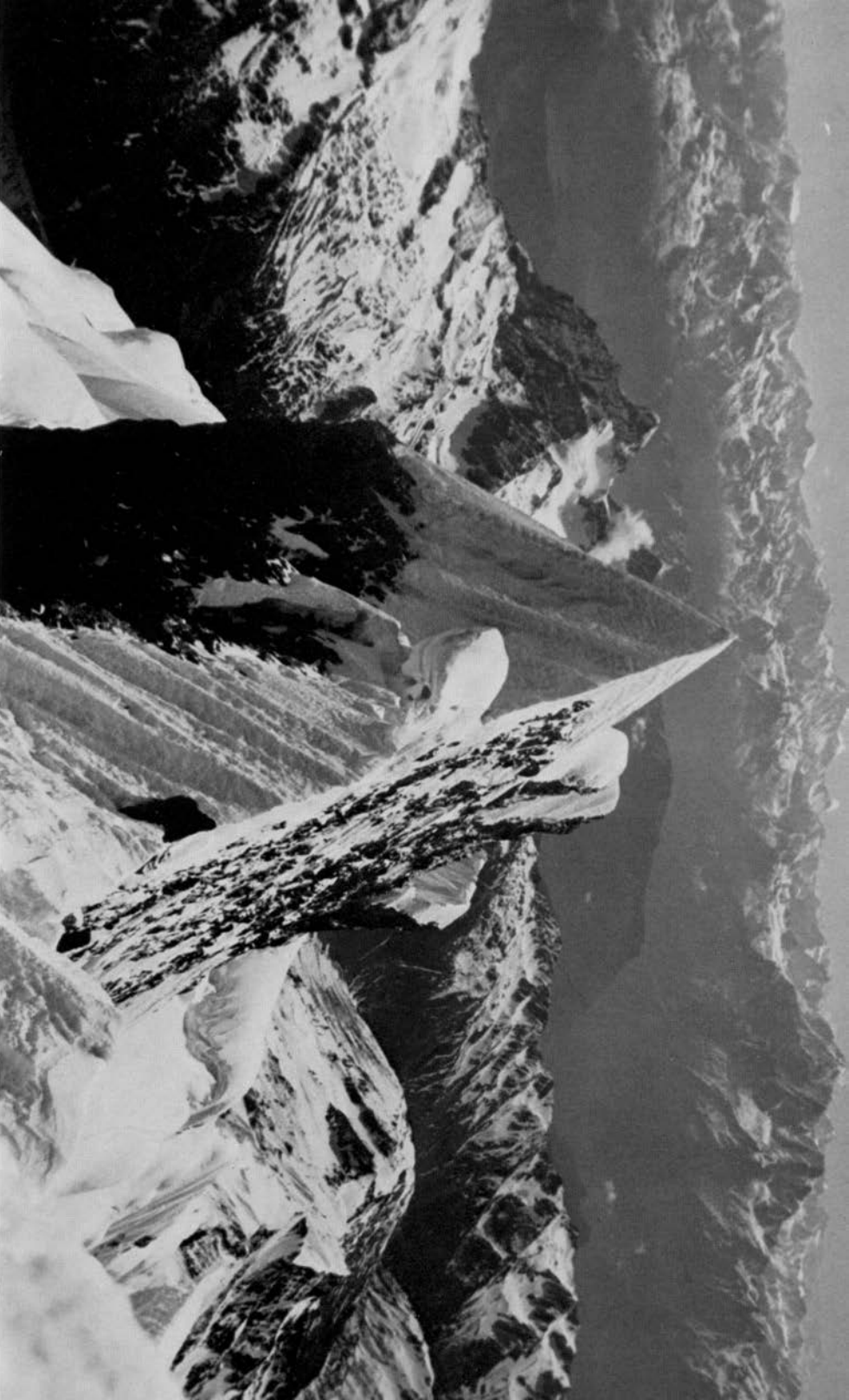


Plate 4-(a) : 頂上よりチベット側を望見，手前はマイン・ピーク。

Mountains in Tibet seen from the top of Ganesh Himal V.

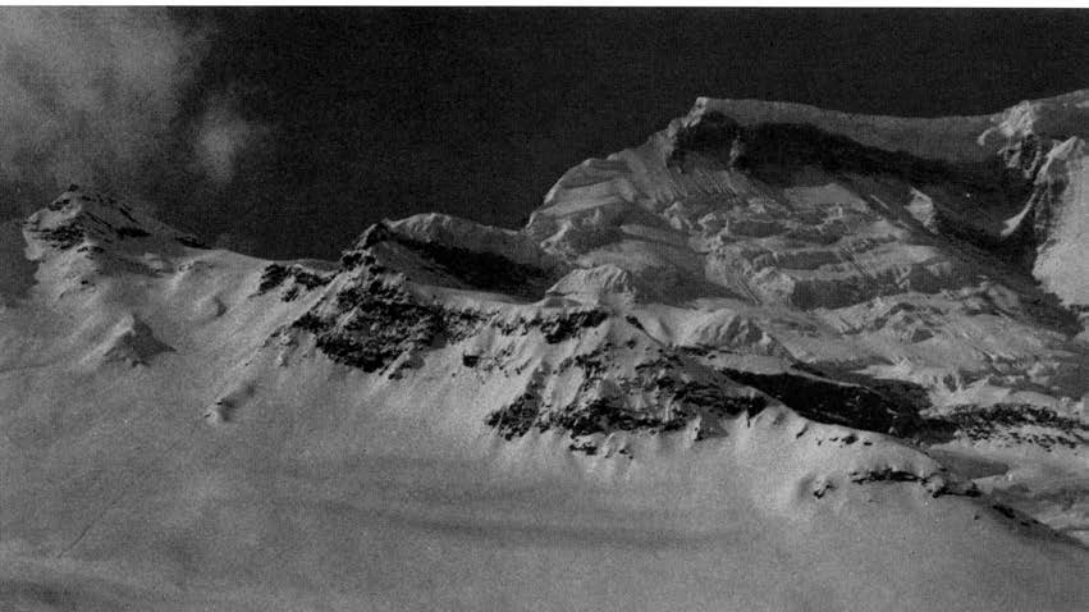


Plate 4-(b) : C1よりC2への荷上げ。

Transport to C2 from C1 (Ganesh Himal V).

Plate 5-(a) : カンバ・コーラから見たラムジュン・ヒマール北稜とその支稜。

Lamjung Himal-North Ridge and the Branch seen from C1 (4650m) on Kanba Khola.



もコンデイションを崩し行動不能になればローテーションには狂いが生じるので、各自健康管理には気を配っていた。

最終キャンプ

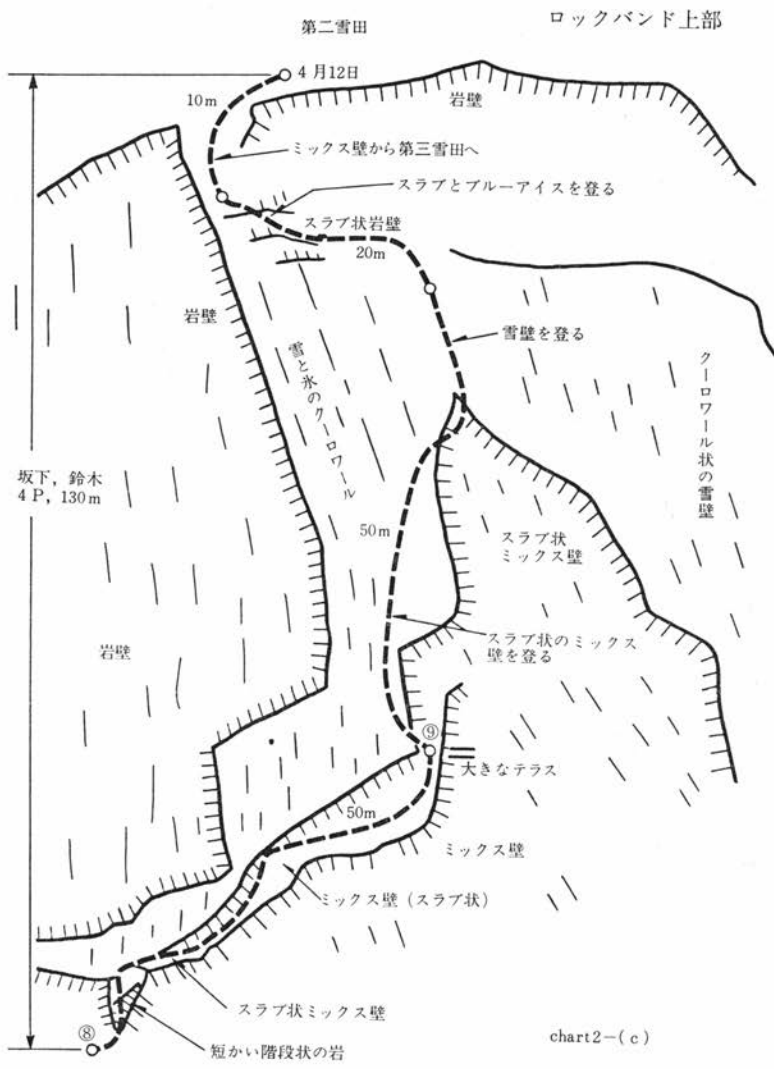
四月二十一日、全員ベース・キャンプで休養し、以後のスケジュールを調整する。各キャンプの収容人数が限られているので、ローテーションの微調整が必要だったのだ。

二十五日、坂下パーティはC4へのルート途中にあるロックステップを四ピッチで抜け、第三雪田に向けてロープを固定する。下部では風も緩やかだったが、上部では強風にさいなまれる。体温を奪われ、感覚のなくなった体でのルート開拓はきびしい。加えて七六〇〇メートルの高所になると、まだ順応も完全ではないので、一歩ずつ、遅々とした動きしかとれない。

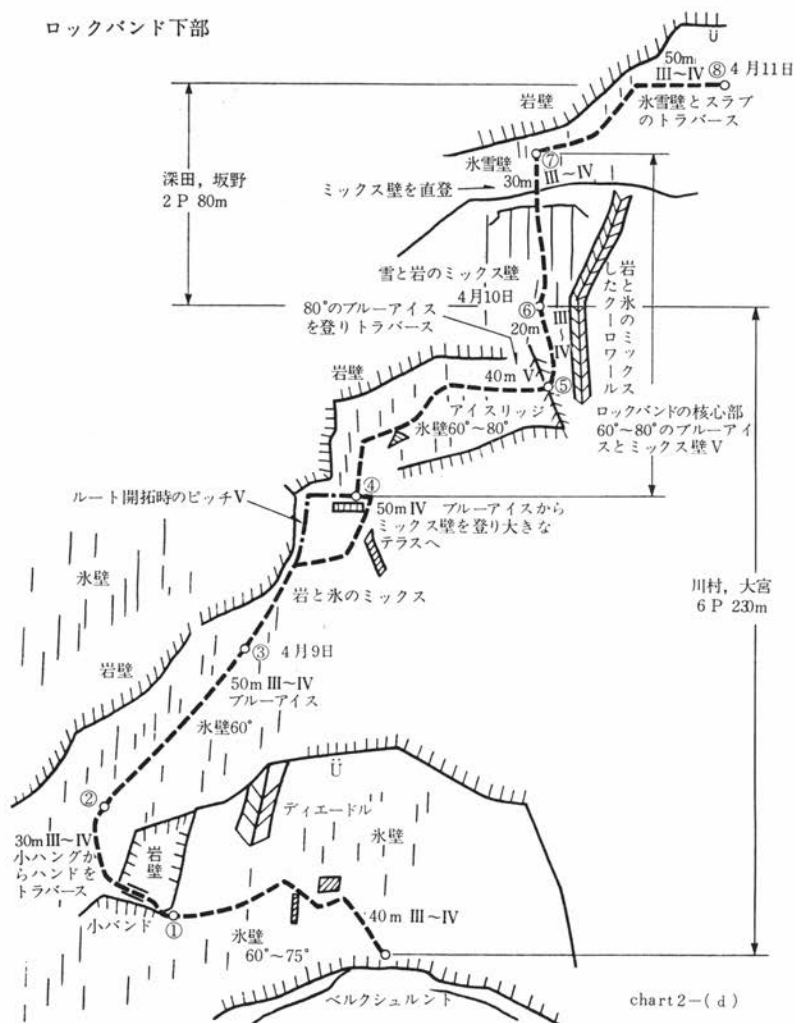
二十六日、川村パーティはC4予定地（七九〇〇メートル）まで登ることになっているが、風速三〇メートルを超えようかという強風に妨げられて五ピッチしかロープを伸ばせず、七七〇メートルから逃げるように下降した。翌日、小西隊長と坂下パーティが強風についてC4予定地に達した。ここでは前年の英国パーティと同じく雪洞を掘る予定だったが、適当な場所がないので、雪壁を削ってテントを張ることにした。

連日続いていた天候も崩れかけていたので、全員いったんBCに下ってしまった。ところが翌日も好天で、C3のアン・プルバ以下三名のシェルパがテント二張と若干の物資を運びあげ、C4を建設した。

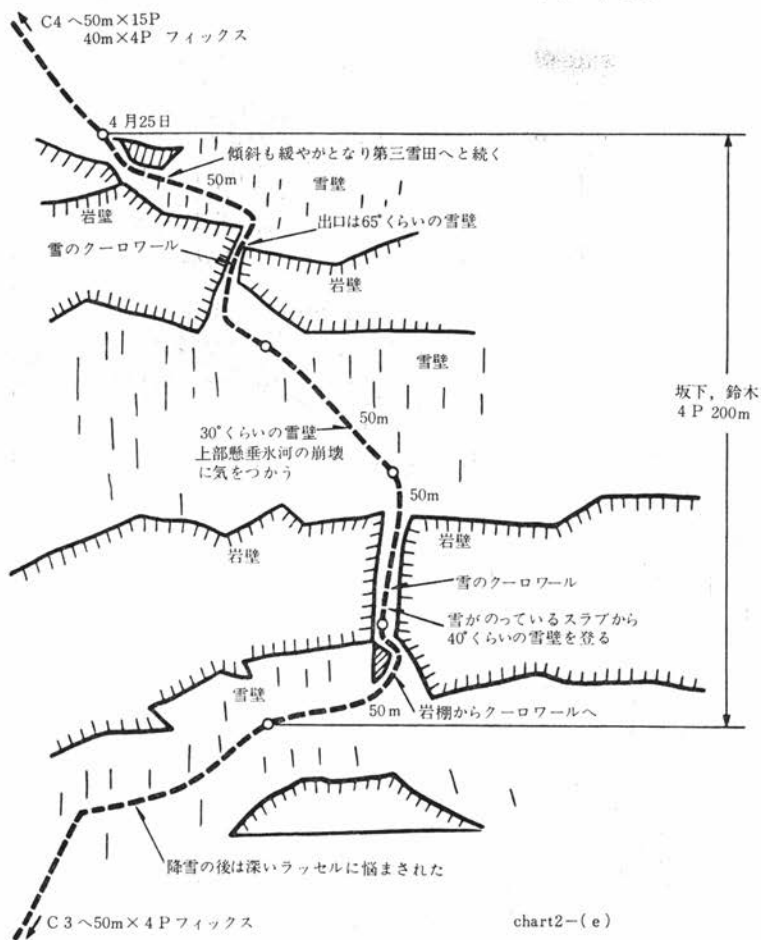
BCでミーティングを行ない、現在のパーティを解体し、登頂へ向かって新編成を組むことにする。第一次隊は深田、川村、坂下、鈴木の名とサーダーのアン・プルバ。第二次隊は小西隊長、大宮、坂野の三名とペンバ・ツェリンと決まる。



カンチェンジュンガ北壁



ロックステップ



五月五、六日の二日間、第一次隊はC4までの順応を行ないBCへ下山。第二次隊は次の七、八日の二日間でC4を往復。そしてベース・キャンプへ集結し、三日間の休養をとる。

遠征は最終的な段階を迎えていた。五月十日、頂上攻撃の日程が決められた。第一次隊は五月十一日にベース・キャンプを出発し、十四日に登頂。第二次隊は十三日にベース・キャンプを出発、十七日に登頂となった。間隔を置かず、二日間続けてアタックをかけるのが理想的だが、C4のテント敷を考えると、間隔を開けざるを得なかった。C4から登頂してC3まで下るのは体力的にも時間的にも至難のわざである。

頂上へ

五月十三日、一次隊はC4へ入る。天候は申し分なく、周囲の山々はバラ色に染まり、明日の晴天を約束しているかのようにであった。初めて泊る七九〇〇メートルだが、食欲もあり頭痛もない。胸の奥に積もっていた不安が少しずつ払われていくようだ。興奮から眠られぬ夜が明け、十四日の朝を迎えた。一時に起床し出発の準備を始める。テントの外には満天の星が輝いている。

ヒマラヤの山々に朝が訪れる四時三〇分、坂下、鈴木、アン・プルバが先行する。三〇分後深田、川村が出発。各自、登攀用具をザックに入れてるので一〇キロ近くあり、苦しい。暗くなってもC4まで下降するつもりなので、ツェルトは持参しなかった。C4から雪壁を右上へ登って行くと、頂上岩壁下の雪田へと雪のクローワールが続いていた。朝陽の恩恵を受けないクローワールは寒気が厳しい。二重靴とオーバースューズを通して足先がしびれるように冷たい。四〇〇メートルほどのクローワールを抜けると、雪の乗った岩棚に着いた。クローワールには帰路のことを考え、六ミリのロープを二七〇メートル固定する。

余分な装具をデポし、身軽になって雪の大斜面に取付く。ロープより軽い一センチ幅のナイロン・テープを登攀用

ウェスト・コル～頂上

第一次隊 5月14日16時15分
第二次隊 5月17日17時30分



に使用するのでザックに入れる。ウェスト・コルへ続く雪田は膝下までのラッセルで長く辛い登りであった。クローワールから雪田の半分ぐらいの地点までは順調なペースで進んでいたが、徐々にペースは落ちていった。中間地点が大休止する。四〇〜八〇メートルでラッセルを交代しながらウェスト・コルを目ざすが、呼吸は激しく足は思うように前に出ない。何十回となく立ち止まっては呼吸を整え、苦しいラッセルを続ける。最初は二〇歩ぐらい歩けたが、ウェスト・コル（八四五〇メートル）の直下あたりでは五歩が限度だった。

コルへ続く急峻な雪壁を深田がリードし、一四時、コル上の雪稜に達した。頂上への稜線はいくつかのピナクルのある岩稜で登れそうもない。ヤルン側のミックス壁を登り、大きな岩塔の下にある小さなピナクルに達する。何ピッチ登ったか定かでないが、コルからここまで一時間三〇分も要した。全員集結し、雪の舞う中、崩れだした天候について話し合う。いろんな意見もあったが、ベース・キャンプへ交信後、再び頂上へと登り出す。休んでいると呼吸はそれほど苦しくないが、いったん動

き始めると肩で息をしなくてはられない。小さなピナクルから一度チムニー状の岩場を下り、雪壁を登る。川村がリードし、ⅢⅣ級ぐらいの岩場を直上し、短いチムニー状の岩から顔を出すと雪の台地が目に入った。もうそれ以上高い所はなかった。

時計を見ると一六時一五分であった。もうこれ以上登らなくてもいい。やっと終わったんだ、という安堵感が胸に去来した。アイス・アックスを深く刺し込み、テープを固定して後続を待つ。鈴木、坂下、深田の順で登って来る。一人ひとり握手を交わしていると、亡き小川が一緒であれば喜びもひとおしであつたらうに、と思わずにはいられなかった。雪の舞う頂上からの展望は、わずかにヤルン・カン、中央峰、南峰だけが雲の切れ間に浮かんでいた。三分後、五キロもある一六キロ撮影機を担いたサーダーが到着。登頂成功の声をベースへ送り、一六ミリカメラをまわし、一七時、頂上を後にする。

暗闇の中、ヘッドランプの光を頼りに、登り以上に長く辛いC4への下降を続けた。二張のテントを見つけてころがり込んだのは一九時五〇分だった。

五月十七日、予定通り第二次登頂が行なわれた。三時三〇分、C4を出発した小西隊長、大宮、坂野、ペンバ・ツエリン、それにラッセル要員として加わったダワ・ノルブの五名は前日に降った新雪のため一次隊のトレイルも消えて膝を没するラッセルに悩まされた。ダワ・ノルブがすばらしい体力でリードし、八四〇〇メートルまで達した。しかし、ここで痛め止めの薬を飲んだ小西隊長は急に嘔吐をくり返し、結局登頂を断念してしまった。一人C4へ下る隊長と別れた四名はさらに登り続け、一七時三〇分、雲海の広がる頂上に着いた。途中彼らはウェスト・コルに残された酸素ボンベを発見した。反対側のヤルン氷河側から登山中だったヘルリヒコツファー隊のもので、この前日、隊員の一人とシェルパ二人が頂上に立ったのだった。また頂上直下の雪を掘ってみると一九七七年にシッキム側から北東稜を経て登頂したインド隊のスノー・バーが出てきた。

翌十八日から休むことなく撤収が開始された。各キャンプ撤収とともに川村と坂下は七一〇〇メートルまで再度登り、ロックバンド終了点から下の固定ロープ、ピトン類をすべて撤去し、担ぎ下ろせないものはクレバスに捨てた。全ての撤収が終わったのは五月二十日深夜のことだった。

(川村精一)

無酸素登山を終えて

できる限り人工手段を排して山という自然に果敢に挑む行為が登山の本質とするならば、ヒマラヤの巨峰は、七八年、エヴェレストがメスナー、ハーベラーによって無酸素で登られて初めてその本質に近づき得たのかも知れない。否、人類の巨峰への挑戦は、元来無酸素でなされて来たのである。一九二一年以来のイギリスの七次にわたるエヴェレスト遠征で酸素が使われたのは二度にすぎない。現代に比べると、登山装備の貧弱さ、ヒマラヤに対する情報や経験の不足といったかなりのハンデを背負いながら、八千メートル以上のキャンプ生活に幾晩も耐え、ノートンら四人が酸素も吸わずに八五七〇メートルの高所に達しているのである。にもかかわらず八千メートル峰に酸素器具が必須のようにいわれ出したのは戦後の八千メートル峰の征服競争の中で、英国のエヴェレストやイタリアのK2、日本のマナスルに代表されるナシヨナリズムの色濃い登山が多くなつてからである。この登山の本道はずれた征服競争が、一九二四年のノートンの「元気に充ちたパーティーであつたら酸素なしで頂上に達し得る」という意見や、ソマヴェルの「ノートンや私のようなごくあたりまえの人間が、エヴェレスト頂上から三〇〇メートル以内の地点に無酸素で達することができたのであるから、世の中には漸進的な訓練によって完全な高所順応の得られる、強力な運動能力を持った人間が多数いるはずである。そういった人々を最終段階でトップに立たせれば、無酸素で頂上に立つことは可能である」という確信にみちた意見を、ふき飛ばしてしまったのである。このため、エヴェレスト、カンチエンジユンガといった巨峰は、本来の登山の対象となり得ぬまま、二五年が過ぎてしまふのである(その中の例外は一九六

一年ヒラリー隊のマカルー、そして一九七七年ニュージーランド隊のエヴェレストである。一方、日本においては、マナスルの成功がその後のヒマラヤ登山に大きな影響を与えた。八千メートル峰一四座中六座が無酸素で初登頂されているにもかかわらず、日本隊は一四座中八座へ、計一五回四三名が登っているが、そのいずれも酸素を使用してきた（一九七九年静岡隊のアンナプルナI峰は睡眠用のみ）。しかし、ピトン一本の使用の是非が問題とされる現代のクライミング思想からすれば、初登攀に無酸素で登られた山に酸素をもちこむことは、ピトンも一本も使用せずに登られた岩壁に電動ドリルをもち込むようなものであろう。というのは、一〇〇年を超えるアルピニズムの歴史で、酸素器具ほど威力のある人工手段は見当たらないからである。

「八千メートル峰だけに存在する厳しき、困難性を滅茶苦茶にし、六千メートルの状況に変えてしまうような酸素器具を使ってしか登れない人は、初めから六千メートル峰で楽しむべきだ」というメスナーの意見は、一見乱暴に聞こえる。そして「一回しかチャンスのないヒマラヤだから八千メートルに行きたい。そのためには、危険を避けるために酸素器具は必要である」という理屈は、日本では逆に当然のように受けとめられがちである。しかし、岩登りもあまりしたことのない人が、「せっかく谷川岳に来たのだから是非衝立岩に登りたい。そのためには何を使ってもかまわない」という論理は、あまり説得力がないと思われるのである。

我々は今回、天候にもめぐまれ、幸運にも無酸素で八五九八メートルの頂上に立てたが、隊長以下全員、マカルーより低い八千メートル峰では、どんなバリエーション・ルートをとろうとも、酸素は使う必要がないと感じている。私自身、アタック時も含め、八千メートルラインに、四回達して行動してみた結果、八千メートルまではスコップも振えるし、かなりの労働にも耐えられた。だから我々の次の目標は、やはりこの地球上に残されたあと二五〇メートルの高度差を克服すること以外にはないだろうと思っ

今後のヒマラヤ登山

遠征終了後、春の各遠征隊の成果等を登山局長と話しているうち私は、カンチ無酸素登頂の喜びなどはどこへかぶつ飛び、今後のヒマラヤ登山を考えて肌寒さを覚えた。ニコラ・ジャジエールは、メスナーら、イタリアの精鋭を集めてさえ、なお不可能といわしめたローツエの南壁に単独で挑んで力尽きた。そしてK2やダウラギリに登っているロスケリーは、マカルー西稜のC4より単独無酸素で登頂に成功し、八一年には単独無酸素で冬期エヴェレストの南西壁に挑むという。そして、ダウラギリの東壁をアルパイン・スタイルで登ったクルティカ、マッキンタイアらのパーティは、八二年に、ローツエ南壁ダイレクトのアルパイン・スタイルを目ざしているという。一方でエヴェレストの許可をとったある日本隊は、南西壁からノーマル・ルートへの変更を申し出ているという。

私は、打ちのめされたように登山局を出た。「ここ五年以内に、登山はすべて無酸素になるだろう、そして次の五年は、冬期に集中するだろう」という登山局長の予想は、あまりはずれたものでもないなど感じながら。

この冬のアンナプルナI峰に単独で挑戦する計画を進めている私は、世界の第一線クライマーのとどまる所を知らない欲望にあらためて目を見張るとともに、自分もがんばらねばと思っただのである。

(坂下直枝)

(本文は「岩と雪」第七十七号より転載)

△記録概要▽

隊の名称 山岳同志会カンチエンジュンガ登山隊

活動期間 一九八〇年三月～五月

目的 セミ・アルパイン・スタイル、無酸素カンチエンジュンガ(八五九八メートル)北壁登攀

隊の編成 隊長Ⅱ小西政継(41)、登攀隊長Ⅱ深田良一(37)、隊員Ⅱ川村精一(32)、坂下直枝(33)、大宮 求(31)、鈴木昇己

(27)、医師Ⅱ坂野俊孝(35)

行動概要

二月十四日ダーラン・バザールよりキャラバン開始、ポーター一九七名。二月十七日グンサ(三五五〇メートル)到着。三月一〜三日グンサ周辺で、五〇〇〇メートル級の山へ高所順応トレーニング。三月五、六日カンパチエンへ移動。ジャスーのベース・キャンプへトレーニング。三月七〜十三日ロナークへ移動。六〇〇〇メートル級の山へ高所順応トレーニング。三月十九日カンパチエンよりロナークを経てパンペマ(五〇五〇メートル)のベース・キャンプに三月二十日到着。三月二十五〜二十七日隊荷の整理とベース・キャンプ周辺で高所順応トレーニング。三月二十九日北壁に向けて行動開始。四月一日C1(五八〇〇メートル)を建設(七九年イギリス北稜隊のC2地点)。四月二日深田、坂野がアイス・ビルディングに取付く。四月三日川村、大宮がアイス・ビルディングを突破、四日C2予定地に到達。四月七日第一雪田にC2(六五〇〇メートル)を建設。四月九日川村、大宮がロック・バンドにアタック開始。四月十二日氷と岩とミックスした困難なロック・バンドを坂下、鈴木が突破。四月十七日中央岩壁帯に十日間を費やして突破した後、第二雪田にC3(七三〇〇メートル)を建設、坂下、鈴木C3入り。四月二十五日坂下、鈴木がロック・ステップを抜けて、第三雪田にルートを延ばす。四月二十八日坂下、鈴木、シェルパの三名がC4予定地(八〇〇〇メートル)に到達。五月一日最終キャンプC4(七九〇〇メートル)を第三雪田上に建設。五月三〜十日の間、ベース・キャンプとC4の間を二往復して八〇〇〇メートルへの高所順応を行なった後、ベース・キャンプで休養。五月十一日の深田、川村、坂下、鈴木、アン・プルバがベース・キャンプを出発し、十三日C4に入った。五月十四日午前五時C4を出発した五名は午後四時十五分登頂。五月十七日小西隊長、大宮、坂野、ペンパ・ツェリン、ダワ・ノルブが頂上に向った。小西は高山病がひどくなり登頂を断念、一人でC4に下ったが、残りの四名は午後五時三十分登頂した。四月十八日C4を撤収、十九、二十日川村、坂下が七二〇〇メートル以下のフィックスド・ロープを撤収しベース・キャンプに帰着。五月二十五日ベース・キャンプを撤収、下山。カンチエンジュンガ無酸素第二登を果した。

厳冬期バルンツェ峰登頂（一九八〇年）

北海道大学山岳部・山の会

はじめに

北海道大学山岳部とそのO・B組織である北大山の会が厳冬期八〇〇〇m峰への遠征構想を持つに到つてからすでに十余年が経過した。その間、一九七六年には山岳部創設五十周年事業の一つとしてこの計画が採り上げられ、ガルワル・ヒマラヤへ最初の偵察山行がなされた。これは失敗に終つたが我々は多くものを学んだ。

この挫折にもかかわらずヒマラヤを目指す部員の熱意は次々と受けつがれ、一九七八年、山岳部現役隊（石村明也隊長）によるカラコルムのドレフェカル（六四四七m）の初登頂、次いで翌一九七九年、カラコルムのシュマリクンヤンチツシュ（七一〇八m、越前谷幸平隊長）の初登頂をもたらした。

こうして着実に力を伸ばしてきた我々は、ネパール政府が冬期の登山を解禁したのを機に、厳冬期八〇〇〇m峰への一歩としてバルンツェ峰（標高七二二〇m）を選び、会の総力をあげてこの遠征に取り組んだ。そして今冬の悪天候にもかかわらず、幸運にも登頂に成功した。以下はこの遠征の報告である。

計画の概要

バルンツェ峰（七二二〇m）はすでに一九五四年九月、バルン氷河周辺の偵察を目的とするヒラリーが率いるニュージランド隊により初登され、一九六五年には立教大隊の挑戦、一九八〇年秋には宇都宮大隊による第二登がされている。

我々がバルンツェ峰を選んだ理由は、一九六二年、北大隊のチャムラン峰初登頂（中野征紀隊長）以来、この地域になじみ

が深く、また会員による氷河などの學術調査行がされており、データが豊富であったこと、将来の八〇〇〇m峰挑戦を含む敵冬期ヒマラヤの総合研究をおし進めるための地理的氣象的条件に恵まれていることがあげられる。

AACHが会の行事としてこの遠征を行なうことを決定すると、直ちに大学院学生を中心とする若手研究者たちは、装備の実験に取りかかった。敵冬期七〇〇〇m以上の挑戦は過去、ポーランド隊によるノシヤック、ローツェ、エヴェレストの三回のみで、自然環境に関するデータはほとんど未知であった。そのため、ハジュン（四四二m）における越冬氣象観測データ、カトマンズにおける高層氣象観測データに基づいてバルンツェ山上の氣象の予測が行なわれた。その結果、装備はマイナス五〇度C、風速四十m/秒に耐えられるものを開発することが前提とされた。そして北大低温科学研究所のマイナス二〇度Cの低温室、次いで民間のマイナス五〇度Cの大型冷凍冷蔵庫を借用して市販品および試作された防寒装備の性能試験が重ねられた。この結果、防寒靴、フェイスカード、寝袋、テント、保温ビン等の開発、改良が行われ、極寒条件での使用に自信を得ることができた。さらに登攀には障害となるジェット・ストリームを逆にして風力発電を行ない、生活条件をよりよくしようという発想から、出力一五〇Wの風力発電機二台の製作も行なった。

我々の隊は林和夫総隊長（六四才）を総指揮者とし、現役学生二名を含む十二名で構成され、そのうち登攀隊員十名中過去にヒマラヤを経験したものは五名である。

若い隊員が多いこと、いかに実験を重ねたとはいえ、自然環境についてはほとんど未知であること、来るべき敵冬期八〇〇〇m峰挑戦への一歩という目標設定をした上では、是が非でも登頂に成功しなければならぬ、という観点から、医療用及び、高所キャンプへの酸素ボンベの配置、高所順化のためのいくつかの原則の確認、装備の改良、及び開発、充分な食糧等、今日のヒマラヤ登山の基準からいえば超安全主義ともいえるべき思考が基礎となった。いかに敵冬期とはいえ、安全主義にすぎることには一部会員や隊員の中には不満もない訳ではなかった。ルートはローワー・バルン氷河から東南稜を登る初登ルートとした。

ベース・キャンプまで

カトマンズでの各々の任務に応じ、九月から十月にかけて三回に分かれて先発隊が発進した。本隊は十月二十三日、総隊長隊は十一月二十七日、成田から出国した。

先発隊はカトマンズでの業務を済ませ、本隊がカトマンズ入りする前、十月二十二日、二十三日の二日に分れ隊荷、シェルパと共にトラックでダーラン・バザールへ向け出発、十月二十

六日よりキャラバンを開始し、二十九日にはツムリンタールへ到着した。

十月二十四日、カトマンズへ到着した本隊は、渉外のため残っていた池上とネパール観光省へ日参したが、リエゾン・オフィサーがなかなかきまらず焦慮させられた。出発を明日に控えた十一月二日、やっとリエゾン・オフィサーが決定し、登山許可証も発行された。

翌三日、空路ツムリンタール入りした本隊は、すでに真黒に陽焼けし、ポーター並みの容姿の先発隊員五名と再会した。九月中旬に日本を出国した花井とは一ヶ月半ぶりであった。

ツムリンタールでキャラバンを再編成し、五トンの隊荷、一七〇名のポーターと共に翌四日、アルン・コーラに沿った快適な尾根道をカンドバリへ向った。五日、ボデバシ、六日、ホルル、七日、ヌンとキャラバンは順調に進んだが六日から雨模様となり眺望もきかずうっとうしい天候であった。八日、アルン・コーラを越えて、九日、セドア着、ここでダーラン・パザールとツムリンタールで雇ったポーターを解雇し、セドア地区のポーターを集めるため、一日停滞することになった。

ところが十日、十一日とセドアに滞在することになってしまった。サダーのワンゲルが背信行為をしており、そのことを知ったシエルパ達が不信感を持ち、ワンゲルがサダーでは協力できないと言いだしたためである。シエルパ達によればワン

ゲルは隊荷の中からグランドシート三枚、その他食糧をツムリンタールで盗み出し、またカトマンズで一括して渡してあったシエルパに支給する装備費の一部を着服し、更に必要以上にポーターから手数料をとっているとのことである。以前より、サダーとシエルパの間がしっくりしていなかったが、シエルパ達のワンゲルに対する感情がセドアに着いてから酒の勢いも手伝って爆発したものである。早速隊荷のチェックをし、シエルパ、ポーターから事情を聞くとシエルパ達の言い分は間違いない。ワンゲルに釈明を求めると一部は認め、一部は否認し、更に今後は悪いことをしないから許して欲しいという。しかしこのまま許したのでは示しつかないし、一度落ちてしまった權威は取り返せるものではなく、今後の行動にも影響があるであろうとの判断の上解雇を決意した。リエゾン・オフィサーのウツタム中尉に相談すると是非そうしてくれ、観光省へは自分から連絡し、問題の起きないようにすると快諾してくれた。新しいサダーにはシエルパ達に信頼のあるアン・ペンバを指名した。結果的にはこの措置は至当であった。ワンゲルがこの地方は初めてであるのに対しアン・ペンバはよく知っており、有力者達と顔なじみで、帰路のポーター集めもスムーズに行なわれ、またシエルパたちも我々の措置に満足し、以後、アン・ペンバを中心によくまとまり協力的になったからである。

十二日、キャラバンは予定より一日遅れて最奥部落のセドア

を後にした。雪のくる前にシプトン峠を越えなければならぬ。その為にキャラバン出発を早めたのだから。相変らずガスの多い急な登りをシプトン峠目指してひたすら登る。十四日、シプトン峠を越える。心配した雪には見舞われずにすんだ。十五日、バルン・コーラへ下り、十六日、ネーラを出発し、森林限界を越えキャラバン最後のキャンプ地メーラに着く。バルン・コーラに入ってからずっと続いていたU字谷はこの付近からV字谷となり、メーラのキャンプ・サイトからローワー・バルン氷河の舌端が白く輝いているのが見える。そしてそこから長い長いサイドモレーンが城壁のように連らなってバルン・コーラへ押し出している。

十一月十七日、ベース・キャンプへ着いた。標高五〇〇〇mである。バルン・コーラをはさんでマカルーが屹立し、ユーゴ隊が登った南壁が我々を圧倒する。ポーター達もよく頑張ってくれた。給金をもらったポーターは「ナマステ」を連発してどんどん下ってゆく。高度障害で調子の悪い隊員三名もネーラまで下ろす。全員揃ってベース・キャンプ第一夜をすごせないのは残念だが、彼等もすぐ戻ってきてくれるだろう。

登攀活動

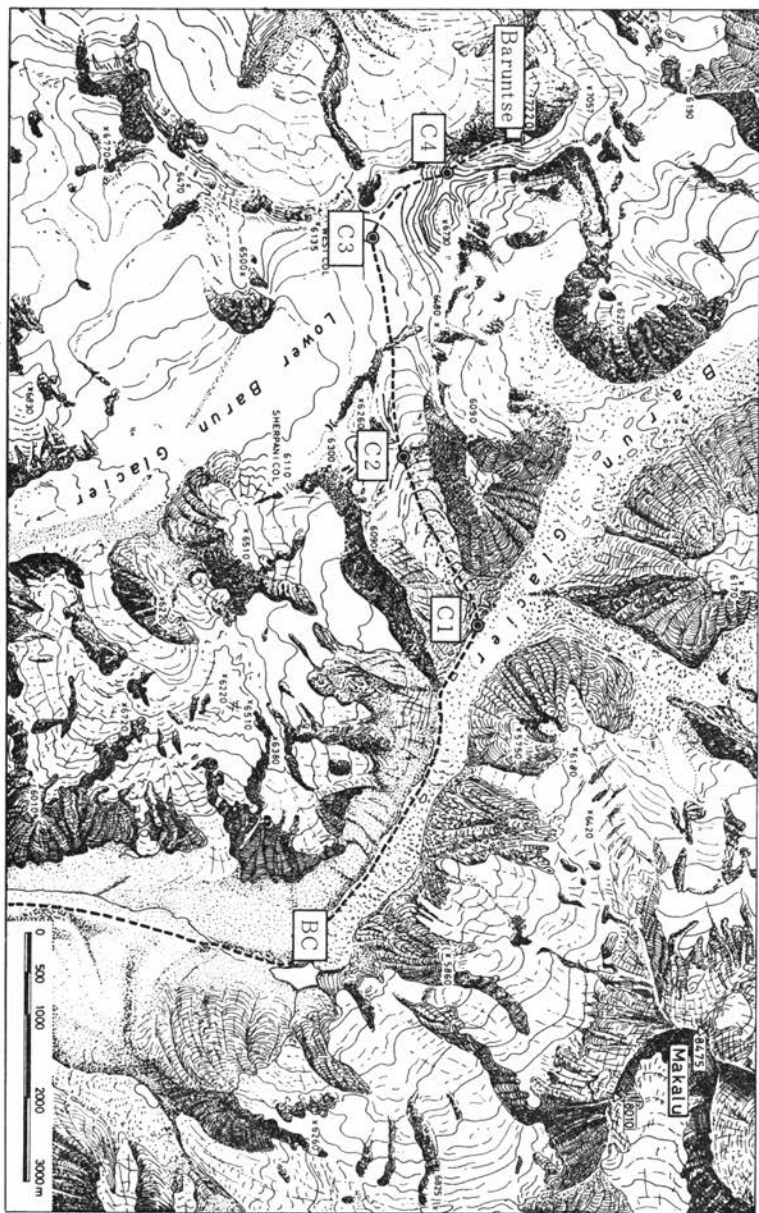
キャラバン中、特にシプトン峠で雪に遭遇するのを避けるためにキャラバンの出発を早く行なったが、ベース・キャンプ入

りが順調に行なわれた場合、登攀活動開始までの十一月中の十日余りの日程をどうするかが問題であった。計画ではこの間を高度順応期間とし、ベース・キャンプ近くでトレッキングをする予定であった。キャラバン中、ウツタム中尉にこの件につき折衝していたが、予定以外のトレッキングはどうしても認められないという。その為、代案としてC1付近までの荷上げを認めてくれるよう頼んだところ、C1以上に行かないこと、又、ルートははずれないこと、を条件に許可を与えてくれた。

ベース・キャンプに到着した翌十一月十八日と十九日、隊員とシェルパ全員及びポーター二十八名による五二〇〇m地点への荷上げが行なわれた。この地点はシェルパ・ニ・コルへの登路のバルン氷河との出会いから更に上流へ一Kmほど行った地点である。表面が堆石で覆われたバルン氷河の上を登ったり、降りたり、距離の割には高度の稼げない歩きにくいルートである。この二日間で約二トンの荷上げを終え、残っていたポーター達は全員足取りも軽く下っていった。以後十一月中は隊員とシェルパによるC1への荷上げが続いた。高度順応の続いていた東、中村は二十四日、住谷は二十七日にベース・キャンプ入りすることができた。

十一月中はC1への荷上げの合間を縫ってベース・キャンプの整備が行なわれた。気象、雪氷担当の東は観測用の計測器具の設置、装備担当の中村(豊)は風力発電機の設置、他の隊員

Chart3-(a)



は装備、食糧の点検等に追われた。今回の気象観測の主目的は、冬期ヒマラヤの気象状況を把握することであり、ベース・キャンプでは自記記録計による風速、気温の連続観測を、各キャンプでは定時観測を行なうことになっていた。

十二月一日、登攀活動の解禁日である。隊員六名とシェルパ五名がC1の設営とC2へのルートの偵察のためベース・キャンプを出発して行った。夕方C1からの連絡によるとC2までのルートは高度差が六〇〇mあり辛いが、特に問題がないとのこと、安心する。

二日、風力発電の調整に忙しい中村(豊)を除いて残りの三名の隊員もC1入りをする。C1は大入り満員である。ベース・キャンプから風力発電が順調に発電を開始し、「まるでカトマンズに居るみたいだ」とウツタム中尉のうれしそうなお声がトランシーバーを通して聞こえる。これで交信用の電池充電の目的の用途がつきほつとする。

三日、C1よりC2への荷上げとC2の設営が行なわれる。

C3予定地(六一四〇m)への偵察へ行った石村、花井により、ローワー・バルン氷河の乗り越したダンライン・ロープが二ピッチ固定され、C3へのルートも開けた。

四日、C1からC2、C2からC3への荷上げ。

五日、C3の設営が行なわれた。快調なペースだ。キャンプ・サイトはウエスト・コルよりやや北側である。ここからは南

にチャムラン、東にマルカー、西にクンプの山々が連なり眺望絶佳である。

C3とC4に設営したテントは四角錐のピラミッド型テントで南極の観測隊のものを参考に新たに開発した傘を開くような形で簡便に設営できる。剛構造で強風下でもその耐風性は実証済みであった。

六日、七日とC2及びC3への荷上げに専念する。八日、九日、ベース・キャンプにて全員休養。今までのペースから考えて、高度順応さえうまくいけば、六日目には第一次アタックが可能と判断し、十五日を第一次アタック、引き続き十六日に第二次アタックを行なうことと決める。それにしても予想以上によい天候が続いている。夜間は十五m前後の風が吹くが、日中は殆んど快晴だ。この天候を逃がさずアタックをしなければならぬ。

十日、住谷はC1、他の隊員はC2へ入り登攀活動を再開した。連日の行動でバテ気味だった隊員達も二日の休養ですっかり英気を取り戻している。十一日から十三日までの三日間はC3への荷上げ、C4(六七〇〇m)へのルート工作、C4の設営、及びC4から上部へのルート工作が行なわれた。高所での経験の豊富な池上、花井はルート工作隊として、ぐんぐん高度を稼いでゆく。

十四日、前日よりC4入りしていた池上、石村と花井は更に

上部七〇〇mまでのルート工作了完了した。C3から浜名、須崎、サーダーのアン・ペンバ、カルマの四名が新たにC4入りをし、隊員五名、シェルバ二名による第一次アタック態勢は整った。

十五日、昨夜の猛烈な風はどうやら治まった。天候は、大丈夫のようである。六時、浜名と定時交信をした。七名とも出発できる状態にあるとのこと。安心する。八時、七名はC4を出発した。しかし十時、須崎が疲労のため遅れ、登高は無理なのでC4へ下げることにする。ちょうどこの頃、先頭を進んでいた石村と花井は七〇〇m付近のナイフ・リッジに雪庇の張り出した難所でルート工作に苦勞していた。苦闘一時間半、ようやくロープがフィックスされ、ルートは開かれた。しかしここでカルマが恐怖心におそれ登高を断念した。一時三十分、浜名、池上、石村、花井、アン・ペンバの五名が遂に頂上に到達した。写真をとり、しばし休息ののち、午後五時、九時間の行動の後、隊長の待つC3に帰着した。翌日に予定していた第二次アタックは、住谷、東、松本が疲労と高度障害で不調のため、一旦全員ベース・キャンプへ下って休養したのち、二十三日に行なわれた。しかし、西からの猛烈な風と寒風に阻まれ、七〇〇m地点で徹退を余儀なくされた。すでにヒマラヤは完全に寒気団に覆われていた。

林総隊長と佐藤ドクターは十二月二十日、シプトン峠を無事

越えて、ネーラにすでに到達していた。第二次アタックは失敗に終わったが、第一次アタックが成功したことと、全員が無事であることを知ってきつと喜んでいてくれるに違いない。

終つて

冬期とはいえ、登攀活動の行なわれた十二月中は、予想していたよりかなり暖かかった。ベース・キャンプの最低気温はマイナス二十度C以下になることなく、C3における定時観測で測定した最低気温はマイナス二十七度C、瞬間最大風速は、二十三mであった。しかし第二次アタックの行なわれたときの気圧の谷の通過時は、測定はできなかつたが、風速は三〇m以上であったと思われる。降雪をみたのは、十一月二十九日と十二月二十三日、二十四日の二回だけであった。又絹雲が頻繁に現われたが、天気が大きくくずれたのは、十二月二十三日と二十五日だけである。今回の遠征では、多くの気象、雪氷に関するデータを得ることができた。充分解析を加えた上で、別の機会に報告したいと思う。

多くの実験を行なつて改良、開発した装備は夫々に有効であった。ピラミッド型テントは、居住性もよく、テントの揺れがないので安心感がある。又、化繊を使用した寝袋は、ややかさばるが、保温性にすぐれており、快適であった。

風力発電は、予想より早く登攀活動が終了したので、C3で

は使用せず、ベース・キャンプだけで使用された。風車から発電機への動力伝達部分にロスがあり、期待通りの発電量を得ることができなかったが、照明、ニッカド電池の充電などに利用された。更に改良を行なえば、非常に有効に利用できると思われる。

登攀活動は、予想以上に快調に行なわれた。ヒマラヤ経験者が多かったことにもよると思うが、早い時期にベース・キャンプ入りし、十一月中に予定地に隊荷のデポができたこと、予想以上に天候がよかったこと、最悪の条件を考えて準備に万全を期したことが大きな原因であろう。しかし天候の安定していたのは十二月中旬までであって、下旬になると、第二次アタックの失敗に見るようにジェット・ストリームと寒気に悩まされる。

今回の経験をもとに更に研鑽を積み、次のステップの厳冬期八〇〇〇m峰登頂を目指したいと思う。

(文責・中村晴彦)

△記録概要▽

隊の名称 北海道大学山岳部・山の会ヒマラヤ遠征隊―80―81

冬期

活動期間 一九八〇年十月―一九八一年一月

目的 厳冬期ヒマラヤ登山の研究

隊の編成

① 厳冬期バルンツェ峰の登頂

② 調査、研究

③ 厳冬期八〇〇〇m峰登山のための総合的訓練
 総隊長 林 和夫(64)、登攀隊長 中村晴彦(43)、
 医師 佐藤行郎(53)、住谷俊治(24)、隊員 浜名
 純(32)、池上宏一(28)、花井 修(28)、石村明
 也(27)、東 信彦(26)、中村豊彦(23)、須崎信
 彦(21)、松本伊智郎(21)、リエゾン・オフィサー
 Ⅱ ウッタム・シン・カルキ(23)、サード Ⅱ アン・
 ペンバ

行動概要

十一月三日ツムリンタール集結、十一月十七日ベ
 ス・キャンプ着(五〇〇〇m)、十二月一日C1(五
 二〇〇m)建設、十二月三日C2(五七二〇m)建
 設、十二月五日C3(六一四〇m)建、十二月十三
 日C4(六七〇〇m)建設、十二月十五日登頂
 (浜名、池上、石村、花井、アン・ペンバ)、十二
 月二十三日第二次アタック失敗

パンワリ・ドワールとヴァスキ・パルバット（一九八〇年）

中 江 啓 介

インド・ヒマラヤは少しづつ門戸を開放し、ついに六五〇〇mの高峰群の残るガンゴトリ氷河の一部も一九七九年から登れるようになった。八〇年は日本からも数隊がこの山群に入り、さながらガンゴトリブームを作った。私達の目指した山はガンゴトリ氷河の支流、チャトランギ氷河の盟主サト・パントに近い峻峰である。

もう一つの山、パンワリ・ドワールはナンダ・デヴィを囲む山々の一つで未登の山として残っていた。

*

九月八日の早朝、わたしたち三名は、最後の希望を持って、ヴァスキ・パルバット東壁の偵察に出かけた。

昨年、イギリス隊三名がアルパイン・スタイルで試みた北壁を回りこみ、北稜の末端まで来ると、赤茶けたぼろぼろで、急

傾斜の東壁の一部が顔を出す。「ひどい壁でんな。こりゃ、ちょっと無理とちやいまつか」と、なかばあきらめながら、スندگان氷河のモレーンの上を登る。正面には、かんとんに頂上まで登れそうなサト・パントが、どつしりとかまえている。東壁の支尾根を回りこみ、壁の全貌を見わたせる所に出た。ここより仰ぐヴァスキ・パルバット東壁は、まさに理想的な傾斜を持つ壁であった。下部の岩壁帯は脆いが比較的傾斜がゆるそうだし、上部の雪壁は、上に登るにつれて傾斜を増してはいるが、なんとか頂上稜線へぬけ出せそうだ。「こりゃ、行けまっせ、ひよつしたらアルパイン・スタイルで」

一九七七年、ガルワール・ヒマラヤのマイクトリ南稜を六名全員が登頂後、デリーで現地解散したが、だれ一人としてすぐには、日本へ帰らず、各々。パキスタンへ、ネパールへ、そして

インドへと放浪の旅へ散って行った。この旅こそが現地順応の旅であった。インド周辺の国々では、現地いかに早く順応できるかどうかによって、登山そのものや、登山スタイルにまで大きく影響している。もちろん体力と登攀技術、そして精神力の重要な事は言うまでもないが、現地に早く順応できると、当然短期間で遠征が可能となり、余分な労力や費用を費やさずに済み、少人数で経済的登山を可能にさせる。

今回の遠征計画は、マイクトリ登山とその後の放浪の旅の体験から生まれた。プレ・モンズーンとポスト・モンズーンに二つの登山を行ないモンズーン中はできるだけ金を使わずに、体力をつかってトレーニングにはげみ、安全に現地に順応した所で最後の目標にいとむという計画をたてた。プレ・モンズーンの登山に、遠征の大半の資金・装備・食料を費やして確実に登頂を行い、ポスト・モンズーンには、残りの装備・食料を使い、すでに高度順応を獲得している体で、速攻あるいはアルパイン・スタイルで登頂を試みるという計画だ。たとえわたしたちの実力で登れなかったとしても、わたしたちなりの満足のおける登山を試みたかった。

出発五か月前に、インドへ申請書送り、最終的にプレにパンワリ・ドワール、ポストにヴァスキ・パルバットの許可を得て、短期間に、あわたたしい準備を行いインドへ飛んだ。

デリーで、リエゾン・オフィサーの問題があったりはした

が、大きなトラブルもなく五月四日、ピンダリ氷河の末端にベース・キャンプを設営することができた。以後三十日間の登山活動に入る。

このパンワリ・ドワールは、過去に日本隊二隊が東南稜より試登していたが、まだ未踏のままで残っていた。一九七九年のプレに、佐久アッセント・クラブが頂上直下一五〇mまで試登を行い、その冬には、九山同人隊が冬期登山を同ルートの東南稜より試みたが、隊員一名を雪崩で失うという悲劇に見舞われた。わたしたちがベース・キャンプへ到着した時、同隊によって遺体が発見された。微力ながら遺体搬送の際には、わたしたちも手伝わせてもらった。

前回のマイクトリ遠征の時の偵察と、過去二隊の報告とによりルートははっきりしていたので、案外早く登頂できそうだと思つた。しかし、日本で鈍った体にむち打って荷上とルート工作に毎日がんばるが、東南稜上にC3を設営できたのは、登山活動開始から二十日目であった。

C3より上部のルートは、下部とうって変って困難度を増す。ここより頂上までは、両側が切れ落ちた雪稜が続く、スندانダルンガ谷側はアイゼンの爪も受けつけない青氷の斜面が谷底まで続いている。一方ブリア氷河側は、軟雪の雪庇が張りだしている。この山の回りには、マイクトリ、ナンダ・カート、ナンダ・コットと連なっているが、遠望する限りどの山もこれ

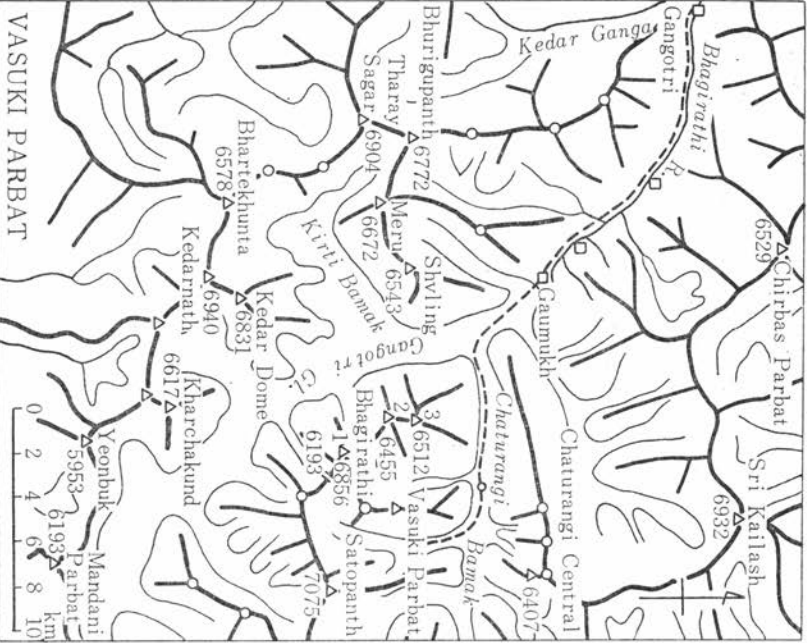


Chart4-(a)

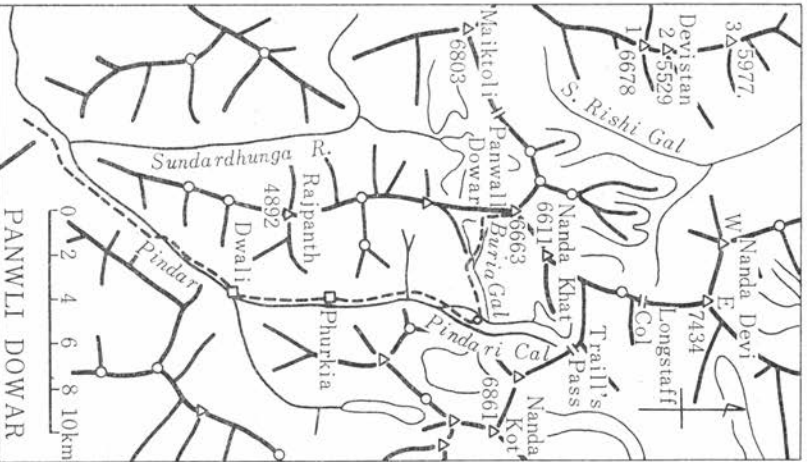


Chart4-(b)

ほど悪くはなさそうだ。実際、この山のスندگان谷側の斜面は、陽光のもとではいつも青白く輝いているのだ。

過去二隊の残置フィックス三〇〇mも含めて、C2より頂上直下まで一七〇〇mのフィックス工作を行い、なんとか登頂態勢に入る。五月三十日と六月一日の両日に、隊員二名ずつ未踏峰の頂上に立つ。わたしたちにとって初めて手にした未踏峰の頂上であった。しかし、頂上よりナンダ・デヴィ、チャンガバンを望む時、なんととはなしに心から喜べないものがあつた。もちろん隊員一同、自己の体力と技術とを出しつくした登山であつたが。

六月下旬再びデリーへ帰つたわたしたちは、前期の登山のみで帰国する山岳部現役隊員の小林を送り出し、ヒマチャル・プラデッシュのマナリへと向つた。ポスト・モンsoonの登山までの二か月間、いかに安く生活して体力と技術をつけるかが問題であつた。マナリでは、おかげで一か月一〇〇ルピーという超安値のホテルを見つけたが、体力と技術向上のためのハード・トレーニングを實行できたかどうかは疑問である。この二か月間に、セントラル・ラホールとデオ・ティバベース・キャンプへのトレッキングを行ったが、いつもトラブルばかり数だったし、度の日帰りの岩登りもいつも中途半端に終つた。しかし、インド女性に片思いの恋をしたり、映画を見たり、大酒を飲んだり、温泉に行つたりして、インドの生活にどっぷ

りつかり、楽しいマナリの生活を過した。

八月下旬に再度デリーに帰つてきたわたしたちは、体力・技術とをのぞけば、他のどの遠征隊にも負けないと自負できるたくましい人間に生長していた。また幸運なことに、前回のリエゾン・オフィサーとはうってかわつて、わたしたち貧乏隊にびつたりの人物を迎えることができた。彼の名前はブラデップ・ダス氏で、一年のうち半年はヒマラヤで過ごしている。カルカッタのヒマラヤン・ソサイアティの会員である。

インドに四か月も滞在していると、日本からの登山隊の大半に出会う。そのたびに高所キャンプ用の日本食の寄付をいただいた。これによつて、高所キャンプ用食料も四人で三週間分のストックを得ることができた。ヴァスキ・パルバットの登山に關して装備と食料はまったく問題はなかつたが、わたしたちを一番なやましたのは遠征資金であつた。パンワリ・ドワールの登山に遠征資金の大半を費し、それにマナリ滞在の二か月の生活費を加えると、残りは五十万円ほどしかなかった。十万円を予備費にのこすと、一人当たり十万円ずつとなる。いくら貧乏隊といえどもガングトリの奥地まで、一か月間の登山に必要なポーターを雇用して行く自信がなかつた。途中で資金切れのために引き返さざるを得なくなるかと思つた。

この問題の解決へのアドバイスをあたえてくれたのは、わたしたちのリエゾン・オフィサーである。「我々インドの大半の

遠征隊は、一人十万円以下の資金で十分やっているのではないが、どうしてできないことがあるか」「私にまかしておけ。だいたい日本人は金持なので、遠征に金をかけすぎるんだ。どうして日本人はエージェントを使って、彼らにもうけさせるのだ。私は、この遠征が終わったら日本人向けのエージェントをつくるつもりだ。」と半分冗談をまじえて助言をあててくれた。わたしは日本人にとっては耳が痛いことだらけである。「遠征隊にはなんのためにリエゾン・オフィサーが同行しているか知っているか。遠征隊のすべての活動がスムーズに行なえるようにと同行しているのだ。」

後日、ウツタル・カシでのことだが、ポーター賃の交渉での彼のマネージメントはすばらしいの一言につきた。二十五ルピ―から始まった交渉は、最後には二十一ルピ―まで値下がった。この値段は、この年にガンゴトリへ入山したインド隊を含めたすべての遠征隊の中で、二番目に安かったとのことだ。

金がないかわりに汗を流せということで、デリーを出発して一路ガンゴトリへと向う。ウツタル・カシでは、中遠征隊の間をぬって、小遠征隊の持つ機動性を發揮して、ポーターを雇用して四日後の九月五日には、ナンダンパン上部のチャツランギ氷河左岸、バギラッティII峰の直下にベース・キャンプを建設することができた。高度は約四七〇〇mあるが、隊員一同、高所順応ができていたのでまったく普段と変わらない。

ベース・キャンプよりヴァスキ・パルバットの西壁と北壁を仰ぎ見ることができた。西壁は、赤茶けたオーバー・ハングを持った壁で、どこから手をつけて良いかわからない。北壁は、全体が急傾斜の雪壁で、相当な困難が予想されるし、かりにこの壁を抜けたとしても上部の長い北稜を登らなければならないので、短期間では無理のようであった。

このヴァスキ・パルバットの初登は、一九七三年に、北稜よりITBP隊（インド・チベット・ボーダー・ポリス隊）とされているが、記録・写真をいっさい発表していないので、その詳細は不明であった。ガンゴトリ山群が外国人に解禁された昨年の一九七九年のポスト・モンズーンには、イギリスの東ウェールズ隊三名が、アルバイン・スタイルで北稜と北壁と西稜とより試みたが失敗した。

日本では、ヴァスキ・パルバットに関する資料といえ、
「ヒマラヤン・ジャーナル」の不鮮明な北面・北東面の写真と、「岳人」の西壁の写真とぐらいいしか手に入れることができなかった。ITBP隊が北稜より登ったとの報告はあるが、詳細は不明だし、「岳人」の写真では怪峰ヴァスキ・パルバットと書いてあるし、七割がた登頂の可能性はないものと思っていた。ただ不鮮明ではあるが、「ヒマラヤン・ジャーナル」の北東面の写真に最後の希望をつないでいたが。

マナリからデリーに帰ってみると、「岩と雪」の編集部より

イギリス隊の資料がとどいていた。この山に関する初めて接する登山の資料であった。この資料より判断すると、わたしたちの実力からすれば、ますます可能性がないように思えた。しかし東面についてはまったくふれてなかった。

九月八日の東壁偵察で、頂上稜線までの理想的なルートを東壁に見つけることができた。翌々日、三人二週間分の食料と装備とを持って、東壁直下、シングル氷河五一〇〇mのABCへ入る。東壁でのルートは、頂上直下より落ちるルンゼの右側の下部岩壁帯を越え、そのまま雪壁を直上してセラック帯に入り、ここより傾斜の増した雪壁を右上げて、頂上稜線へ抜け出るといふものである。

九月十一日、フィックスド・ロープ三八〇mを持って、五八〇〇mまで登って見る。下部岩壁帯は思ったよりやさしく、IとII級程度で、一部IV級を含むものであった。フィックスド・ロープの必要をそれほど感じなかったが、このまま持って下るのもしやくなのと、下降の時の安全を考え、張りながら下る。ビバーク用品と食料をできるだけ切り詰めたが、最終的には一人十五キロになってしまう。食料は七日分を用意する。最後まで頭を悩ましたのは、テントにするかツェルトにするかだった。結局、高所での体力の消耗を考慮して、ダンロップ・テントの本体とポールを持参することにし、軽量化よりも居住性にポイントをおいた。

九月十二日、フィックスド・ロープをたどり五七〇〇mでビバーク。九月十三日、岩稜二ピッチ、雪壁二十二ピッチを登り、日没寸前に浅いクレバスを見つけてビバークする。高度計は六二五〇mを示し、高度の影響で食欲がない。上部ではこれ以上に食欲がおちるものと思い、軽量化のため大半の食料と若干の装備をデポする。翌日、さらに傾斜の増した雪壁を右上升すること十七ピッチ、最後の雪庇を突破して、夕刻頂上稜線へ抜け出る。稜線は思ったより広く、頂上までもう手のとどく範囲であった。この場所にテントを設営してころがり込む。この夜はまったく食欲がなく、固形物は受けつけない。飲物だけをとり翌日の頂上へのアタックにそなえ早目に横になる。

五月十七日、起床三時二十分。飲みものだけのかんたんな朝食であったが、出発した時には、すでに六時を回っていた。三日続いたの重労働と、高度の影響と、そしてほとんど食事をうけつけないという最悪の状態で、コンティニューアスとスタックアット六ピッチをまじえて、午前九時半全員ヴァスキ・パルバットの頂上に立つ。頂上より南方に、同じ高度と思われるピークがあったので足をのばす。これが思ったよりも時間をくい、このピークに到着したのは午後一時であった。実際は、このピークが少し低く南峰と名づけていいものであった。今日中に東壁を下降して二日目のビバーク地まで行きたかったので、登頂の喜びもかみしめないままにいそいで引き返す。日没寸前に今朝

出発した地点までもどつたが、これから東壁の下降は無理なので再びビバーク。この夜から高度の影響で顔がむくみ始める。

翌日、同ルートを最大限の注意をはらい下降する。下降は上記以上の困難をきわめ、スリップするといつきに一四〇〇mの落下を覚悟しなければならない。二日目のビバーク地でデポした装備を回収して下降を続け、午後五時過ぎになんとかフィックスド・ロープの始まる所まで達する。今日中になんとかアドバンス・ベース・キャンプまで下りたかったので、フィックス八十mのみ回収してヘッドランプをつけて下降を続ける。フィックスの終了した地点でこれ以上の下降は危険と判断して、五四〇mの岩棚の上で最後のビバークをする。

翌日、朝起きると三人とも眼がつぶれるほど顔がむくみ、別人のような人相に変わってしまった。しかし、登頂をはたし、ここまで無事下ってきた喜びで顔のむくみなど苦にならなかった。約一時間の下降で、六日ぶりにアドバンス・ベース・キャンプへ帰り着く。

△記録概要▽

隊の名称 立命館大学山岳会ガルワール・ヒマラヤ遠征隊一九八〇年

活動期間 一九八〇年四月〜一〇月

目的 パンワリ・ドワール初登とヴァスキ・バルバット新

隊の編成

ルートからの速攻登山

隊長Ⅱ中江啓介(29)、隊員Ⅱ乃村昌広(25)、野村浩(23)、小林 毅(22)、連絡将校Ⅱニラム・クマール(NILAM KUMAR)、『プラデップ・ダス(PLADIP DAS)』

行動概要

四月二十八日デリー発。五月四日ペンダリ氷河末端右岸(三七〇〇m)BC建設。五月八日プリア氷河末端(四六〇〇m)にCI。五月十五日パンワリ・ドワールとバウルジュリのコル(五四五〇m)にCII。五月二十四日南東稜(六一五〇m)にCIII。五月三十日中江、小林の第一次アタック隊。パンワリ・ドワール初登。六月一日乃村、野村の第二次アタック隊登頂。六月四日BC着。小林帰国の後約二か月マナリに滞在。八月三十日ウツタルカシ着。九月五日チャツランギ氷河右側(四七〇〇m)にBC建設。九月十日スンダル氷河(五一〇〇m)にABC建設。九月十二日から東壁に取付き、五七〇〇m、六二五〇m、六五〇〇mでビバークの末、九月十五日九時ヴァスキ・バルバット主峰第二登。同一三時南峰に登頂(東壁は初登)。さらに二回のビバークでABC着。九月十七日BC着。九月二十五日BC撤収。十月二日デリー着。

ガネツシュヒマールV峰（一九八〇年春）

長尾 悌夫

はじめに

東京慈恵会歯科大学山岳部のOB会である山の会では、今までに数多くの遠征隊に遠征隊医師として会員が参加してきたが、単科の医科大学だけに単独で遠征隊を組織するには種々制約があり、幾度となく検討はされたものの実現には至らなかった。

一九八〇年は大学創立一〇〇年にあたり、また山岳部創立五〇年にもあたるところから、この大義名分をかざして単独のヒマラヤ遠征を実現することになった。

目標の山。七〇〇〇メートル級の未踏峰ということで解禁後間もないガネツシュヒマールII峰（七一五〇メートル）にねらいを定め、登山許可の取得に成功した。ガネツシュ山群は最近

まで未許可だった為に資料が乏しく、七九年五月に浜口がネパールに入り、ヘリコプターをチャーターしてガネツシュII峰を中心に空から偵察して帰国、その報告を下に登攀ルートの検討を行なった。

ところが私達に登山許可が下りて間もなく、七九年ポストに登山許可を申請していた岡山大学隊にもII峰登山の許可が下りた。岡山大学隊が初登頂に成功したらどうするかが問題となり、あくまで未踏峰をということでガネツシュヒマールV峰（六九五〇メートル）にも追加申請を行ない、幸にも許可された。結局II峰は七九年ポストに岡山大学隊が見事初登頂に成功したので、私達は目標をガネツシュヒマールV峰に変更した。ガネツシュ山群の未踏峰は外国隊単独では登山は許可されず、われわれもネパール政府の登山規則にてらして日本ネパー

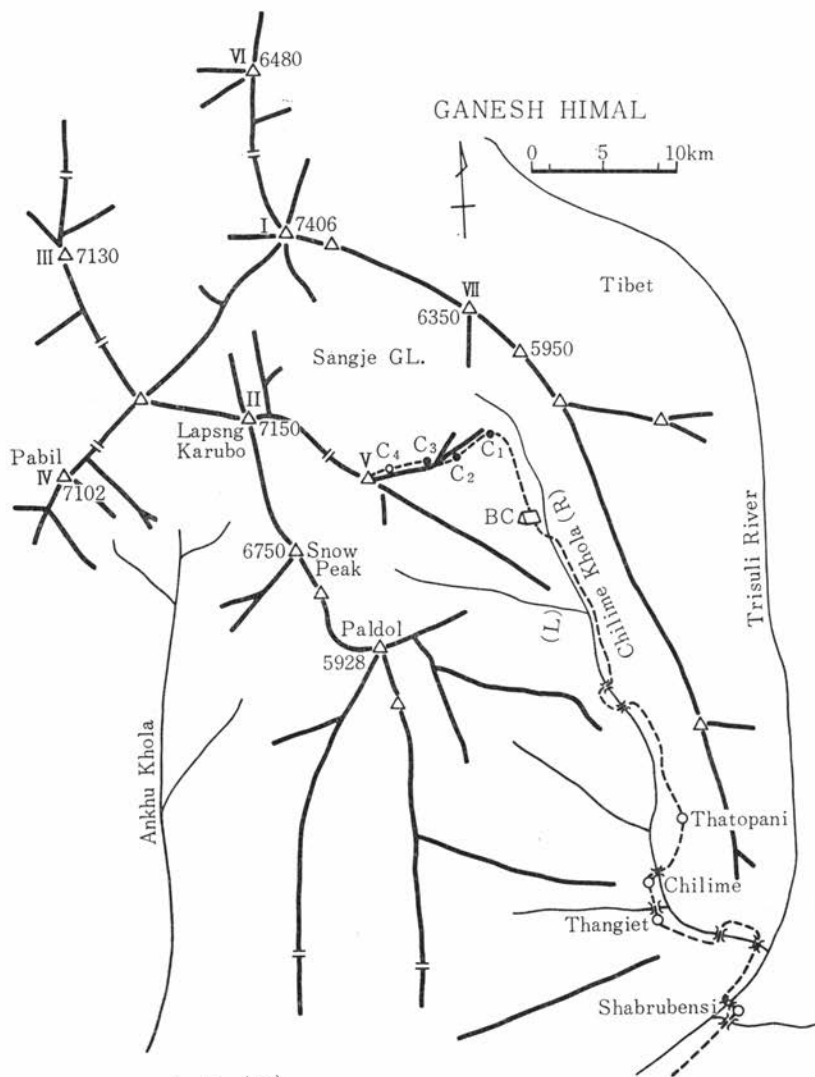


chart5-(a)

ル合同隊の形式を整えた。

キャラバン

三月七日 トラック一台、マイクロバス一台に全隊員、全隊荷を積んでカトマンズを出発、カカニの丘を越えてトリスリバザールのはずれに幕営。

三月八日 一四四名のポーターを雇用してキャラバンを開始。マロガオン、ガラン、ドンチュを経て三月一日シヤブルベンシ着。

三月十二日 学術班五名と別れチリメコーラに入る。

三月十五日 ゴルジュ帯を目前にしたモルパカルカから積雪帯となり、約三分の二のポーターが下山。以後BCまでピストン輸送となる。降雪のため二日間停滞。

三月十八日 ゴルジュ帯を抜けジャンジュンマカルカ着。隊荷の集結をはかり一日停滞。

三月二十日 メサンジェカルカ着。三八〇〇メートル。高度の点およびV峰までの距離の点から不満であったが国境線の問題もあり、ここにBCを設営することにす。BCからはV峰の頂上はピナクルにかくれて見えず、サンジェ氷河の奥深くI峰が貫録を見せて聳え、チリメコーラをへだてて対岸にはVII峰が美しく聳えている。

三月二十二日 全隊荷がBCに到着。正式にBC開設式を行

なう。

登攀活動

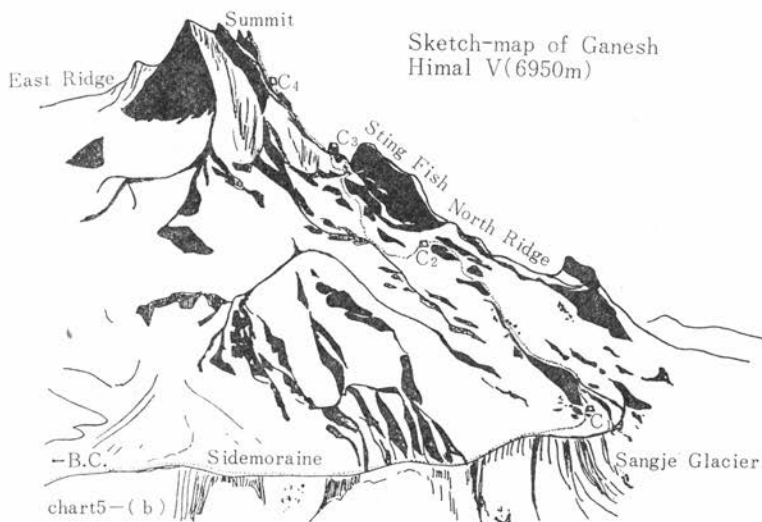
登攀ルートは北稜を考えていたが、北稜はそのほぼ中央にわれわれがオコゼ岩と名づけた巨大な岩峰が聳えており、その上部のシルより、頂上から落ちている懸垂氷河の末端にとりつけそうであった。問題はオコゼ岩の基部に達するまでの下部のルートであり、双眼鏡による偵察で三つばかりルートがありそうであった。

三月二十四日 この三つのルートに偵察隊を出して検討した結果、BCからの距離は遠いが、北稜を基部から忠実に辿る以外にルートはないとの結論に達した。

三月二十六日 北稜の基部にC1（四三三〇メートル）を建設。

三月二十七日 C2へのルート作業を開始する一方、シエルパ、ローカルおよびC1への荷上げに備えて解雇せずに残しておいた屈強なポーター七名を投入して精力的に荷上げを行なう。

三月三十一日 オコゼ岩の基部にC2（四九三〇メートル）を建設。C2からC3を予定しているオコゼ岩上部のシルへは、オコゼ岩の左側を右へ廻りこみながら急峻なクローアルをつめるルートが考えられるが、頂上を直下から落ちている巨



大な懸垂氷河からのセラックの崩壊の危険にさらされているため、オコゼ岩の右側にルートを求めんとしたが果さず、結局はクローアールをつめて、四月六日に斉藤、小森がオコゼ岩のコールに達した。しかし、オコゼ岩のコールは予想以上に狭く、高峰側はすっぽり切れ落ちていて、かつ、上部の懸垂氷河との間は大きなクレヴァースにさえぎられている、懸垂氷河にとりつくことは不可能と思われた。

四月八日 浜口、佐々木が再度コールに達し、なんとか懸垂氷河への足がかりを得ようとしたがやはり不可能であった。一方、ラクパ等はクローアールの上部を左にトラバースし、大きなアイスビルディングの基部を右に廻りこみながら登り、懸垂氷河の末端にとりつくことに成功した。

四月九日 C3建設のめどがたったので、全員BCに下りて久し振りの休養をとる。

四月十一日 登攀活動再開。

四月十四日 頂上からの懸垂氷河の末端にC3(五八〇〇メートル)を建設。

四月十五日 長尾がC2入りし、今日からサーダー、コックを除く全隊員、全シェルパがC2以上で行動することになる。篠原、小森が高度障害をおこしてC3からC2に下る。C3からは氷壁登攀になったが、ルート工作に岡部、斉藤が頑張る。

四月十六日 浜口、佐々木C3入り。

四月十七日 C3からは高度障害をおこした岡部、浜口がC2に下り、交替に復調なつた篠原、小森がC3入り。C3上部では、懸垂氷河の中を着実にルートが延びている。

四月十八日 篠原以下六名のルート工作隊が氷壁を登つてC4予定地に達し、更に上部まで偵察を兼ねてルート工作を行なう。斉藤休養のためC2に下る。

四月二十日 懸垂氷河の上部氷壁の中にC4(六五〇〇メートル)を建設。好天続きのため氷の状態が日一日と悪化してきていたので、二度にわけて速攻をかけることにし、第一次アタック隊として、佐々木、小森、ラクバ、ニマ・ノルブ、ニマ・テンジンがC4に入る。篠原、ジンバ、ドルジェがサポートしてC3に戻る。C2からは復調なつた岡部、浜口、休養充分の斉藤がC3入り。

四月二十一日 無風快晴、絶好のアタック日和。第一次アタック隊五名は六時五〇分にC4を出発、十時には氷壁を抜けて岩稜基部に達し、その後は六九〇〇メートルでの岩登りとなる。一時五二分、遂に未踏のガネツシュヒマールV峰の頂に立った。頂上は小森の表現によれば煎餅を立てたような感じで、北面は岩、南面は雪と氷で、人が一人やつと立てる位の広さしかなく、一人つつ交替で頂上に立った。眺望は素晴らしく、チベットの山々まで一望の下であった。この間に岡部、浜口、篠原、斉藤、ジンバ、アン・ツェリン、ペンバ・ツェリン、ド

ルジェの八名が第二次アタックに備えてC4に向う。登頂に成功した五名のうち、佐々木、小森はC3に泊り、のこりは一氣にC2まで下る。

四月二十二日 今日も快晴。第二次アタック隊八名はC4を出発。第一次隊のフィックスを使って快調に登る。八時四五分登頂。昨日にもまして素晴らしい眺望をほしのままにする。稀薄な酸素に喘ぎながら、日本、ネパール両国歌、慈恵医大学生歌を唱う。

四月二十三日 全隊員、全シェルバがBCに集結し、登山活動を終了した。

むすび

始めて実現したわれわれだけの遠征隊であったが、幸にも事故もなくガネツシュヒマールV峰の初登頂に成功した。われわれの隊は日本・ネパール合同隊であったが、ネパール側隊員は実質的にはシェルバであり、隊員としてのシェルバと雇用関係にあるシェルバとの間のトラブルを懸念したが、実際には、これといったトラブルはなかった。

医師および医学生の一遠征隊という特色を生かして、キャラバン中および登山活動中にくつかのリサーチを行い、その結果は日本生気象学会、ネパール研究学会等において報告した。

一部の雑誌に、われわれが越境して中国領から登ったと誤り伝えられているが、事前に観光省に提出して許可されたルートを通って入山し、BCもネパール領内のメサンジェカルカに設置したし、BCとC1の間のチリメモコーラの右岸に国境を示すコンクリートの大きなブロック（岡山大学隊も確認している）を確認しており、越境の事実はない。しかしその後ネパールと中国との間で国境の改訂が行われ、I峰・II峰・V峰を結ぶ稜線が国境になったとの説があり、それが事実であれば、これからはネパール側からこのルートをとってI峰、II峰、V峰への登山はあり得ないことになる。

△記録概要▽

隊の名称 東京慈恵会医科大学創立百年記念学術登山隊（日本・ネパール合同登山隊）

活動期間 一九八〇年二月～五月

目的 ガネッシュ・ヒマールV峰（六九五〇メートル）の初登頂

初登頂

隊の構成 隊長Ⅱ長尾悌夫（50）、隊員Ⅱ岡部紀正（40）、浜口

欣一（38）、篠原 健（32）、佐々木達海（30）、斉

藤三郎（26）、小森秋彦（23）、ラクバ・ドルジェ

（29）、ジンバ・ザンブー（23）

リエゾン・オフィサーⅡP・B・カルキ

行動概要

サーダーⅡダワ・ザングー（34）

シエルバⅡニマ・ノルブ（31）、アン・ツェリン（26）

ニマ・テンジン（50）、ペンバ・ツェリン（34）、ドル

ルジェ（21）、ユックⅡアン・ツェリン（25）、キッ

チンボーⅡニマ・テンジン（34）、ジェッタ（20）

メイル・ランナーⅡダワ・ラクバ（40）

三月七日 カトマンズ出発。

三月二十日 メサンジェカルカ（三八〇〇メートル）

にBC建設。

三月二十六日 北稜基部にC1（四三三〇メー

トル）を建設。

三月三十一日 オコゼ岩基部にC2（四九三〇メー

トル）を建設。

四月十四日 頂上から懸垂氷河の末端にC3（五八

〇〇メートル）を建設。

四月二十日 懸垂氷河内にC4（六四〇〇メートル）

を建設。

四月二十一日 佐々木、小森、ラクバ、ニマ・ノル

ブ、ニマ・テンジンの五名、登頂。

四月二十二日 岡部、浜口、篠原、斉藤、ジンバ、

アン・ツェリン、ペンバ・ツェリン、ドルジェの

八名、登頂。

ラムジュン・ヒマール北稜（一九八〇年春）

柏 木 恒 造

はじめに

法政大学体育会山岳部は、一九六八年に海外登山の第一歩として、ヒンズーラジ、プニゾム山群へ登山隊を派遣した。以後、さらに計画を発展させるべく、いくつかの海外登山計画を企画したが、諸般の事情により具体化することができなかった。

こうした中で、一九七八年十一月、来たる一九八〇年の法政大学建学百周年、山岳部創立五十五周年に際し、記念事業の一環として海外登山を行うことが提案され、以後具体的活動を行うことになった。

私たちは現役学生を主体とした登山隊であるため、高所登山は未経験であるから高度は七〇〇〇メートル前後が望ましいと

考えた。そして登路としては、雪稜を主体としたルートであること、なおかつメンバーが目標として納得し、魅力を感じる山であることなどを基本として対象の山を検討した。一九七九年二月、最終的にラムジュン・ヒマール北稜よりの登攀を目標とする。すでに良く知られた山であるがラムジュン・ヒマールの概念を書いておく。

ラムジュン・ヒマールは、アンナプルナ山群の東端に位置する標高六九八六メートルの山である。主峰より四つの尾根が生じている。北西へはアンナプルナⅡへ続く主稜。東へは過去のラムジュンにアタックしたすべての隊が登路とした南東稜が下降している。南峰へ続く南西稜と、北西稜にはさまれた地域は広大な雪原となっている。北へは主稜上の三角ピークとの中間より、一九七一年、信州大学隊により登路としての可能性を

見出された北稜が、マルシャンデイ川へ急激に落込んでい
る。(その後白川義員氏の写真集にこの北稜上部が写し出されてい
る。)

ラムジュン・ヒマール登攀小史

一九四九年 スイス人、アーノルド・ハイム空中偵察。

一九五二年秋 イギリス人、グッド・フェロー南面偵察。

一九五五年秋 ドイツ人、H・シユタインメツツら四人がアン
ナプルナ山群での登攀のあと南東稜試登。

一九六七年春 ドイツ人、H・シャルジンガーら三人が同じく
南東稜を試みたが、五九〇〇メートルにて断
念。

一九七一年春 信州大隊がアンナプルナII峰偵察のため北西面
のカンパ・コーラに入り、北稜の可能性をみつ
けた。

一九七四年春 ドイツ陸軍登山隊が南東稜より主峰の登頂に成
功。

一九七四年秋 日本ヒマラヤ協会隊が新ルート(北稜)からの
登攀を目指したが、入城できず、南東稜からの
第二登をなす。

一九七六年春 高知山岳連盟隊が南東稜より第三登十六名の大量
登頂をする。

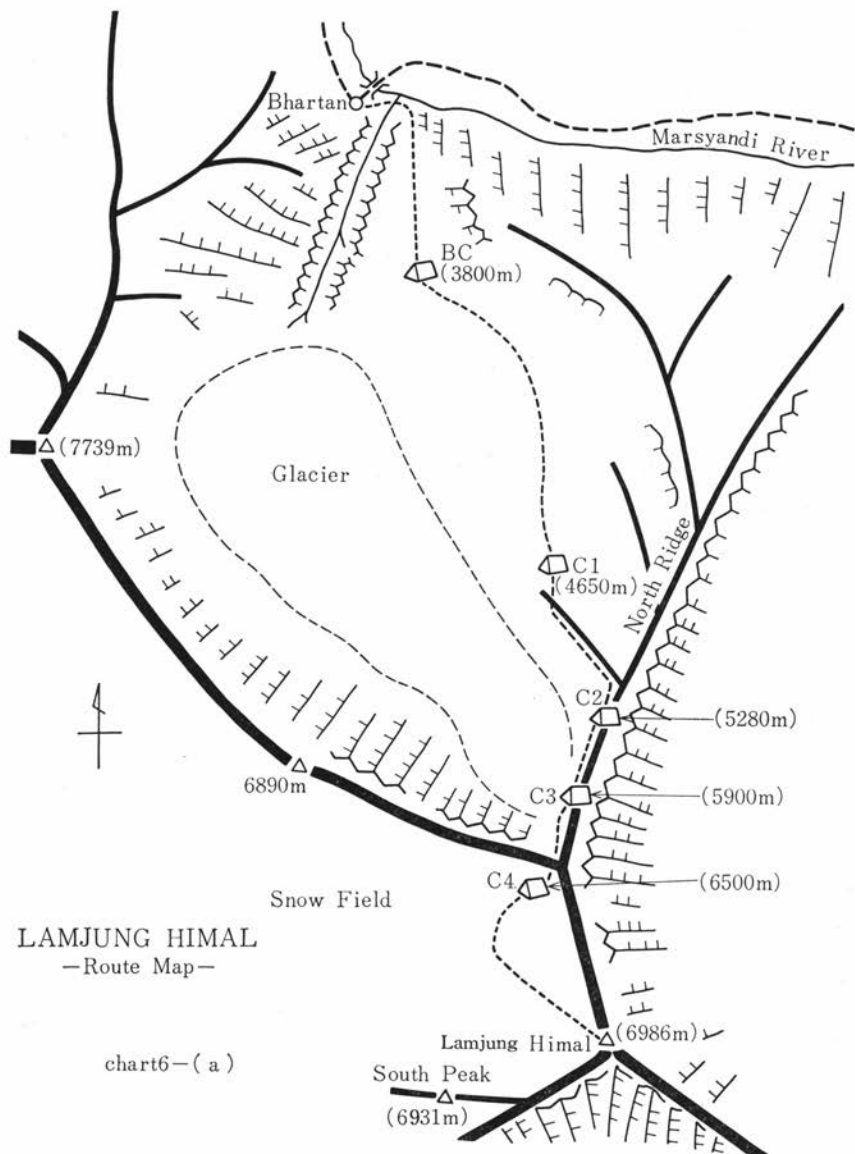
*

マルシャンデイ川に沿って

夢ではない、遠く雪を頂いたヒマラヤの山々が見えるでは
ないか。今、私たちはそれに向かって歩いている。これからは
登るだけだ。私たちは遠征に不慣れたためか、ここまで来るの
に様々な苦労があった……感慨無量である。

私の一番大きな任務はすでに終了したようにさえ感ずる。

ポーターやテント場については有能なサーダー、サンゲらに
まかせ、私たちはバナナやサポテンが点在するのどかな田園風
景のキャラバンをのんびりと楽しんだ。キャラバン四日目、ベ
ンシサルより初めてラムジュン・ヒマールのどっしりした白
銀の姿を望見する。六日目、ジャガート付近より両側の山々は
狭まりマルシャンデイ川は「黒部川下の廊下」の峡谷とそつく
りな景観を呈し、山に入って来た実感が湧く。翌日、ターレ、
ダラパニ、バガルチャップと奥地に入ることになって家々の造り、
住民の風俗などもチベット風となり、これらの変化も興味深
い。またこの付近まで来ると夜は大分涼しくなる。八日目も晴
天で、進むにつれてマナスル山群と共に初めてアンナプルナII
峰が素晴らしく眺められる。ナウル川との合流地点、コトのチ
ェック・ポストより目差すラムジュンの北稜が真近に見える。
スケッチしたり、写真をとったりしていると、あたかも登攀し



LAMJUNG HIMAL
-Route Map-

chart6-(a)

ているかのような気分になってくる。

三月二十八日（キャラバン最終日）昼頃バルドン部落に着く。午後、マルシャンデイ川右岸の岩まじりの急な樹林帯の踏み跡をたどり二時間、カルカのある、雪の現われ始めた三〇〇〇メートル地点にテント村を設営し、BC建設のための第一中継キャンプとした。本日でスノー・ポーター十九名を残しあと

の者は解雇する。

登攀活動開始

第一中継キャンプより積雪が次第に深くなるのでポーターに靴、スパッツ、ズボン、セーターなどを支給する。キャラバン中は裸足でボロをまとい「ネパール人」であつた彼らは、私たちと同じ服装となり、顔付も似て「日本人」とそっくり。また、苦楽を共にしているせいか、急速に親近感を増す。しかし支給装備数の不足により最終的にスノー・ポーターは十二名に絞り、ウッド・チョーパ二名、マイル・ランナー二名、シエルバ三名、私たち隊員八名、計二十七名にて荷上げも開始するが、急な樹林帯の積雪に悩まされてはかからない。BCまでの途中、第二中継キャンプ（三四〇〇メートル）を設ける頃、急登が続くため高度の影響も現われ、日本人隊員の動きはにぶい。中でも一番元気な上総は「おまえら、ネパールの人々に荷を背負ってもらい、テントを張ってもらって、それで良いと思

っているのか、働け」とハッスルそれに向かつて文句を云う者、のろろと動きだす者、様々な遠征にまつわるお話しが始まった。

第一中継キャンプより一週間を要し、予定より八日遅れ、四月五日、BCを建設した。翌日快晴の中、シエルバ流のBC開村式を行い、この登山の無事安全と成功を祈る。

BCは標高三八〇〇メートル、広い台地状の尾根の末端の低い丘の上で、積雪約三メートル、この地域の森林限界である。BCでの炊事は薪使用を原則としたため予定より四〇〇メートルも低い地点となつた。しかし雰囲気はよい。

左のラムジュン北稜、正面の主稜、右のアンチブルナII北東稜に囲まれ、背後にピサン・ピークを仰ぐ、白と藍の世界のまつただ中である。

隊をABC三チームに分け、ルート工作、荷上げにあたる。BCより通称「くの字尾根」をたどり、約四三〇〇メートルより雪原を右上し、北稜支稜末端の下、四六五〇メートル地点をC1とする。ここまでは全く問題のないルートで、十二名のスノー・ポーターも荷上げに従事させ、三日間でほとんどの物資はC1に荷上げされた。

四月九日にC1を建設、Bチームが入り、翌日より北稜支稜のルート工作をな行なう。四月十二日、CチームはBチームよりルート工作を引き継ぎ、支稜の最後の部分に一五〇メートル

LAMJUNG HIMAL -Climbing route-



chart6-(b)

をフィックスし、北稜に出た。ここで雲上の世界、ヒマラヤの景観に接する。

東のチャーメ側はスッパリと切れ落ち、頭上にはラムジュン主峰が雪煙も吹きあげ、その左方にはマナスル山群がひととき高く、遠く中国との国境の山ヒムルン・ヒマール、近くに私たちが当初計画したカングルーなど、スケールの大きいヒマラヤの山波にしばし足を止める。

北稜は高度感あるナイフ・リッジでPⅡ（仮称）に続き、次のコル（五二八〇メートル）をC2予定地とする。四月十四日、AチームはB、CチームのサポートによりC2を建設し、翌日よりC3に向けルート工作を行なう。これより北稜は絵に画いたようにきれいな氷雪のリッジが上部岩壁に向かって伸びている。

事 故

四月十七日、Cチーム三名は、C3までのルート工作に向う。Aチームのルート工作終了点より北稜ルート唯一の岩壁帯六〇メートルをフィックスし、小さなコル（五七五〇メートル）に出て昼食をとる。眼前のなだらかなピークを越した場所は平坦となつてゐるはずで（白川氏の写真による）、そこがC3予定地である。午後一時、トップの上野はルート工作に立ちあがった。四〇メートル進んだあたりから傾斜がやや急になり、ひ

ざより腰のラッセルとなる。数メートルで胸に達する。

「ピチッ」彼の数メートル上で深さ約一・五メートル、幅約五〇メートルにわたって雪が切れ、上野におそいかかる。彼は多量の雪にまみれ、チャーメ側の絶壁を落ちてゆく……。

セカンドのスバス、ラストの私の手の中を残った数メートルのロープが滑る。ロープが全部（五〇メートル）延びきって止まった。スバスは連絡のため下らせ、私は新しいロープも出し、上野の所まで降りて行き、彼を励ます。全身打撲、左足首骨折の上野はよく頑張り、氷化した難しい岩壁を登攀、夕方には北稜の元の地点まで戻ることができた。私がピッケルで雪洞を掘っている間、痛さと寒さにうめいていた彼の悲痛な声は忘れられない。

暗くなる頃、C1よりC2まで荷上げに従事していたBチームの上総と杉原は、ピヴァークに必要な物資を持ち、この地点まで上つて来てくれた。同夜四名は現場にて過し翌日より全隊員で上野の救助活動を行うが、北稜部分は厳しく、彼も背負うことはできない。彼は這い下ることになる。隊員の協力と上野自身の頑張りによつて、四月二十一日、彼をBCに収容することができた。

好天期間である。この五日間のロスは痛い。また事故はCチームの消滅を意味し、以後ABの二チームにより登山を行なうことになる。

この事故により私はショックを受けた。もはや隊を指揮する自信も気力もない。幸い私の後を継ぐ岡は、隊唯一の遠征経験者であり、沈着冷静な判断力により救助で活躍し、彼本来の力をとり戻した。また、ベテランのサーダー、サンゲも元気で大いに我々に協力してくれた。

人格者である隊長（山岳部部长、政法大学教授）と相談し、私は上野を安全地帯まで送るべく、彼らに後を託し、四月二十五日、B Cを後に下山した。

核心部の登攀

四月二十六日、C 3はP I（仮称）の肩（五八〇〇メートル）に建設され、Aチームが入り、翌日より上部のルート作業を行ない、四月三十日よりBチームと交代。しかし、この頃よりモンスーンの前兆か、毎日午後は降雪となり、ルートの伸びは鈍い。五月一日、上部ルート作業のための時間の短縮を考えて、C 3を一〇〇メートル上部に移す。

北稜上部はいくつかのハンギンググレイシャーを含み、その間の氷雪のナイフ・リッジは不安定で登路とならず、右の氷雪壁にルートをとる。五月四日、Aチームは再びこの壁のルート作業に挑む。五月五日、今日こそ大雪原（C 4予定地）まで、と張りきって出発するが、午後の降雪に加え、激しい雷の恐怖にさらされ、杉原は放電による苦痛に悲鳴をあげる（この日私

はB Cに帰着した）。

五月六日、Aチームの伊藤は休養を申し出た。ザンブーは食糧補給のためC 2に取りにもどる。岡、杉原の二名は理想時間よりだいぶ遅れて出発する。急傾斜の氷雪壁の最上部のクラストはきわめて不安定である。薄い氷の下は砂のようなザラメ雪で、さらに奥のでこぼこの氷雪にアイス・ハーケンを打ち込む……。

岡はこの難しい壁で頑張り、雪原まであと四〇メートル、雪庇の部分を残す地点までルートを伸ばした。彼らは事故に引き続いでの上ルルート作業で疲労は激しい。C 4建設と頂上アタックに望みをたくし頑張るAチームにBチームとの交代を命ずる。

五月十日、Bチームトップの西村は、ピッケルとスコップを駆使し、最後の難関、四十メートルのハングした雪庇に挑む。セカンドの上総は、ルート作業による間断ないスノー・シャワーで雪だるまとなり。寒さに震えながらかつ睡魔におそわれていた。

午後二時の定時交信で、オープンして待つトランシーバーに上総の泣き声が入る「やりました。たつた今西村が雪原に出ました。」各キャンプの隊員は踊りあがる。

C 3より雪原までの、約十八ピッチのルート作業に、十五日間を要したこととなる。

登 頂

五月十三日、昨日C4(六五〇〇メートル)を建設したBチーム(上総、西村、ザンブー)は午前七時二十分出発し、大雪原を右に回り込み登る。快晴に恵まれ、あえぎながらも、最大級の光景を堪能しつつ、午前十一時五十分、ラムジュン・ヒマールの頂上に立つ。予定より二週間遅れたが、北稜よりの初登頂である。

五月十四日、C4、C3、C2を一気に撤収、小雨降る中全隊員はBCに帰着した。

おわりに

ヒマラヤ登山のみが山を趣味とする者の目的ではないが、現役部員及び若年OBが(ヒマラヤの人と生活を見聞しながら)これを体験できたことは貴重な学習である。

しかしながらいかにも多くの方々にご協力をいただいたことか……。

わが部は、ブニゾム登山と、今回のラムジュン登山を基として、今後も海外登山を活発に実践したいと考えるが、その難しさを痛感する今日この頃である。

△記録概要▽

隊の名称 法政大学ラムジュン・ヒマール登山隊

活動期間 一九八〇年三月二十日～五月二十六日

目的 ラムジュン・ヒマール(六九八六メートル)北稜からの登頂

隊の構成 隊長Ⅱ萩原 仁(56)、副隊長Ⅱ柏木恒造(44)

隊員Ⅱ岡建治郎(34)、上総紀久男(30)、上野芳規

(26)、杉原 尚(24)、西村 哲(23)、伊藤直樹

(21)、松田祐治(20)、医師Ⅱ岩崎泰彦(34)

L・OⅡクリシュナ・プラサド・シエレスタ(32)

サーダーⅡサンゲ・シエルバ(43)

シエルバⅡアンリタ・シエルバ(33)、ザンブー・

シエルバ(27)

行動概要

三月二十日 カトマンドゥ発。

四月五日 マルシャンディ川右岸三八〇〇メートルにBC建設。

四月九日 北稜支稜末端四六五〇メートルにC1

建設。

四月十四日 北稜五二八〇メートルにC2建設。

四月二十六日 北稜五八〇〇メートルにC3建設。

五月十二日 雪原六五〇〇メートルにC4建設。

五月十三日 午前十一時五十分登頂。

ジュトマル・サール登頂（一九八〇年）

杉 本 忠 男

はじめに

ジュトマル・サール（七三〇メートル）は、カラコルム山脈ヒスパール山群に位置する未登峰であった。ヒマラヤの未登峰が年々少なくなっていく中で、ほとんど資料すらなく、未だ探険的要素を残したこの山に、私達は大いなる魅力を感じていた。一九七六年秋、南面からこの山を偵察して、登攀の可能性を探った。

一九七八年五月、私達は隊員九名でこの山を目指した。当時カラコルム・ハイウェイの通行が禁止されていたため、アプローチはスカルドゥックからキャラバンを進め、ヌシク・ラ（四九九〇メートル）を越えなければならなかった。しかし、ヌシク・ラの急峻な下降ではポーターは一昨年の偵察後のように動いて

はくれなかった。約六十名のポーターは逃げ帰ってしまい、残りの三十名のみが空身なら下りてもよいという。約一〇〇〇メートルのフィックスド・ロープを張ってポーターを降ろした後、数個ずつ荷物をロープで降り降ろした。しかし、この方法はあまりうまくいかず、最後にはポーターの力を借りざるを得なかった。結局この下降に一週間も費やし、雪崩や荷降ろしのミスから若干の物資を失なった。加えて精神的、肉体的疲労を残したままベース・キャンプにたどり着いた。

登山も惨憺たる結果で終わった。まずベース・キャンプから一步も登らないうちに六日間の悪天に見舞われた。しかし、七月十二日からようやく快晴になり行動を開始して、主稜線までの核心部のルートが十日間で開かれた。ここから先のルートはやさしいことが確認され、登頂できる見込があった。だが、隊

の中に明るさが戻ったのも束の間だった。その直後にC1が雪崩に襲われ、隊員三名、ハイ・ポーター二名が死亡した。登山は即刻中止され、すべてが終った。

再挙―出発からベース・キャンプまで

一九八〇年、私は再びジュトマル・サールの登山許可を得た。ヒマラヤを指す以上、私にとってこの山はさけて通れないものになっていた。志岳会単独ではメンバーが集まらず、学生時代の後輩等にも声をかけ、いわゆるよせ集めの隊であったが、隊員四名、ドクター一名の小パーティはいたって気楽なものだった。

五月十九日、全員ラワール・ペンデイに集結した。アプローチはカラコルム・ハイウェイが解禁になっていたので陸路ナガールまで入れた。一昨年のヌシク・ラでの苦労がうそのように思えた。

六月一日、六十名のポーターと共にナガールを出発した。今年のキャラバンは別の意味で難行した。一昨年の約二倍のポーター賃に加えて、彼らは一日の行程を短縮して稼働日数を増やすことに一致団結、全精力をそそいでいた。しかも氷河を嫌ったポーター達は、ベース・キャンプより二日行程も手前で荷物を投げ出して帰ってしまった。若い隊員達は、あまりのポーターの身勝手さに怒っていたが、これはある程度予想されていた

ことでもあったので態勢に影響はなかった。残った数名のポーターと隊員達で十日間の荷上げの後、六月十九日ジュトマル氷河上によりやくベース・キャンプが建てられた。

登攀開始・事故

六月二日、登攀開始。高所順応を兼ねてC1予定地までのルート確認に全員で行くことにした。前回より時期が早かったためか雪がやや多く、クレバス帯はまだ雪の下だった。ジュトマル氷河北岸右岸ぞいにルートを進め、小さなアイス・フォールを越えて、いよいよ雪崩の危険地帯に入る。氷河源頭にある小雪原の手前になんとか雪崩を避けられそうな場所が見つかり、そこをC1予定地とした。ベース・キャンプから四時間半を要したが、第一回目の行動としては十分満足できるタイムだ。高所順応が順調に進んでいる証拠であろう。梯子をデポし、軽い昼食を済ませて下山にかかる。五分も下らぬうちに最初の雪崩の洗礼を受けた。ズズズ……という音と共に右手の急峻なルンゼから雪崩が発生したのだ。「来た、」という声と共に全員夢中で近くの雪の小山へ駆け上がった。振り返ると雪崩の足は短かく、ルンゼから氷河へ入るとすぐに止まってしまった。小アイス・フォール帯を過ぎるとうかつにも氷河の上を歩いていることを忘れてアイザイレンを解いてしまった。往路ではクレバス帯はクラストした雪の下だったのでつい油断したの

だ。クレバス帯を抜ける頃先頭の渡辺がヒドン・クレバスにぶつかつたらしく、ストックで回りを慎重にさぐっていた。そのとき足早に追い着いてきた江原が、やや遠捲きに渡辺を追い越そうとし、止める間もなく一瞬のうちにヒドン・クレバスに吸い込まれてしまった。氷や雪の落ちる音がクレバスの奥深くから聞こえ、我々は絶望感に包まれた。私は前回の事故にも懲りず、再びこの氷河にやって来た自分の愚かさ加減に強い怒りが込み上げてきた。だが、幸運にも江原は深さ十八メートルほどの所でちよつとした氷の出張りと反対側の壁との間に引っかかっていた。三十分ほどかかって彼を引き上げた。彼は肋骨骨折と頭部を含めた全身打撲を負っている。精神的なショックとともに、雪解け水を全身に浴びていたため震えが止まらない。急いで着替えをさせ、応急手当をして、ベース・キャンプで静養することになった。このときはじめてクレバスの中でも短時間のうちに凍死する場合もあり得ることを知った。

登攀再開・主稜線目指して

六月二十四日、登攀再開。今日からは杉本、渡辺、茂木の三人、一パーティだけで、ルート工作から荷上げの総てを行なわなければならず、行動計画を一部変更した。C1まで二日間の荷上げの後、悪天候の周期に入った。二十八日に小アイス・フオール帯の上まで荷上げしただけで、あとは停滞が続いた。七

月二日、ようやく晴天がおとずれたが、新雪雪崩を警戒して停滞。三日、久し振りの行動で心もはずみ、足取りも軽い。一週間で主稜線までのルート工作を終えようと、三人共勇んでまだ夜の明けぬベース・キャンプを後にした。C1直下には側面から押し出された新しい大きなデブリがあり、気持を引きしめる。二時間四五分でC1到着。今まで一番早いペースだ。さっそく雪崩の爆風をさける為、雪の急斜面にテントがほとんど隠れるほどの深いテラスを切り開き幕営する。登攀開始以来なんと十三日目にしようやくC1入りがかなったことになる。

七月四日、今日から本格的なルート工作が始まった。小雪原は累々たるデブリの山で歩きにくい。こんな所で雪崩が起れば逃げようがないので早く登りたいのだが……。

主稜線最低コルの西側にある雪の小さなピークから、南面へ高度差一〇〇〇メートルほどのリッジが落ちている。上半部は急峻なリッジだが、下半部は侵蝕によってけずり取られ、すでにリッジの形態をなくしてしまった脆い岩場になっている。見るからにたよりない貧相なリッジだが、南面から主稜線に上がる唯一のルートだと思ふ。我々はこれをチョタ・リッジ(チョタはウルドゥ語で「小さい」の意)と名付けた。取り付きにある大きなクレバスを渡り、雪の付いた脆い岩場を右からからむようにルートを進める。所々に一昨年フィックスド・ロープやハーケンなどが残っており「前人未踏の地だと思ふ」とたまら

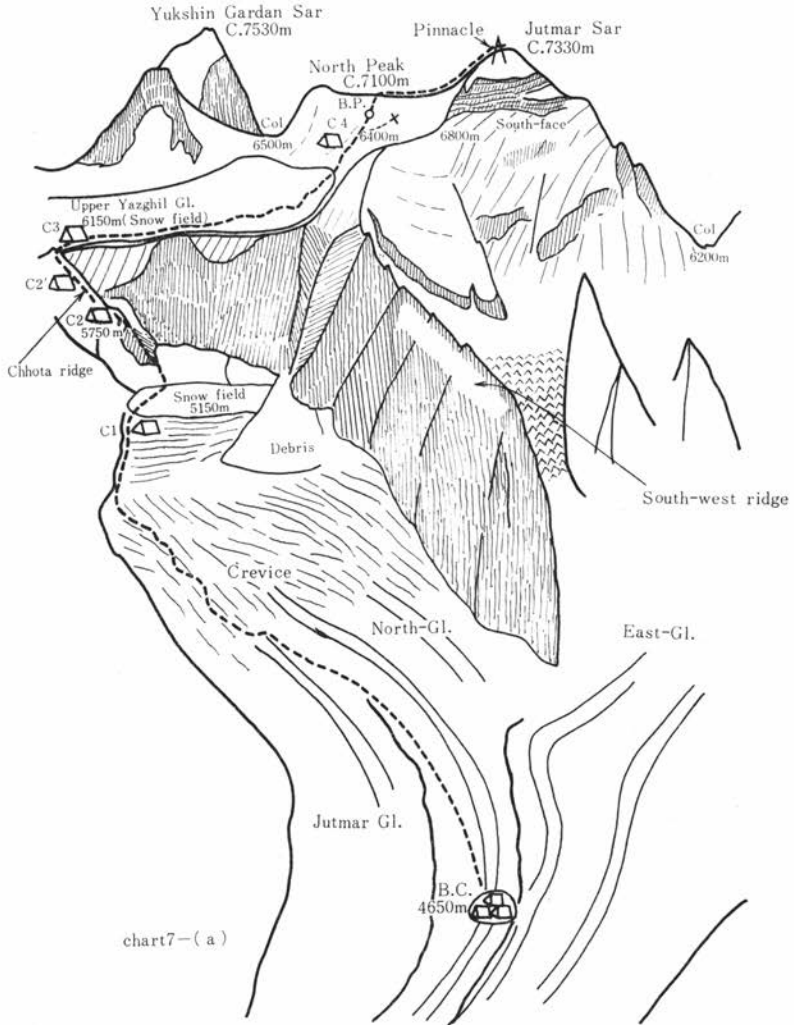
んなあー」と言っていた仲間達の顔が思い出される。この日は四〇〇メートル（八ピッチ）ほどルート作業をして、C1へ引き上げた。C1での最初の夜は予想通り雪崩の爆風に襲われた。しかしタコ壺作戦が効を奏した為か、爆風はテントの上を通りすぎていった。五日、今日中にC2までのルートを完成させるべく重い荷物を背負って出発したが、午前九時頃からなんと雪が降り出した。カラコルムでは天候に周期性があるという。その説によればあと四、五日位の好天は続くはずなのだが……。所詮とほしいデータでは予測しきれないものと、なさない気持だ。チョタ・リッジ基部に荷物をデポし、はげしくなる一方の降雪の中をベース・キャンプへ駆け下りた。

二日間の停滞を余儀なくされた後、七月八日未明ドクターと江原の見送りを受けてベース・キャンプを出発した。今日こそは一気にC2までのルートを完成しなければならぬ。C1で大休止をとった後、今までより大きなデブリが幾つも出ているのに驚かされながらチョタ・リッジへ向かった。リッジの基部に着くとさらに驚いたことには、先日張ったばかりのフィック・スド・ロープが切れて基部まで落ちていた。新雪雪崩にやられたらしい。このためルートを整備しなおしながら登ったので、前回の最高到達点に着いたのは午後二時すぎになってしまった。この頃から疲れも出てきたため、さらに二ピッチ作業しただけで荷物をデポし、夕方C1へ下った。今日は未明から十四

時間もの行動となり、ヒマラヤでの一日の行動時間としては長すぎた。九日、C1を撤収し、持てるだけの装備、食料を背負ってC2へ向かった。しかし、荷物の重さと、昨日の疲れが重なってまったくピッチが上らない。やたらに休憩しては三人共ぼけっとしてゐる。不安定な雪壁に神経をすり減らしながら昨日のルートを四ピッチ伸ばして、ドームの頭にC2を建てたのは午後六時半頃だった。十日、チョタ・リッジ基部まで逆ボツカに行く。今日も疲労が残ってか、三人共終始スロー・ペースだ。十一日、天候は下り坂で午後から雪が降ってきた。杉本のみ逆ボツカ。他の二名は雪稜をルート作業してチョタ・リッジの核心部を突破し、大テラスまでルートを伸ばした。十二日、小雪が降る中を、杉本、茂木が急峻な雪稜をさらに四ピッチ作業する。十三日、雪のため停滞。十四日、小雪。視界がきかずルート作業ができないため、大テラスにC2を作る。十五日、小雪。今日中に主稜線へ抜けるべくC2を撤収してルート作業に向かう。チョタ・リッジ上部は一昨年とまるで様子が違う。リッジの形態が一昨年より乏しくなり雪壁に近い。気温が高いため新雪でもやや安定しており、雪崩の心配はそれほどない（気温が低くサラサラした雪の方が新雪雪崩の危険が大きいと感じた）。しかし、雪が軟らかいので急な所では胸までもぐるラッセルになり登行は遅々としてはかどらない。アイス・ビルディングを右からからむと主稜線直下の大氷壁に達した。この

Climbing Route of Jutmar Sar

by T. Sugimoto



氷壁は所々垂直を越え、高度差五十メートル、幅三〇〇メートルに及んで我々の行く手をはばんでいた。ルートは氷壁の下を右へ水平トラバースしてコルへ出るのだ。ここでフィックスド・ロープがたりなくなる可能性が出てきたため、茂木が大テラスの下部のロープを回収に行く。残り二本のロープとメイ・ザイルを使い果たして、夕闇せまる頃、待望の主稜線に飛び出した。C3を建てて茂木を迎えたのは午後七時半をすぎていた。

大雪原

七月十六日、ガス深く停滞。杉本のみ大テラスまで逆ボックカに行く。十七日、早朝ガスが切れはじめた。私達は今ジュトマル・サールとプマリ・チツシユを東西に結ぶ主稜線のコルにいる。ところがこのコルの北側はすでにアッパ・ヤズギル氷河の略奪点となつて、南面のジュトマル氷河へ大きな雪崩をときどき落としているのだ。ジュトマル氷河北侯の涵養源はなんと大半がアッパ・ヤズギル氷河だったのだ。

それにしてもこの雪原はどうだ。東西八キロメートル、南北二キロメートルに広がるほとんど傾斜すらない大雪原だ。標高六〇〇メートルを越えた高度で、これだけの規模の雪原が他にあるだろうか。

いそいで朝食を済ませて出発。ジュトマル・サール北稜目指

してややクラストした大雪原を進む。午前八時半、ジュトマル北峰のわきに朝の太陽が昇る。逆光が大雪原を黄金色に染め、ユクシン・ガルダンやジュトマル・サールがガスの中から代る代る姿を表わす。なんと幻想的な光景だろう、我を忘れて思わず叫びたくなつてきた。南にハラモシユやスパンティク、遠くにはナンガ・バルバットが望まれる。振り返るとヒスパイの山々が折り重なるように続いている。幾ら眺めてもあきない景色だ。約二時間で雪原を縦断して北稜への登りにかかった。この頃から雪がゆるんできて、ラツセルに苦勞させられ、この日は六四〇〇メートル附近の小台地にC4を置いた。頂上は目前にせまり、明日の登頂を皆確信した。

アタック

七月十八日、いよいよアタックの日だ。気持を引きしめ午前四時四十五分、薄明りの中を出発した。北稜目指して一歩一歩高度をせり上げて行くうちに、夜もすっかり明けてきた。回りを見渡すと高い山々のみ七四〇〇メートル附近から上部が雪に覆われている。空は晴れているのだが地平線にレンズ雲まであって不吉な感じだ。残念ながら予想が当って午前九時頃から雪が降り出した。六八〇〇メートル附近で視界もまったく利なくなつたため、ツエルトを覆って二時間ほど待期したが回復の兆しはまったくない。全員がつくり肩を落として足を引きずる

ようにC4へ戻った。十九日、今日も降雪。それにしてもなんという天候だろう。過去の記録では二、三週間も晴れっぱなしという記録も幾つかある。例年、最低一週間ぐらいの好天は周期的におとずれる。それが今年は登攀開始以来せいぜい四日しか好天が続かない。今日まで悪天の方が多いくらいだ。今回は五日間の悪天の後、一昨日の晴天でようやく好天の周期に入ったものと思っていたのだが、それがたった一日だけだったとは……。二十日、今日も小雪が降っておりアタックはあきらめざるを得なくなった。食料が尽きたため、いったんベース・キャンプへ下って態勢を建てなおすことが必要だ。往路は二時間で縦断した大雪原も深い雪に足を取られ、ガスに包まれてルー・ファインディングに神経をすり減らしながら、八時間かかってC3へたどり着いた。ここにもほとんど食料はない。

七月二十一日、昨夜の強風でテントが半分埋まってしまった。のんびり朝食を済ませて外に出ると、なんと快晴だ。下山の準備をしているうちに気が変わった。今年のカラコルムは天候が安定しない。従っていったんベース・キャンプへ下ってもアタック時の天候が良いとは限らない。それにあの雪崩の危険地帯をまたもう一度往復したくもない。そこで、この晴天を逃がすまいと残飯をかき集めて、午前十時急ぎよ再度アタックに出発した。昨夜のトレースは強風にかき消されて今日もラッセルのやりなおしだ。この日も渡辺ががんばって、トレースの大

方は彼がつけた。夕方C4に着き大休止。午後九時半、月明りの中を上部目指して出発、雪がややしまりひざより下のラッセルで昼間よりは登りやすい。零時半、月も隠れたので六八〇〇メートル付近で、三人腰かけられるほどのテラスを切り開きツエルトを覆った。

七月二十二日、息苦しさをこらえて、うとうとするうちに夜明けを迎えた。快晴で静かな朝だった。午前五時四十五分、杉本がトップで行動開始。まず上部のクレバスをさけてやや左へ斜上する。ひざまでのラッセルで五十メートルほど歩むと徐々に傾斜が増し、雪も深くなってきた。雪崩が出そうで緊張させられる所だ。下の方で渡辺が「もっと左だ」などと言っているが、こちらはそれどころではない。少しでも真つすぐ登りたい所だ。なんとか雪板の上に乗ろうとする。ひざを乗せて息をこらし、徐々に体重をかけるのだが雪板は割れてしまい腰までもぐる。あと十メートルほどで傾斜が落ちる所まで来たとき、とうとう雪板雪崩が発生した。茂木は四、五メートル流されただけで止まったが、杉本が捲き込まれた。早い速度で雪面が動くため体の自由はまったく利かない。雪の波にもまれながら二〇〇メートルほど流され、急に暗くなったと思ったら深さ二十メートルほどのクレバスの中だった。幸運にもケガはまったくなかった。クレバスの外へ這い出すと渡辺と茂木が駆け下りてきていた。動揺をおさえるため、もとのテラスまで戻って一休み

した。

この事故で気落ちしたためか、北稜へのラッセルは思っていたより長かった。三時間かかって標高約七〇〇〇メートルの北稜上へ出た。北稜の東側はすっぱり切れ落ち雪尻が出ていた。頂上台地の基部までさらに一時間以上のラッセルが必要だった。この頃よりラッセルに加えて強い向い風が顔に吹きつけ、呼吸は一層苦しくなった。黙々とラッセルを続け、頂上直下の帯状に広がる氷壁の下に着いたのは午後一時頃だっただろう。オーバー・ハングした氷壁は登れないので、アンザイレンして西面の小さなリッジに回り込んだ。さらに一ピッチ登ると突然大きな岩峰が視界に飛び込んできた。そこはもう頂上の一角だった。頂稜は雪の小さな四つのピークが東西につらなっている。東へよるほど高い。頂稜のゆるやかな雪の線とは対象的に、例の大岩峰が頂稜からはずれて、頂上とほぼ同じ高さで南壁からニョッキリと突出している。緊張感がプツツリと切れ、気抜けした体を、なかば這うように頂上へはこんだ。

下 山

ドクターや江原に迎えられてベース・キャンプへたどり着いたのは二十三日の深夜だった。三人ともほとんど眠りっぱなしの三日間はすぐに過ぎてしまった。

七月二十七日朝、八名のポーターが予定より一日早く上って

きたため、我々はあわてて撤収の準備を始めた。昼近く、もう二度とおとずれることのないであろうこのベース・キャンプに、そしてこの氷河に永眠する五人の仲間達に別れを告げて下山し始めた。

ヒスパイまでの三日間は楽しい毎日だった。特に第一夜のジュトマルでの満月、二日目の高山植物が咲きみだれたアプレーション・バレーぞいの道。一昨年の方はこんなに沢山の花々が本当に咲いていたのだろうかと思ふほどだ。あのときは心身ともに打ちひしがれ、重い荷物におしつぶされそうになりながらトポトボと歩いたことが思い出される。

私の十五年に渡るヒマラヤへの夢もこれで大きな一段落がついた。それにしても人間が何かをするということは、たとえその望みが達成した場合でもその裏では、なんらかの形で自らの手を汚し、心にキズを受ける。登山といえどもそれはさけられない。そして当事者の目標が大きければ大きいほど、また当事者の能力が小さければ小さいほど、その汚れや心のキズは大きなものになるのだ。まったくけがれない手は赤子の手だけだ。こう考えると人間とはなんと悲しい生きものなのだろう。

七月二十九日、ポーターや隊員達から大分遅れ、たった十二、三キロの荷物にあえぎながらヒスパイ氷河のスナトウを渡った。ヒスパイ村への最後のひと登りも苦しかった。村へ入ると多くの男や子供達にまじって、一昨年の雪崩事故で死亡した



Plate 5-(b) :

5200mの稜線上から見たラムジュン・ヒマール北稜。

Lamjung Himal-North Ridge between C2 (5280m) and C4 (6500m) seen from 5200m on the ridge.



Plate 5-(c) :

北稜6000m地点から見たラムジュン・ヒマール。

Lamjung Himal seen from 6000m on the North Ridge.

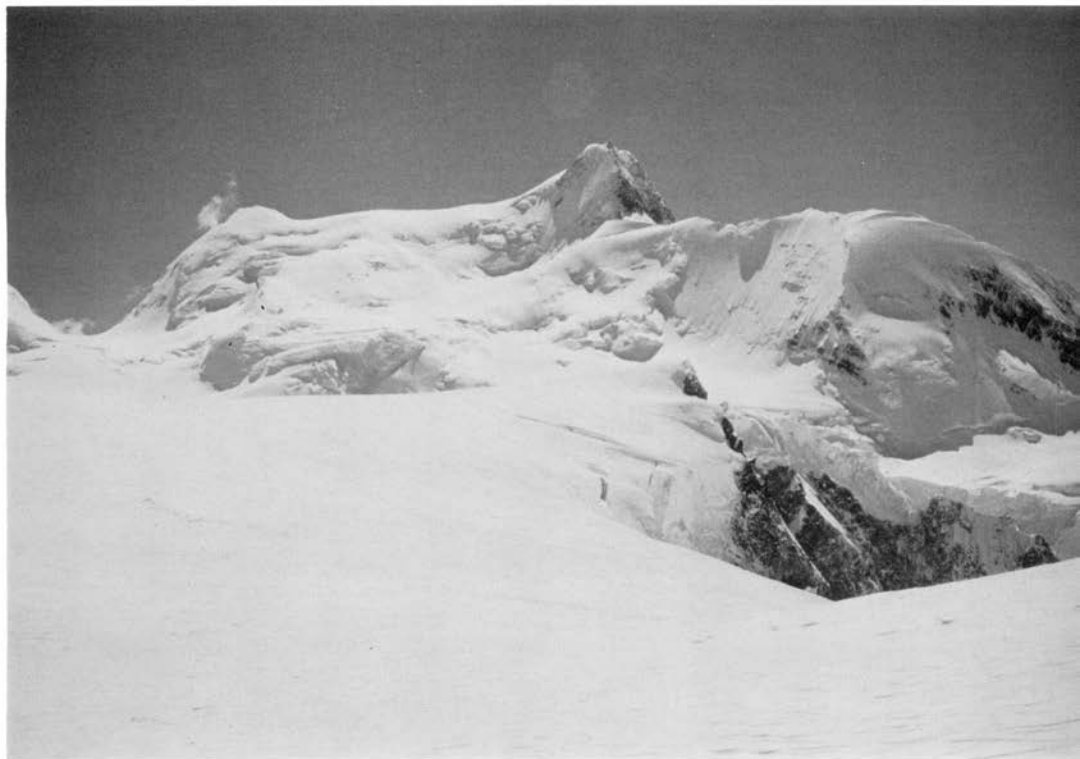


Plate 6-(a) : C3から見たジュトマル・サール (C. 7330m) 西面。

West face of Jutmar Sar (C. 7330m) seen from C3.

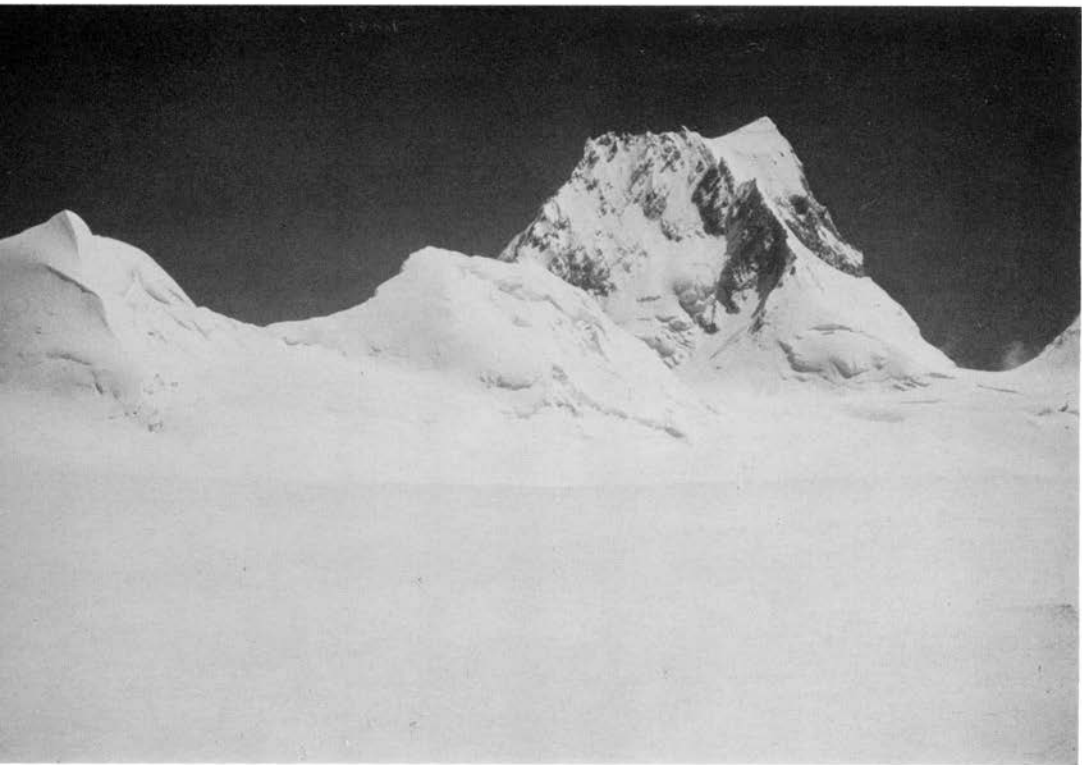


Plate 6-(b) : アッパー・ヤズギル氷河とユクシン・ガルダン・サール (C. 7530m)。
Yukshin Gardan Sar (C. 7530m) and Upper Yazghil Glacier.

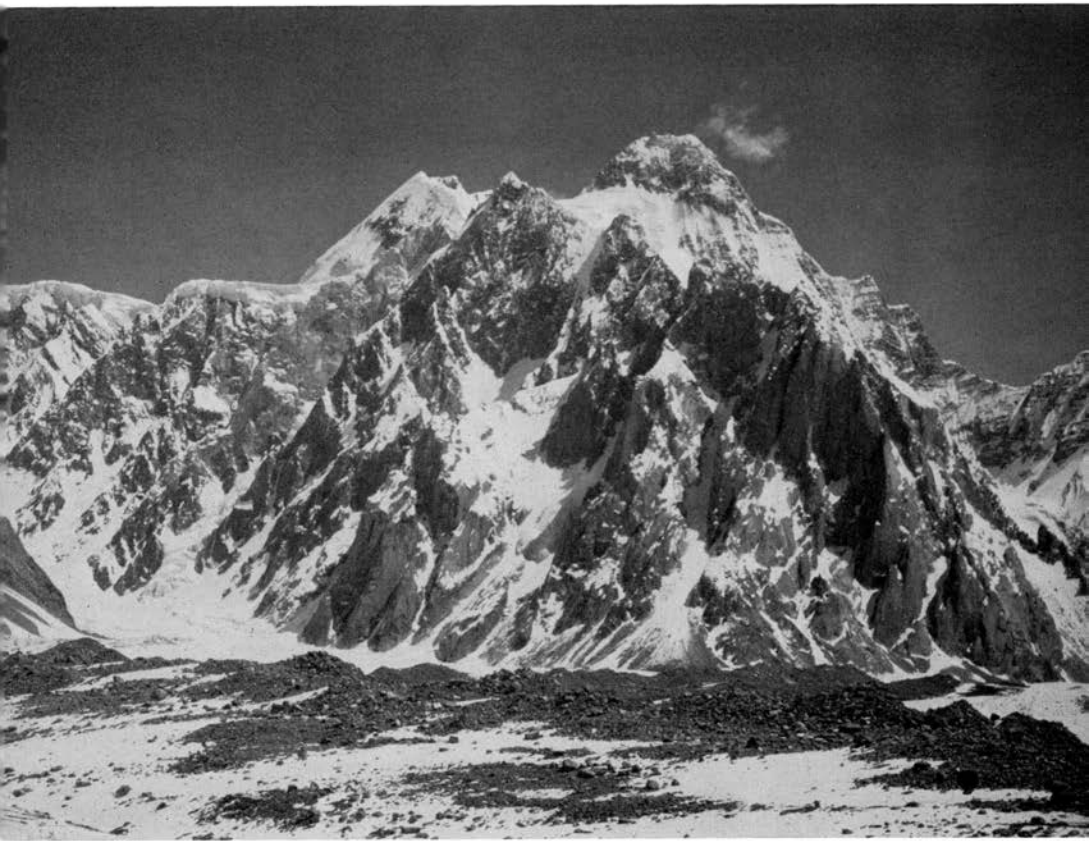


Plate 6-(c) : ジュトマル・サール (C. 7330m) 南面。
South face of Jutmar Sar (C. 7330m).



Plate 7-(a) : 月光のアマ・タブラム

Ama Dablam in the moonlight. (by H. Fukushima)

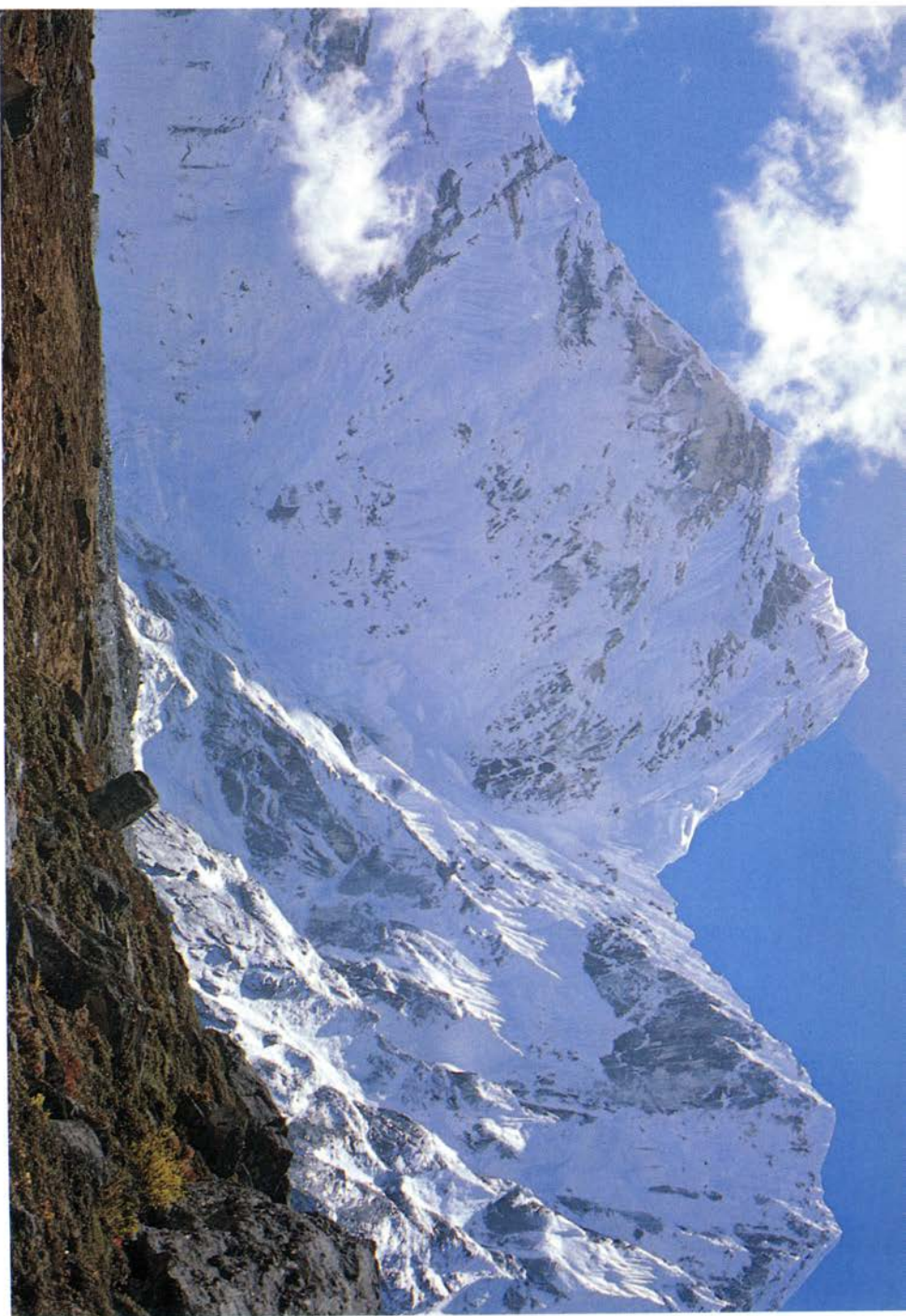


Plate 7-(b) : BCからのアマ・ダブラム北壁と北西稜のピナクル。

North Face of Ama Dablam and Pinnacle on the North-west Ridge, seen from B.C. (by H. Fukushima)



Plate 7-(c) : ACからの北西稜のピナクル。

Pinacle on the North-west Ridge seen from AC. (by H. Fukushima)

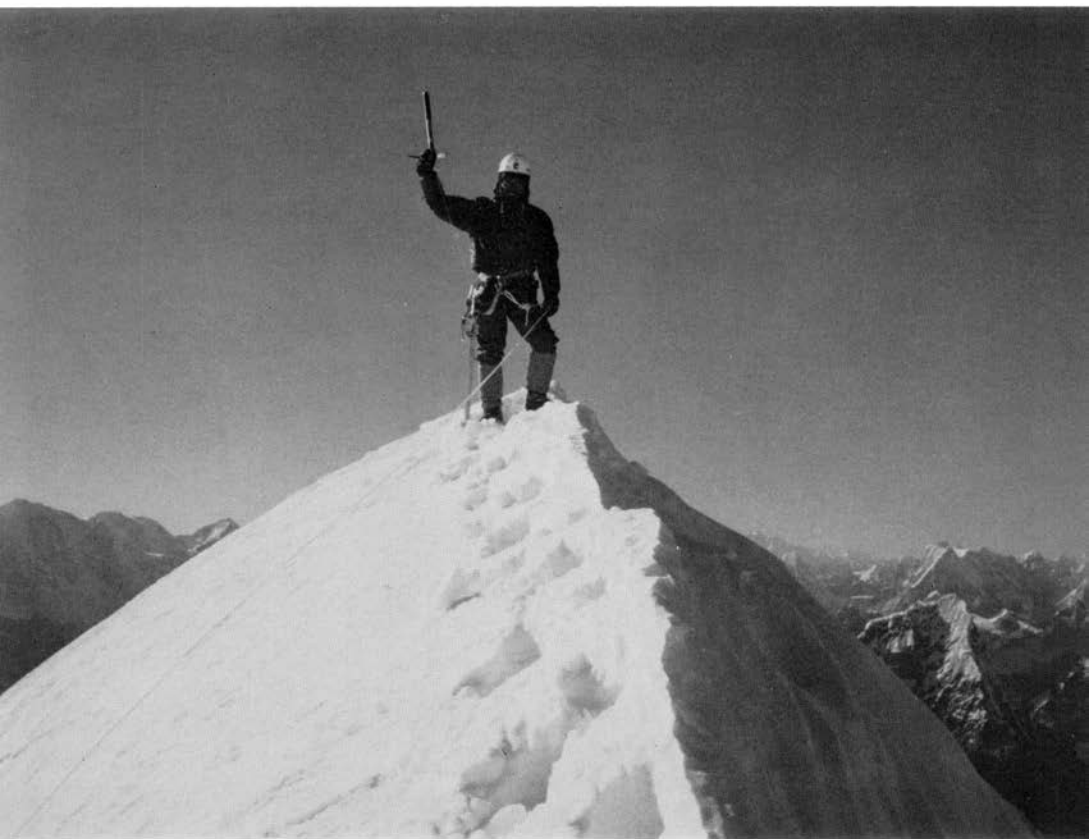


Plate 7-(d) : アマ・ダブラムの頂上に立つ福島隊員。

Fukushima on the top of Ama Dablam. (by M. Tomita)



Plate 8-(a) : 運動靴で登った核心部のクラック。

Climbing up the crux crack with canvas shoes (the N Face of Shivling).



Plate 8-(b) :

北稜から見たシブリン東稜。

The East Ridge of Shivling seen from the N. Face.

Plate 8-(d) :

C3より上部を眺む。

Upper route seen from C3 (Shivling).



Plate 8-(c) :

クーロアルを登る。左上は頂上下のアイス・キャップ。

Jumaring up the Couloir (Shivling).

ハイ・ポーターの息子ゴラム・ネビイの姿があった。往路では、父親を死へ至らしめた男への憎しみや戸惑いがあったのであろう、私と顔を合わせても彼はニコリともしなかった。しかしその彼が今日は笑顔を浮かべて右手を差出してくれたのが、私には心から嬉しかった。

△記録概要▽

隊の名称 東京志岳会ジュトマル・サール登山隊一九八〇

活動期間 一九八〇年五月～八月

目的 ジュトマル・サール初登頂

隊の編成 隊長⇨杉本忠男(33)、副隊長⇨渡辺 優(30、

渉外、輸送)、隊員⇨江原祥司(27、食料、会計)、

茂木正広(25、装備)、医師⇨加藤亮子(45)、連

絡将校⇨グラム・シャビール中尉(25)。

行動概要

五月十九日全員ラワール・ペンディ集結。二十九日陸路ナガール着。六月一日キャラバン開始。十日ジュトマル氷河出合に仮BC設営。十九日ジュ

トマル氷河上標高四六五〇メートルにBC設営。六月二十一日登攀開始。C1往復の帰路、江原が

クレパスに転落し肋骨骨折。二十四日登攀再開。以後三人のみの行動となる。ジュトマル氷河北俣

奥壁にルートを開き、七月十五日主稜線(六一五

〇メートル)に到達。十七日アップパー・ヤズギルの大雪原を縦断し、北稜への斜面にC4(六四〇メートル)設営。十八日未明よりアタックに出たが天候が崩れ、六八〇メートルにて敗退。二十四日天候回復せず食料も尽きた為BCへ撤退開始。この日はC3止まり。二十一日快晴。予定を変更して再アタックを開始し、六八〇メートルでビバーク。二十二日北稜を経て杉本、渡辺、茂木が登頂。二十三日BCへ下降。二十七日BCを撤収。三十一日ナガール着。

アマ・ダブラム北壁初登（一九八〇年秋）

——苦闘の三十九日間——

福島比佐雄

エヴェレスト街道に端然とそびえ立つアマ・ダブラム（五六メートル）。その鋭くも美しいアマ・ダブラムを目標に、この計画がスタートしたのは、一九七八年私がヨーロッパ・アルプスから帰って来たばかりの秋のことであった。当初は北稜を目標にして準備を進めていたが、そのさいちゅうにフランス

隊に登られてしまったので、急ぎよ目標を北壁に変更した。しかし、その悪絶さと、ヒマラヤ経験のない私や、若い隊員でこの壁に登れるかどうかは正直いって半信半疑であった。幸い加藤隊長の豊富なヒマラヤ経験と、日本での机上勉強で不安は徐々に解消されていった。そして、七月末、日本を出発した。

先発としてカトマンドゥに着いた私は、隊長と一緒にLPGのチャージ、装備、食糧の買い出し、それに両替など、現地のおんびりした空気の中で、気ばかりあせて思うように進まな

い毎日であった。天候不良でルクラ行きのフライトが連日キャンセルになって、そうこうしているうちに九月になってしまった。飛行機をあきらめてキャラバンに切替えた。

九月六日、しびれを切らして小川、富田、寺西の三名が、先発として空身同然でカトマンドゥから出発していった。

九月十六日、残る加藤隊長、坪井、私の三名も、ラムサンダールから総勢六人の登山隊としては、少量だが一・二トンの装備・食糧を運ぶポーター四十人と共にキャラバンを開始した。ルクラまでの飛行機代とポーターの賃金をくくると、差し引き大きな費用の持出しになった。キャラバンは毎日のように雨にたたられ、ジュカーとだに悩まされる生活であった。九月二十九日、ナムチェ・バザール着。二十日ぶりに先発隊員と一緒にになった。ここからは眼前に広がる山々を眺めながらヤクと

共にキャラバンを続け、十月一日、やっとアマ・ダブラムのベース・キャンプに着いた。「ベース・キャンプまで行き着けば半分成功したも同然だ」とカトマンドゥで見送って下さった高橋照さんの言葉を思い出した。

ベース・キャンプはエーデルワイスの咲くデュオ氷河の末端にある氷河湖のほとりに建設した。この氷河湖の水が、炊事、洗濯と大いに役立った。ベース・キャンプから北壁に目をやると、はたしてこの壁に登れるのか。北稜側と前衛峰からの雪崩、さらにハンギング・グレイシャーを突破して、氷と岩のミックスした上部壁にルートを開けるかがポイントであった。

十月二日、いよいよ登攀活動が始まった。先発して高度順応の進んでいる者は上部への偵察。ベース・キャンプを四七〇〇メートルに設けたので、高度順応の出来ていない者はもう一度麓へ下って体調を整えることにした。ベース・キャンプでは食糧係である私が、これから始まる一か月余の食糧の仕分けや、装備チェックなどをして、明日からの行動に備えた。

十月三日、本格的な登攀活動が開始された。しょっぱなからハンギング・グレイシャーの登攀になる。ベース・キャンプから取り付までのアプローチに六時間を要し、ルート開拓者は日が暮れてからベース・キャンプに戻った。まだ高度になれないせいかがぐったりとしていた。四、五日おきに降雪に見舞われ、そんな日は程良い休養日として過した。

十月七日、なんとなく気温の高い日であった。私と小川は小雪の舞う中、ハンギング・グレイシャー下でルートの整備に、そして、降雪のため加藤、富田、寺西は上部でのルート作業を止めて下って来た。坪井は高度順応を兼ねて登って来た。全員が合流し下山を始めた午前十一時頃、突然雪崩が私達を襲った。私は一〇〇メートルも流されただろうが、途中で訳わからなくなり、気がついた時は顔が雪の中に埋っていた。息苦しくなって顔をあげたら上の方から、難をのがれた富田と寺西が下って来るのが見えた。「助かった」、そう思うと同時に右腕に激痛を覚えた。単なる自然停止ではなく、右腕にスノー・バーとフィックスド・ロープが絡まり、それが制動になって途中で止ったのだ。ヤッケの右袖はロープ摩擦で燃けていた。加藤と坪井もこの雪崩に巻込まれたが無事だった。その夜は、私は腕の痛みで一睡もできなかった。もしや骨折では！、今までの苦勞と大金と時間が水の泡になってしまふ、そう思うと、悔しさと涙が出て来た。

十月九日、ペリチェに下って診療所で、米人ドクターに診察をしてもらった。骨折はしておらず、三、四日すれば治ると言って、バンテージ処置だけしてくれた。うれしさのあまり飛ぶようにベース・キャンプへ帰った。その夜、ミーティングが開かれた。今日も上部ではルート取付前で、雪崩に襲われ間一髪のところだったということである。「命がいくつあっても足り

アマ・ダブラム北壁
 登攀ルート
 Climbing Route of
 Ama Dablam-North Face



chart8-(a)

ない、「ルートを変更するか」隊員の心はここ数日の雪崩襲撃で揺られていた。現在のルート続行を主張する富田が「ハンギング・グレイシャー下の安全地帯に雪洞（氷洞）を作ればルート工作に時間が稼げる。堅氷雪だが二日もあれば掘れると思う」と提案した。富田の意見が採用され、続行と決まった。この雪洞は仮C1として役立ち、前半の行動を大きく前進させる基地となった。その後も周期的に降る雪にハンギング・グレイシャー突破はおくれた。

十月十六日、やっとハンギング・グレイシャーの一四〇メートル、四ピッチが開拓され、ワイヤーばし子二本がセットされた。私も荷上げに往復したが、今度は加藤隊長がこのルート工作終了後、下降中に頭大の氷塊の直撃を腕と足に受け打撲症を負ってしまった。このため一週間行動不能となり、大きな戦力低下であった。

十月二十一日、天候は好天に向った。その後登頂までこの好天が続くとは、後で思うと幸運の一語に尽きる。ハンギング・グレイシャーから上のルートは、中央の巨大なローソク状の岩の基部めがけてトラバースが五ピッチ延ばされ、その基部五九〇メートルに二十四日C1を建設した。C1はローソク岩の上部から巨大な氷塊がビュンと落下して来るので雪洞を掘り、その中に二張のテントを張った。下部ではフィックスド・ロープの補修、荷上げなど順調に進んだが、ハンギング・グレイシ

ャーの崩壊は毎日のように発生し、死の恐怖と背中合せだった。

十月二十六日、C1建設後、上部壁へのルートは私と富田で、C1から二ピッチ不安定なトラバースの後、垂直の壁を四ピッチ延ばした。リードする富田のバランスはさすがだ。初めのピッチはハング気味で、ピッケル、バイルを打ち込んだところから氷片がダイレクトに私の方へ飛んで来る。壁はなおも八十度の粗密なピッチが続き、充分なランニング・ビレイを取れぬ状態であった。「落ちたら死ぬ、絶対にミスはできない」とピッケル、アイス・バイルを振り続けた。登攀用具の不足が目立って来た。雪崩によるロープ切断や、ルート整備に手が取られて荷が上って来ないので、富田は上部のルート整備、私はハンギング・グレイシャー下から逆ボッカをした。二十九日、富田、坪井でS字の四ピッチが延ばされ、さらに三十日、坪井と寺西によってルートが三ピッチ延ばされた。みんな疲労気味である。ルート工作、荷上げ、休養とローテーションは組まれているが、休養の暇がない。

十一月一日、私と寺西で北西稜寄りに三ピッチ、ルートを延ばしリッジ上の雪原に出た。高度六三三〇メートル、C1から十七ピッチ、この素晴らしいパノラマの大地をアドバンス・キャンプとする。ベース・キャンプでは、加藤隊長が不足しているロープ調達のためペリチェ、ディンボチェと走りまわっている

るといふ。三日、私と小川、寺西でアドバンス・キャンプを建設。その夜、私と富田がここに泊る。四日、小川と寺西は不調のためベース・キャンプへ下った。ルートは見つからず、一ピッチも延ばすことができなかった。

十一月五日、ルートは私と富田で左へ下降気味に一ピッチのトラバース後、ブルー・アイスのルンゼに快調に六ピッチ延ばした。ハンギング・グレイシャーで大崩壊がおき、フィックスド・ロープはもちろん、クレバスに渡した丸太、標識がすべてへし折れ、さらわれてしまった。上部にいた私達にも、その時の大音響は聞こえた。富田がC1へ下り、坪井がアドバンス・キャンプに上つて来た。

十一月六日、私と坪井とで後半の三ピッチを延し、六五九〇メートルまで達したことになる。加藤隊長の打撲症も治りロープを購入してC1まで荷上げに来ていた。この時点で、いよいよ頂上も近いと、感じられて来た。夜のアドバンス・キャンプでは下部キャンプと食糧、登攀用具の最後の詰の綿密な計算を、トランシーバーで打合せした。

十一月七日、岩と氷のミックス帯とこれに続くブルト・アイスを私と富田がダブル・アックスで五ピッチ延ばした。稜線が近くなったからだろうか、この頃から急に風を感じるようになって来た。稜線に続く易しいルンゼを四十メートル登ったところで、大きな岩にビレイを取り、後続の富田が四、五歩ステッ

プを切つて登り初めた時、突風と共に落ちて来た雪塊が彼に当り十メートル程叩き落とされた。ハーケン一本のビレイ、八ミリ・シングル・ロープ、落下係数二という生と死との境の出来事であった。ここで、どちらがいうでもなく、今日はこれまでにしようと思つた。長い長い下降を続け、アドバンス・キャンプに帰着した時は、私も負傷が治つて以来ほとんど第一線でのルート工作の連続で、疲労が蓄積して来た様だなど感じた。しかし、頂上に立つという情熱のささえは、これを打消してくれた。

十一月八日、一晩寝て疲労もなんとなくとれたようだが、体も軽い。ユマールリングでぐいぐい登れる。しかし、ここは北壁だ、陽の当たらない午前中は靴の中の足が痛い。靴擦れをしているうえに、軽い凍傷にもかかっているようだ。昨日の最高到達点に三時間程で着いた。昨日と異なつて、うそのように穏やかだ。三十分程遅れて富田も登つて来た。二人揃つたので登攀を開始することにする。私がリードして易しい雪壁を四十メートルいっばいに延ばし切つたところで急に展望が開け、茶褐色のマカルーが視界に飛び込んで来た。右の方に目を移すと、緩かな雪原の上を目指すピークが見える。「やった！」と思わず声を上げた。スノー・パーをがっちり打ち込んでアンカーを取り、「おうい、頂上はすぐそこだ、登つて来い」と、富田に声をかけたが、なかなか姿が見えない。ロープをたぐる手に力が

入る。ようやく富田も姿を見せる。北稜の背に立ったのだ。「頂上はバカに広いようだな」、「今日は国旗もカメラも持って来っていないぜ」と私と富田がつぶやく。頂上へはてくてく歩いて行けそうなので、スノー・バー二本とロープ三十メートル一本以外はそこに置いて、コンティニユアスで登ることにする。二十分も歩いただろうか、十四時五十分、雪稜のとがった山頂は足下になった。

「やつと着いたなあ」、「あんな恐いところを通って、よくここまで来たものだ」、「みんな頑張ったなあ」、「次はジャイアントがあるぜ」と、ありきたりの会話をかわし、肩を抱きあって登頂を喜びあった。マカルー北西壁やローツェ南壁、プモリ、ギャチュンカンの巨峰群を見まわしているうちに、熱い涙が頬をつたった。

翌九日には加藤隊長と坪井、十日には小川、寺西が登頂。念願であった全員登頂を果すことが出来た。こうして苦闘の三十九日間は終わった。

アマ・ダブラム北壁も長い生活のなかにあつては一つの過程にすぎない。私達のなかの何人かすでに次の大きな計画に取組み実行に移している。

△記録概要▽

隊の名称 イエティ同人東京ヒマラヤ登山隊

活動期間 一九八〇年九月～十一月

目的 ネパール・ヒマラヤ、アマ・ダブラム(六八五六

メートル)の北壁初登攀

隊の編成

隊長 加藤康二(31)、隊員 福島比佐雄(29)、

坪井忠雄(26)、富田雅昭(24)、寺西良文(24)、

小川清次(27)

行動概要

北稜と北西稜にはさまれた北西壁を目指した。十月一日四七〇〇メートルにベース・キャンプ建設、二日後に登攀を開始。十月十日北西稜側壁からの懸垂氷河の下に雪洞を掘って仮C1を設置。

十月二十四日C1(五九〇〇メートル)を建設。

十一月三日C2(アドバンス・キャンプ六三〇〇メートル)を北西稜上に建設。十一月八日福島、

富田、九日加藤隊長、坪井、十日小川、寺西が登頂。新ルートからの全員登頂を果した。

シヴリン北壁（一九八〇年）

藤田正幸

一、気迫と忍耐

七月二十七日より登攀活動を始めて、すでに四十日が過ぎ去っていた。我々は連日の激しい行動でがりがりにやせてしまっている。しかし、今日は山本、久保が最も困難なトラバース・バンドを突破した。口もきけなくなる程疲労困憊して帰って来た彼らを癒すのに、砂糖しか入っていない紅茶と、雪庇上に張られた小さな天幕しかなかった。六〇〇メートルの高度でデリケートなトラバースに山本の神経は安息を求めて悲鳴をあげていたに違いない。不機嫌に口もきかない山本の耐えている姿は痛々しかった。

久保も表面には出さないが、精神力だけで連日の行動に出かけて行くのがわかる。彼は毎日いやな顔もせず、雪の降る中、

長時間の確保をしてくれた。進んで一番重い荷をポッカした。それが幾日も続いた。

我々は自分の限界を試すかのように、慢性的になった疲労をおして進み続けた。そこにはだれへのしがらみも、だれからの強制もなかった。内なる気迫が行動の源であった。赤須も自分が先頭に立って登れない山と知っていても進んでポッカに専念した。

雨が降り、それが夜になって凍りロープを棒のようにしてしまふ。そのロープの氷をおとしながら忍耐強くユマーリングする安田も、泣き言ひとつ言わずに登り続けた。

油断から来る危険の大きさは頭で考えられない程の山であった。だから、山は我々に今までにない力の発現を強いた。もしかすると我々は山に啓もうされていたのかもしれない。しか

し、ここで重要なことは、計画を立てる段階から、ましてや山を見てからは一層登れないだろうと考えるようになっていた。それにもかかわらず、これだけの気迫が出せたということである。頂に立てるといふ確信が我々をふるいたさせたのではなかった。あこがれの山、全身がぶちあたれるルートに我々はふるいたったのだ。こんな山登りができて、幸福ではないと思うものがいるだろうか。

降っていた雪もやみ、夜のとばりの中、四十日間我々に明日への闘志を毎日約束してくれた眠りにつく。残された日は明日だけ。だが疲労の蓄積で特別の気迫の出ようはずもない。今日の次の明日が来るのだ。

二、メンバー

最終決定のメンバーは次の通りであった。

隊長 安田典夫(26)、通称ヤースン、新人部員として入った頃は大変こわかったが、いっしょに登っているうちにおもしろさがわかって来る。この遠征の発起人で、今でも智将のほまれ高い。十年來出せなかった海外遠征を出した殊勲は評価される。

総務・会計・計画 藤田正幸(23)、通称ブータ、安田隊長の愚痴きき役を果す。我ながらよく金をあつかえたと危険きわ

まらない自信をつけてしまっている。

装備・ルート工作・消耗 山本正嘉(22)、通称？ 今や世界的クライマー(?)になっており、だれもまねのできない登攀法で他の追隨を許さない。ただ、人間関係で消耗しやすいいデリケートな心を持っている。

食料 久保 功(22)、通称ポッチョ、二時間を越える降雪の中、不安定な確保に怒り出すことも、消耗もせず耐える。小さな体ながらポッカ力も発揮。常に一番重い荷を背負っていた。我が部で初めて雑誌「岩と雪」の表紙に載った人物。

医療・輸送・梱包 赤須孝之(23)、通称アカスケ、彼の手にかかりたくないためだれもけがも病気にもならなかった。医学部六年生。天幕の中で毎日のようにする安田隊長との女性の品定めは他の隊員に多大な影響をあたえた。シヴリンは彼の求める山と正反対であったにもかかわらず、ポッカに精を出した。

連絡官 ニーラン・クマール(22)、デリーで英語教師をしている。ベース・キャンプにまで新婚の奥さんをつれて来てみんなのひんしゆくをかう。他のインド人と同様に、金にきたなく私はしまいには口もきかなくなった。ただし、ベース・キャン

プで我々に五十日以上つきあった功績は評価される。

以上がメンバーであった。本当に動けるものだけの五人のパーティーは、はじめローテーションも組めず大変かと思つたが、六〇〇〇メートル級のピークには理想的な人数かもしれない。

三、黒 部

シヴリンにいよいよ登ることになった一九八〇年三月我々は黒部横断を行なつた。日本でもこれといった山行を行なつたことのない我々が、シヴリンを前にしてできることは、長い山行きになれるということだった。確かに長かつた。しまいには空腹で午後になるとパワーがぐんと落ちる日が続いた。それでも、不帰から剣岳という計画は九十パーセント成功させることができた。遠征前に大きな山行へ行くことは、よろしくないと言われている。しかし、我々にはこの山行は必須の山行きだったのである。むしろシヴリンという目標がなかったら達成度はもっとずっと低いものになっていただろう。三十日間の腹すかし山行は自信となつて我々の体内にたくわえられた。

四、戦闘開始

七月二十日にベース・キャンプが作られる。タポヴァンとい

うところである。荒々しい氷河のモレーンを登ると突然現われる楽園は別天地と名づけるにふさわしい。広いところで幅五〇〇メートル。奥行き二キロメートルの広大な草原。シヴリンは頭上にそびえて……。

しかし、我々は一週間以上にわたつてシヴリンの姿をおがむことはできなかった。毎日シヴリンのあたりには雲がたれこめ、雨の帳が我々のまわりにも続いた。ルート決定しようにも山が見えなければお手あげである。西稜側のメルマバック方面の偵察によれば、メルマバックには道ができている。シヴリンの北の稜はピナクルが林立しているが登れそうな気がする。山本、久保は帰ると、そのように話した。

赤須は西稜、山本、久保は北稜、私はガネツシュ・リッジの挑戦的な美しさにガネツシュ・リッジを、それぞれ主張した。そこで、安田隊長は大筋としてルートはヴァリエーションにする。今のところ北稜に行くにしろガネツシュ・リッジに行くにしろ通らねばならない四七〇〇メートル地点に荷物を上げることにして登山活動が始まつた。皆の心中にはどうせ登れないなという気持ちと、やっと山に登れるといううれしさとがあつたにちがいない。天気は湿っぽさにもかかわらずベース・キャンプには重苦しい空気はなかつた。

アドヴァンス・ベース・キャンプの作られた四七〇〇メートル地点は、新しくガレた所と、むかしガレてコケがむして

シヴリン北壁

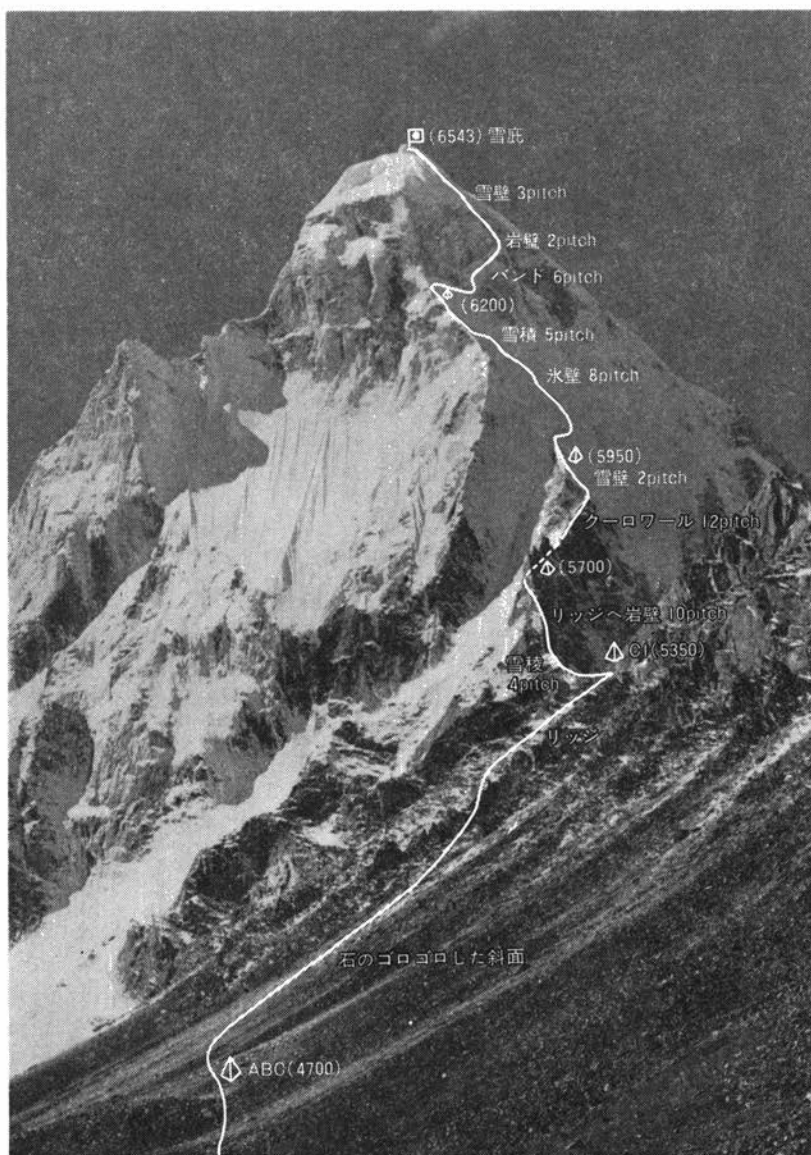


Plate 8 (e) 北面からのシボリン (6543 m) 東大隊の北郭～北西壁ルートとキャンプを示す
 Shivling (6543 m) from the north with the route and camps of Tokyo Univ. Party marked. Photo : Tokyo Univ. Exp.

所が交錯する所で、水が流れていた。ここより右は北稜にあるベビー・シヴリンのピークへ、左はガネッシュ・リッジへ長大なトラバースと続いていた。安田、山本の二名はここよりベビー・シヴリンのコルに至るガレともろいリッジにルートを作った。

八月四日ベビー・シヴリンのコル（五三五〇メートル）にC1が作られた。五、七日の三日間山本といっしょにリッジ上をルート工作。途中の凹角を山本が運動靴でリードする。調子の落ちた山本と交代に安田、久保が上がって来る。雨で三日沈殿の後、ピナクルのトップまでルート工作する。最初にピナクルのトップに行ったむこうをのぞいた安田が、突然とんきょうな声をあげた。行ってみると、その先のリッジは、ピナクルだらけで通行不能。むこう側へ降りようにもスッパ切れた大岩壁になっていた。

五、最初の難関

ここを突破すべく八月十三日、久保と私はC1を出発した。工作地も遠くなり、ここにはぜひテント・プラッツがほしいところであった。しかし、我々の前にはテント・プラッツはおろか、ルートすらもはっきりしないのである。私は、バンドがきれぎれにトラバースしてリッジの向こう側へ降りているのに望みを託して、五メートルアップザイレンした。最初二メートルく

らいの一枚岩をトラバースできれば、あとは切れ切れにバンドがつづいている。ボルトを二本打ち、あぶみをかけて、一枚岩をまわり込む。荷揚げが大変だと思いつつ、切れている部分を強引に回り込みどんづまりまで行く。あとは傾斜もゆるく、リッジ左のクローワールの入口まで行けそうだ。五ピッチのばしてクローワールの入口にテント・プラッツを見つけ引き返す。雪は本降りになっていた。

六、再びリッジへ

三日の沈殿をはさみC2（五七〇〇メートル）入りしたのが八月十八日であった。C2は岩からつるしてもねられるようにと設計された特製のテントである。このテントしか張れないところでのピヴァークは、幸いにしてなかったが、万全を期して作った。ほかに荷揚げ袋、岩壁用デポ袋なども作って持って行ったが幸いなことに使う機会はなかった。

C2からは十二ピッチの長大なクローワールの登りである。北面であるのが幸いしてか、落下物もたまにずっと上の方ではがれた氷片が落ちるのみであった。降った雪も傾斜が強いいためたまらず、雪崩のおそれもほとんどなかった。

こういった点を考えると、我々のとったルートは大変安全だったのではないかと思われる。岩のルートはユマールのある今、最初に登る人間は困難かもしれないが、ロープが張られて

しまえばあとは安全に登ることができる。雪のルートはそうはゆかない。今や安全のためのヴァリエーション・ルートがあつてもおかしくない時が来ているのだ。

クローワールを十二ピッチ登ると、再びリッチに出る。エンピツ・ピナクルと名づけ、日本で写真を見ながら口々にどう処理したらよからうと言っていた巨大なピナクルの上に出たのだ。第一の難関は終った。リッジを、八十メートル程のぼすと小さなコルがある。そこにテントも張れる。うまくいった。あとは五〇〇メートルの頂上岩壁だ。

七、頂上岩壁

八月二十一日、山本、久保と工作を交代。我々にゆるされた登山期間は八月末までなので、あと十日間しかない。でも、だれもあせるものはいなかった。ここまでだつて全力でルートをひらいているのだから、これ以上あせりようがなかった。山本たちはじりじりと岩と氷のミックスマットをのぼしていった。八月二十八日、十三ピッチをのぼした。最前線に出るまでに消耗してしまう。絶対にテントを上げる必要があつた。しかし、途中は両側すっぽりと切れ落ちたナイフ・リッジになつていた。テントを張るといっても他に場所もないのでこのナイフ・リッジを切り崩して張ることにした。

八月三十日、テントを上へ上げる日が来た。連日の降雪でロ

ープは雪にうまり、ユマールはしょっちゅう雪とかんでストツパーがきかなくなつた。C3地点で荷上げの安田、赤須と別れ、C4をめざす。悪天候が続いてもC4を安全に長期に保持するための食料、燃料をいっぱい入れたザックが、ぐいぐいと肩にくい込む。

最初の八ピッチは左へ右へとトラバースしながら、たくみに壁の弱点をのぼっている。途中ばんばんにはったふくろはぎを休ませるところもない程の氷ののっぺりした斜面である。その氷壁を登り切るところで上からサポートに来た山本に会う。彼の疲れ切っている様子が手にとるようにはわかる。不機嫌な仕事で荷物だけ受け取るとだまつて行つてしまつた。

C4の張られていたところは、文字通り雪庇の上であつた。

八、トラバース・バンド

八月三十一日、いよいよトラバース・バンドの工作である。山本と私はせり上がったリッジを工作の終点まで行く。山本のリードで前回山本の落ちたバンドにはいあがる。頭をおさえつけられるようにしてはい上がると水平のバンドに出る。そこを四十メートルうすい雪をだましましたトラバースする。どんづまりは切断部になつてゐる。上はオーバー・ハンダグしており、足もとののはがれそうな氷をつかつて乗っ越すのだが、氷が本当にはがれて、山本は二回程宙ぶらりんになつた。その後、岩に

くいつき、クラックにアングルをたたき込んで切断部に入った。そこから右の氷雪壁にふりこをしようとするも失敗する。山本があまりに疲れているのを見て、危険を感じ引き返すことにする。

九月一日、もはや与えられた登山期間は切れた。だからといって自分からやめる必要はない。ここまで苦勞して来て後続にこのルートから登られてしまったら、くやしきで夜も眠れなくなるだろう。しかし、そんなことを気にせずただ登る気迫だけで我々は出発した。我々が強かった点は無心に登っていたことだろう。このルートをのぼすということのみを考え、登山期間のことも、だれに対してということも考えてはいなかった。岩登りの好きな人間が、自分の好きなルートを開拓をしているという充実感が、仲間割れや戦意喪失の起らなかった最大の原因ではなかったかと思われる。

この日、久保と二ピッチのぼし、いよいよ斜上バンドに入る。斜上バンドは雪の状態もはるかに悪く、リスもなく難攻不落ぶりを発揮しはじめた。ここまで来て大きな障害にぶつかった感じである。斜上テンド直下の氷壁で久保が十五メートル落ちる。下では経験しなかった傾斜とメルバマックまで一気に切れ落ちている場所での工作は、大変な精神的緊張を強いられる。

次の日は朝から雪であった。今日は休みだと、皆ほっとし

た。やめる理由がひとつ見つかっただけでも登のをやめただろう。その位の緊張を強いられていた。しかし、天は皮肉なもので、昼前より回復しはじめた。テント内に複雑な空気が流れ始める。今までこういう状態はいろいろ経験して来たが、行動してから考える、というのが一番良いとわかってくる。

「さあ出るぞ」の声とともに準備を始める。疲れ切った山本、久保はシビアにもじゃんけんをして決める。結局久保が負けて私と出かける。昨日のところからボルトを打って斜上バンドに取り付く。しかし、十メートル程行ったところでハーケンがぬけ、ロープにぶらさがることになる。きわめて手ごわいところだ。雪はザラメのようでクランポンがきかず、メチャクチャに傾斜がある。その上、氷はうすいのでアイスピトンはきかない。コンタクトの壁はかぶっていて、リスは全くない。ボルトを連打するには距離がありすぎる。そういったわけであきらめがつき、かえってせいせいした気持ちでテントにもどった。しかし、山本ならできるかもしれないと思ひ彼をたきつける。「山本、お前だったらできる」そう言われると山本も気合が入ったらしく、疲れた体にムチを打って、翌朝テントを出発していった。私はアタック体制の準備をしてテントで待機していた。山本もなかなか動かない。午後には雪もちらつき始めた。声もほとんどなく、ときどき晴れるガスの中に見える山本は、かなり低いところを登っているようだった。夕方、暗くなるこ

ろふたりは口もきけない程になって帰って来た。あと十メートルぐらいでバンドの向こう側をのぞけるところまで行ったそうである。明日のラスト・アタックでなんとかもう少しルートがのびるだろう。

九、アタック

そして今日は本当に最後のアタックの日である。皆の気合も限界にまで来た。今日はいつもより二時間早く起きる。それなのに山本も久保も起してもなかなか起きない。ふたりとも本当に疲れ切っている。七時、いつもより少し寒い外に出る。私は久保といっしょに昨日までのルートを復習してゆく。一ピッチ目は八十度ぐらいの氷壁、二ピッチ目はリッジを乗越してドラパス・バンドへ。三ピッチ目トラパス・バンド。四ピッチ目切断部のハングを越えてクラックを直上。五ピッチ目フェースをトラパスしてクローワールを登り斜上バンドへ。ここで久保も私も落ちたのだ。六ピッチ目、バンドを五メートル登り右下へアプザイレンをしてから右斜上。ここが最悪。ユマールリングでもこわい。七ピッチ目再び斜上バンドに入り五メートル。ここから新しいピッチが始まる。バンドの末端を回り込むとぐっと傾斜も落ちる。二ピッチ岩にのぼすと、スノー・キャップになる。四十度程の雪壁であるが、ラッセルにあえぎあえぎ登る。見上げればスノー・キャップは雪庇となって消えてい

る。疲れ切っているにもかかわらず、足は前へ前へと出てゆく。雪庇に取りつく。この上が頂上である保証はない。でも、もうこれを登り切る程しか時間は残されていない。しかし、心の中までこの雪面のように白く、あせりも、あきらめもなく、体は動いてくれている。

思ったより雪庇は手ごわかった。ピッケルとパイルを打ち込み、それにあぶみをかけるが、かぶっていて雪がやわらかいので、落ちそうになる。その上腕力がなくなってきたので、乗越してもたついてしまった。ころがるようにして雪庇をこえ、ただっ広い雪原だった。なにもない平凡な雪原。それが山頂だった。

我々の忍耐をためし、気迫を引き出した山、シヴリンの頂上は、テニスコート程もある真白な雪原であった。

△記録概要▽

隊の名称 東京大学スキー山岳部インド・ヒマラヤ登山隊一

九八〇

活動期間 一九八〇年七月九日

目的 モンズーン期シヴリン峰(六五四三メートル)の

北稜からの登頂

隊の構成 隊長Ⅱ安田典夫(26)、隊員Ⅱ藤田正幸(23)、山

本正嘉(22)、久保 功(22)、赤須孝之(23)

行動概要

七月二十日入山。タボヴァンにベース・キャンプを建設。ルート偵察は、連日雨のため、山をほとんど見ることができなかった。二十八日アドバン・ベース・キャンプ（四七五〇メートル）を建設。八月四日C1（五三五〇メートル）を北稜上のコルに建設。ここから先はピナクルの林立する岩稜が続き、登山靴では難しいので運動靴でルートを拓くなど二週間の奮闘で突破。十八日C2（五六〇〇メートル）をピナクルの基部に建設。氷雪のクローワールから北壁側の雪壁をたどって二十二日C3（五八〇〇メートル）を建設。この上で北稜は北西壁に吸収され、氷壁から不安定な雪壁を十五〜十六ピッチ登るとオーバー・ハングした頂上岩壁基部に達する。三十日ここにC4（六二〇〇メートル）建設。北西壁を横断する顕著なランペにルートをとる。ものすごい高度感に悩まされながらルート工作を続け、九月四日藤田、山本、久保の三隊員が頂上に向かい、スノー・キャンプを登って午後五時三十分登頂した。C1〜頂上間、約三〇〇〇メートルのフィクスト・ロープ、三〇〇本のベク、十五本のスノー・バーを使用した。





Plate 9-(a) : パーカーのホルダリングは美しすぎる。
John Bacher on a boulder.

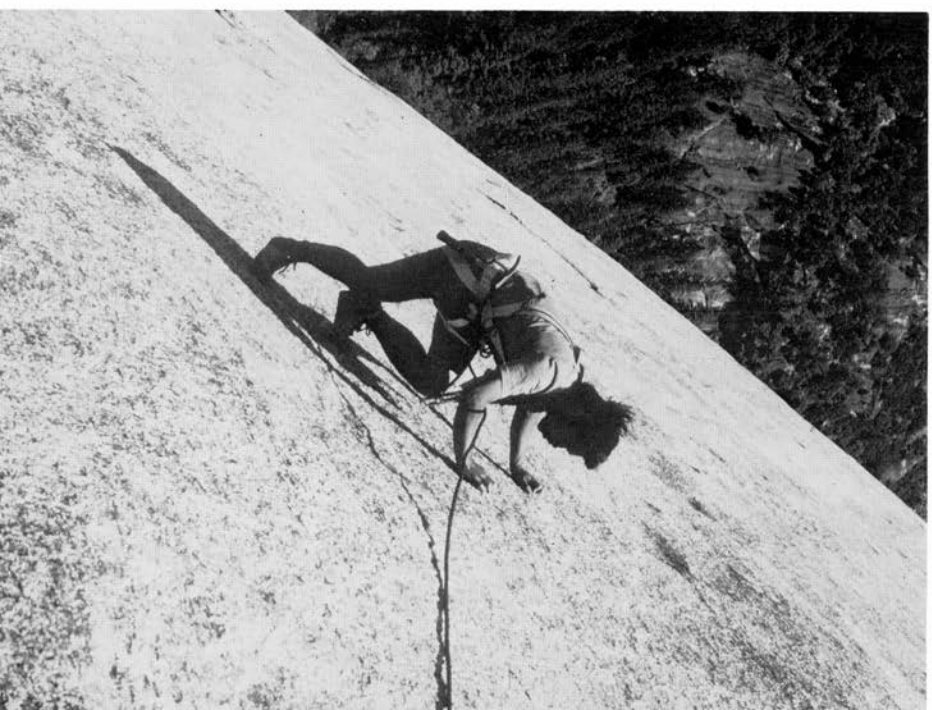


Plate 9-(b) : 何処をどうやって登ったらいいのか。
Slab on Patio Pinnacle Right in Yosemite.



Plate 9-(c) : 肉体の躍動：ダイナミック・ムーブ。
John Bacher on a boulder.



Plate 9-(d) : ホルダリソクを楽しむ。
On a boulder.

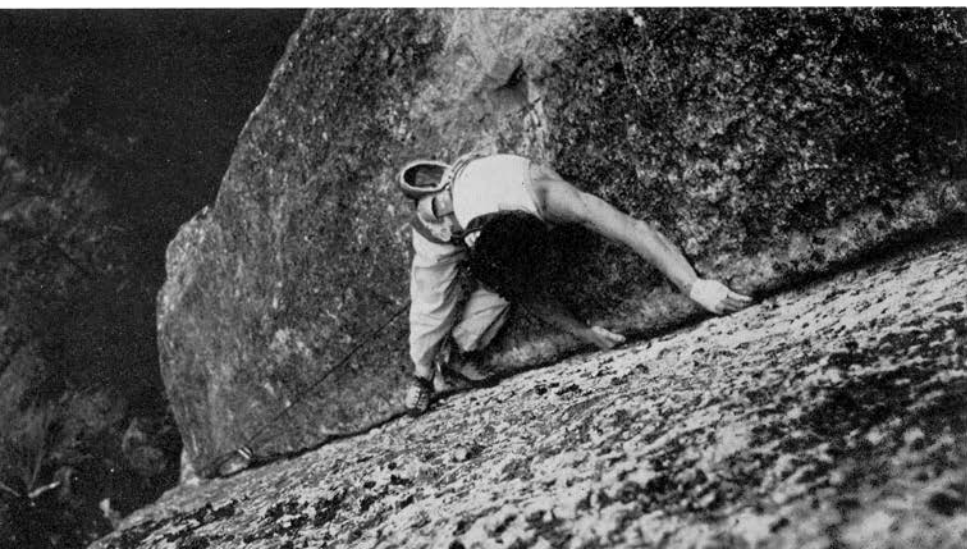


Plate 9-(e) :

オーバーハングもフリーで登れる。
The second pitch on Hair City
in Colorado.

Plate 9-(f) : コーナークラックをレイバックで登る。

Liebacking a corner crack on Haru Urara, Mt. Mizugaki.



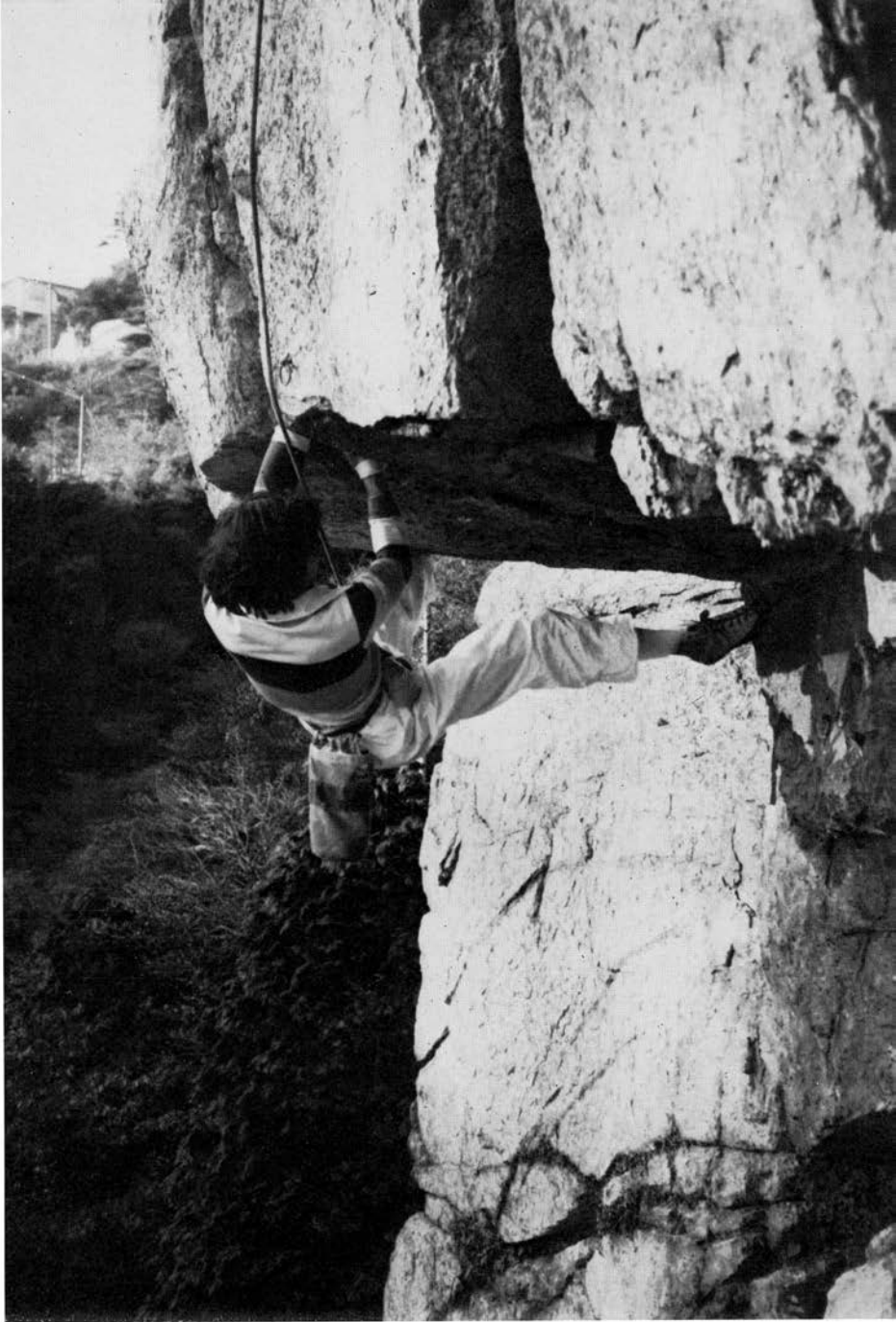


Plate 9-(g) : 典型的なルーフ・クラックをジャミングで登る。

A typical roof crack of "The Roof" on Central Ridge, Horui-Iwa crag, Mt. Rokko.

遊ゆ 戯げ 三さん 昧まい

戸 田 直 樹

ヨセミテ・シヨック

一九七九年五月末、カリフォルニアの鋭い陽さしを受け、眩いばかりに輝く白銀色のスラブの真っ只中で、身動きできなくなってしまう。岩質が悪いわけでも、草付がはげ落ちたわけでもない。そこがルートであることは確認できても、はじめて使う炭酸マグネシウムの白い粉末を指先にこすりつけ、岩肌をなで廻してみたところで、たったひとつのしっかりしたホールドさえ見つからず、足は一步前へ踏み出すことを本能的に拒絶している。登る意識よりも重苦しい精神的不安感が先行し、墜ちることすらできず、自らの行動を縮めてゆく。

なんとも自分に言い訳のできない苦い挫折感を味わった。

それは初日だけのことでなかった。翌日も、またその翌日も、小さな岩場のちよつとした所に出合った。おそらく日本の岩場でもこうした場面に何回か直面していたはずだ。ただフリーで登れるはずがないという固定観念に縛られ、安易にピトンをつかんだり、アブミをかけたたり、なんとかごまかして見て見ぬふりをしてきたのだろう。

登れないことをこれほど自覚したことはなかった。はじめてフリー・クライミングを強く意識すると、今まで見過ごしてきたいくつかの重要なことが浮び上ってくる。

ボルダリング・ゲーム

ヨセミテ国立公園のサニーサイドキャンプ場の北側には、氷

河が運び忘れた岩塊（ボルダー）が散在している。高くて五、六m、低いものは二mにも満たない。このボルダーに課題を想定し、登ることをボルダリングと言う。野球なら素振り、将棋にたとえるなら詰め将棋といったところか。気象条件に恵まれ、外的危険にさらされることの少ないボルダリング・ゲームでは、一切の補助的手段ばかりか、ロープも使わず、ひとりで行なうのが基本だ。容易に飛び降りられる範囲で登られるこのゲームでは、極限的フリー・クライミングが課題となる。

私達も滞在早々、好奇心も手伝い、小道に沿ったボルダリング・コースをトレーニングがてら一巡してみた。軽い小手調べのつもりで、白いすべり止め（チョーク）の跡で一目瞭然のホールドに手を伸ばすが、足が一步も地面から離れないこともあり、やさしい力技を除き、完敗の連続。難しすぎては、ボルダリングの面白さは伝わらない。

ところが、思わぬことでパートナーがケガをして、五日間クライミングを休まなければいけなくなった。ようやくフリーで登る意識が芽ばえ始めてきた私は、その対象をボルダーに求め、真剣に取り組む環境に導かれた。

以前、指先の掛り具合さえ細かに観察できる距離であざやかに登るクライマーを見ながら、今度は自分でそのホールドに手を触れると登れそうな予感すらなかった。指先が引っ掛るジャグ・ホールドならまだしも、外傾した斜めのホールドは力の入

れどころがない。いつもなら、それだけで「登れるはずがない。ダメ」のラク印を押して、それ以上の努力も、工夫もしないで放棄した。「トレーニングだ……これが登れなかったって、岩場に行けば……腕力がないだけじゃないか……」と馬鹿にしていれば、登ることはできなかったが、プライドを傷つけられることはなかった。

ところが、ボルダリングを意識して力一杯やってみると、登れないことが自分を熱くする。たった二〇cm先の次のホールドまでが、無限の距離を隔てているように見える。確かに、石の上の上に立てばその長さを容易に縮めることはできる。どんなに難しい課題だって、ボルトを連打する気なら小一時間で征服できるはずだ。この場にいると、そんな考えを持つだけで罪悪感を感じる。

ガ・ツーンとブチ当たる。

ポイと放り出される。

くやしかった。メチャ・クチャな闘争心が燃えあがる。もう結果なんかどうでもよかった。そうせずにはいられない衝動だけが、行動に駆り立てる。

ひたすら祈るような気持でしがみついているうちに、滞空時間が少し延びた。

うれしかった。無性にうれしかった。

力がないから、背が低いから……と信じて疑わなかったホー

ルドをしっかりと捕えた時、思ってもみなかった感激がこみ上げた。

不可能と思いこんでいたボルダーが登れた時、見せかけのクライミングでは決して得られなかった充実感と、持てる力を燃やしつつした解放感につつまれ、自己のフリー・クライミングの限界に新たな可能性を感じた。それ以来、極限状態にあって、無我無中になってエネルギーを発散し、冷静に自らの可能性を見つめる楽しさを、クライミングの面白さを通して知った。またその過程の中で、今まで抱いていた可能性の限界が実は既成概念によって作られた産物にすぎなかったこと、その見直しが必要なことを意識していた。

観念的に決めつけた限界に甘んじて、用具に頼り、不確定要素をその都度取り除いては、クライミングの世界を縮めて行くばかりだ。遥かかなたで待ちうけているフリー・クライミングの限界を用具に頼り超えることは簡単だが、そこにどれほど自己の限界を肉迫できるか、それがフリー・クライマーに与えられた永遠の課題であると思う。

ジョン・バーカーとの解返

コロラドのクライマー、パット・エイメントが不世出のボルダー、ジョン・ギルに連れられ、彼の手になる難題に挑んだ

あと、「ホールドはつかめたが、問題まではつかめなかった」と、ボルダリングの本質に迫る言葉を残している。問題どころかホールドも満足につかめなかった私が、この言葉を深く味わうことができるようになったのは、アメリカ・ロック・クライミング界のスーパー・スター、ジョン・バーカーのボルダリングを目のあたりにしてからだ。

キャンプ場の中央に、コロンビア・ボルダーと呼ばれる高さ五mほどの大岩がある。この一面が大きくハングし、ここに当時彼にしか登れない課題があった。私達もぜひ自分達の目で見たかったので、彼に模範演技を依頼した。快く承知してくれたバーカーは、約束の夕刻、二人の徒弟と共にボルダリング・サーキット・コースを出発した。

オボジジョン、振りこみ、マントル、飛びつき、ノーハンド、ヒール・フック……聞いてはいても、見たことのないテクニックが次から次へと披露される。まるで技術見本市だ。それでいて、彼のボルダリングは決して力まかせにねじ伏せている印象を与えない。ひとつ、ひとつの動きは完璧なまでにコントロールされ、優雅に流れるクライミング・フォームは真に『芸術品』である。私にも簡単に登れる錯覚を感じさせる。ところが、たった今、バーカーが手にしたホールドに手をのばすと、しっかりとした岩角は消え、幻想の世界からいきなり現実に引き戻される。

彼が自在に使いこなすのは、小さな岩の結晶、平然と見過される凹みだけではない。両手の先端はまだ理解できるとしても、ラバー・ソールで覆われている足先までもが、細かな岩角をしっかりとつかんでいるように見えてならない。私がいくら試みてもビックともしなかつたボルダーも、みごとな四肢のコンビネーションによって、合理的に計算された無理のない、洗練されたスタイルで解決される。創造力の貧しさから、パワーこそ最大の武器と考えていた私は、ガク然としながらも、惹きつけられていた。

ウォーミング・アップにしては少しハードと思えるボルダー群をこなしたのち、いよいよ例のボルダーに向う。さすがに真剣な表情を見せていたが、それまで見せることのなかつた鍛え抜いた肉体の躍動、ダイナミック・ムーブをみごとに調した、鋭い切れ味だつた（この連続写真が「岩と雪」七二号に掲載されているので、興味のある方は御覧下さい）。

後日、このハミリ・フィルムを見たひとりがつぶやいた。

「あれはサイボーグだ。あんなの岩登りじゃない。」と。

滞在中に馴らされた私達でさえ完全に酔いしれた「ショー」を、順化のできていない人が見たら、とても信じられないだろうし、信じたくもなかつたのだらう。

同じ人間がこれほど鍛えあげられるのか。強さ、たくましさ、豊かな可能性の一端を垣間見て、人間とフリー・クライミ

ングの可能性の限界について、もう一度考え直さなければいけないと思つた。それはかつて味わつたこともない、激しいカルチャー・ショックだつた。

彼のひとつの岩角に対する執着心と集中力は、どこから生まれてくるのだろうか。自分自身を素直に見つめ、自らのクライミングに徹している強さだけではない。天性もあるうが、努力もあつたはずだ。強靱な力と技があれば、私などに使えない小さな突起すら、充分なホールドになり得る。ホールドの大・小は、使う側の人間が勝手に感じるものだろう。テクニクの間習得はもちろんのこと、筋力トレーニングの必要性を痛感した。それも今までのように「やった」と精神的に満足させるだけではない、実際に有効なトレーニングが必要だ。

上手に登る人、巧みに登る人に出会つたことがあつても、「美しさ」を感じさせるクライミングに出会つたことはない。パーカーのクライミングは、岩登りと呼ぶにはあまりにも美しすぎる。華麗なるボルダリングを観て、はじめてクライミングの奥行の深さを実感した。登れば終りのクライミングに、スタイルの洗練化と言う、知的ゲームの領域に踏み込んだ、味わいある楽しみ方を知る。

洗練化の度合ははてしなく進む。どこにその限度を置くか、それはクライマー一人ひとりが決めるものである。それが小さな岩を大きく使う、ひとつの知恵だ。

余韻の覚めやらぬ別れ際、私のパートナーが、
「彼はチャンガバン南西岩稜のリーダーだった……」と、紹
介の言葉が終らないうちに、

「君はアルバイン・クライマーで、ロック・クライマーじゃ
ないんだ」とパーカーが言う。

正直に告白すれば、心の何処かに「俺はヒマラヤに登って
いるんだぞ」と、秘かな優越感が顔をのぞかせていた。「だから
下手なんだな」と、続く言葉が聞こえてくるようだった。

ほんの二〇年ほど前、岩登りだけしていると、カタワ者呼ば
わりされ、オールラウンドに中途半端な登山を志してきた。目
標は、もちろんヒマラヤの高峰が最高級と考えられていた時代
だ。やがて私自身アンデスに行き、ヒマラヤの「低山」に登っ
たあと、もともと岩登りが好きだったせいも、そこにある種の
物足りなさを感じた。単なる憧れだけで、自分の気持を縛りつ
けておけなくなった。

三週間余りのヨセミテ生活を終え、七年ぶりに訪れたペル
ー・アンデスの白銀の峰々を登りながら、ふと思った。

「俺、いま楽しいのかな？」

高峰を登ることに興味がない人にとつて、八千米峰であらう
と、七千米峰であらうと、それは山以外の何物でもない。岩登
りに関心がなければ、すばらしいクラックであらうと、それは

岩の割れ目にしか映らない。

スキーが好きな人は、夏になれば水上スキーをしなければい
けないのか。短距離ランナーは、長距離ランナーに見劣りする
だろうか。

私は登山家になるために、山を登っているわけではない。

威圧感を期待しながらも、どこかおどおどした私に比べ、サ
イボーグ人間がなんと誇り高くそびえていたことか。

なぜフリー・クライミングなのか

ボルトが連打されているルートを登るだけなら、岩など見る
必要はない。次にアプミをかけるボルトさえ見失なわなけれ
ば、一本のレールが終了点まで導いてくれる。こうしたルート
に慣れてしまうと、目の前に何も無くなったとき、とたんに不
安になるものだ。そうしたクライマーがヨセミテに行き、ルー
ト選定を誤ると大変なことになる。極端に難しい箇所などの例
外を除き、プロテクションの間隔が一〇m以上離れていること
は、珍らしいことでない。私もヨセミテに行った当初、一〇m
先にプロテクションが見えているのに、何処をどうやって登っ
たらいいのか、ルートが読めなくて苦しんだ。ルート・ファイ
ンディングはフリー・クライミングの妙味とは昔から言われる
が、それも技術や意識・経験に裏打ちされているものだ。

クラック・ルートなら、ルート図とニラメッコすれば、目的のラインは分かる。分かるには分かつて、ジャミング・テクニクを知らなければ、どうしてそこが登るラインになり得たのか想像もできない。ルートの途中で、マントルと言う、それまで使ったこともないテクニクが必要な場面に出合ったとしたら、これはスゴスゴと引き下ることになりそうだ。そうしたテクニクを知って、はじめて目の前のふくらみが有効に使える。知らなければ、知ろうとしなければ、ふくらみはいつまでたつてもふくらみに過ぎない。

クラックを登るのにジャミング技術を知らなければ、快適なクライミングを楽しめないのと同様に、垂直を超えたオーバーハング、バランス・クライミングの限界を超えた岩場を登るには、必要最低度の腕力も不可欠だ。

難しい岩場を登るには、こうしたキーワードをどれ程持ち合わせているか、それが重要になっている。

ジャミング・テクニクとひと口に言っても、指・手の形状を利用する方法、意図的にひねりを加え、指先にくさびと同じ働きを持たす方法、力で作り出す方法等の使い方と、指先しか入らないシン・クラック、手首まですっぽり入るクラック、斜めのクラック、コーナーにあるクラックなど、その対象の形状との組み合わせで、数えきれないバリエーションがある。基本があつて、無いと同然のジャミング技術。そのひとつをとって

みても、その完全マスターには、気の遠くなる歳月が必要だ。碁や将棋の世界では、何十手、ときには百手を超す先まで手を読むと言われる。ボルダリングをはじめ、フリー・クライミングにも大局観が必要だ。いかに多くのキーワードを持っているからといって、それだけで、どこでも登れるというものではない。

イマジネーション・クライミングから始まる。岩の面をよく観察し、大きなホールド、安定したフット・ホールドなどの特徴を読む。次に、それらを結ぶ流れを考える。それが初見で適中することは稀だ。次の動作を作り出すために、はじめの動作から組み直しが必要になることもある。効きの良いジャミングを考えつくまで、半年かかったこともある。「問題は解いたが、ホールドがつかめない」と、捨てゼリフを吐く時は、日夜バベルと格闘になる。あとになって、それがとんでもない誤解であつたことに気づく場合も少くない。

クライミングの意識を高めると、厳しい状況の中で恐ろしいほど敏感になる。滑らかな岩肌に無数の凹凸が浮びあがり、何の変哲もない岩角に限りない利用法を見つけ、指先に微妙な感覚が鋭く伝わる。それまで気にもとめなかつたロープに重みを感じ、パートナーのロープさばきさえ気にかかる。それまで何の気なしに登っていた既成ルートでも、岩をよく見ながら登ると、数多くの発見がある。フリー化なども、その見本ではない

だろうか。アブミを使わなければ登れないと決めつけていると、ピトンとピトンを結びつける線しか目に入らない。ところが、可能性を秘めた眼で岩全体を面として見直すと、多くのホールドとその使い方が見えてくる。

谷川岳コップ状岩壁雲表ルートのフリー化を思い立った時、

その二か月ほど前に登ったばかりの人間に尋ねた。

「あのルート、フリーで登れそうか？」

「エー、フリーですか？ 行けるわけじゃないでしょう」

それから半年後、その人間と共に、カール下テラスでオーバーハング帯を凝視する。

「ハングの出口に打ってあるピトン、あの右上の岩角はホールドに使いそうだろう。あそこを右手でつかみ、その左斜め下のクラックに左手を……」

「へー、登れそうですね。人工で登った時、岩なんて全然見てなかったんだな」

翌日、一九八〇年五月十二日、雲表ルートはフリーで登られた。

思えば一九五八年、コップのルート開拓ではじめて試された埋込ボルトは、その後、使用方法の倫理の枠が外され、その威力は『不可能』の本来の意味を追放した。巨大な庇、ツルツルに磨かれたスラブであろうと、単純作業のくり返しにより舗装道路ができあがり、次いで、アルプス、ヒマラヤを想定し、そ

れが量的にどれほど拡大できるか、そこに焦点が絞られた。私達のチャンガパン南西岩稜の登攀においても、多量のフィックス・ロープ、ユマール、ボルトに守られていたおかげで、出発以前に『天候が不順。時間がもう少しあれば』と『チーム・ワークの勝利でした』との二通りのコメントが用意できた。こうした八百長試合は、観客を楽しませることはできても、自らに充分な満足感を与え続けてはくれない。

フリー・クライミングの意識は、単調なアブミの掛け換えルートや、空白部の岩、見過ごされてきた小さな岩場に新たな命を吹き込み、再びクライミングに冒険性を呼び起した。

おわりに

季節を問わず、フリー・クライミングに徹していると、

「そんな小手先のテクニクは、冬山に通用しない」

「ヒマラヤに登るには、まず体力」とか忠告される。まったくその通り。ごもつとも。フリー・クライミングが万能で、全てであるとは、私も思っていない。ただ、私に対するそうした言葉は、『小さな親切、大きな迷惑』だ。

フリー・クライミングに対する取り組み方は、千差万別。クライミングを楽しむ人。極限的フリー・クライミングを追求するタイプ、対象をより大きなビッグ・ウォールに求める人、エ

イド・クライミング・テクニクと合流し、大岩壁、高峰に新たなルートを切り拓くタイプなど。クライマーは、皆一様に冬期登攀を、ヒマラヤの高峰を目ざしていると考えられたら、それはとんでもない誤解である。

私は、フリー・クライミングが面白いから、楽しいから、全身で享受している。今ほど岩登りが楽しいことはない。それは表面上、フリークライミングに巡り逢えたことであると同時に、自分の山を探しあてた喜びである。いつまで楽しんでいられるか、見当もつかないが……。

北アルプス時代。そこでは、山の深さや広さは遠く去り、激しい岩壁との闘争に明けくれた日々だった。

私はそのことを思い出すと、いまでも血の騒ぎを覚える。岩に、氷に、雪に、何ものかにつかれたように、恋いこがれ、それに挑んでいた。その数年間は、たとえ、それが私の本来の山登りの道から離れていたとしても、決して悔いのない数年間だった。むしろ、純粹な、水晶のような時代として私の胸に、いまでもしっかりと刻みつけられている。”

加藤泰安著『森林・草原・氷河』



人間ティルマン・その生涯

評伝『高い山々と冷たい海』からの恣意的なぬき書

High Mountains & Cold Seas

by J.R.L. Anderson

London, Victor Gollancz 1980.

田 口 二 郎

H・W・ティルマンは、ナンダデヴィーの登頂者として、また画期的なヒマラヤ軽装遠征の創始者として戦前から高名だったが、戦後も、開国早々のネパールに先駆者的な足跡を残して日本の登山界にもマナスル遠征を触発したことは周知の通りである。しかし、ネパールの旅を最後に山の世界から忽然と身を引き、爾来二十五年間毎年自小艇をあやつって両極に身を乗り入れ、一九七七年、八十才を間近かに南極の冷たい海洋に劇的な最期を終えた。

……評伝の作者J・R・L・アンダーソンは、紀行冒險のジャンルに多くの著作をもつ英国の老作家であるが、晩年のティルマンに接し、その深い人柄に強くうたれて、早くも没後二年目の一九八〇年にこの伝記を上梓した。膨大な資料(著

作・遠征日誌・私信)と多くの友人の証言をもとに、エヴェレスト遠征隊長をつとめたり戦時にはパルチザンとして闘う等、波乱に富んだその八十年の生涯が、豪毅にして超俗的な人間像と共に三百五十頁のなかに生々と描き出されている。

紹介者はかつて会報で伝記を短評したが、山岳の編集からティルマンその人についてももう少し詳しくという要請があったので、結局本の梗概を綴ってみることにした。結果的に不手際な長文になったのが気にかかる。原著の紹介でありそれを通じての主人公のポートレートだから、できるだけ作者の言葉を生かすように努めたが、文脈を保つ為に時々紹介者の勝手な筆がまざっていることもお断りしておく。

評伝第一行を作者は次の一文で始めている。

「これは、今世紀あるいは他のどの世紀でも類をみないほどの広大なスケールで、長い人生を生きぬいた孤高の男の物語りである。」

一 育ち

一八九八年（明治三十一年）、英国リヴァプールの豊かな砂糖商人の家庭に生れた。リヴァプールは、カリブ海からの棉花・砂糖の輸入港でイギリス資本主義育ての港と言ってもよい。彼の父は、高等教育も受けないたたき上げの商人らしく、しっかり者でまた無類の読書家だった。店の小僧はいつも図書館へ走り使いをしていた。人頼みをしない独立の気風、本好き、若いティルマンはこうした父の性格をそのまま受けついだ。彼は三人の子供の末子で、六才うえの姉アデレンにいちばんよくなついていた。ティルマンにとつてこの姉が生涯に大きな役割を演じるのだが、彼女に対する愛情は一生変らず、彼が七十六才の時、スピッツベルゲンの近海で姉の死を聞いた時、「私は頼みのつなを失った気持だ」と心から嘆いた。少し年うえの兄は、青年の時、海軍の事故で亡くなっている。

十一才の時、父は、彼をロンドン北方の中学の寄宿舎に入れたが、小説家グラム・グリーンンの父を校長とするこの小さな学校からレイモンド・グリーン、F・S・スマイス、H・W・ティルマンと云う三人の登山家が出ていることは面白い。当時

の学友は、「オールラウンドの学生だったが、少し惚けて浮世離れした面があった」と彼を評している。

十七才の時、大戦が勃発した。青年層は、ロマンチックな戦争熱にあふられて、よもや戦争が何年もつづき地獄のような形相を呈するとは夢にも思わず応召した。英国は一九一四年に戦争に入ったが、徴兵は十六年まで行われなかった。ティルマンは、職業軍人になるべく士官学校の砲兵科に入学し、規定を破り十八才未満でベルギー戦線ソムムの会戦に参加した。そこでは百万近い両軍の将卒が死傷した。戦線は塹壕戦で膠着し、独軍の毒ガスや飛行機や英軍のタンクが初めて姿を現わした。至近距離での射ち合いで、死はいつも間近かであった。家族への私信——自分のおかれている状況の描写は、言葉少なく簡潔で殆ど形容詞が欠落しているのだった。自分を客体視した乾いたユーモアが必ず忘れられずそこにあった。これは彼の生涯の文体となつたものであるが、そこには英雄主義はひとかけらもなかったし状況の深刻さは行間にしか読みとれなかった。

戦争が終り故国に向つて船に乗る前に、上官が若者達に次のように別れを述べた。「体に気をつけ、たつぷりお金をかせいで好い嫁さんをもらつてくれ。そうして一生幸せに暮してくれ。」しかし、ティルマンは生涯要らなかつた。父親は、自分の仕事を手伝うか大学へ行くことを望んだが、彼はもう常人の生活には帰れない（それを我慢が出来ない）人間になつていた。

自分が何故生き残ったのだらうと自問し、今生きている苦痛なしに生きていることが、たいへんな贅沢みに感じられるのだった。これ以上望むことは、自製の城を超すようにも感じられた。ティルマンの複雑な人間形成と強烈な自給自足への意欲は、青春のない戦争体験と深く結びついていた。

— ケニヤへ —

赤道直下の高地の開拓に、白人とくに退役軍人が歓迎され、特典も与えられたので、二十才のティルマンは故郷リヴァプールをあとにして、アフリカの原始生活に乗り出した。この荒地は十年後には、開墾者を養うことになるだらうと、結婚して米国に移った姉に書き、ここにやっつてこないか素晴らしい所だ、アメリカに行っても貴女の亭主に、やましい程大金持にはならないように伝えてくれ、とユーモラスに皮肉を書き足している。戦場が男の世界だったように、ここに住むひとにぎりの開拓者もみな前身は兵隊で、共同で道や橋をつくり、動力は牛だった。亜麻やコーヒーを栽培した。最寄りの郵便局まで十五マイルもあった。ティルマンは、はじめはテントに寝、次に粘土の家をつくり、やがてレンガを焼いた。彼の女嫌いは何故か到着の第一日から知れ、開拓民のなかでの女房持ちは、ティルマンの出席する集りに女房を出すことを遠慮した。太陽が沈むと時計の針を六時に合せ、朝もまた、太陽をみて六時に合す自然のリズ

ムに合せた勤労の生活を何年もつづけ、その間英国最大の叢書デントのエヴリマン・ライブラリーの何百冊を全部読破した。

— シプトンとの出会い —

アフリカ生活も、もう十年もたった。父からの共同投資もあって、新地区にコーヒー栽培をやり英国に輸出した。昔の牛車の代りにトラックの姿がみられるようになった。生活物質的にも落ち着いたが、人生にこれといった目的も見出されなかった。そのような生活のなかに、ひとつの運命的な一石が投ぜられることになる。アフリカ生活十年目の一九二九年十二月、彼が目を通した「East African Standard」紙に載った「マウントケニヤの双峰バチアン登頂記」がそれである。執筆者は、E・シプトンとあり、同じケニヤのコーヒー・プランターである。ティルマンは、一九二六年に、兄の死去の際、いちど国のリヴァプールに帰り、同じくアメリカから一時帰国した姉とふたりで訪れた、レーク・ディストリクト地方の山の美しさに魅せられたことがある。その思い出が忘れ難くシプトンの山の記事は、ティルマンの生活の単調を大きくやぶって、シプトン宛に一筆を書かせることになった。

— 自分はレーク・ディストリクトで少しばかり山登りをしたものが、ケニヤでの山登りについて御教示願いたい、というすでに三十才を超えた男の一本の謙譲な手紙が、この歴史的

なコンピを生み出す端初になった。一九三〇年にはキリマンジエロ、同年にケニヤ双峰の縦走（シプトンが生涯で、いちばん困難な登山だったと回想する）、三二年には伝説的なルヴェンゾリと、たてつづけにふたりは組んで登るのだが、ティルマンよりも九才も年下のシプトンは、二十才の時すでに完成された登山家であったのに、これにくらべティルマンは駆け出しで、むずかしいケニヤの縦走では、スリッパして人事不省に陥るというアクシデントも起す。が、その山行で指南役だったシプトンは、彼の自伝のなかで、ティルマンこそは天性の登山家であることにおどろいた、また山行についての計画方針も自分と全く意見を同じくすることもわかった、と書いている。

— ティルマン・シプトンの軽装備遠征 —

これが編み出されたのが、同じ英国の植民地でも自からは肉體労働にたずさわらず、土着民衆のうえに君臨した印度ではなくて、白人自らが自作農民になったアフリカであったのが面白い。また三十年代のエヴェレスト遠征にアフリカ育ちが多く参加していることも目につくことだ。山登りは十九世紀に、工業化・都会化に対する反動・ロマンティック運動の一翼として生まれ、ウィンパーによってポピュライズされたものだが、シプトンを山の世界に引き入れたのもウィンパーの著書だった。しかし、山登りは富裕階級のスポーツだったし、こと海外遠征は

装備品とポーター費でそうだったが、シプトン・ティルマンは既成概念をひっくりかえし、装備はテント・ピッケル・ロープ・プリムスのストーヴと二枚の替えシャツだけで十分で（ふたりは克蘭ポンは使わなかった）、食糧は現地食で間に合せ、荷は自分で担ぐ方式をアフリカで実践し、ヒマラヤまでもちこんだ。ヒマラヤにもちこまれた時、今までポーター視されていたシエルパは、ティルマン等によって初めて仲間視されることになる。

— ティルマンとシプトン —

ふたり位対照的な人物はいない。シプトンは、幼年時セイロンで父を失い、母について放浪的少年期を送った。そのせいか血気早く快活でお喋りであるのに、九才年上のティルマンは、戦争で苦勞しているし、いつも無口で無愛想で苦行僧のような人物だ。長いつき合いで、ふたりの間には静かな友情が育つが、外面的にはそう仲が良いとも見えない。山登りに対して同じ見解をもつので、ふたりは実際の実利的見地から、組みを組んでいるという面があった。シプトンが書いた挿話が面白い。ある時、ふたりは、高い雪の尾根に腰をかけ、岩壁に足をブラブラさせて休んでいた。「おい、ティルマン。お互い知り合っからもう久しい。命を助け合うこともある。そろそろファースト・ネームで呼び合おうじゃないか。」すると、たちまちテ

イルマンは、ノーと答えた。何故だ、と訊ねると、黙っていたが、暫らくしてから、「なあ、君のエリックという名が、如何にもバカげた下らぬ名前だからな」と言ったという。あれほど山行を共にした間なのに、ビル、エリックと呼び合うまで随分年月がかかったというのは、ティルマンという男が、他人の世界にも入らぬが、自分の世界にもめつたに人を受け入れたり寄せつけない、英語で言う処のペリ・プライヴェート・マンということになるのだろう。

もうひとつ、このふたりの対照的なのは、シプトンが、母親が欧州を転々としたので、十代ですでにスイス・アルプスで場数を踏んだ登山家であったのに、ティルマンは三十代で登山を始めた晩学であったと言うこと。

— 一九三二年、アフリカ生活に終止符を打つ、—
 ティルマン三十四才。プランテーションを売り英国に帰った。父にも借金を返したが、彼のよろこびは、離婚した姉が二人の子供を連れて両親の元に帰り、ティルマン家の中心となつて、老いた父母を看ていることだった。その年、山の友人と三人でレーク・ディストリクトに出かけ、三人共転落し、一人は死に彼は背に重傷を負ったが、十分治療せぬままにアルプスに出かけ、ドフィーネ、シャーモニーでガイドを雇つて方々を登つた。そこで生れて初めてクランポンをはいたが、人工的なア

ルプスの雰囲気に嫌気をおぼえて、「何から何まで厭々した」と書きつけて英国に帰った。発つ時は少し背中が曲つていたが、帰国した時は真直になつていた。これがティルマン流の最良の治療法だった。時あたかもケニヤで金鉱熱が湧きあがり、またアフリカに引き返し友人とふたりで小屋掛けして、半年間金鉱探しをしたが、全くの徒勞だった。

— キリマンジェロの単独行とアフリカ自転車旅行 —
 二年前シプトンとふたりで登つて霧の為に頂上付近で迷つてしまったキリマンジェロの頂にひとり立ち、一万七千呎以上で山酔しなかつたことに深いよろこびをおぼえた。ティルマンは、不思議な位、高度と山酔に生涯コンプレックスをもちつづけた。

さて帰国の段になるが、スエズ経由で船に乗るのはいや、車は高価過ぎる、歩くのは時間がかかり過ぎるというので、自転車を仕入れ、ケニヤから大西洋岸の仏領カメルーンまで三千マイルを、グランドシートと寝袋とモスキート・ネッツだけを荷台に積んで走り始めた。食糧は途中で入手できるバナナが主食だ。三十年代にアフリカで白人が自転車でひとり旅することは、落ちぶれた無銭旅行者と等しく、土着民の蔑みを買うことさえあれ、風俗的にも芳ばしからぬことだった。帰国後、ティルマンは、三千マイルを故障なく走りおこなせた英国製自転車の

製造会社を訪れ、PR用に新しい自転車を贈られるだろうと期待したら、楽しい旅で結構なことでしたと、冷たくあしらわれた。

かくて彼の十四年間のアフリカ生活は終りを告げた。

「アフリカは、空望みしたような富を私に与えなかったが、それよりも、遥かによいもの、想い出、山々、友人達を贈ってくれた」——三十五才の彼は、姉に書き送った。

— ヒマラヤへのいざない —

英国に帰ったが、定職をもたなかった。文筆で立とうということも、その頃考えたことがある。もともと読むばかりでなく書くことも無性に好きだった。シプトンを思い出して、レイク・ディストリクトに行かないか誘った。これに対して、五か月間ふたりでヒマラヤに行かないか。費用は半々持ちで、という提案が返ってきた。この手紙のやりとりこそ二人の人生に大きな影響を与えることになった。自分の誘いなしでは、ティルマンのヒマラヤ行きは少なくとも五年はおくれたことだろう。また自分もティルマンなしでは、ナンダ・デヴィー探索の成功はなかったらう、とシプトンは自伝のなかに書いている。

一九三四年の探索は、ロングスタッフが垣間見、ラトレジが命名したナンダ・デヴィー内院の不思議な世界と、全く画期的な小人数による軽装ヒマラヤ遠征を世に紹介した。シプトンの

名著、『ナンダデヴィー』はティルマンに捧げられている。

隠遁者、女嫌いで、つまらぬお喋りや空虚な議論には一切耳を貸さないティルマンに較べると自分は逸楽者だ。全部現地食でやって行くことは、言うは易く実際にはきびしい。毎日チャパティやツアンバの連続で、疲れてくると見ただけで吐気をもよおす。しかし、ビルの禁欲的な顔を見るとそれを言いだす気にもなれなかった —— シプトン紀行の一節である。

この年ティルマンは、ケニヤ育ちの登山家ウィン・ハリスとシプトンの推薦でACに入会した。無名のティルマンに較べて、新時代の代表的な登山家としてのシプトンの令名は高かった。彼は、スマイス、レイモンド・グリーンとのカメットの初登頂者（一九三一年）であり、またラトレジの三十三年のエヴェレスト大遠征の主力メンバーでもあった。しかし、機動性のない大遠征隊に失望して、その翌年の三十四年に、ティルマンをナンダデヴィー踏査に誘ったのだ。そして続けてその登頂を目論み、講演で資金集めにいそいでいた。

ところが、突然チベット政府が、エヴェレスト遠征の許可を下ろすという事態がおこり、一方ACでは、本格登山を準備出来なかったので、翌年の遠征に備えて急遽シプトンをリーダーとする踏査隊を送り出すこととした。リーダーのシプトンは、有力隊員としてティルマンに声をかけた。おどろいたことに、エヴェレストへの招聘を受けて、ティルマンは何の感動も示さ

なかつた。そればかりか、六人も揃って行くのかと、不平顔をしたと言う。しかし、三十五年のエヴェレストでは、ティルマンはふるわなかつた。二万三千呎以上は山酔いで体が利かなかつたのだ。この為、彼は翌年（三十六年）の遠征には、インヴェーションを受けないことになる。

しかし、エヴェレストから外された為、年齢上の理由から同じく外されたオーデルとふたりで、彼はナンダデヴィーの登頂者という幸運をつかむことになる。

— ナンダデヴィー登頂 —

ティルマンと何回もヒマラヤ行きを共にし、彼に私淑したピーター・ロイドは、ナンダデヴィー登頂を戦前での最もすぐれた登山業績であると評価しているが、この登山は、たくさんの偶然の所産だった。カンチを登ろうというアメリカ人の発案で、そのひとりにはチャールズ・ハウストンだが、四人の英登山家の参加を求めてきた。カンチ入山が不許可になり、ナンダデヴィーに切り替えられたが、現地でリーダーを決めようということになり、ティルマンがえらばれた。彼には天性の威厳が具っていたと言われる。リーダーの彼は登頂のチャンスはハウストンとオーデルに与えたが、ハウストンが病気になるので、彼自身が登ることになった。成功した時、人間が到着した最高の頂として、センセーショナルに報道されたが、ティルマン自

身は、二万五千呎の頂で十二分にその高度に耐えられたことを何よりのよろこびとした。ナンダデヴィーは彼の特異な生涯のなかのひとつの偶発的な出来事に過ぎなかつたのだ。

彼が頂に立つ丁度十日前に、リヴァプールで、老父が姉のアドレンに看取られて息を引きとつた。父は現在の価値にすれば百万ポンドに匹敵する遺産を残した。この遺産に支えられてティルマンは、冒険に満ちた人生をさらに追うようになる。

ナンダデヴィーは、登山家としての名声ばかりでなく著述家としての地位も彼にあたえた。「ナンダデヴィー登頂」は、図書協会の三十七年度推薦書となり、殆んどすべての新聞論説が、その簡潔な文体を「好箇」の読物として、好意的にとりあげた。アフリカ体験を語った、『赤道上の雪』も引きつづき上梓された。この二冊は、ティルマンが初めて書いた本で、今では山登りのクラシックになっているが、タイムズだけは、すでに最初の書評で、その後のティルマンのすべての著作に一貫する欠点、文章に抑制が利き過ぎて山や海の素人には、実相がわかりにくいという鋭い指摘を行なっている。

— シプトンとカラコラムへ —

三十七年、かつてヤングハズバンド、コンウェイ、ワークマン夫妻が歩き、まだ多くの未測量地帯を残しているカラコラム山脈の北側に、足を踏み入れた。山登りはせず、専ら測量に日

を費やしたが（砲兵士官なので地測ができた）、先人がアイス・キヤップではないかと問題を提起した大きな雪原を、巨大ではあるが通常の氷河であるとひとつのミステリー解きを行なうと同時に、イエティーの足跡に夢中になって、新しいミステリーを土産にもちかえった。ティルマンは、自然界の動物が好きで、翌年のエヴェレスト遠征のさいも、イエティーの材料をたくさん仕込んでいる。カラコラムの広大な白い世界に魅せられ、遊牧民のようにいつまでもスキーに乗って、ここで暮したいと姉に書いたが、四囲の状況は彼にそれを許さなかった。

— 三十八年エヴェレスト遠征の指揮をとる —

エヴェレストが解禁になり、A.Cの委員会はナンダデヴィーの業績を買って、遠征の指揮を、四十才の彼に委ねた。一枚の紙切れに書きこめない計画は、過剰計画だという年来の主張を実践する機会をあたえられることになる。

そこで彼は、スマイス、シプトン、ピーター・ロイド、オーデル、ウォレン、オリヴァという当代登り手だけを集めて、サポート・メンバーや科学者を入れなかった。また荷や食糧に大鈍をふるい、ラジオをもち込まず、酸素問題では委員会と鋭く対立した。

しかし、この遠征は、あらゆる意味でついでになかった。異常な寒気・雪崩・病人の続出で、かつてノートンが達した高さ

までも達しなかったが、小型遠征隊でもこの巨人と十分に太刀打ちできることを証明したはずのこの遠征隊は、間もなく欧州をおおった黒い戦雲と大戦の勃発によって、人々から忘れられてしまった。遠征の報告書が出たのは、十年後の四十八年であった。それから五年後の五十三年、エヴェレストはネパール側から登頂されて、世紀の歓呼を受けたのだから、三十八年のティルマン遠征は、最も陽にあらぬ遠征だと言えよう。

しかし、この遠征途上からティルマンが出した手紙は、彼の人間性を浮彫りにして、極めて興味深い。出発点のカリンボンで風邪をひいて寝込むのだが、その時、「重責にたえられない私の精神力の弱さをみせつけられた」と弱々しげに姉に書き、ノース・コル雪崩と病人の続出に、隊員シェルパ全員の休養下山を命じた隊長としての決断が、結果的には登頂のチャンスを遠のかせたのではないかとよくよく悩んだ手紙も書いている。それより興味深いのは、隊としては登頂を逸しているのに、彼自身が、玄人・専門家であるスマイス、シプトンのふたり組の達した二万七千二百呎に、第二隊としてピーター・ロイドとふたりで達したことを、非常なよろこびとしていることだ。スマイスやシプトンの意見を、彼はいつも、玄人の意見として書いている。自分自身をかつて玄人とは言ってもいないし、思ってもいなかったのだ。たしかにスマイスやシプトンは、山歴の長さはティルマンより遥かに長いし、早くからその

名声を謳われた。素直に彼等に傾聴する気持もあっただろう。しかし、(紹介者考えるのに)自分は、ただの山屋ではないのだ、という心の奥の気持もあったのではあるまいか。

エヴェレストの帰り、彼は全員を先に帰して、ひとりでシェルパを連れゼム・ギャップを超える。そして全くプライヴェートのエヴェレスト遠征を夢みる。さらにアッサムに足をのばす。

— ティルマンと酸素 —

登山も帆走と同じだ。発動機をつけて帆走することは何の意味もない。若し生活の為ではなく、よろこびの為、良い言葉ではないが、気持のうえでの自己拡張の為に、自然に立ち向うのであれば、人は、生得の武器で闘うべきだ。酸素を持ち込むことは、最初から山に降服したことを意味する。それなら何故、着衣して靴を履いて登ることが許されるのか、と言う論理になるが、これはたしかに矛盾で、我々は理屈では割り切れない人間であるし、山登りも、理屈では割り切れない娯楽だと言う外はない。——ティルマン語録の一節である。

— 第二次大戦 —

ティルマンの生涯をみると、それを貫ぬく一本の筋は、まるで彼の強い意志と人生哲学が生み出した、ひとつの劇的な作品

のようにみえる。平時ではそうであっても、人間個々の意志が殆んど届くことのない戦時ではどうだったろうか、原書を見てもみよう。

ティルマンは、砲兵の予備士官として忽ち応召し、若い時に塹壕戦を闘った北仏に配置されるが、破竹の独軍機械化部隊に撃破されて、ダンケルクから敗退した。大混乱の国内を通過して家にたどり着いた時は、戦場でもついていた小銃をそのまま身につけていた。欧州を制覇した独軍は、イタリイを跳躍台にしてアフリカ北岸に進出した。

ティルマンの所属する部隊は、印度に派遣され、プーナの士官用バンガローでの、沢山の奴隷(印度人の召使いのこと)にかしずかれるという生活に、厭々する。極東情勢の変化に対処する為、もう少しでシンガポールに配置されるころだったが、亦印度に退屈して、彼はそれを望んだのだが、若しそうなっていたら、彼は日本軍の捕虜となり、その長い捕虜生活には耐えられなかったろう。部隊は間もなく、油田防護にイラクに移動するが、古い貨物船のなかで、兵隊と一諸にボイラーの缶焚に汗を流して、「一岩壁をこなしたようだ」とよろこぶ。やがてアレキサンドリアに迫るドイツのロンメル將軍のタンク師団との大会戦に投入され、エル・アラメインで敵を撃破する戦闘に参加する。第二次大戦の転換点となった戦だった。アフリカから独軍を追い払った英軍は、チュニスでひと休みする。

ティルマンは第一次大戦からの軍人で、方々に転戦し四十五才にもなるのに、いっこうにウダツが上がらない。第一次大戦の同僚は準将や大佐になっているのに、彼はやっと少佐で昇進を推薦してくれる人もいない。これは、出世に必要な本部付の行政的な仕事を嫌う、本人自身がもたらした結果だ。彼はいつも野戦にいたいのだ。しかし、本人はとて不幸で姉に不満を手紙で書いている。この時山岳戦学校の校長の話がもちかけられたが、断っている（彼は自分を山の玄人だけだと考えたくなかつたのか）。

しかし、この時点で彼は自分の運命をティルマン流に切り開く。敵占領下のアルバニアへ落下傘で降下し、パルチザンと連携するという特殊任務に応募する。四十五才のティルマンは、連日落下傘着地の訓練をうけ、「彫刻家」という暗号名をもらって、ギリシャ北方の山岳地帯の森に飛び降りる。

出発前に彼は姉あてに、「鶏口になるも、牛後となる忽れ」と独立になりたい心境を精一杯に知らせている。手に汗をにぎる生活が始まったが、その時仲間だったある英人は、いちばんタフだったのは、いちばん年をくって、とがった鼻と顎先をもち、怒ったようにピンと立った髭をはやし、短軀で、がっしりした「彫刻家」だったと回想している。その彼は口癖に、この生活は、ヒマラヤ探検のよいトレーニングだと言っていた。

独軍につけねらわれて死地を脱したティルマンは、現地体験

から、色々な党派のパルチザンのなかで、共產系が最も信頼できたという意見を持ち、英政府のパルチザン諸派に対する等位政策に不平を鳴らす。彼はもともと政治には全く無関心な人間であって、こうした彼の発言は生粋の軍人としての発言であり、この点アラビアのローレンスとの強い相似を思い起こさせる。

連合軍はイタリアに上陸し、イタリアは降服したが、北部は独軍の占領下にあった。これにたいして、イタリアの抵抗運動が息づいている。ティルマンの次の任務は、北伊に飛び降りることだった。終戦の時、彼はドロミテ地方の解放されたベリノ市にいた。解放運動を共に闘ったベリノ市民は、彼を市の公民として迎えた。ベリノ市の公民権は、かつてガリバルディーに与えられたものだった。ティルマンと他の英人を匿っていたあるイタリア女は、蔵書のシエークスピアを彼に貸していたが、戦後、彼は、英国から立派な装丁のものを、彼女に贈った。

戦争体験は、W・ブレイクの詩から題名をとった著書、『山と人が出会う時』にまとめられた。

― 戦後の陸地大旅行の時期 ―

(四十七年―五十年)

戦争終了の翌年（四十六年）、彼はスイスの山岳探検財団から、ラカポシ遠征参加の誘致をうけた。打合せの為チューリヒ

に行き、初めてヴィヴラム底の靴を見、英国では入手できない羽毛寝袋を手にとつて、よろこんだ。四十七年、ギルギットからスイス人とラカボシを試みたが、失敗した。その時のことを、彼は、「未知の巨峰にいきなりとりかかつて、二カ月以内に登ろうというのは、巨峰にたいする侮辱である」と、『ふたつの山とひとつの河』のなかで書いている。

スイス人達と別れて、旧友シプトンが領事をやっている中国新疆省のカシユガルに向かった。まさにその頃（四十七年七月）、印度・パキスタンは、英国から独立したのだが、幸いにもまだその頃ティルマンは、印度北西国境を突破することができた。ミンタカ峠を越えてタシクルガンで、旧友のシプトン夫妻に会い、早速ムスタグアタをふたりで試み、カシユガルで三週間もくつろいだ。行きはよかつたが、帰りが悪かつた。大英帝国の印度からの撤退で中央アジアの政治的雰囲気は一変し、帰途アフガニスタン領に足を踏み入れて逮捕されてしまった。結果的には、チトラル国境まで送付されて解放されたのだが。

翌四十八年、ティルマンは再度中央アジアに足を踏み入れた。この壮大な旅は、この種のものとしては欧州人にとっては、最後のものになってしまった。それは、中国が中共によって制覇される前のものだったからだ。カシユガルへの道はカシミアの紛争で閉ざされたので、ティルマンは上海から蘭州まで飛行機で飛び、ここから郵便バスで十何日もゆられてウルムチ

に辿り着いた。「空の旅で、旅人の財布は軽くなるが、知識はふえない」と彼は書きつけた。ウルムチにはまだアメリカの戦時領事館が残されていた頃で、ここで陸路で来たシプトンと落ち合い、ボグドオラ連峰を試み、カシユガルに共に帰って、チャカル・アギル（二万二千呎）を試みるが、ここでもガイドの病氣などのために登頂を逸している。これが、ティルマン、シプトンが組んで登った最後の山になった。ティルマンが当時行なった黄河からオクサス河へのシルクロードの旅は、伝説的なオーレル・シユティンが、近代的な地誌的知識の基礎をあたえた広大な中央アジアを通過するものだった。

ティルマンが、前掲書『ふたつの山とひとつの河』並びにそれに続く『中国からチトラルへ』で語った足跡に対して、王立地学協会は探検賞を贈っている。

— ネパール・ヒマラヤへ —

（四十九年・五十年）

戦後ネパールで行なった三回の旅行は登山史上、歴史的な重要性をもつことになった。その後の多くのネパール登山を、誘導する灯のような役割を演じることになったのだ。原書にはその指摘はないが、日本のマナスル登山もそのひとつである。

中国の制覇でチベットは鎖されてしまった。しかし、その閉鎖は逆にネパールの開国を促すことになった。かつて印度を支

配した英国だけは、封建ネパールと長年特殊関係をもっていた。グルカ兵への給料・英領印度を通じる無関税輸入は、ネパールには魅力だった。カトマンズに存在する唯一の外交機関は、英国大使館だけだった。しかし、英国大使でさえカトマンズとテライ以外には赴くことを許されなかったのだ。しかし、四十八年、四十九年に鎖国は緩み出し、外国人に国内旅行が許される勢いになった。

四十九年、ティルマンは、ピーター・ロイドとテンジンノルケ等を伴って、ゴリリシヤンカを目的にカトマンズに入ったが、色々な条件をつけられた上、ランタンヒマール登山の許可を得た。ネパール軍人の護衛をつけられたり、科学調査が必須条件で、ティルマン自身も昆虫の採集をやることにした。ランタン・ヒマールから彼は初めて、ゴサインタンを見た。初めて見たネパールを彼は、「欧州人によってまだ未探検の、きわめて人口密度の高い国」と書いている。

翌五十年のアンナプルナへの旅は、強力な登攀メンパーを揃えたが、探検を主目的とした山旅で、欧人として初めてマルシヤンディ峡谷を廻り、マナンポット地方に足を踏み入れ、そこからアンナプルナ四峰を試みたが、ティルマンとしては、これが最後のヒマラヤの山登りとなった。ティルマン五十三才。二万呎以上は老衰を感じると書いている。帰途ラダク山脈で、転石に乗って転倒し背中を打って一週間動けなかった。ちなみに

この年アンナプルナ主峰は初の八千米として仏隊に登頂を許している。

さて、カトマンズに帰りつくと、思いがけないことに旧友のアメリカ人ハウストン父子等が、英人には許可の下りなかった東部ネパールへの旅行の許可を得て出発を準備しており、ナンダデヴィー以来の旧友に同行をすすめられる。そこで一行は外人として初めて、登山者にとっては聖地のようなナムチェバザリーに入り、ラッサに入ったマニングのような興奮をおぼえる。またタンボチエに入り、英人として初めてエヴェレストの南側を目に入れる。そこで歴史の悲劇といおうか、エヴェレストをあれほどよく知っているこの年季の入った登山家は、ウエスタン・クムからの登頂に悲観的な判断を下すのだ。ティルマンのこの旅を契機として、翌年シプトンを隊長とする踏査隊が送られ、二年後のハント、ヒラリーの栄光につながるのだが。この旅の最後の頃には、かつてスイス・アルプスについて書いたように、「もうネパールに厭々した」と書き、名著『ネパール・ヒマラヤ』の最後の句を「力がおとろえる時、それを補ってますます勇氣をふるわねばならぬ。このきびしい戒律が守られない時、人はヒマラヤ登山という高い努力の舞台から身を引かねばならない」と結んでいる。

登山でも船乗りでも彼は、伝説的な人物になったが、ホモでもなく失恋の経験もないのに、彼の女嫌いやまた、伝説的なものになった。ACが伝統を破って女子会員の入会を許す決議をした時、ティルマンは脱会してしまった。名誉会員に推され、多くの人に説得されて漸く再入会したという。

アンナブルナからカトマンズに帰り、旧友ハウストンとの奇遇をよろこんだが、ハウストンの同行者にアメリカ有数の女流登山家ベツイ・コール夫人がいた。その時姉に、次のような騎士らしからぬ手紙を書いている。「今まで自分は、女をヒマラヤ遠征の欠くべからざる装備の一部と考えたことがなかった。しかし人は生きているうちに勉強するものだ。ともかく、病を直すために医者をして、祈ってくれる為に牧師を、飯を炊いてくれる為に女を同行させることで、人はもつと自信をもつて未来に立ち向えるということだろう。」

東部ネパールへの旅の最初の二日間、ティルマンは、膨れっ面で誰とも口をきかなかつた。が女流登山家の人徳か、ティルマンは段々上気嫌になり、シッキムやブータンの冒険談をペラペラ喋るようになり、ついにはあの彼が高笑いさえした、とハウストンは、手記のなかに書いている。

— 旅行観・登山観 —

『中国からチトラルへ』のなかで彼は旅行客にとつて、旅は

目的地につく為の手段だが、旅人にとつては、旅自体が目的なのだ、と書いている。旅は、それ自体が目的であるばかりでなく、人生の最も望ましい姿だった、山がそこにあれば、登ることはよいことで、旅のひとつの目標にもなる。しかし重要なのは、山よりも旅そのものなのだ。山にかかれれば、頂を極める行為よりも、頂に達する道を見つけないこと、それまでの行程そのものの方が重要なのだ。勿論、初登頂をする、むしろ登山者も興味をもった。しかし、頂に立つことに彼は、競争心というものをもたなかった。ゲームに勝つより、どうゲームをするかという方が、彼には中心の関心だった。

— 彼のかくれ家と初めての宮仕え —

大戦後、姉は成長しつつあるふたりの娘をつれて、リヴァプールからウエールズの海岸沿いの僻地に、人里離れてポツンと立つ山荘を見つけてそこに移った。前が深い入江で、背後は深い森におおわれた丘がっらなっている。写真を見ると中世を舞台とするシェクスピア悲劇の主人公が住んでいそうな暗うつな風景である。ここが、ティルマン晩年三十年のついの住み家となった。彼は冒険の旅から帰って、ここでものを書き講演の下書きをして次の旅を企画した。彼の最大の情熱は、自分でパンを焼くことだった。酒好きがどう酒を選択するように、彼は

何よりパンが好きでことに粗目のパンに全く目がなかった。また彼自身の調合によってビールをつくった。山荘の裏手で森を伐採してアッシュを植えた。自給自足、誰の世話にもならない生活のなかに、ひとつ異変が起こった。

ネパールの大旅行から帰り（五十年）、五十一年に突然彼は、ビルマ北部のメイミョウ市の領事になった。生れて初めての給料生活である。何故そんな所に行ったのか。戦後のことで治安も悪く誰もよるこんで行く所ではない。ティルマンは遠い荒々しい土地が好きだった。彼のなかのロマンチズムがこの遠隔地に赴かしたのかも知れない。

ラングーンの英大使館に姿を現した時の印象を、ある英外交官は「一向見栄えのしない男。会話が全く欠如しているので、彼の人柄は、むしろ彼の著書から推測したわけで、会話から知るわけにはいかなかった。その举止は、おおよそ外交官とは全く反対のものであった。夕方パーティーのあと、皆は車で帰って行くのに、ティルマンだけは、しめったラングーンの夜のなかに、ひとり姿を消して行った。しかしこの風変わりで寡黙な男は、実の処並々ならぬ人物だったのだ。」と書いている。

北部任地の治安はまだ英軍ビルマ軍両者が守っていた頃で、そこでの生活、毎夜パーティーの多い生活を、ティルマンは愉快ではない、と書いている。その年の暮れに、彼は来春切れる領事としての職務契約が延長されないことを知らされた。第三

者から見るとあながち不思議ではないのだが、ティルマン自身は、仕事をやめること自体気にしていない癖に、「首にされた」と憤慨して書いている。

ビルマを去る前に、ハントのエヴェレスト遠征が公表され、サンデー・エクスプレスはティルマンに、遠征に同行してそれをリポートしてくれと依頼してきた。彼はそれを断った。「エヴェレストについては、すでに十分過ぎる程書かれている」と姉に書いた。

— 海洋へ —

五十余才で、高い山に見切りをつけた老登山家は、冒険の場を海に転じる。それから八十才で、南極の海に果てるまでの二十五年間、ウェールズ僻地の山荘は、休息の住み家ではあっても、長居する場所ではなかった。初め地中海にヨットを求めに出かけたとき、彼は海の連中にいたく失望して、山の仲間ではこんな事は起こらないだろう、と書いている。ところが、ミスチーフ号を手に入れて以来、彼は、老齢ヨットに恋に落ちたかのように夢中になり、海から離れられなくなった。

ミスチーフ号は、その昔まだ発動機が使われない頃、プリストル港の水先案内が、大洋帰りの大きな帆前船を迎えに出た木製の頑丈なカッターで、これを十一屯のヨットに改造したものだ。

最初の旅は、パタゴニア南端の氷河に着陸し、アイス・キャップを横断することだった。太平洋側から氷と南極ブナの入り混じる奇怪な世界にとりつく計画は、ある友人が戦時ドイツの捕虜だった時に思いついたものだったが、現地に行くと氷河が荒れて、とても接岸できない。そればかりか、ミスチーフ号は、すぐ氷にとざされてしまう危険がある。ゴムボートで氷河に接し、やっと氷河の上に登りその上に黄色い天幕を張った。

ヨットの乗組員には、何週間後に帰って来ることを命じ、毎週一回帰って来て三度目に、上陸隊の姿をみかけない場合には、見捨てて英国に帰ってくれと言いいおいて、背水の陣をしいてアイス・キャップに向かった。この時の記録『パタゴニアのミスチーフ号』は、英米のヨット協会から賞を贈られる快挙だった。

しかし、それから南極に北極圏に、二十年にわたって毎年つづけられた彼の航跡は、優に十万マイルを越すもので、その規模は、その昔ハドソン・ベイからノースウエスト通路を発見したジョン・デイヴィスに十二分に匹敵する。それにも拘らず、宣伝することを極端に嫌った彼は、いつも黙って故国の港を出て、黙って帰って来た。六十年代に、世界一周のひとりのヨットの旅でサーの称号をもらったフランシス・チチェスタやアレク・ローズより遙かに大きい船旅をしているのに。

パタゴニアのあと翌年は、南海の果てにある仏領クロゼット島を訪れ、そのあと、一年がかりの南海よりも、半年をサイク

ルとするカナダ北極圏・グリーンランド・スピッツベルゲンへの帆走に転じた。ミスチーフ号は、グリーンランドの沖で難破してティルマンを悲しませるが、それと暮した十四年を五冊のミスチーフものに書いている。その文章は、キャプテン・ジェームス・クックと同質の沈着さと資質を映しているが、文体はハイライトをもたない玄人むきの海洋文学だと言えよう。

ミスチーフ号を失った彼は、同じ船型のカッターを求めてバロックと命名した。七十五才から七十八才の間、バロックは毎年彼を北極洋につれて行ったが、その間ティルマンは、大きな試験にぶつかった。この梗概の初まりである、一育ちの項でもふれた様に、一九七四年、彼が北海の上にある時、姉が他界したのだ。「頼みのつな、心のよりどころを失った気持がする」と友人だった作者に書いている。

姉を失ったが、冬はウェールズにこもり、夏は北海に出かける生活のバターを変えなかった。しかし彼の耳は、すっかり遠くなった。まごうことなく老年を感じ始めたのだ。七十七年の五月、作者への手紙で、「永生きすることは辛い。同世代や友人が、あの世に去って行き、私はとり残されて行く。最近エリック・シプトンが、癌で死んだ。私は、彼が病氣だったことすら知らなかった」と嘆いた。シプトンは、これより少し前（七十五年）に、ティルマンに息子をグリーンランドに、乗組員として、つれて行ってくれと文面で依頼している。シプトン

から便りがあったのは、久しぶりのことだったのだ。

ティルマン七十九才の時、翌年八十才の誕生日は、北極でむかえてみたいという気紛れな望みを持った。そんな時に、かつての日、パロック号の乗組員だった、若い友人サイモン・リチャードソンが、鉄製の曳き船をカッターに改造し、南極のサウス・シエトランドのスマス島への遠征に、老ティルマンを誘った。彼は、もう見張り役にしか役に立たないが、と言いなながらもその招待を受けた。アナヴァン号（鉄製の曳き船）は、最後の港リオデジャネイロを、七十七年十一月に出発、そのまま消息を絶った。

ティルマンには、従って、墓はない。A・E・ハウスマンの言葉を借りると、めぐる地球が彼の奥津城である。

— ティルマンの航海観 —

彼が行なったようなきびしい船旅に、クルーをみつつけることは容易でなかった。彼がいつも新聞広告でクルーを募つたのはそのせいだ。「小曳による長旅に乗組員を求む、給金なし、楽しみもない」がその文面だった。小艇での長い海上生活に、彼自身はいつもきつく啣えたパイプと、食糧は米か小麦粉と、味づけにはチリーとカレーだけで結構満足していたが、他の人間にはこれが如何に辛かろうかという点に彼は心配りということをしなかつた。自給自立的な人間だけが彼について行けたの

だ。

彼の航海用具は、本質的にクックの時代と同じで、六分儀、クロノメータ、海図だけで、近代的のエレクトロニクスは勿論のこと、初期には、ラジオさえ持ちこまなかつた。救命具、危難シグナル等は無用な長物視し、むしろ泳げない人間を良しとして、遠い荒海で他人から助けられるといった幻想をもつこと自体おろか至極で、泳げないならそれだけ苦痛の時間も短かくなると主張していた。

彼の航海術は、全くモダンヨット術の正反対で、彼の乗つたどのボートも遅脚であり、この遅脚こそが荒海を生き抜くキー・ファクターであるとした。荒海では、たちまち帆を最小限に降ろしてしまつた。それにも拘らず、専門家達は、彼を評して、「彼こそは、どんな風や雨や波の状況をも瞬時に総括的に把握する素晴らしい船頭、スキッパーだった。この男について行け—安全だと、誰もが感じたものだ」と述べている。

— 登山家としてのティルマンを評価する —

海洋に乗り替えたティルマンは、山を忘れたわけではなかつた。たとえば北極圏では、行く場所場所で、山さえあれば登山を試みた。二、三千呎の山にしても、海上から聳え立つ山だから低いとはいえない。登山家としての彼について、A Cの会長をやり、ナンダデヴィー、三十八年のエヴェレスト、戦後のネ

パールに同行したピーター・ロイドの文を借りよう。

「クライマーとして彼は、はなばなしと言うより着実だった。決断、耐久、頼りになるといふのが、彼の人間的特性だった。山は彼には常任の地で、厳しい環境のなかに如何に身を処し、身を楽にするかを心得ていた。しかし彼の最大の特質は、自然に身についた威厳であつたろう。従来型の遠征の半分の規模で行つた、彼のエヴェレスト遠征。記録は打ちたててなかつたが、三十八年の遠征は正にティルマンそのものを表現する典型的なものだ。登山家としての最大の業績は、ナンダデヴィーの探索と登頂だろう。しかし、ハウストン隊に同行して行つた、五十年のエヴェレストの回帰は、ふたつの意味から悲しい面に色どられている。ひとつは、巨峰にたいして彼自身年を取り過ぎてしまったこと。ふたつは、サウス・コルへのアプローチに、余りに悲観的な観測を述べる誤りを犯したこと。彼が隠退したのは正しかった。若い世代によるものと組織化され機械化された山登りが、到来し始めたからだ。彼の時代は終りを告げたのだ」

これが三十八年のエヴェレスト遠征に同行し、帰途ティルマンが、カンチ方面やアッサムにひとり残つたので、彼に代つてロンドンで遠征報告し、その際「若し私にエヴェレストに行く機会がさらに与えられるなら、もういちどティルマンの指揮下で行きたい」と述べたそのロイドの言葉である。

— 著者のティルマン観 —

ティルマンの如き人物を、ひとつのパターンのなかに閉じ込んで、規定することはできない。登山家探検家そして世界を知り尽くすために旅そのものを目的として活動した古典的な意味での旅行家トリッパー、そのすべてのコンビネーションであらう。ヘロドトス、——ティルマンは、彼と著しく似ている。つまり癒すことのない好奇心のかたまりだったので。二十世紀最大の一匹狼の探検家だつたと言えまいか。この著者の言葉に対して、紹介者は、英国あるいは西欧文化からはみ出た、管理社会、工業化、大都会とは氣質的に相容れない反俗的なアウトサイダー的人物とも云えるのではないか、とつけ加えたい。

上高地の一夜

——ノエル・E・オデール氏に聞く——

1

雨あがり——。

梓の川面を心地よい風が渡っていく。ウィークデーとあって、初秋の上高地は、夏の喧噪を忘れたかのようにひっそりとして、みずみずしい空気に満たされている。

穂高の山嶺にはまだ灰色の雲がひっかかっているが、川辺の小径には、ときおり雲間から陽光が差しはじめ、木洩れ陽が疎林の下生えを、やわらかく光らせている。

点在する水たまりを気にするでもなく、この静寂のなかに、悠然と歩を運ぶ人影がある。右手には頑丈な造りのステッキをつき、首から下げた小型のカメラには、いとおしむように、し

池田常道

っかりと左手が添えられている。

ノエル・E・オデール氏。あと三カ月で九十歳になろうという、英国の老ヒマラヤニスト。氏は昨年九月、日本山岳会の招きで日本を訪れ、ここ上高地に数日の旅をした。

あいにくの秋雨にたたれて肌寒い日々がつづいていたが、この日はようやく晴れ間が訪れ、河童橋からウェストン碑をめぐって田代橋へと、短い散歩を楽しむことになったのだった。

オデール氏は一九二四年と三八年の二回、エヴェレストに遠征している。一九二一年から第二次大戦直前まで、七次にわたる英国隊のエヴェレスト挑戦は、この山の長い登山史のなかでも、多くのエピックを生んだが、とりわけ一九二四年の第三次遠征は、マロリーの死というドラマのためによく知られている。このときオデール氏は、マロリーとアーヴィンが不帰の登

攀に出発し、北東稜を登っていく姿を雲間に目撃した。

この、あまりにも有名な遭難は、すでに多くの文献（ノートン『エヴェレストへの闘い』など）に述べられているが、いくつかの疑問を残しているのも事実である。そのなかで最大のもの、彼らは果して、エヴェレストの頂に立ったのかどうか、ということである。

二人を最後に見たオデル氏は、貴重な証人であるわけだが、このほかにも氏は、一九三六年にティルマンらとナンダ・デヴィに登頂するなど、戦前のヒマラヤで活躍した人として知られている。当時のヒマラヤ登山や英国登山界、それにブルース將軍やノートン、ソマヴェル、ティルマンら錚々たる登山家たちをぢかに知っている人物として、登山史の生き証人ともいべき存在である。

私が、オデル氏のことについて、ここ上高地までやってきたのは、これらヒマラヤ登山史上のエピソードを氏から聞き、それを雑誌『岩と雪』に書くためだった。

私たちは一行七人。上高地でのオデル氏の接待を担当している福井正吉、坂本正智、伊丹紹泰の各氏、通訳として同行している吉川みどりさん、そして取材のためにやってきた武藤昭カメラマンと私である。

本格的なインタビュアーは、この日の夕食後に予定されてい

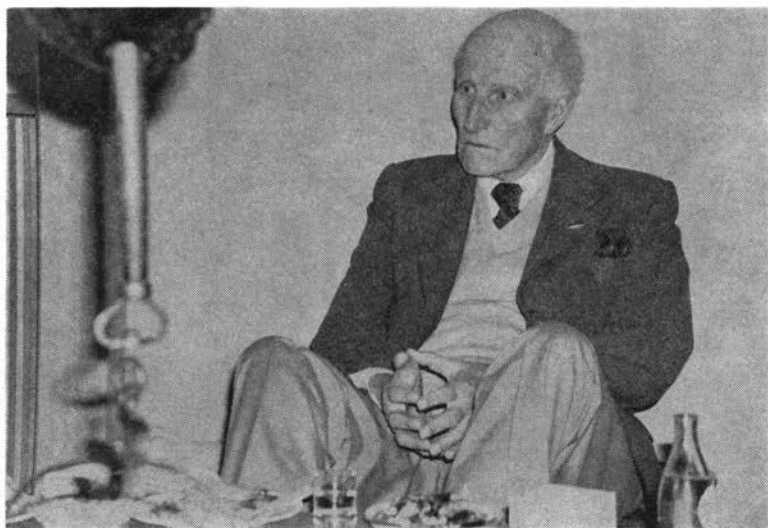
た。私たちは、ひとまず宿舍の五千尺にもどり、軽い昼食をとってから、明神池まで足をのぼすことになった。

「私は、スモール・ランチがいい」というオデル氏のことばにしたがって、お茶とトーストで済ませる。私たちはコーヒーとチーズトーストを頼んだのだが、オデル氏は紅茶とトースト、そしてチーズはパンといっしょに焼かずに、別に添えてくれるように、と注文した。ふだん街の喫茶店などでもよく口にしていて私たちは、チーズトーストといっても別に異和感はないが、考えてみればこの代物は、ピッツアの代用品のようなもので、英国紳士たるオデル氏の好みではないのかもしれない。

ふたたび宿舍を出るころは、いつしか雲がひろがって、ときおり雨がバラつく、うつつうしい空模様にもどっていた。

オデル氏は雨具をとり出して身につけ、五千尺の名が入った大きな番傘をさしてゆく。地質学者である氏は、路傍の大岩にも立ち止まって岩質をしらべ、穂高の峰々は、これと同じ岩で構成されているのか、と質問したりする。晴れていたたら徳沢か横尾まで足をのぼして、穂高の代表的な岩壁群を見てもらうこともできたのだが……。

道すがら、話はウエストンのことになった。オデル氏は若いころに、ウエストンがロンドンで行なった日本アルプスのスライド講演を聞いたことがあるとかで、その曽遊の地を訪ねる



上高地、五千尺旅館にて

ことができたのには、ことのほか満足しているという。

それにしても、夏の最盛期と紅葉シーズンの狭間の、静かな上高地で本当によかった、と私たちは思ったことだった。

明神池には、誰もいなかった。薄い霧が水面にただよい、まだ緑濃い明神岳の山脚が、影絵のように浮かんでいる。

「京都では、どこか寺の庭をごらんになりましたか？」

「残念ながら時間がなくて」というオデール氏は、つづけて「でも、このような落ちついた風景をながめていると、話に聞いていた禅の庭が、なにを意図して作られたのか、よくわかるような気がします」

水ぎわの石に腰を下ろした氏の足もとに、古い煙草の吸殻が落ちていた。ふと目をとめた氏は、ステッキの石突を使って、丹念にそれをほぐし、岸辺の砂に混ぜ合わせて目立たなくすると、ふたたび、やすらかな視線を湖面にもどした。なにげないが、ひどく印象に残る動作だった。

嘉門次小屋に立ち寄って、嘉門次が愛用した村田銃や、ウエストンから贈られたというアルペンストックを見せてもらったあと、五千尺にもどったのは、すでに夕暮れどきだった。

夕食のテーブルをともにしてから、私たちは、五千尺のロビーの脇にある、囲炉裏の切っである和室に移った。床柱を背にオデール氏が坐り、その前に居流れるように私たちが座を占めて、話を聞くことにする。

オデール氏は、エヴェレストに行く前は、どんな山行をして
いたのだろうか。

氏は一八九〇年の十二月二十五日、クリスマスに生まれてい
る。名前のノエルはそれにちなんでつけられたものだ。山登り
をはじめたのは十六、七歳のころとか。クラツグスマンだった
学校の先生につれられて、レイク・ディストリクトでの岩登り
に行ったのが初体験だった。

この先生の影響で岩登りがおもしろくなり、やがて自分自身
のクライミングを志すようになった、という。

最初のアルプス行は、しばらくあとのことだった。伯母につ
れられてアルプスへ行き、そこでアルパイン・クラブの会員に
出会った。彼がトリオレ、アルジャンティエール、シャルドン
スなど、より大きな山へつれていってくれたのだという。

本格的な氷雪技術は、スイスのガイドについて習った。彼は
ママーリーのガイドをしていたアレグザンダー・ブルゲナーの息
子だった。ガイドレス登山をはじめたのは第一次大戦のあとだ
った。

アルプス以外では、ノルウエーとスピッツベルゲンで登山を
した。ケンブリッジに進んで地質学の勉強をし、一九二一年に

スピッツベルゲンの完全横断を目ざしたが、果たさなかった。

「エヴェレスト行は、誰にさそわれたのですか」と訊くと、

「そう、さそったといえれば自分自身でそうしたといえるでしょ
う」

つまり、それまでの登攀歴を評価して、アルパイン・クラブ
の委員会が氏をえらんだのだ、という。二年前、一九二二年の
ときにも声がかかったが、そのときはまだ地質学の勉強があっ
たのでことわったということだ。

一九二四年のとき、氏は三三歳。アングロ・ペルシャン石油
会社に職を得ていた。アルパイン・クラブからの知らせで休暇
をとり、直接ダーズリンにおもむくと、そこにはブルース将軍
が待っていた。

「将軍はすぐれた運動家アスリートで、クリケットの名手でした。彼がい
きなり現地語でポーターたちをピック・アップするのを見て、
びっくりしたものです」

ほどなくノートンらも到着し、隊の準備ができるまでの間、
一行は農園主の家で「ラケット」をしてときをすごした。

キャラバンの途中、ブルース将軍が病気で断念し、指揮はノ
ートンがとることになった。「ノートンは、六フィート三イン
チか四インチもある大男で、私よりも背が高かった。アルプス
での登山経験も多く、すぐれたリーダーの素質をもっていまし
た。彼は山で狩猟もよくし、シャモアを狩っていました」

ノース・コルに第四、二万五〇〇フィート（七六八三メートル）に第五、そして二万六七〇〇フィート（八一四〇メートル）に第六とキャンプを進めた一行は、ノートンとソマヴェルによる第一次攻撃隊を送り出したが、八五七二メートルで断念した。

「シエルバたちの荷上げについて上下行動をしているうち、私たちは、かつて誰もなしえなかったくらいよく高度に順応していました。しかし、唯一の問題は喉の痛みでした。チベット高原のホコリっぽいキャラバンで痛められた喉は、高所の寒気と乾燥のために、いっそう悪化したのです。とくにひどかったのはソマヴェルとアーヴィンでした」

ソマヴェルは途中で喉の痛みに負け、ただ一人先へ進んだノートンも、大ターロワールの所で敗退したのだった。

「ノース・コルに下ってくる二人を、私はマロリーとともに出迎えました。ノートンもひどい雪盲にやられていて、二人ともふたたび山上へもどれないほど疲労困憊していました」

第二次攻撃はマロリーとアーヴィンによって、酸素を用いて行われることになった。

「当時の酸素装置は一つのセットで三十三ポンド（約十五キログラム）と非常に重いものでした。故障も多く、山の上では役に立たないような代物だったので。しかし、アーヴィンが一生懸命修理して、二つのセットが使えるようになったので、マ

ロリーは残されたチャンスをそれに賭けようとしたのでしよう」

マロリーは一貫して酸素反対論者だった。当時、高所での酸素使用をすすめていたのは大多数が科学者や登山の素人だったという。

「たとえばジョフリー・ブルースです。彼はブルース將軍の甥ですが、登山家ではなく、輸送担当の将校でした。一九二二年のとき、マロリー、ノートン、ソマヴェル、モーズヘッドが二万六七〇〇フィート（八一四〇メートル）で断念したあと、フインチが第二次攻撃をかけようとしたのですが、もういっしょに行く相手はブルースしかいなかったのです。彼らは二万七三〇〇メートル（八三二三メートル）まで達しましたが、ブルースはそのときがはじめての『登山』だったので、すっかり酸素の効用の信奉者となってしまうたのです」

ノートンとソマヴェルが失敗したあと、つぎの攻撃に強力なペアを編成するとすれば、当然、マロリーのパートナーはオデール氏になるはずだった。マロリーが若く経験の浅いアーヴィンをえらんだのは、私たちにとつてもいささか疑問に思えたのである。

「マロリーは私にいました。『クライマーとして君はアーヴィンよりすぐれているが、酸素装置を修理する職人^{メカニック}としては、彼のほうが適任だ』と。そこで私は、できるだけだけのサポートを

するから、と彼に伝えたのです」

そして、彼らから一日遅れで北東稜を登ったオデール氏は、六月七日に第五キャンプ、八日に第六キャンプに入る。十二時五〇分ごろ、二万六〇〇〇フィート（七九二三メートル）の付近で、約六〇〇メートル上方のステップを二人が登っていくのが見えた。雲の切れ間に一瞬目撃しただけだったが、結果的にこれが、二人の最後の姿となったのである。オデール氏によると、はじめ二人がいたのは第二ステップだと思ったが、あとでよく考えると第一ステップだったという。二人が登頂した可能性について訊いてみた。

「おそらく、頂上に立ったと思います。（注・I think may have.）しかし下降中になにかまずいことであって、帰ってこれなかったのだと思います。私が雲の間に彼らの姿を目撃したときは、予定よりずっと遅れていたのですが、おそらく、かなり遅くなって頂上に着き、下降中に暗くなったために事故になったのではないでしようか」

第六キャンプで約一時間、二人の帰りを待ったオデール氏は、彼らもどって来たときの寝場所をあげるために、単身ノース・コルに下った。その夜、山上には光も見えず、二人からのなんの信号もなかった。

翌日、ふたたび第五キャンプにあがった氏は、マロリーとアーヴィンの消息を求めて十日、第六キャンプに行ってみたが、

テントは二日前に氏がそこを去ったときのままになっていた。

「雪の上にスリーピング・バッグをTの字に置いて、二人が帰っていないことを知らせました。それが、ノース・コルにいるハザードと私の間でとりきめたサインだったのです」

それから九年たった一九三三年、第一ステップ近くの稜線の下で一本のアイス・アックスが発見された。ヒュー・ラットレツジ隊のP・ウィン・ハリスとL・R・ウエイジャーが見つけたもので、これはマロリーのアックスとして長くアルパイン・クラブに飾られていた。

「あれは実はアーヴィンのものだったのです。シャフトに刻まれた三本の線は、アーヴィンの他の持ち物にもあり、彼が自分の装備につけていた印だったので。彼の長兄のヒュー・アーヴィンは私への手紙のなかで、弟の遺したスワッグ・ステッキにも同じ印がついている、と書いています。ところが、ウィン・ハリスは、あれはポーターが帰りに、自分の主人の持ち物を他と区別するためにつけたのだと主張し、マロリーのものだということになってしまっていたわけです」

また、一昨年の秋、日本山岳会の偵察隊に参加した長谷川良典隊員は、中国人協力員の一人が七四年に、八一〇〇メートル付近で英国人の遺体を発見した。と語るのを聞いた。マロリーの遺体ではないか、と一時は大きくさわがれたものだが、オデール氏はこのことについて、ずいぶん質問されたらしい。

「私はちがうと思います。頂上に立った彼らがそんな地点まで下りてきていたならきつと生きてキャンプに帰れたはずです。

あの夜は嵐もなかったし。それに、その中国人が英国人とロシア人を区別できたとは思えないのです」

と氏は語り、一九五二年にソ連隊が六人遭難したといわれていることを付け加えた。彼らのうち二人はかつてロンドンを訪れたことがあり、そのときオデル氏は遭難のことを訊いてみたという。

「英語のできるほうの一人に訊くと、彼はあわてて仲間のところに行き、二人でなにか早口のロシア語で相談していました。私はロシア語がわからないのですが、やがてもどってきた男は、『ノー』と私にいうのです。なにか重大な秘密があるかのような雰囲気でした。ロシア人たちは八一〇〇か八二〇〇くらいまで登ったといわれているので、中国人が見つけたのは、そのうちの一人ではないかと思えます」

最後に、マロリーとアーヴィンの運命に関するオデル氏の推測を訊くと、

「あとで出たトニー・ハーゲンの本に載った写真を見ると、第二ステップのキャンション側は氷雪がついていて巻けることがわかりました。彼らは下山中に、キャンション側へ転落したものと思われます。二人の遺体は永久的に見つからない、と私は思っています」

熱爛の酒を飲みながらのインタビューも終わりに近づいていた。マロリーの話を語り終えると氏は、ふと遠くを見るような表情を浮かべた。五十余年も前の、あのエヴェレスト山上での記憶を、反芻していたのだろう。

まだまだ訊きたいこともあったが、この夜はこれで切りあげることにした。明日、氏は東京にもどり、数日後には帰国の途につく。

△付記▽

このあと東京にもどった私は、吉田宏氏のオフィスにオデル氏を訪ね、約二時間、吉田氏をまじえて懇談した。一九三六年のナンダ・テヴィ、一九三八年のエヴェレスト再訪や、カナダ、アラスカの登山と探険など、氏の長い登山歴のなかで語られるエピソードは、たいへん興味ぶかいものだったが、それらについては、また別の機会にしたい。

追悼

大木 操氏（一八九一—一九八二）

終戦後のある日、一高旅行部のOBの会である縦の会が北寮二七番の部室で開かれた。このとき旅行部の創立者であり、世話好きの日高信六郎氏が「自分は縦の会で神武的な存在になっているようだが、久し振りに出席された傍らの大木操先輩は、旅行部の前身である一高山岳会を創設した神代の存在である。自分達は守島、大木、両先輩のことをイザナギ、イザナミの命と愛称して来た」と紹介された。私はこのとき初めて大木操氏にお目にかかった後輩の一人である。このような先輩の追悼文は、当時山行を共にした仲間の方が記されるのが当然であるが、既にして亡くなられたり御病気であったりしたため、縦の会幹事がこれを引受けることになったものである。

大木操氏は明治二十四年東京四谷に生を享けられた。府立四中時代から写真の趣味があり、度々登山と写真の両目的を兼ねた旅行をされ、富士山や御岳にも登られた。やがて小島鳥水の『日本アルプス』や辻村伊助の欧州アルプス幻燈映写等に接す

るに及びいよいよ山への憧憬を深められた。

明治四十三年一高に入って暫くは陸上運動部に属しておられたが、寮で同室の守島伍郎氏等と天城山や赤城山、木曾駒等に出かけるようになってすっかり山のとりこになった矢先、大正二年六月初旬、二高山岳会が北アルプスを踏破するとの記事を見て、一高にも山岳会を作る必要を痛感し、両氏が中心となって六月二十八日一高山岳会の発会式が行われた。

その翌年日高信六郎、中塚發巳男、又木周夫、上条秀介氏らがこれを校友会の一つの部として公認される会に発展させることを試み、大正三年三月、名前も新たな一高旅行部が設立されたのである。

この間の大木操氏の主な山歴は次のようなものであった。大正元年九月、守島、日高、末弘巖太郎、秦豊吉、倉田百三氏等と男体山に登山。翌大正二年七月から八月にかけて一高山岳会の幹事として久能木慎治、山口成一氏等と北アルプスを歩き、燕―常念―槍ヶ岳の縦走の後、焼岳、前穂高岳、白馬岳に登山。大正三年七月から八月にかけて単独で冷沢―鹿島槍―八峰キレット―五竜岳―大黒鉱山―鐘釣温泉―初沢と歩き、三ノ窓から初へ登ろうと試みた後、立山、五色ヶ原、針ノ木峠を経て大町に下山。同年十月には守島、日高両氏と甲斐駒から雪の仙丈岳に登られた。

槍ヶ岳肩の小屋で木暮理太郎、田部重治氏と出会った話や、上高地清水屋に滞在中、夫妻で槍登頂を目指して偶々同宿していたウエストーン氏から「奥さんあしたの山に登ります。静かにし

「下さい」とたしなめられた話、あるいは前穂頂上で鹿子木員信、茨木猪之吉、辻莊一氏等と記念写真をとった話などは会報『山』の三九七号や四〇四号にも出ていて有名である。また大正三年七月二十五日、音沢村の案内人佐々木助七と二人で三ノ窓に向い、劔頂上への新ルートを開こうとされたが、三ノ窓コルで天候が悪化し、止むなく岩蔭に名刺を埋めて引返された。

これは登山者としての三ノ窓初登であったようである。このあと七月二十九日には長次郎雪溪から劔岳に登られたが、この時は伴野清、大島永明氏等の一行も行を共にした。

当時日本山岳会々員の梅沢親光氏や辻村伊助氏は一高の近い先輩であった関係で、一高山岳会では高野鷹蔵氏や河田黙氏あるいは小島鳥水氏の協力を得て講演会を開く一方、大木氏等は次々に日本山岳会に入会された。そして木暮理太郎、田部重治、武田久吉氏らのお宅によく押しかけて、地図を部屋一ぱいに拡げ遅くまで山談議にふけるのが何よりの楽しみであったということである。このような関係でその後も縦の会には武田久吉先生をはじめ田部重治氏、冠松次郎氏も出席され、いろいろ珍しい山の話などして頂けたのは誠に幸せであった。

さて以上の山行に当り、大木氏は暗箱写真機とカビネ乾板を携行して数々の写真を撮影し、帰宅後慎重に現像水洗の上、段ボール箱に収納されるのが常であった。しかも震災にも無事であり、戦災の際には、大木氏自らこの段ボール箱を抱えて避難されたため奇蹟的に無瑕の俣、現在まで伝えられることになった。そして昭和五十一年には、これらの写真乾板一八〇余枚は

説明文付で日本山岳会に寄贈された。現在ルームや山研の壁にかけられている河童橋上のウエストン夫妻と嘉門次の鮮やかな写真もこれを焼付けたものであるが、お蔭で私共は大正池が出来る前の焼岳の様子や五童岳頂上の当時の三角点、あるいは円太郎馬車の様子なども知ることが出来る。

このように山に夢中であつた大木氏も、大学二年の時御尊父の保爾氏が突然逝去されるに及び、家庭の諸事情でこれを諦めざるを得なくなつた。そして卒業後会計検査院に入り、つづいて衆議院に移ると共にますます多忙となつて一層山から遠のいて行かれた。つまり今度は公務にすべてをかけられたのであつて、その模様は著書『激動の衆議院秘話』第一法規昭和五十五年刊や『大木日記―終戦時の帝国議会』朝日新聞社昭和四十四年刊に述べられている通りである。このため縦の会にも無音となり、日本山岳会も昭和九年に退会されることになった。また山の乾板など絶えて開くこともなかった。このため原版は現像処理が十分であつたせいもあつて理想的な状態で七十年近く完全に保存されることになつたのである。

大木氏は東京都副知事の任期を終えた後、暫く全国選挙管理委員会などに属しておられたが、その頃から再び縦の会にもよく出席されるようになった。偶々昭和四十一年、黒田正夫氏が主唱して、一高旅行部の創立五十年を記念する文集を作ろうという話が持上つた際、大木氏は進んで編集委員を引受け、毎回委員会に出席された。さらにこの文集に、若い時から丹念につけた日誌をもとに数々の原稿を寄稿された。これら正確な山行

記録は、山岳史としても意義のあるものである。(一)高旅行部縦の会編『一高旅行部五十年』昭和四十三年刊二四五頁、『失し山仲間』昭和四十七年刊一五五頁、『一高旅行部の足あと』昭和五十三年刊一八五頁 参照)

また昭和四十九年三月には藤島敏男氏が司会した日本山岳会の山岳史懇談会「一高旅行部」に日高信六郎、中塚癸巳男氏等と共に出席し、山の話を中心にしていかにも楽しそうにされた。昭和五十一年二月に日高信太郎氏の世話で山岳会に復活入会されたが、その時の喜びは会報三七五号に記されている通りである。

しかし山行は最早や実行できないお年だったので、その後はお嬢さんと共に中房温泉とか黒四ダム、上高地、鐘釣温泉など曹遊の地に山を眺めに行くのを楽しみとされた。次の二首は山への限らない愛情がよく表われていると思う。

大町にて (昭和四十一年十月十七日)

夕闇に鹿島槍岳垣間見て

初恋のごと慕情溢るる

上高地にて (昭和四十一年十月十九日)

河童橋姿撮せしウエストン

今碑となりて岩肌に笑む

それでもさすがに足はなかなかお達者であった。会合場所への駅からの往復は勿論徒歩であったが、満員の国電に乗る際などよく「座席の世話は要らないよ。それより誰も座席など譲ってくれよう」としないからよく見ていて欲しい」と自慢された。

実際乗車して観察していると八十を過ぎた大木氏が電車の中央で吊皮につかまっけていても誰一人席を立つ者はない。そして次の駅で六十そこそこのおばさんでも乗ってこようものなら、必ず若者が席を譲るのが常であった。しかしそれ以上に、私などは大木氏の判断が最後まで少しも鈍ることなく正確無比であった点に心から敬服している。

この頃大木氏は何度も「残り少ない自分の余生は山にかけたと思う」と話しておられた。親子程年の違う間柄であったにも拘らず、山の話や議論をしても全く対等に会話を楽しんだり、熱中したりできたのは、一重に大木氏のこの山に対する愛情と、判断の適確さ、記憶力の確かさによるものであった。衆議院を中心としてお仕事と、その前と後の山との深い関わり合いこそ、大木氏にとって生涯を通じての大きい二つのロマンの対象であったのであろう。これらに全身全霊を打ち込み、心ゆくまで満喫されたその一生は、周囲の人をも明るくする全く悔のない幸せなものであったといえる。

一昨年の秋、私共山仲間は上高地で米寿のお祝をしようと計画を立てたが、同年八月大腸の潰瘍手術のため入院されお流れとなった。しかし昨年の十月十八日、大木氏が満八十八才の最後の日に、西堀会長や辻氏その他山岳会や旅行部の有志が集って、東京で米寿と前記四七二頁に及ぶ『衆議院秘話』の出版をお祝いする会を開くことができたのは幸せであった。

病名は表向きは潰瘍となっていたが、本当は癌であったらしい。このことは大木氏自身どうやら自覚されていたようであ

る。本年六月私共が帯那山、水ヶ森、黒平峠のから帰った旅時、再び病状が悪化して杏林大学付属病院に入院されたと同つた。そこで早速お見舞に出かけ旅の報告を行なった所、大木氏は一高生の頃御岳昇仙峡へは甲府から歩いて出かけた等と当時の話をしばしされた後「今度辞世の歌が出来たよ」といつて次の二首を二度ゆっくり朗読して下さった。

生れしより幸福に満ちたる九十年

現世を思うことさらさらになし

ただ一つ北の峯々仰ぎ見る

すべなきことぞ悲しからずや

辞世の歌と聞いて、私共は言葉も出ず黙って佇んでいたが、これらの歌には大木氏の悔なき生涯、山への愛情、心の暖かさが凡てこめられており、私共も今後生きられるとすれば、このような生き方でありたいと思うような歌であった。そしてお通夜の日に拝んだお顔は将にそれに相応しい穏やかなものであった。

御遺族のお話によれば、戒名も既に生前自分で考えられ、お寺とも相談して修正の上、作っておかれたということである。ここにも山への憧憬が最初に掲げられ、大木氏の一生を貫いた意欲と安心がうかがわれた。

戒名「瑞岳院芳著操節居士」

今は大先輩でもあり、敬愛する山仲間でもあった大木氏の御冥福を心からお祈り申し上げるばかりである。

略 歴

明治二十四年（一八九一年）十月十九日 東京四谷左門町に生れる。

明治四十三年（一九一〇年）十月 第一高等学校独法科に入学。

大正二年（一九一三年）六月二十八日 守島伍郎氏らと一高山岳会を創立。七月、日本山岳会入会（会員番号三二五号 紹介者 辻村伊助、

棉沢親光）。

大正六年九月 東京帝国大学法科卒業、会計検査院書記—副検査官。

大正十二年 衆議院書記官。

昭和九年 政務多忙のため日本山岳会退会。

昭和十三年 衆議院書記官長（事務総長）。

昭和二十年 貴族院議員。

昭和二十二年—二十五年 東京都副知事。

昭和五十一年二月 日本山岳会復活入会。

昭和五十六年八月十三日午前七時三十五分、心不全のため杏林大学付属病院で死去、八十九才。

（中村純二）

昭和三十一年に私は故沼井鉄太郎氏の紹介を得て、日本山岳会に入会した。その頃、私は東京都立の戸山高校（前身は府立四中）の教員をしていたが、沼井氏が偶然に府立四中の御卒業だったので、何の機会かに私は沼井氏に向って「府立一中には武田久吉、梅沢親光、山川黙氏というような登山界の先覚者で本会の創立者がいるが、府立四中には著名な先輩はいないのですか？」というようなことを尋ねた。沼井氏は即座に「大木さんがいますよ。大木操という人です」と答えられた。私はその

頃、山岳史の知識もなく大木さんという方が、登山界でどのような記録を残され、どんな仕事をされた方かも知らぬままに何年か経過した。

ある年、私が府立四中、戸山高校の同窓会総会に顔を出したとき、胸に大きな花の徽章をつけた、温顔の老人にお会いし、その名札に「大木」と書いてあるのに気がついた。この方が、大木換さんだなどと思って、自己紹介しながらお話ししたのが、初めての機会であった。大木氏は東京都の副知事をされていた方で、同窓会にも力を尽され、その日はなかなかお忙しそうであった。多分同窓会の方も副会長が何かの役をされていたのだろう。私の方から山の話を持ちかけると、「山はずいぶん昔に歩いただけで、ずっと離れていますので」と遠慮がちに昔話をされた。「大学にいったら、からだが大きいというだけの理由でポート部に引っぱられちゃってね」とやや恥かしそうに、しかし絶えず笑みを浮かべながら話を続けられた。その後も何回かおめにかかる機会があり、大木氏が初の三の窓の初登攀者であり、大正初期の山の写真をたくさんお持ちのこととも知るようになった。

いつか、この貴重な山の写真を拝見したいと思ひ、お宅に伺うことを約束しながらなかなか果せず、ようやくお訪ねできたのは昭和四十八年の秋頃であった。井の頭公園の森もほど近い大木氏の吉祥寺のお宅に伺ったとき、私の不躰の質問にも終始にこにことしながら答えて下さり、数々の山の写真をゆつくり拝見することができた。写真はほとんどガラスの乾板で、これ

を山に運ばれて撮影された苦労話もいろいろとうかがうことができた。そして「こんな写真、私持っていますも仕方ないから、いづれ山岳会に寄贈しようと思つているんです。私も一高の頃日本山岳会に入会して、しばらく会員だったんですよ」と静かに語られた。

私は大木氏に何とか山岳会に復帰していただきたいと思うと同時に、大正初期の劔岳ほかいろいろの登山のお話を聞き出して、会報にも載せられたらと考えていたが、それは意外にも早く実現した。昭和四十九年三月に行われた山岳史懇談会に、大木氏が出席して下さることになったのである。三月十三日の懇談会の席では、大木氏は日高信六郎氏初め旧一高の山仲間とともに実に楽しそうに山を語られていた。

これを機会に大木氏は、急速に山への情熱を取り戻され、復活会員として日本山岳会に再入会された。そして会誌に筆をとられたり、山岳会の会合に顔を出されるようになられたが、そのときのお顔色は健康そのものであり、いかにも楽しそうであった。山岳会が現在のルームを得て移転したときの祝賀会にも元気に顔を出されていたことも昨日のように思い出される。

大木氏が実際に山に登られていた期間は短かったかも知れないが、ポートを漕いでおられても、官庁にその身をおかれても、氏の心はいつも山にあつたのではなからうか。「あなたのおかげで、私もまた山岳会の会員になりましたよ」と挨拶されたとき、大木氏のお顔はほんとうに嬉しそうであった。氏の山岳会への復活は、日高信六郎氏の橋渡しで、私はずっとより何の

努力を払ったわけではないが、私にまで御挨拶される謙虚さに頭が下がったと同時に、山岳会に復帰されてほんとうによかったと思った。その後大木氏は七十年前に写された数多くの北アルプスの写真を整理されていた御様子だったが、一枚一枚の写真に、若き日の楽しい思い出をかみしめ、回想されていたに違いない。

あの温顔にもう接することもできず、山のお話を訊ねる機会もなくなった今となると、八十九歳の御高齢とはいえ、まだまだお元気でいていただき良かったと思う次第である。

御冥福を祈ります。

(春田俊郎)

小池新二氏(一九〇一〜一九八一)

小池さんは日本山岳会に昭和十二年に入ったが、それより遙か前の大正八年秋に霧の旅会に加わっている。その会員番号は十六番といわれ、新二少年は東京府立一中に在学中のことだった。

したがって当時のことは霧の旅会の大先輩である山崎金次郎、野口末延両氏が、よく知っておられ、野口さんは紅顔の新二少年と山行とともにされている。山崎さんは『山』第四三三号に寄せた「岳友・小池新二氏と悼む」で、会誌『霧の旅』

への小池さんの寄稿について詳述された。

この山崎さんの追憶によると、同誌への最初の寄稿は、大正九年発行の第四号に掲載された「小仏峠と石老山」「上信国境」の二篇である。これらは中学生時代の執筆であるから、山への開眼は、登山の先輩も多い府立一中の伝統もあってか非常に早かった。そして小池さんは高校進学にあたって、当時創立三年目の旧制松本高校を選んでいる。もちろんお目あては信濃の山であつたにちがいない。

松高での登山活動については不詳であるが、ここでは小池さんは良き山友に出会っている。二年先輩の酒井由郎氏がそれで、酒井氏は長岡に生まれて山とスキーを愛し、近くに新潟高校が創立されたにもかかわらず、新しい松本高校を目指した人なので、小池さんと意気投合したのは当然であつた。酒井、小池両氏らを中心にして松高山岳部が創立され、会誌『わらぢ』が発刊され、編集は小池さんが担当した。

酒井氏は昭和十九年に惜しくも戦没されたが、令息由春氏が追憶集『三角岩』に寄せた「父・酒井由郎」によると、この『わらぢ』は大正十三年に第三号を出して廃刊となつたという。「三号で終わったのは、恐らく編集者の小池氏の卒業によるものであろう。ちなみに、松本高等学校では戦後、同誌名で続刊されたという」とも付記されている。これによつても小池さんが松高山岳部の創成期に残した足跡が鮮かに示されている。

酒井氏との関係は、さらに東京帝大へ進んでからも続く。同

大学で哲学、心理学科から独立したばかりの美学科へ、酒井氏の進んだコースを小池氏も追うことになる。芸術愛好の士であった酒井氏は大正十四年みずから雑誌『山を思う』を創刊。これも三号雑誌におわったものの、由春氏によると同誌は、「哲学的と言ってもよい追求の仕方であらうと山を追求し、山に登り、山を思う過程から、話題はさらに展開し、文学にも芸術にも及ぶ」という、いわば思想雑誌としての性格をもった同人雑誌であった」という。

この雑誌の刊行については、江口定條氏の質金援助に負うところが大きかった。江口氏は一橋大学の前身東京高商の出身で、当時の三菱財閥の重鎮であり、のちに満鉄副総裁、勅選議員などを歴任したが、生涯山を愛し、吉沢一郎氏なども誘って登られている。とくに中房の赤沼千尋氏をたすけ、燕山荘建設にも肩を入れ、同地域へは八十歳近くまで出かけており、酒井、小池氏らとも、赤沼氏を通じて知り合ったといわれる。その縁で『山に思う』の編集打合せは市ヶ谷の江口邸や都下国分寺の同別邸で行われたようである。

たまたま江口氏の子息である俊助君が北大を出た後、私たちの山仲間に加わったので、昭和初年、その仲介で私は小池さんを知るようになった。その当時の小池さんは、東大の卒業論文に建築美学という新しい学問を輸入した直後でもあり、盛んに海外とくにドイツのパウハウス運動などに現われた建築・工芸の嶄新なデザインを蒐集研究していた。素人なりに、私も同じ興味を抱いていたので、よくそれらの資料を見せてもらった。

後年、千葉大学や九州芸術工科大学で後進の育成に当たる素地は、このころすでに築かれつつあったにちがいない。

小池さんは多才な、そして精励の人であったが、とくに私が感嘆したのは、海外からの資料蒐集に関する手腕であった。どこに秘策があるのか分らなかつたが、貴重な、しかも大部の文献が次々と送られてくるのには舌をまいた。

訳書にドイツのヒマラヤ遠征に関する二冊があるのも、氏の蒐集ルートでいち早く手に入れたためではないか、と思われる。

この訳書二冊を記憶している向きは少なくないと思うが、念のために記しておこう。

『ヒマラヤに挑戦して』

——ナンガ・バルパット一九三四年登攀——

昭和十二年二月一日 河出書房刊

(Deutsche ann Nanga Parbat の訳)

これを右のような邦訳題名としたのは、東和商事が輸入した映画のタイトルにあわせるよう求められたためで、パウ・パウアーの著者の題名とまぎらわしいことを、訳者は断り書きで述べている。

パウ・パウエル著

「ヒマラヤ探査行」

——シニオルチューーとナンガ・バルパット

ドイツ登山家の業績と運命

昭和十三年七月二十日 河出書房刊

右のベヒルトの訳を完了したのち、昭和十二年五月に、小池さんは日本山岳会に入会している。

お互いに晩年、顔を合わせると、進んで話題にされたのは、故長谷川伝次郎撮影の映画フィルムを入手して、その整理に没頭していることだった。長谷川氏が留学した、インドのサンテイニケタンにあるタゴール大学での生活を撮影したフィルムを、東和映画の試写室で見せてもらった。これから次々と続編を見せるとの約束も、ついにむなしくなったのは残念である。

晩年は山に遠ざかっていたものの、直子夫人からのお便りによると、広く世界を旅された模様で、たとえばノルウェーの友人と低山を歩き、北極圏にラップランダーを訪ね、留学中の友人の車でピレネー山脈にわけ入り、またソ連での会議を機に、共産圏をくまなく歩いている。つい行きそびれたアランダスの古都クスコ、カナダ北極圏のエスキモー地域に、心残りを感じていたようだ、と夫人はいわれる。

これらを見ても、その旺盛な知識欲と、多方面にわたる研究心は、老年に入っても一向に衰えることがなかったように思われる。心からご冥福を祈る。

略 歴

明治三十四年（一九〇一）十一月二十三日 父上の北京総領事時代、東京で誕生。

大正八年十一月 東京府立一中在学中に霧の旅会に入会、会員番号一六。

大正十年四月 松本高等学校文科乙類へ入学。

大正十三年四月 東京帝国大学文学部美学科に入学。昭和二年卒業。

昭和十二年五月 日本山岳会に入会。会員番号一七二〇。

昭和十四年 ジャパン・デザインハウス運営委員、横浜、神戸博の企画運営に当たる。

昭和三十六年 千葉大学教授となる。

昭和四十三年 大学設置審議会専門委員、九州芸術工科大学学長に就任
昭和五十二年 右学長を退任、福岡市美術館設立準備委員を委嘱される。

昭和五十六年五月四日 急性呼吸不全のため東京都三鷹市新川の杏林大学付属病院で死去さる。七十九才。

(島田 巽)

吉阪隆正氏（一九一七～一九八〇）

学生時代の吉阪は、これでも日本人かと思えるほど当時の大學生とは、もの考え方も表現方法も違っていた。国粋主義の風潮は大学にも押し寄せてきた時代である。

幼稚園時代、中学生時代とジュネーヴで過した彼は徹底して国際的平和主義を披れきした。天幕の中で他の部員から、何だこの腰抜けめといった攻撃をうけながら、懸命に応戦していた

若いころの姿も鮮かに残っている。

彼はよく寝言をいった。何を喋っているのかわからなかった。寝言はフランス語であった。靴もルックサックもスイス製、彼自身もスイス製といった方が当てていたかもしれない。中学時代には岩登りもスキーも本場で鍛えただけあって、日本のヤブ山しか知らない連中には見られない垢抜けした技術を身につけていた。

日本山岳会には学院のころ私が推薦したと思う。そのころはネパール、チベットは日本人の入れない土地であったが、インドならまだ可能性はあった。立教大学山岳部のナンダコートの成功はうらやましい限りであった。早稲田では海外に遠征しようというまとまった考えはまだもっていなかった。その中で吉阪や私などは国外遠征を強く主張していくのである。

当時の部の正式な名称は、早稲田大学体育会山岳部である。体育会とは大学の正式な機関ではなくスポーツを司る任意の機関であったがスポーツを行う場であった。大学のスポーツであるからアマチュアスポーツである。そのころの早稲田はアマチュアスポーツのメッカの観があった。山岳部だけが何故遅れをとっているのか、若い連中はじっとしていられない気持だった。世の中は暗い方向に急回転を始める。インドに山登りなどといった非国民の代表という烙印を押される行為であった。

一九三八年の暮に、大挙して新高山に出かけたのはヒマラヤ断念記念の山行であった。吉阪は今村正二隊長を助けてマネージャーとして参加した。新高山には穂高の滝谷より標高差の大

きい岩壁があつて、未踏の尾根もいくつか残っていた。これを登るのが目的であつたが、彼はどういふわけか芝の生えた尾根筋を歩くルートを自ら選んだ。

一九四〇年当時庶務担当の理事だった藤島敏男氏から、そろそろ山岳会の会報を手伝って貰えないかという依頼の手紙を受取った。早稲田の部員は大方山岳会に入会していたしトレーニングのない雨の日には虎の門のルームに本を読みに行った。会の大先輩から山岳会の話ときく機会などもあった。その年は私は山岳部の代表委員をやっていたので、部以外の仕事を引受けるわけにはいかなかったが、同輩の吉阪なら私以上に役立つと思うから推薦しますと返事した。会報一〇〇号には時の編集委員の面々の写真がのっているが、かしまつた学生服姿の吉阪の珍しい姿もそこにある。

建築学科に残った彼は戦争が始まったころは大学にいた。私の方は騎甲斐ない廃兵として東京に戻ってきた。そのとき彼は応召して満州にいた。東京は焼野原となつたが、神田の古本屋街は不思議にも焼け残つた。古書会館では月に何度か古書展が開かれていた。終戦の七月のある暑い日であった。そこで彼の父吉阪俊蔵氏に出会う。隆正に嫁を送りとどけるから、一つひやかしてやって下さい、こう父君は言われた。間もなく戦いは終わった。八月の終り吉阪はふく子さんをつれて焼け残つた江戸川アパートの私の部屋に現われた。

戦後のことは記憶から遠ざかってぼんやりしているが、早大山岳部の再建にも、日本山岳会の場合にも彼は顔を出していな

い。建築学科の方がおろそかにできなかったためであろう。日本山岳会はルームは焼け会員は残った。山岳部の方は部室は焼け残ったが部員の姿はそこにはなかった。

私自身はまだ療養の身上だったが、応召していた学生が戦地からぼつぼつ戻ってきた。部室はまたとない憩いの場所であった。山岳部には戦前戦中にやり残した課題があった。目的があったことが復活を早めたといえるが食糧も乏しく装備もない登山には無理があり何でもない場合よく凍傷にやられた。それでも一九五一年ごろには海外遠征を計画するまでに回復していた。そのころ吉阪はフランスに留学し、有名なル・コルビジエの下で働いていた。

卒業後彼と共に山に登り旅をしたのは一九五八年のアフリカ横断である。彼はマネージャーを引受けてくれ、その語学力が大いに役立つ旅であった。日本人はあの大陸に数えるほどしかいなかった。女子隊員がキリマンジャロの主峰キボに登り、彼は今村俊輔をつれてもう一つの峰であるマウエンジに向ったのであるが、帰ってこない。現在見られる簡単な無線機でもあれば何のことはないのだが、下の小舎にいた私は一睡もせず夜の明けのを待った。

その後一九六〇年マッキンレーに隊長として出かける。西南稜の初登頂に成功するのであるが、ある週刊誌に早稲田の隊は頂上に行っていないと書かれる。彼の一行は登頂後悠々とカナダを横断していたのだが大学の体育協議員会でも話題になった。山での初登頂という意味を無智な大学教授に理解させるのに私

は汗をかいた。

建築学科は理工学部の一学科であって、彼も自然科学者の一員かもしれない。然し吉阪はそれ以上に芸術家であった。奔放な芸術家の魂の発露である。時間がどうであれ、他人がどう考えようが問題ではない。先ず自分の心が満たされなければならぬのである。悔を残す芸術家はいない筈である。

一九七〇年、ついに山岳部長を引き上げる。もっと早くから山岳部の責任をとってほしかった。私が表だって手を借すと吉阪の足を引っぱる人間がいたことは山岳部にとってまことに残念なことだった。

四年制の新しい大学制度、これは山岳部にとっては致命的な制度であった。どの部のOBでもやっと思えたらもう卒業だと嘆く。四年の大学生活はあまりにも短い。然し相手も四年でやるゲームなら、たとえ未熟と未熟でもけっこう面白いゲームはできる。自然の山に対しては未熟だけど大目に見て下さいでは通じない。昔以上に錬磨ができるかといえば、やれば部員は一人もいなくなる。構造的な衰退は食止めることはできない。

部長を引受けて初めて一九七九年大谷映芳を隊長とするラカポシ北稜の登山を試みる。これは一つの賭であった。何しろ学生部員は一人も参加していない隊である。この隊を編成し送り出す山岳部長の心境はまことに心苦しかった筈だ。賭は成功しあとに続くものを残した。この成功を土台にして部の名譽の回復を試みる。吉阪―大谷を主軸とする計画を支持するOBは意外に少かったのである。失意の中にK2峰西山稜の計画は練り

上げられた。困難は覚悟の上であった。

聖路加病院のベッドの上でやせ細り苦痛をこらえている姿はいたまじかった。看護のふく子夫人は、八〇〇メートルのキャンプで吹雪かかっている自分を見出しているのだわと胸をつまらせて語られた。いま吉阪隆正は八六一メートルのK2の頂で静かに眠っている。

(関根吉郎)

山に関する著書は、マッキンリー西南稜初登についての『原始境から文明境』(昭和三十六年十一月、相模書房)があり、『山岳』三十七年一月に、フレッシュフィールド「ラウンド・カンチエンジュンガ抄訳」、会報七十四号に「モリス氏の話」、八十三号に「ヒマラヤ八千メートル峰へ遠征隊を派遣するまで」、九十五号に「ポーランド遠征隊の悲劇」、一〇六号「ウエストンを憶う」など発表している。

なお建築家としての生涯は『吉阪隆正・一九一七—一九八一』(建築文化四一六号)にまとめられている。

(山崎安治)

略 歴

大正六年二月十三日 東京新宿で生れる。暁星小学校、ジュネーブ国際学校、暁星中学特別聴講生をへて

昭和十年四月 早稲田大学第一高等学院理科入学。早大山岳部員として、昭和十三年一月、三月穂高岳コブ尾根、昭和十五年一月、三月穂

高明神岳、昭和十四年一月、台湾新高山遠征などに参加、第一線部員、リーダーとして活躍。

昭和十二年二月、日本山岳会入会(紹介者 関根吉郎、鈴木正俊) 会員 番号一六九一番。

昭和十六年三月 早稲田大学建築学科卒業。

昭和十九年、昭和三十年 日本山岳会理事。

昭和三十三年 アフリカ、キリマンジャロ登山、キボで岩登りを行う。

昭和三十四年 早稲田大学第一、第二理工学部教授。

昭和三十五年 マッキンリー遠征。

昭和五十三年 早稲田大学専門学校々長。

追 悼
昭和五十五年十二月十七日 ガン性腹膜炎のため築地聖路加国際病院で死去、六十三歳。

磯野三郎氏(一九一四—一九八一)

磯野氏は昭和七年三月、中学卒業に際し「郷土の山岳と勝」と題して縦一八・八センチ、横一一・九センチの登山案内書を自費出版した。五年間の小槍登攀をふくむ数十回の山行の暇々に書き溜めたものだという。石川県内では最高二七〇二メートルの白山から最低一二メートルの日和山に至るまで、下に「山」の字が付く山々を網羅して余すところが無く、序言ですら四ページに及ぶ内容の濃い労作であるが、巻頭のポートルトを見れば詰襟学生服に、制帽の眉庇を小意気な山型にして被る優しい十七歳の中学生であった。

私は磯野氏と入れ違いで五年前に卒業し、最後の校友会誌の

カートを描き、「スキ一の効用」なる悪文を残したただけだが、当時医学部一年で藪山を歩き廻り、部活動の一端として「金沢から見える山々」というリーフレットを学内に配布して得意になって居た頃だから、後生畏る可きことを痛感したものであった。

銀鞍白馬の貴公子磯野氏は念願の自分の道を往き白山の彼方岐阜高等農林学校林学科に入学して勉学と共に飛騨山系、両白山脈の尾根や谷に親しみ、特に白山北西の目附谷の初登攀に夢を馳せた。

昭和十年三月同校を卒業するや直ちに石川県農林課林務係として勤務、早々に生駒高常知事(台湾山岳会発起人)の識るところとなり、知事と目附谷湖行が企画され同年八月総勢十九名に膨れた一行は谷の中で一大豪雨に遭い失敗に終わったが、二十一歳になったばかりの新卒新入りが勅任官を陣頭に担ぎ出した事実は、磯野氏の人柄と能力とが如何に高く評価されたかを物語っている。

磯野氏は昭和十三年にも目附谷偵察を行ったが、その年の十一月に厚生省体力局国立公園課勤務となり、冠松次郎氏と机を並べた時期もあった。そして戦時色が濃くなった、昭和十六年三月、石川県林務課に復帰した。彼はつとに難解な山名、地名の一部をアイヌ語によって説明を図り、また白山々麓に古くから伝わる「かんこ踊り」の歌詞を採集して五線譜に乗せ、更に遠隔の地方で類似のものを幾つか取り上げ比較することによって「かんこ踊」は即ち「羯鼓踊」であると考証した。

昭和二十年八月敗戦直後、磯野氏は石川県立松任農学校教諭に転出した。金沢市郊外の農林名門校である。三十一歳の若さで着眼が衆に勝ぐれ、頭の回転が速く、有言実行、細心大胆な先生で、札幌の向うを張る気構えであったのか、「よい機会をつかむこと」を、それこそ機会あることに教育したから「チャンス」の愛称を生徒たちから捧げられ、同校山岳部は逸早く日本山岳会石川支部結成に立ち上がったのであった。

第二回国民体育大会に第一回国体登山が実施される準備のため、昭和二十二年一月十七日磯野氏が世話人となり日本山岳会石川支部が結成され、磯野氏宅が事務所となった。その年七月には、松任での教え子を主力とする七名の石川支部員をひきいて彼は目附谷登攀を果して初一念を貫いた。

国体に東京より松方三郎、浜野正男両氏を指導者として金沢へ迎えたが、初めての行事で前例が無く、アイデア一切を地元の磯野氏に委されたので彼は精力的に各方面に活動した。集中登山、分散下降など軍隊用語まがいの新語が彼を苦笑させた。そして十一月に医王山を中心に参加者二百数十名を得て、無事に終了することができた。付随して市中行進、記念講演などの行事もあり、阿部壮次郎支部長以下全員の努力は大きい。磯野氏が居なかつたら成功は覚束なかつただろう。中司文夫、真田昌孝、亀田與三、種村龍夫など古く有力な会員たちは専ら磯野氏個人によって連絡されたものであった。

昭和二十三年には総隊長として白山北方稜線初縦走が、昭和二十四年三月には高体連と合同の隊長として大日山、富士寫岳

縦走が遂行された。これら数次の山行に關するもろもろの渉外折衝には隊長の育ちの良い、明朗な性格と、幅広い面識がソツの無い効果を挙げた。金沢のチャールズ会長で優美な油絵を描かれる錦子夫人と鴛鴦夫婦で一男二女の子宝にも恵まれ、芸術の香高い家庭を築かれ、麻生武治氏や深田久弥氏などと家族全員親交があつた。支部長には年輩者を立て、機関紙『峯』を發行、事務万端を引き受けていたことであつた。

昭和二十六年測量法施行。昭和二十七年に彼は愈教壇を降り個人で測量業を始めたが、自然の林野の測量こそ彼の本領であり、昭和三十年には金沢市に北日本測量株式会社を創立し社長に就任した。

年齢四十一才。商売繁昌のため支部分行の隊長には立てなくなつたけれども海外遠征計画などには外国山岳地図を都合して下さつたり、絶えず適切な助言を惜しまなかつた。そして個人で自由な山行を各地で楽しむことができ、記録をふやしていた。

昭和三十九年三月、私は福井県に転任した。その後二年間磯野氏が支部長を勤め、昭和四十一年四月から小林雄次郎氏が代つた。

昭和四十四年夏、彼は佐藤久一郎氏を隊長とするスイス遠征に二十六日間参加、五十五歳の彼の第二五〇回目の山行である。

昭和四十七年七月、白山三方岩岳が第二六一回の山行。そして昭和四十八年七月、スイス留学中の次女ゆり嬢とデートしたツェルマットの三日間は五十八歳の老いたる岳人の想い出を飾

つたことであらう。

既に東京代々木に東京支所をも設けて隆昌を誇り、石川県測量協会初代会長の榮譽も頭に輝いている。長い間頑張り通した細い身体に漸く疲れが兆した。内臓疾患が次ぎ次ぎと跡を曳いた。昭和五十四年二月十二日、彼は令息洋明君と私の田舎屋敷を突然訪問して、越前海岸の水仙の花を見て帰ると云つた。

そのすぐ後に内灘の医大病院に入院して手術を受ける。「挨拶廻り」であつたのだ。内科病室から見える白馬、立山、薬師、槍、笠、乗鞍岳のスケッチ、外科病室から見える医王、大門、大笠、白山、別山のスケッチは色鉛筆で彩られ、脚註付きで送られて来た。それは五十年前に私が描いたものとそっくりだ。

彼はその年九月に退院したけれども病魔は更に追い討をかけた。不自由な耳でありながら不撓不屈の彼は金沢大学医学部耳咽科教室に事務局を置く「失語症友の会」会長となり、リーフレットを發行して患者たちに氣力と希望を持たせる奉仕に余生を捧げた。

昭和五十六年一月十二日、お花畑のようなご家庭から彼は白雲の外へ旅立つた。

略 歴

大正三年六月二十八日、金沢市に生まる。

昭和七年三月、石川県立金沢第一中学校卒業。

昭和七年四月、岐阜高等農林学校林学科入学。

昭和十年三月 同校、卒業。

昭和十年三月 石川県農林課林務係勤務。

昭和十三年十一月 厚生省体力局国立公園課勤務。

昭和十六年三月 石川県林務課勤務。

昭和二十年八月 石川県立松任農学校教諭。

昭和二十七年 同右退職。

昭和二十七年 測量業自営。

昭和三十年二月 金沢市に北日本測量株式会社設立、社長。

昭和五十四年十一月 同社会長。

昭和五十六年一月十二日 逝去。享年六十七才。

山 歴

昭和七年七月 『郷土の山岳と探勝』自費出版。

昭和十六年五月 日本山岳会入会、会員番号 一九一七。

昭和二十二年一月十七日 日本山岳会石川支部結成。

昭和二十二年七月 白山目附谷初登攀。

昭和二十三年三月 白山北方稜線縦走。

昭和二十四年三月 大日山、富士葛ヶ岳縦走。

昭和三十九年四月から同四十一年三月まで 日本山岳会石川支部長。

昭和四十四年七月～八月 日本山岳会員佐藤久一郎氏を隊長とするスイ

ス遠征隊に参加。彼の第二五〇回山行。

昭和四十五年十月 西穂高独標。第二五五回山行。

昭和四十七年七月 白山循環道路視察。三方岩岳及び姥ヶ瀧。第二六一

回山行。五十八才

(池田知幸)

松本節子氏 (一九三一～一九八〇)

松本節子さんに、始めてお会いしたのは、昭和四十六年五月十五日の、金山平に於ける木暮理太郎先生碑前祭の時でした。彼女は岳友でクラスメイトの千坂雅子さんと共に今朝、新宿を発って、木賊峠を越えて来た、とのことで、山梨支部の山村正光氏に紹介して貰いました。そして、その晩、有居館の奥の茅葺き屋根の大部屋で昔懐かしい石油ランプの下に、支部の会員が集められた、盛り沢山の山菜料理に舌鼓を打っていた時に、折よくも、彼女は持参したウイスキーのホワイトホースの瓶を提供してくれるのでした。そして、彼女は本当に山が大好きらしく、その前の年の暮の十二月十二日にも、この二人で木賊峠を歩いていた時に、山村正光氏に会い、此の日催しに誘われて、参加したのだということでした。そして、明朝は四時出発で金峯山に登り、川端^{かわがは}下にと下ることとで、その晩は愉快に語り合っ

つて分れたのでした。その時以来、彼女は山行の都度、山の便りを下され、又、幾度か山菜を届けてくれました。そのうち、一度こんなことがありました。これから山菜を届けに行くから都合はどうかと電話がありました。その日は誠に都合が悪く、実は、昭和四十九年五月二十三日の私の長男の結婚式のある前日であり、その次の日が名誉会員だった、神谷恭氏の葬儀の友人総代を引き受け

ていて、何かと忙しく、今日はどうしても駄目だと断わつたのですが、その時、彼女は定めし冷たく感じたことと思ひますが、内容をはつきり言えば、いずれも彼女のことだから、何かと心づかいをされては困ると考へての事だったので、後で説明したらよく解つてくれて、彼女としてはその前日まで三日がかりで転付峠から、二軒小屋泊り、千枚岳へ往復し、山菜を沢山とつて来たのに本当に残念だったとのことでした。私もその話を聞き誠に惜しいことをしたと今だに思つています。お亡くなられたあと、彼女の登山日誌を拝見したのですが、それには、その時が彼女の一〇六回目の山行で、昭和四十九年五月十七日の新宿発、二時四十五分の急行で発ち、「車中乗り合せた、中年過ぎのグループが楽しげに、優雅に一杯やつていた。木暮祭の言葉が出る所を見ると、日本山岳会のメンバーかも知れない、明日は木暮祭の日だから。然し私は欠席して千枚岳に登ることになった。」との一項目があり、私の目には懐しく感じたのでした。

此の日誌は、コクヨの硬表紙付の部厚な、赤いノート二冊で各々一六八頁に一杯に書かれ、登山回数は一〇七回の浅草岳と守門岳行きで終つていますが、それは昭和四十九年六月十四日であり、次で此の夏に千坂雅子さんと飯豊山に行つていますが、帰宅後、発病入院手術をしたので、これが山登りのお別れだったので書かなかつたことと思われまふ。この日誌の内容は極めて整然としたもので、コース、タイム、費用、氣候、服装、食糧を掲げ、ついで、途中の情況、草木花鳥の分

布から、その時折りの眺望や、出来事など、誠に情緒細やかに書かれています。第五十回目の山行の項には、木賊峠で、初めて、山岳会の山村さんに会つたことなど誠に山心を誘われるものがありました。第一〇〇回目の山行は、四十九年二月十日で、千坂さんとの同行で大菩薩峠へ登つています。そしてその山行の回数も、誠に盛で四十五年三月から、四十七年五月までの間、二年二ヶ月の内に四十四回にも達する猛烈さでした。

その彼女が入院先の目黒の三宿病院より、お手紙をくれたものですから全く驚きました。退院し暫く静養の後、いくらか元気が出たので多少なりとも山の雰囲気に触れたら気がまぎれはしないかと、その年、四十九年の暮、十二月二十三日の箱根強羅の升友荘に於ける霧の旅会の忘年会にお誘いしたら快く参加され、松本善二、野口末延、鶴岡元之助、牧野衛、松本熊次郎、神奈川甚吉、小林幹三郎の諸氏と共に愉快な一夜を過し、翌日は、富士山を見ようと、彼女と善二氏と私の三人で、わざわざ仙石原に一泊して帰つたのですが、善二氏も小林氏も既に故人となり、強羅の升友荘も今年五月に閉鎖され、淋しい思い出になりました。そして、翌年八月七日やつと特急券が入手出来たので上高地へお誘ひした処、行つて見たいと同行、山研に二泊して帰られたのですが、かつては南アルプスの山々に魅せられて、くまなく歩いた彼女も、今は、穂高連峯を指呼の間に眺めながら、リュックを負えない淋しさをしみじみと感じている様子でした。その日は、丁度、元山岳会事務所のあった本郷のさくらビルの持主の利根川夫人も同宿されており、名古

屋の会員、川北仁氏も、元氣な姿を見せたので、早速彼女に紹介して大いに朗かになって貰い、管理人の津村夫妻ともよく気があって、葉になるといふことで、山で採れた猿の腰掛けなどの話をしていました。そして帰りは、川北氏に松本駅まで同行して貰って分れたのでした。その年の十二月六日の京王プラザホテルで開かれた、山岳会の七十周年記念晩餐会には、彼女は千坂雅子さんと共に、大いに盛装して列席して愉快に振舞われたものでした。

その後、静養をつづけて、すっかり山行とは縁を切っていたのですが、やはり山の話には誘われて、幾度か、お互に訪問し合ったのですが、五十四年の四月、霧の旅会を牧野衛氏の主催で、南アを西から眺められる、しらびそ峠まで、乗物で行ける計画だったので早速お誘いしたら、誠に垂涎の至りだが、とても遠方で二千米の峠では、健康が保てないので残念ながら此度は遠慮したいと断わって来られ、これが山行の便りの最後になりました。そして同年の暮に再び前の病院に入院されたもので、翌年正月、福島県の高湯ひげの家に行った時のみやげ、「吾妻小富士」と温泉まんじゅうを持って、お見舞に行きました所、大変喜んでくれ、翌日不自由な手で誠に丁寧な礼状を貰った。これが最後の手紙になるとは知りませんでした。その後、家の用件のため暫く御無沙汰したので、四月二十八日に御見舞に行ったら、もう意識不明のため面会出来ず、三十日の午前二時に、長い間の薬石も効なく永眠されたとの知らせを受けました。そして翌日、下馬町会第一集會場で行なわれた告別式

には山岳会より西堀会長の御丁寧なる弔電を頂き、山を愛好した彼女に対する最高の、^{はなむけ}餞だったと思います。その後、渋谷区原宿の長泉寺に埋葬されました。

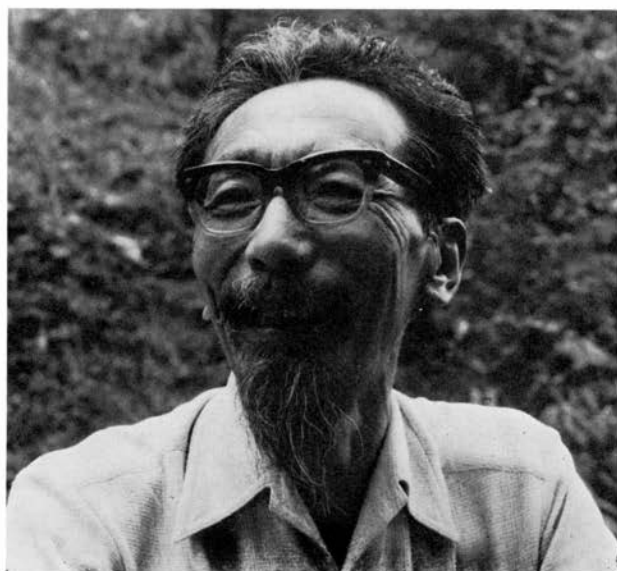
節子さんは昭和六年二月二十三日に渋谷金王八幡の近くで生れ、常盤松小学校を卒業、麻布六本木の府立第三高女（後に学制が変り渋谷に移転して駒場高校となる）に学び卒業と共に東京外国語大学に入学、昭和三十二年三月同校ロシア語科を卒業、直ちに東京熱処理工業（株）に入社五十一年一月に退社されました。その後は療養かたがた、マンションの自室を「ブティック」にして北欧デンマークに定住して画業に専念されている、御令兄青木憲一画伯の作品取扱事務所を兼ね、化粧品や趣味のファッションを扱って居られ、五〇年の九月二十七日には「作品の榮」を送って来られ、付箋を挟んで、それには「仲秋の名月は、せまいペランダから、たのしみました。如何でいらつしやいましたか、兄の作品の榮ができましたのでごらん頂ければ幸に存じます」と書いてありました。ほんとに、此の様な優雅な時もあったのでした。

松本節子さんが外語大を出て居た話は、私には最後まで洩さず、一周忌の法要の日に外語の同級生がいたので始めて知った次第で、彼女が来訪の折、チエホフの小説「犬を連れた奥さん」の話を黙って聞いていたのを思い出して誠に冷汗をかく思いでした。

私はここに、短い年月でしたが会員として彼女との交遊の思い出を綴り、謹んで御冥福を祈ると共に残された御母堂並びに



大木 操氏
Misao Ohki
(1891~1981)

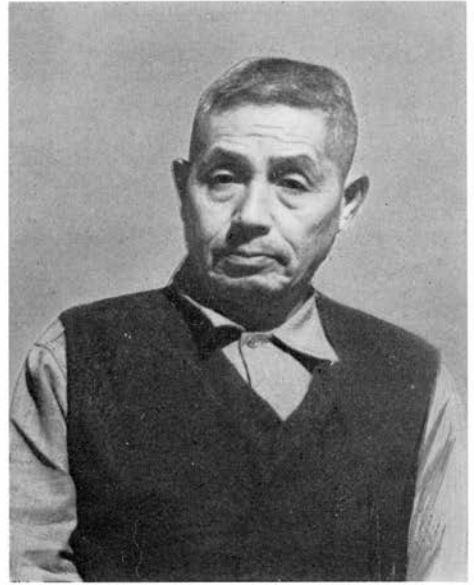


吉阪 隆正氏
Takamasa Yoshizaka
(1917~1980)



磯野三郎氏
Saburo Isono
(1914~1981)

三谷忠一氏
Chuichi Mitani
(1909~1979)



松本節子氏
Setsuko Matsumoto
(1931~1980)



西山正二氏
Shoji Nishiyama
(1947~1980)



井田英彦氏
Hidehiko Ida
(1937~1980)



長尾幸七氏
Koshichi Nagao
(1902~1980)



武藤清次氏
Seiji Muto
(1923~1981)

滝浪喜一氏
Kiichi Takinami
(1900~1980)



若林裕治郎氏
Yujiro Wakabayashi
(1890~1980)

鈴木裕幸氏
Yuko Suzuki
(1929～1980)



トーマス・ルゴー氏
Thomas Rugo
(1954～1980)



村上金吾氏
Kingo Murakami
(1893～1979)



武藤晃氏
Akira Muto
(1911～1980)



竹中昇氏
Noboru Takenaka
(1953～1981)

御兄姉の御健勝をお祈りする次第であります。

合掌

一九七二年十月 日本山岳会入会 会員番号 七四五七

(山崎金次郎)

三谷忠一氏（一九〇九—一九七九）

八十歳を越してもなお、毎日のように庭の畑に出ては耕し、野菜をつくり、時には山に出かけていた三谷のおじいちゃんが、全くあっけなく、天国に行ってしまった。『天国』などという言葉は、ときとしてキザみたいではあるが、もともと敬虔なクリスチャンであつたおじいちゃんにしてみれば、当然、行くべきところなのである。

昭和五十五年、日本山岳会東九州支部は創立二十周年を迎え、記念誌を発行した。三谷さんは、それに「登山と私」を寄稿した。短い文章ではあつたが、その行間に、三谷さんの登山に対する考え方がにじみ出ていた。いってみれば、それが、三谷さんの山の生涯を振りかえる絶筆ともなつた。

三谷さんは、明治三十一年、愛媛県の大洲市に生まれた。教育者であり、クリスチャンであつた両親の影響もあつて、十六歳で洗礼を受けた。そして、初めて山に登つたのも、実はこの

ころである。大正三年、県立大洲中学校の生徒だつた氏は、大分県別府市の叔母のもとに遊びに行き、鶴見岳（一三七五）に登っている。回想によると「当時、別府には栈橋もなく、船は港の一〇〇メートルほどの沖に碇泊し、伝馬船が港に客を運んだ。別府駅前には、人力車、客馬車の駐車場はあつたが、自動車は一台もない小さな温泉町だつた」という。

鶴見岳は、この別府温泉の母体となる山であり、信仰の対象である。このため、宗教的に登拝する人はあつても、当時の九州には、まだまだスポーツ的な登山の気風は一般に広がつておらず、ましてや、旅の中学生がふらりと山に登るなどということとはなかつたろう。三谷さんがどういふ気持ちで山に登つたのか、いまにして思えば、聞けずじまいだつたのが残念である。あるいは、氏の受洗と何らかのかかわりがあつたのだろうか。

四年後、中学を出た氏は、別府に居を定めることになる。姉のついでにいた永見醬油店を手伝うことになつたからである。翌大正八年、店員三人と阿蘇に登る。当時の豊肥線は大分—三重町の間が開通していただけ。四人は三重町から竹田經由で夜通し歩き続け、宮地から登つた。これを皮切りに、氏の本格的な登山活動が始まつている。

大正十二年に独立して食料品店を経営するようになった。九州における登山もようやく盛んになろうとしていたところで、昭和に入ると別府に二豊山岳会が生まれた。当然、入会する。七年には富士に登る。三谷さんにとってはあこがれの山だつた。そのころの富士山には、別府観光開発の先達だつた油屋熊八が

「山は富士、海は瀬戸内、湯は別府」の宣伝標柱を建てていたものです。

昭和の不景気、そして戦争。同業者のなかには、別府では暮らしていけないと、満州などへ出かける人も多くいた。「私は登山をしていとおかげで、人の一生は重荷を背負って坂道を登るが如し」の言葉がよくわかったから、別府にとどまっていたが「んばった」というが、氏にとって本当に苦しい時代だった。

戦後、登山の復活とともに、氏の動きは一段と活発になる。

そうして昭和二十五年の夏、立山を縦走して剣御前の小屋に泊ったさい、沼倉寛二郎氏に出会った。初対面ではあったが、話はずみ、ここで日本山岳会への入会を勧められた。これが、三谷さんと日本山岳会との最初の結びつきである。

以来、九州の山はもとより、南アルプスから八ヶ岳、谷川岳、さらに吾妻、蔵王、秋田駒から北海道の山々まで、氏の足跡は伸びて行く。昭和三十五年、日本山岳会東九州支部が生まれる。野口秋人、木本善重、南崎大海の各氏らとともに、三谷さんも中心メンバーであり、亡くなるまで役員を勤められた。

三谷さんは、まさに温厚篤実な人だった。自ら進んで人前に立つなどということはなかったし、むしろ嫌がっていた。そんな氏が、多数の人の前で講演したことがある。七十歳の敬老の日のことである。娘さんのグループに招待され、山の話がせがまれたのだ。そこで氏は、こんな話をしたという。

「私の登山は、私の人生と同じ。楽しいときもあれば、苦しいときもある。重いリュックで急坂をあえいでも、頂に立った

ときは、それを忘れることができる。私の商売にも苦しいときがあったが、私は登山のときの気持ちでがんばった。しかし、人間は生身だから、いつ肉体の苦痛が起こるか、あるいは物質的、精神的な苦しみがかかるかわからない。そのときには、登山で鍛えた精神力で苦しみを乗り越え、人生をまっとうしたい。この信念が、私が登山で得たものだ。」

ところが、この話をして十日後、思いがけない肉体的苦痛が三谷さんを襲った。庭で果樹の手入れをしていたとき、踏台から落ちて右足首を骨折したのである。複雑骨折、治療四カ月の診断。かかとにドリルで穴をあけ、針金を通して三キロのおもりを下げる。激しい痛みの毎日。そして五十日たつてギブスに移り、さらに五十日。その後、長い歩行訓練を経て、退院したときは七月も終りに近かった。

ベッドの中で、三谷さんは「よくなったら、もう一度、槍・穂に行くのだ」と決心したそうだが、その通り、七十三歳で北アルプスから尾瀬、七十四歳には木曾御岳と回るのである。その後も、四国の剣、石鎚、山陰の大山と、高齢の登山は続いた。

三谷さんの生涯と、悟道にも似た山登りの一生だった。その足跡を誇ることもなかった。だから、まさに「良きおじいちゃん」といった風貌からは、ひたむきな山登りの姿勢をうかがうことはなかなかできなかった。眸は、いつも子供のように澄んで、まったくの好々爺ぶりだった。あるいは、それを支えていたのは、クリスチャンとしての篤い信仰だったかもしれない

が、後輩にしてみれば、それこそ長い登山活動によって初めて到達する世界であるのかもしれないと思われた。

進んで人前には出なかったが、人を後から支えてやることは進んでかかって出た。山岳会の面倒見はもちろん、それは宗教活動から社会事業にも及ぶ。消防団への奉仕も四十年にわたって続いていた。昭和四十三年、国は氏に対して勲七等で報いた。

略 歴

明治三十一年七月十九日 愛媛県大洲市に生まれる。

大正七年 県立大洲中学校を卒業、大分県別府市に移住。永見醤油店に勤める。

大正八年夏 阿蘇登山を皮切りに本格的登山活動に入り、以来、足跡は全国に及ぶ。

大正十二年 別府市松葉通りで食料品店経営を始める。

昭和六年 二豊山岳会に入会。

昭和三十四年 日本山岳会入会。会員番号 四八四五。

昭和三十五年 東九州支部設立。

昭和五十六年四月八日 脳血栓のため別府市原町七―七の自宅で死去。

(梅木秀徳)

西山正二氏 (一九四七―一九八〇)

昭和五十五年九月二十六日、あまりにも突然、不帰の人とな

ってしまった。心筋梗塞、ポックリ病、どんな病名をつけられようともきびしい現実である。この春、チョモランマ登山隊に参加したあと、第一線の診療病院の整形外科医長として、心機一転はりきって勤務をはじめた矢先のできごとであった。

西山正二君はチョモランマ登山隊では人数の多い北東稜隊のドクターとして大いに活躍した。山岳部の出身で超高所の経験はなかったけれども六千五百米の厳しい環境の前進根拠地で長期間に亘りドクターとしての重責を立派に果した。北東稜隊では何人かの故障者がでた。西山君はその故障者と一緒にベースキャンプを往復するなど隊員の健康管理に精一杯努力した。彼のおおらかな人柄は医療を越えて中国側協力者を含めた北東稜隊員全員に豊かな気持と頑張りをあたえてくれた。隊の責任者として心から感謝すると渡辺兵力隊長の弔辞があった。西山君自身はせめてノースコルの上あたりまでは登ってみたいといってお出かけたが、終始隊員の診療に専念し医師の使命を全うしたのであった。

西山君は昭和四十一年四月に東京慈恵会医科大学に入学すると同時に山岳部に入部し、熱心な部員として全合宿に参加し、学部三年からはチーフリーダーとして部の企画、運営に努力するとともに後進の指導にあたった。丁度最終学年のとき韓国の雪岳山、キナバル山に出かけるチャンスにめぐまれ、日本では知ることのできなかつた、その国々の人々や生活に引きつけられるようになった。人類学的興味から最後の休みをヤミ族の生活を求めて、台湾の南端鵝鑾鼻の遙か東方海上に浮ぶ蘭嶼島

(紅頭嶽) に出かけ、熱心のあまりツツガムシ病にかかり高熱になやんだエピソードをもっている。

卒業後は母校の整形外科教室に入局し、きびしい研修をつづけていたが夏には槍ヶ岳にある山岳診療所に顔を出していた。

昭和五十五年は慈恵医大百年記念にあたりガネツシユ・ヒマール学術登山隊を出すため、彼は強力なメンバーとして推薦されていたが、丁度学位論文の執筆や教室の多忙な研究の中心人物として活動していたため、その準備にも参加できずかなりなやんでいた。

丁度論文の目どがついた所、チョモランマ登山隊の話がもちあがり急拠参加することになったのであった。

彼はすすめられると否といえない良い性格、たのまれると何でも引きうけて頑張るといったところがあつた。彼とは一度北岳の第4尾根を登つたことがあつた。当然彼が現役の元氣なときであつたのでトツプをやつてもらつたが難渋しながら頑張りとおしてしまつた。あとでこんな難所ははじめてですよと、平然した態度が今でも目にうかぶ。また一方、電子顕微鏡を使つた細かい仕事を引きうけ何日も徹夜で頑張るファイトも持ちあわせておいたのもしいかぎりであつた。

このたびのチョモランマ登山を通して多くの知友を得、いまわりも、二まわりも大きくなって帰つてきた。この経験を生かし、また大学での研究をもとに第一線の診療病院でのびのびと腕を磨いてほしかつた矢さきだけに残念でならない。心からご冥福を祈ります。

略 歴

昭和二十二年(一九四七)一月二十三日 千葉県市川市に生まれる。

昭和四十七年三月 東京慈恵会医科大学卒業。

昭和四十九年五月 同大学整形外科教室助手。

昭和五十五年二月 日本山岳会入会(紹介者、渡辺兵力、大森薫雄、会員番号 八六八六)

昭和五十五年三月 医学博士。

昭和五十五年七月 福島県郡山星総合病院整形外科医長。

昭和五十五年(一九八〇)九月二十六日 逝去。

山 歴

昭和四十一年五月 白馬岳、七月 穂高岳、笠ヶ岳、劔岳、十一月 北

岳、十二月 白馬岳。

昭和四十二年三月 南アルプス、四月 北岳、五月 巻機山、八ヶ岳、

丹沢、六月 丹沢、七月 槍ヶ岳、八月 槍ヶ岳、針の木峠、十月

塩見岳、十二月 会津朝日岳。

昭和四十三年三月 餓鬼岳、唐沢岳、四月 白馬岳東面、六月 丹沢、

七月 立山東面、九月 巻機山、奥多摩、十月 槍ヶ岳、十一月 富

士山、十二月 白馬岳。

昭和四十四年三月 槍ヶ岳、四月 白馬岳東面、五月 谷川岳、丹沢、

六月 劔岳、北岳、七月 穂高岳、北岳、八月 槍ヶ岳北鎌尾根、十

一月 北穂東面、十一月 茶臼岳。

昭和四十五年二月 八ツ岳西面、三月 木曾御岳山、白根三山、四月

穂高岳、五月 奥多摩、六月 鹿島槍ヶ岳、七月 知床岳、八月 利

尻岳、十月 六百山、十二月 笠ヶ岳。

昭和四十六年三月 赤石岳、四月 韓国雪岳山、七月 ボルネオ、キナ

バル山。

昭和十五年三月　チヨモランマ登山隊参加。

(大森薫雄)

瀧浪善一氏 (一九〇〇～一九八〇)

昭和五十五年十二月九日、南アルプス山麓田代の隠居宅で、八十余年前善一氏の着用した産衣から作った、一尺余大の人形の着せ替着物が出来上り、久し振りに訪ねて来た長女が人形に着せ替終り、ケースに収めたと同時に、便所に立った善一氏が倒れ、再び意識はもどらなかったとの事である。

同氏は大正七年静岡商業高等学校卒業後、郷里井川村組合に勤め組合長も務めたが、昭和五年満州に渡り、東洋協会旅順語学校支那語科を卒業、更に上級の、財団法人満州法政学院法律科を十五年に卒業、終戦に至るまで、関東局通訳生兼警部として五族協和の理想の下、満州国の育成に青春をすごされた。昭和五年渡満、関東局職員に奉職しながらの勉学は、人並以上の体格と強い意志を持つ同氏ならではの努力の賜であった。

終戦、捕虜、投獄の当時の状況を見ることが出来る。

昭和五年奉職于関東局、在職十有五年大太平洋戦争熾。二十年九月従大連見送海域、抑留旬余、而更移西比利亞矣、十一月

下流至這爾諾天似卡耶人虜舎。舎半隱在地中、隠濕纒有兩三窗、白晝猶黃昏。四周荒涼朔風吹草、數里不聞鷄犬、雪雖不太多氣温零下四十度、邦軍所携寒暖計不為用、寒冷與飢餓交交至斃者相踵。

獄中、少しの給与食をふやしてもらうべくゴマをする人々の中で、巍然たる態度をとり続ける同氏を不思議に思ったポイコ少佐なる責任者に対し、「吾は乞食に非ず」と答えたと言う。感心したポイコ少佐が帰還順位を特別に早めてくれたので、家族の日本帰還より早く、昭和二十二年一月に佐世保に上陸出来たという。

郷里に帰った同氏は井川森林組合主事、農協常務理事、更に井川中学教諭を三十三年迄務められ、以後、三期村議会議員となり議長の要職も務められた後静岡市合併で職を終る。

此の間、第十二回国民大会南アルプスに於る登山部門実施に当り、井川山岳会を創立、会長となって団体に協力。以後、南アルプスの保護と健全な登山育成に老後の全精力を投入された。数々の感謝状、表彰状、そして二度の叙勲からもそのひたむきな南アルプスへの傾注のほどがうかがわれる。日本山岳会員で私的山行に世話になった方も多い。

山歴の主なもの南アルプスに関するものであり、七十五才で、茶臼岳―聖岳徒走をし、死去する四十日前には新しい二代目、井川山岳会長以下と共に八十一才で転付峠を越へて山梨県に出ている。同氏はエベレスト街道トレッキングを近い内にしたいと熱望を持って居られたが、実現出来ずに終った。瀧浪氏

は蔵書も多く、書倉を日石山房と名付けられていた。俳号を水心子と言う。著書の井川村誌の外、未刊の原稿の世に出ないのが残念である。

略 歴

明治三十三年九月一日 生れる。

大正七年三月 静岡県立静岡商業高等学校卒業。

大正十四年～昭和五年 井川信用組合組合長。

昭和五年～昭和二十年 関東局通訳生兼警部。

昭和十年三月 東洋協会旅順語学校支那語科卒業。

昭和十五年三月 財団法人満洲法政学院法律科卒業。

昭和二十二年二月～六月 関東局警視。

昭和二十二年～二十三年 井川森林組合主事。

昭和二十三年～二十五年 井川農協常務理事。

昭和二十五年～三十三年 井川中学校勤務。

昭和三十三年～五十二年 井川山岳会会長、自然公園指導員。

昭和三十四年～四十三年 井川村議会議員。

その他、法務省人権擁護委員、静岡県山岳遭難対策協議会会員。また勲八等瑞宝章、勲六等单光旭日章受賞。

(山本朋三郎)

井田英彦氏（一九三七～一九八〇）

一九八〇年十月二十一日、井田英彦君は急性骨髄性白血病による七ヶ月間の闘病生活に力尽き、四十二才の生涯を閉じた。その七ヶ月間の入院生活は、作詞家として知られる父君、井田誠一氏が後に述懐されているように「長く短く重い七ヶ月」であった。

その年の三月、長期出張先である香港で身体の不調を覚えながらも、持ち前の責任感から極限まで仕事に没頭した彼は、高熱にあえぎながら日本に戻って来た。そして診断を受けた医師から直ちに入院を指示され、更に家族は絶望的なその病名を告げられたのだった。血液の癌と云われるこの病気は、癌細胞のついた白血球が異常に増殖すると同時に血液を凝固させる働きを持つ血小板が激減し、各所の血管から大量の出血が始まる。出血箇所によっては生命を直ちに奪ってしまう現代の難病のひとつであった。血小板を補充するための輸血用血液が大量に要るとの連絡に、病院に駆けつけた私は、正に消耗しきってベッドに横たわる彼の見て、言うべき言葉を失ってしまった。

抗癌剤と抗生物質の投与、そして血小板の輸血のくり返しが続き、体力は更に低下し、高熱に苦しむ日々が過ぎていった。三ヶ月を過ぎた六月下旬に奇蹟的に状態が良くなり、退院の許可が出たが、十二日後には再び入院することとなってしまっ

た。初夏の香りに僅かに触れただけで、季節の無い病院のベッドでの夏が過ぎていった。そして十月、突然の出血が脳と胸部に始まり、意識を取り戻すこと無く、翌二十一日永遠の眠りについていた。

井田英彦君の所属する早稲田大学岳友会は、一九六五年に数名の山仲間によって創られた小さなクラブであったが、幸にも今日まで大きな事故も無く、この間に三回の海外登山隊を送り出すことができ、その上に最初から初登頂の記録を残す幸運にも恵まれていた。

第一回目の海外登山は一九六五年のペルーアンデスで、井田英彦君はその隊長を務めた。伝統も無く、組織力も小さく、名前も知られていないクラブが初めて海外に出るための諸準備は、単なる努力だけで済むものではなかった。それでも、予定通り五月の初めに横浜港から遠いペルーに向けて出発することが出来たのも、多くの方々の熱い御支援による所が大きかった。

コルディエラ・ブランカ山群における登山活動は、最初隊員の半分近くが高度順化に失敗するなどの一時的な後退もあったが、七月三日ネバド・ランパルカ（六一六二メートル）の登頂に成功し、勢いを得た彼らは引き続いて七月十日、頂上直下の粉雪に苦しめられながらも、ネバド・オクシャバルカ（五八八一メートル）の初登頂に成功した。ワラスよりアプローチ二日の山群に未登峰が残っていたことも幸運であったかもしれない

が、一九五八年のイタリア隊に始まって、一九六一年のドイツ隊、一九六三年のアメリカ隊、そして同じ時期にぶつかったアメリカのコロラド・アリゾナ両大学の合同隊のいずれもが登頂に失敗しているのを見ても、単なる幸運だけで片付けられるものではないと思う。初めての海外登山隊の隊長の重荷に耐えて、多くの困難を乗り越えて隊員たちを頂上へ到達させた井田英彦君の指導力や判断力、そして行動力にも卓越したものが有ったと判断して良いだろう。そして三年後のヒンズー・クシュ、一九七九年の第二次ペルー・アンデスの遠征もこの初回の成功が大きな刺激となって生れたと云っても良い。

井田英彦君と晩秋の上高地への路を、荷上げの重い荷を背負って歩き始めてから二十五年が過ぎた。共に歩んだ多くの山々への想いを残しながら、再び会うこともない遠い旅へ、余りにも早く彼は出て行ってしまった。最後に父君、誠一氏が書かれた一文を引用させて頂く。

「抗癌剤の投与は一クール四日間であった。これは大変強烈な薬で、癌細胞の着いた白血球を速やかに殺してしまふ。しかし、序でに健康な白血球も殺してしまふ。善玉も悪玉も同時にやっつけてしまうのだからたまらない。無差別爆撃のようなものだ。悪玉だけを爆撃出来るような薬を開発すべく、今世界中の医学者、薬学者達が研究にいそしんでいるが、その開発は遅々として進まない。昨年はアメリカの人工衛星が土星の環の撮影に成功した。又、地上では遺伝子の組換えな

どという難しい実験に成功した学者もいる。その間にも棄がないために癌患者はほとんど死んで行く。科学の進歩というものは何処か調子が狂っているような気がしてならない。……」

万人の思いが込められた文章であると思う。

略 歴

昭和十二年十一月十五日 東京都八王子市千人町に生る。

一九六〇年三月、早稲田大学理工学部応用物理学科卒業。

勤務先、ビクター(株)(一九六〇～一九六一)、古河特殊金属工業(株)

(一九六二～一九六九)、ソニー(株)(一九六九～一九八〇)、

日本山岳会々員、五八四四番、一九六四年入会。

早稲田大学岳友会々員。

(立花種則)

長尾幸七氏(一九〇二～一九八〇)

長尾さんと山の集まりを共にした最後は、昭和五十三年十月のことでした。福島支部創立三十周年記念をかねたJAC現地小集会を吾妻山で行った時で、前支部長伊藤さん亡きあとの最長老で七十六才になった長尾さんには非出席方をお願いし、山歩きは出来ないがどんなことをしても顔を出しますとの確約を

とり、全国から集まられた長老、先輩の多くの方々と盃を交し、一晚を過ぎたのが最後でした。その時の様子は会報四〇二号に前副会長折井健一さんが以下の様に報告されております。

「新野地温泉での交歓会は福島支部の長老長尾幸七会員の打上げの花火が開会を宣した。吾妻山の夜空を飾って……」

家業が銃砲火薬店の為、打上げ花火で歓迎して貰ったわけです。その夜は愉快にのみ交し、トレッドマークの「山はええない」を連発し、今は亡き藤井運平さん、高橋憲二さんらと独得の高笑いで談笑されていた姿が今も晩に残っております。

長尾さんの登山歴をみると我が国の登山の歴史と同じようなもので、本人も「僕の登山の始まりは宗教である」と言っておられた通り白衣、金剛杖姿で月山に登ったのが最初のようにです。しかしそれは単なる講中登山で終るものではなく、後日又独りで登るといふようなやり方で、登山にのめりこんで行かれたわけです。

昭和初期は宗教登山、戦前戦中は東北の山々、北アルプスを中心とした山行、戦後は飯豊連峰を主に、またその後は北海道の山々を心ゆく迄歩くという経路を辿られたようです。

伊藤弥十郎氏、額田敏氏の推薦にてJACに入会し、二一八〇の会員番号を貰ったのは昭和十七年(一九四二)のことでした。

戦後二十二年には福島県内の山岳愛好家を募り、相語らい、JAC福島支部を設立、委員としても大変お世話いただいたものです。

その後県体育大会、吾妻山の山開き等の行事が始まりその都度出席されておられました。

特に昭和二十四年四月には当時余り人の入っていないかった積雪期の当地方の登山を開始し、同年朝日嶽に、翌年には飯豊大日岳へと入山しています。交通の不便、装備の不完全、ルートの不整備等全て悪い状態のもとの登山は本当に辛いものでした。しかし一息入れ、腰をおろすと必ずといっていい程「山はええない」を連発するのが長尾さんでした。行を共にするものにとつて活を入れるというか、自棄になりそうな気持から脱け出させるような言葉でした。

家庭にあっては九人の子供さんに恵まれ、それも皆男の子で、成長過程にはいかに大変のことであつたかと想像できません。然し子供達が成長するにつれ、よく山に連れて行かれ、一時期の単独行から家族登山に移っていったのもこの頃からと思われます。

子供さん達が社会に出られ各方面に活躍されるようになった昭和五十四年のこと、親爺の喜寿の祝に山の記録を残そうという皆さんの発案で、

『日本山岳会員2180の踏跡—

岳友と息子たちの想い出—』

という記録集が発刊されました。長尾さん自身も、古い岳友の想い出、山行記録等、今見れば大変参考となるような文を寄せられており、私もまたお祝の言葉と、飯豊の記録を出させていただきました。またそれ以上に素晴しかったことは、九人の子

供さん達がそれぞれ、長尾さんに連れられ、また尻押ししてもらった記録が集められていることです。

これから余生をのんびり送られる筈でした。

私どもも昔の想い出を茶のみ話に交じりたいと、やっぺえやっぺえと話し合っていたものでした。

然し年毎に身体も弱られ、又記録集も出された安堵感もあつたのか、昭和五十五年三月七日、長の旅路にたたれました。

謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈りします。

略 歴

明治三十五年 福島市にて出生。

大正十二年 福島県立福島商業学校卒業後、家業(鉄砲火薬店)に入る。

大正十五年 結婚。

昭和五十五年 逝去(七十八才)。

山 歴

昭和八年八月 講中で月山第一回登山。

戦前 尾瀬、飯豊山、朝日連峰、北アルプス、中央アルプス。

昭和二十一年八月 飯豊連峰縦走。以後、東北の山々を歩く。

昭和二十七年七月 大雪山。以後、北海道の山々を歩く。

昭和四十八年七月 月山。

(中島正夫)

若林祐治郎氏（一八九〇～一九八〇）

本会々員のなかには、青壮年時代に山登りにはげんだが、中年以降あまり実際の山登りをしなかったにも拘わらず、永く会員としてとどまり、永年会員となつて、生を終るまで会籍にある方が少なくない。

若林祐次郎さんも、まさにそういう一人であった。本会に入会したのは大正三年十一月で、若林さんの二十四歳の時であり、紹介者の一人、今村幸男氏は、後年住友銀行や住友信託の役員となつた人だが、当時関西ではかなり知名の山岳人であつた。

日本山岳会は、当時でも多少は登山の経験者が入会した筈だから、若林さんも既に京都にあつて幾ばくかの登山はしていたと思うが、その記録は現在では全く判らぬのが残念である。

『山岳』の会員登山報に見られる最も古い記録は、第十一年第一号所収の大正五年七月の若林さん自身の筆になる上高地からの通信である。それによると同行は片岡康太郎氏、七月十三日京都を發し有明金森旅館投宿、十四日中房を経て燕小屋、十五日大天井岳、二俣小屋を経て赤沢小屋、十六日槍ヶ岳をきわめて上高地へ、案内人夫は畠山團惠（團衛とも記され、燕岳の團衛谷にその名が残る）、矢ノ口栄作、林栄吉。

若林さんは右に続いて、三上捨三、中山益太郎、小林良之助

氏らと中村常太郎ら七人の案内人夫を伴い、七月二十一日大町をたつて、二十二日針ノ木峠を越え（黒部川の渡渉で若林さんは危うく流されかけたが、無事平ノ小屋に着く）、二十三日五色ヶ原、二十四日鬼ヶ岳、竜王、浄土山を越えて一ノ越に幕営、二十五日小林、三上氏らは雄山から下山したが、若林さんらは別山頂上硯ヶ池付近に幕営、二十六日長次郎谷から劔岳に登頂、室堂へ、二十七日富山へ下山、という登山を行っているが、それは中山氏が報告している（『山岳』同年同号）。これで見ると、若林さんの大正五年夏の北アルプス行は十五日間の長期に互るもので、当時をよくそれだけの休暇がとれたものと思ふ。

次に『山岳』に出ている記事は、大正六年二月十八日の伊吹山登山で、この山の冬期登山としては、極めて早期に属するものと思う。『山岳』第十一年第三号の編者が、同行者三上捨三氏の写真を五点も掲げているのは、この登山をかなり重視した証拠であろう。会員登山報の記事は三上氏の筆になるものである。

若林、三上両氏は、近江長岡から上野村の旅館松村屋に到つて人夫一名を雇い、杖、輪カンジキ等を準備して、十時に登山を開始した。一合目から輪カンジキをはき深雪をわけて登り、午後三時三十分、五時間半を費して山頂に達した。天気晴朗で眺望は実に壮観だったという。

第三の記録は『山岳』第十二号第一号の会員登山報に掲載された大正六年七月のもので、同行者は三上捨三、松代鍋種氏、

芦峠の佐伯春蔵を案内に伴った。

七月十八日芦峠を発つて、立山室堂を経、二十一日別山乗越をこえ長次郎谷から剣岳に登頂、熊ノ岩の下で偶々下山してくる冠松次郎氏と出会った。帰路も長次郎谷を下って別山下に幕営、二十二日雄山を経て鬼ヶ岳で露営、二十三日ザラ峠、五色ヶ原を経て越中沢岳の下に露営、二十四日数河乗越から間ノ山三角点の下に幕営、二十五日薬師岳をきわめた。しかし二十八日迄に帰宅せねばならぬ用事ができたため、これ以南の縦走を打ち切り、薬師岳から最も近い鶯谷を下ることとした。タルの多い鶯谷を下ったところ、雪溪上で熊に出会ったりもした。それから岩井谷に合して真川落合の木材小屋に一泊、二十六日十九折を経て湯川に合し、温泉道をひた走りに走って富山へ出た。

鶯谷の廻行は大正五年七月の冠松次郎氏によるものが最も古く、佐伯平蔵、春蔵が同行している(『山岳』第十一年第二号参照)。若林さんの鶯谷下降は、前年夏、冠松次郎氏に同行して、この谷の廻行を経験した佐伯春蔵が随行していたから、実行できたのだと思うが、薬師岳の下降路としては、勿論一般ルートではなかった。それは昭和十一年八月に廻行した吉沢一郎氏の記録(『山岳』三十一年第二号参照)をみても同様であり、恐らく現在でも通る人は極めて少ないであろう。

以上が『山岳』に掲載されている若林さんの登山記録のすべてである。私は後年、若林さんに、青年時代の登山の思い出を是非書かれるようすすめたが、実現できなかったことは惜しま

れてならない。

私が三井信託に入社した昭和十三年当時、若林さんは経理部長の要職にあり、また会社の山岳会の会長をされていたかと思う。そんなことで、石老山や大地峠などへ一緒に一緒したかすかな記憶がある。

実際の山登りから遠ざかったあとも、若林さんは山への関心が強く、それ以上に本会に対しては終生変らぬ愛情をもち続けた。たしか十数年前の早春の一日、若林さんから連絡があった。山岳会へ絵を贈りたいから一度見に来て欲しい、ということであった。

早速日時を約して参上すると、この絵は会の新ルーム(鎌倉河岸の向井ビル)を飾るのに相応しいと思うから是非受けて欲しいということ、見ると矢崎千代二画伯の二十号ぐらいのパステル画で、ダーズリンから眺めたカンチェンジュンガ山群をえがいた見事なものであった。現在も会の談話室の壁面を飾っている、あのタブローである。

「山」二七四号(一九六八年四月)には、この絵に添えた若林さんの手紙が掲載されている。それによると、「この絵は大正十五年倫敦に寄ったとき買ったように思います。無論ヒマラヤ登山など夢にも考えなかった頃の事です。丁度その前に印度でダーズリンを訪ねて、カンチェンジュンガを眺めた記憶が新ただったので、うれしくなって求めたのでした。(云々)」とある。

また若林さんは陽明学の影響による強い倫理観をもち、清く

正しく生き抜いたと聞いているが、三井信託で私が接した当時を振り返ってみると、まさに模範的な立派な先輩であったという印象が強い。しかし、山登りの他にもテニス、ゴルフ、観世流謡曲、短歌、俳句、日本画等々と広い趣味をもち、教養も実に豊かであった。

会員在籍六十六年に及ぶ若林さんの長逝を悼み、心から冥福を祈って筆を措く。

略 歴

明治二十三年（一八九〇）一月三十日 誕生。京都にて少年時代を過ごし、十二歳の夏、父を失う。

明治四十年三月 三井銀行に入行、京都支店勤務。

大正三年十一月 日本山岳会入会、会員番号 三七二番、紹介者は今村

幸男、東義一。

昭和十二年 三井信託に転じ経理部長、監査役を歴任。

昭和四十年 本会で永年会員制実施と同時に永年会員となる。

昭和五十五年（一九八〇）九月二十九日二十一時五十分、心不全のため逝去、享年九十才。法名は眞誓祐山清道禪定門。

（望月達夫）

武藤清次氏（一九二三〜一九八一）

豪雪に見舞れた今年の山々は、例年になく残雪が多く、五月の月山も、ようやく道路が開通し、いよいよ夏スキーシーズンが始まろうというところであった。

五月三十一日、武藤さんが会長をしている吾妻山の会一行は姥沢コースから登り始めたが、最初の斜面を登った所で武藤さんは、「一寸疲れたから休むよ」と云って木の枝に腰を降した。以前から心臓が悪かったので自身でも常に注意を払い、マイペース守っていたので、その時も何時もの様に少し休めば回復するだろうと誰もが思っていた。しかし様子が何時もと違い、腰を降しているのも大儀らしく、スキーの上に横になってしまった。「どんな様子だい」と云う私の間に、「この辺が苦しいんだ」と胸に手をやったが、その言葉が最後に、僅か数秒後に突然発作を起し、仲間の必死の心臓マッサージや人工呼吸にも拘らず、近くに居合せた医師が馳着けた時には、脈博も無くなり、十時四十五分とうとう息を引取ってしまったのである。余りにも急な死であった。

武藤さんは、大正十二年、福島市の西の郊外、吾妻山を望む旧野田村八島田に生を受けた。最初の登山は、昭和十一年八月、旧福島中学二年の時、野田学友会による吾妻登山であった。以来故郷の山、吾妻山を愛し、中学時代は幾度か、夜を徹

して歩いて吾妻山に登り、又山岳部に籍を置いて近くの山々に登っていた。

中学卒業後、仙台高等工業学校土木学科に進み、短期卒業して、旧満州ハルビン市に就職、以来、現地召集、終戦による抑留生活と、昭和二十四年に帰国するまでは山とは無縁の時期を過ぎた。

しかし帰国後は、直ちに福島市役所に奉職し専門の土木行政に携る傍ら、再び山登りを始めた。二十年代は山岳会等には所属せず単独で、或は知り合った山仲間と冬の吾妻山、安達太良山に、また夏には同地域の沢に入っていた。

然し、武藤さんが、最も充実した山行をし、そして山に対する経験を積んで行ったのは、この時期ではなかったろうかと思う。特に武藤さんが中心になって調査製作した吾妻最大の沢、中津川の詳細なルート図は、今でも中津川溯行者必携の資料となっているのである。

日本山岳会への入会は、昭和三十五年で、会員番号五一九七番、福島支部常任委員として御意見番的存在だった。また市役所山岳部部长として、永く山岳連盟の役員を努めていたが、後には推されて理事長となり、県山岳界の発展に多忙な毎日を送っていた。

山行は主として、吾妻山の会の仲間と共にしており、最近の主な山行を見ても、五二年五月会津毛猛から浅草岳、五十三年五月朝日岳、六月御神薬岳新高ルンゼ、五十五年一月吾妻山合宿、五月飯豊山石転沢、更に今年に入って、一月吾妻山縦走、

五月初め会津駒ヶ岳、そして三十日からの月山と、精力的な登山活動を行っていた。

武藤さんは、その人柄から、山仲間や職場の人達からだけでなく、知り合いの多くの人々から「ムーサン」の愛称で親しまれていた。今年三月、永年勤めた市役所を退職され、今までの山行記録の整理をしながら山に登り、八月のマッキンレー、トレッキングを楽しみにしていたその矢先であった。

私が武藤さんと知り合ったのは、昭和三十二年武藤さんが吾妻山の会に入会した時であった。それ以来二十四年間、山の会の例会や山行、日本山岳会や山岳連盟の集り等で、山に関係のある時は何時も一緒だった。山と酒を愛し、結婚の仲人を幾組も引き受けるなど面倒見の良かった武藤さん、純白の月山の雪の上で逝かれるとは、如何にも武藤さんらしいと思われるが、まだまだ元気で、一緒に山に登り、酒を酌み交したかった。

心から御冥福をお祈り致します。

略 歴

大正十二年一月二十五日 福島県信夫郡野田村八島田(現福島市八島田)に生れる。

昭和十五年三月 福島県立福島中学校卒業。

昭和十六年三月 仙台高等工業学校卒業。

昭和十六年 ハルビン市都市計画課に就職。

昭和十九年二月 召集、黒河省野戦高射砲第一大隊入隊。

昭和二十年十一月 中央アジア、カザフスタン、サマルカンド市に抑留。

昭和二十四年十一月 帰国。

昭和二十四年十二月 福島市役所土木課就職。

昭和三十五年 日本山岳会入会、会員番号五一九七番。

昭和四十三年七月 全国国立公園大会に於て県知事表彰。

昭和四十七年五月 福島県山岳連盟理事長。

昭和五十六年五月三十一日 月山登山中心筋梗塞のため逝去。

(河上鎌治)

鈴木祐幸氏（一九二九—一九八〇）

私と鈴木さんの最初の出合いは、昭和三十三年頃と記憶しています。当時、鈴木さんは中学校の美術の先生、私は町教委の社会教育係をしており、仕事や山行のことなどで、大変お世話になったことでした。鈴木さんの行動範囲は、もっぱら県内や東北地方の山々であり、主として山岳写真や、スケッチをやっておられました。

鈴木さんは、日本山岳会秋田支部に所属する一方、羽後町の山岳会の副会長、そして町体育協会の理事を務められ、本職の学校教育は勿論のこと、社会体育の振興にも、随分尽力されておられました。

そして「ほら」を吹かない、自慢話をしない、威張らない、

他人の悪口をいわない、そしてどんな事があっても腹を立てない、くどくないといったわけで、氏の行くところいつも和かな雰囲気に包まれていたものです。

学校においても、生徒や、PTAの信望は絶大なものでした。晩年は、羽後町の菟沢分校勤務でしたので、鈴木さんが入院すると、PTAの人達は村をあげて、毎日、鎮守の森に祈願するなど、それはまた大変なものでした。

また、出世欲などというものは全然なく、従って他人にお世辞をいう事もなかったでしょう。

何も管理職になるのが良いというわけではないのですが、鈴木さんにお世辞の一つもあればと残念に思ったこともありま

す。日本山岳会秋田支部長の柴田均二さんをはじめ、町の五人の教育委員のうち、三人までが鈴木さんと同じ会の人達でした。また私も町教委事務局にいた関係上自然と教育委員、事務局職員は鈴木さんを中心として幾度も秋田銘酒をくみかわしたことでした。

昭和五十五年元旦の年賀状には、東北大学附属病院からの「近況」として、次のように書いてこられました。

一昨年十二月入院ののち、昨年三月末全治退院致しましたが、在勤六ヶ月間にて惜くも再発、同時に十月三日再入院致しました。

今度こそは完治するまで療養に専心致し、再びご心配をおかけすることのないよう頑張りたいと思います。

皆様方のご健勝をお祈り致します。

再入院の際には、氏も覚悟をきめられていたようで、同じ羽後山岳会の「やすけそばや」主人、金昇一郎さん宅に立ち寄り、「俺はもう二度と羽後町に帰ることはあるまい」と言い残して、仙台に向われております。

人生もこれからという時に、不治の病に倒られた氏のことを思うと、洵に惜しまれ、運命というほかありません。

略歴

- 昭和四年九月十八日 秋田県大曲市栄町に生まれる。
昭和十七年三月 北秋田郡鷹の巣国民学校卒業。
昭和二十二年三月 秋田市立中学校卒業。
昭和二十五年七月 日本大学芸術学部文芸学科三年休学。
昭和二十八年三月 秋田大学文学部一部甲類国語科四年卒。
昭和二十五年七月 雄勝郡三輪村立三輪中学校助教諭。
昭和二十六年三月 依願退職。
昭和二十八年四月 三輪中学校教諭。
昭和三十三年四月 湯沢市立湯沢中学校教諭。
昭和四十三年四月 湯沢南中学校教諭。
昭和四十四年七月 日本山岳会入会（会員番号七四〇八）。
昭和四十六年四月 県教育庁指導主事併任。
昭和四十八年四月 羽後町立西馬音内小学校教諭。
昭和五十二年四月 羽後町立軽井沢小学校教諭。
昭和五十三年十月 昭和五十三年度教員海外派遣団の一員として、ヨーロッパ研修。

昭和五十五年五月二十二日 東北大学附属病院にて、癌のため逝去。享年五十九才。

（藤原隆太郎）

武藤 晃氏（一九一〇—一九八〇）

昭和五十五年六月二十三日午前六時半、「お父さんが心筋梗塞で入院しました。すぐ来て下さい」とつづいて「死亡しました」という電話がとびこんで来た。武藤光明君（武藤晃氏の末子で現在、慈恵医大専門課程一年生）からである。文字通り耳を疑った。前日の二十二日の夜、私の定年記念会の会場で、相変らず元気な武藤先輩と話し合った。閉会の辞が終り宴会場の外へ出た時、向こうから武藤氏が近づいて来て私の手を握った。そして玄関まで送ってくれた。これだけのことだったが、今になると何かひっかかるものがある。

武藤晃氏は慈恵医大昭和十二年三月卒業で、私より三年先輩である。学生時代から山岳部内では、観音様のあだ名がつけられていた。仏顔でしかも所謂ボーカリーフェイスの感じがするので格好なあだ名であった。秋田県大館中学の出身で、スキーを得意とした。私が入学した時は、学部一年生で予科（大田区久ヶ原）とはキャンパスが離れていたもので、平素はあまり接触がなかった。観音様を知ったのは入学した年（昭和八年）の十二

月の苗場スキー合宿だった。

武藤氏の学生時代の主な山行は後記の通りであるが、特に、十二年三月の中又白谷大滝の登はんが光っている。

この様な山行をした武藤氏は体力においてすぐれていたばかりでなく、精神力が強かった。ファイトがあり、信念があり、口やかましかったが、筋の通った言葉なので、誰も不平を言わなかった。「おれはこう思うのだ……」にはじまる文句にはOBも現役も耳を傾けた。ところで、武藤氏と私とは特に因縁が深かったようだ。

昭和九年七月、高木、武藤両先輩につれられて一の倉沢の二の沢と滝沢の間の山稜を登りはじめた。アンザイレンして武藤氏が先頭で私はジッヘルしていた。突然、武藤氏が滑り落ち、彼の両足が丁度私の両肩の上に落ちて止った。下を見ると一の倉沢の雪渓が口をあけて待ちかまえていた。ゾーッとした。また、私の靴のトリコニーが二cmほどの岩ヒダに引っかかっているだけだった。以来、私は命の恩人といわれるようになった。

武藤氏は大学を卒業して六月に海軍に入った(軍医科二年現役士官)。私もその三年後の五月に海軍に入った。

私は大東亜戦争の緒戦を艦で戦って、昭和十七年五月から横須賀航空隊勤務となった。同年十月武藤氏は筑波航空隊軍医長になった。十二月頃武藤氏から電話があり、こんどの土曜日に横須賀に行くから飲もうという話だった。土浦からはるばる横須賀まで出て来た。名は忘れたがある小料理で飲んだ。(勿論、私服)その店に常陸山(?)の娘という体格の良い、大柄な綺麗

な子がいた。私が十八年七月ラバウルへ出発するまでの間大休毎月一回その店で一緒に飲んだ。

これで、今後、武藤氏に会うことはないだろうと思つてラバウルへ向かった。ところが、武藤氏は十八年十二月、一五一航空隊軍医長としてラバウルに現われたのである。一五一航空隊の本部はラバウル市の中にあり、私はそこから陸路約四〇Km離れた山の中のトベラに居た。爆撃がはげしくなり、ラバウル市のヤシ、バナナ、パイヤなどすべての木が全滅すると、彼から「ビタミンC欠乏す」という手紙が私のところに来た。早速、バナナ、パイヤ、ヤシの実などを、ヤシバスケットに入れて届けた。月に二〜三回位だった。そこで、また、私は命の恩人にさせられた。

しみじみと因縁の深さを感じるのである。

五十四年四月、末子の光明君が慈恵医大に入學した。武藤氏はかなり以前から糖尿病があり、かなり節酒していたが、御子息入學を機会に「子供がまだ小さいのだから、長生きしなければならぬ。酒をやめるよ」と宣言した。死の前日の会でも飲まなかった。意志の強さには敬服する。ところで、最近、心筋梗塞とアルコールとはアンチだという説を耳にする。折角禁酒したのにこんなに早く多界するのなら、少しずつでも飲んでもらいたかった。その方がひよつとしたら心筋梗塞にはならなかったのではと考える。

武藤氏はいつも、ネイビブルーの背広に、同色のレインコート(海軍の雨衣)を着ていた。『帝国海軍』を表象するかの

如くであった。昭和五十五年六月二十三日を以て、『帝国海軍』
はついに全滅した、というのが実感である。

本当に惜しい人を失った。「どれほど惜しい人であったか」
を十分表現できないのが残念である。

謹んで、御冥福をお祈りする。

山 歴

昭和八年七月 烏帽子—槍—穂高縦走。

十一月 谷川岳マチガ沢。

十二月 大源太山。

昭和九年七月 谷川岳幽の沢左俣。

十二月 槍ヶ岳。

昭和十年三月 谷川岳。

四月二十九日 武藤氏と同級の山口敏彦他一名が谷川岳一の

倉沢で遭難、搜索のため五月十日までとその後、日曜

及び夏休みに谷川岳一の倉沢及び周辺の沢で搜索を行

う。

七月 後立山（白馬—針の木）—立山—剣岳縦走。

昭和十一年三月 中又白谷。

八月 谷川岳幽の沢。

十二月 富士山。

昭和十二年三月 中又白谷大滝登はん。

昭和二十三年九月 日本山岳会入会（会員番号 四七五一）。

昭和三十八年—四十年 同会理事を務める。

追 慈恵医大山の会会員。

略 歴

明治四十四年四月十三日 秋田県小坂町に出生。

昭和四年三月 秋田県大館中学校卒業。

昭和八年三月 東京慈恵会医科大学予科卒業。

昭和十二年三月 東京慈恵会医科大学卒業。

昭和十二年六月 海軍医科士官に任官。

昭和二十一年五月 復員。

以後、国立久里浜病院（厚生技官）、京成電鉄病院長、第三次南極観測

隊越冬隊長、川口医師会病院長、第七次南極観測隊越冬隊長、神奈川

県リハビリテーションセンター病院長等歴任。

（森田 茂）

Thomas Rugo 氏（一九五四—一九八〇）

トーマス・ルゴー君（トム）は、一九七九年九月日本を訪ず
れ、一九八〇年九月二十一日、日本山岳会学生会部・ブリグ・パン
ト峰遠征隊々員として、同峰東南稜上の第一キャンプで雪崩の
為遭難、死亡した。享年二十六才。故国アメリカに両親と兄弟
二人を残した。

トムと我々とは、結局、一年弱の、そして、私とは四ヶ月に
満たない短期間の交際でしかなかった。しかし、この短期間
に、彼は山行を通して多くの友人を日本で獲得し、月並みな表

現を許していただくのならば、我々にかくも深い憶い出を残して去ったのである。

トムは、訪日後数週間の日本語研修の後、英会話教師の職を得、そして、彼の教室に本会の山本良三会員が出席されていたことが我々と彼とを結びつけるきっかけとなった。

トムは、日本での最初の山行の機会を一九七九年十月下旬、山本氏との丹沢行でもった。その後、同年中に秋田・乳頭山、冬富士と計三回の山行を山本氏と行なっている。乳頭山では「秋田の『マウンテン・クライミング』に誘われたので」(トーマス・ルゴ「トム君の栗駒山沢登リポート」『岳人』三九九号より引用、以下同じ)ヘルメットやEBシューズを持参し、また、悪天候下の富士山では登山者の行列に瞠目し、「日本の山では、孤独を見いだすのは、非常に難かしいと悟った」りしている。これらの山登りは、彼がアメリカで身につけた先鋭的な登山観とは大分異なるものだったので、トムとしては大いに面喰らったわけだ。

しかし、一九八〇年の正月には、一橋大学針葉樹会のメンバーによる後立山縦走に参加し、「シユラフも凍る寒さと、深い雪から日本の冬山がどんなに難かしいかを知る」経験も得た。そして、この山行を境に、トムは本会の最も活動的な会員との交際を拡げ、後掲の登山譜に見られるような多くの山行を重ねていった。

ところで、彼は日本での山行の全てに必らずしも満足していたわけではなかった。特に、彼は屏風岩や谷川岳の登攀を通し

て、日本の登山者の姿勢には厳しい批判の目を向けていた。これらの批判には、勿論幾分の皮相さと陳腐さが含まれているとはいえ、やはり日本の登山界の一面を鋭くつく面もあることを認めないわけにはいかない。そして、それはトムの登山観を表現するものでもあった。トムは次のように述べている。

「日本の山登りに関して、私が最近感じてしている焦立ちには、人気のあるルートに登山者が殺到する以外に別の理由があった。あまりにもしばしば、無能な登山者が最新のアルペンファッションを着こみ、不必要な道具で荷を大きくしすぎ、私にはそれが疑問に思えてならなかったからだ。クライミングは個人の技術と唯美主義の感覚に依存するものだが、彼らは固定されたピトンとボルトで充滿したルートを、機械的に、ただ自らを持ち上げていくだけなのを私は見えてきた。スタイル・装備だけがヨセミテから輸入されたものにすぎないように思えた。こんなやり方から、どこかでクライミングの冒険の感覚が失われてしまったのではなからうか」と……。

トムは日本での多くの山行と友人とを通して、そして、その登山観に支えられてブリグパント遠征に参加していった。

私がトムと最初に会ったのは、彼がブリグパント遠征への参加を決めた後だった。そのころ私達は、一九八一年度のカラコルム遠征を企画しており、それがトムの仲間達を中心としたものだったことから、彼も当然のようにこの企画に加わったのである。その後、私は彼と六月中に二回谷川岳に行を共にし、七月には東北の沢登りにでかけた。前出の彼のレポートは、この

際のものである。また、ほぼ週一回の割で彼との会合を重ね、私の家で会合を持つ場合には泊り込むことも幾度かあった。

彼は洋食よりも和食を、また、洋酒よりも日本酒を好んだ。

私の家では、彼の為に日本酒を用意しておくのが常だった。私はしばしば泥酔したが、彼は決して度を越すことがなかった。

全体に非常に抑制の効いた男であり、それは一方では寡黙さとして、他方では誠実さとなって表われた。彼の寡黙さは決して言葉のせいでも、勿論性格の暗さからくるものでもなかった。

それは彼の明朗さと陽気さに裏打ちされていたからであり、また直ちにトムの誠実な態度、行動に通じていたのである。彼は口舌の徒ではなく、簡明な言葉の中に行動を伴わせていた。あるピッチを前に我々が逡巡すると、トムは一言、「僕が行きます」といい、直ちに岩に取り付いた。

トムは何とか日本語で話そうとし、それは充分に我々に通じるものだった。英語は必要最少限しか使わなかった。しかし、私は彼の英語を必要とし、遠征に必要な手紙、書類の推敲を度々彼に頼んだ。私の英語を彼が直し、私が側からその度に「グッド」というと、トムは私の顔を見てニヤリとしながら「これで良いのですか」と聞き返したりした。

トムは、陽気ではあったが、騒がしい男ではなかった。静けさを好み、ある意味の孤独を求める面がなかったとはいえないが、私にはそれがトムの自然観、冒険観を表わしているように思われる。前出の東北での沢登りの時も、トムは滝場毎に変化する新たな景観を前に、しばしば立ち止まっては「いいなあ、

いいなあ」を繰り返していた。それは、谷川岳の登攀では決して見ることもなかった彼の満ち足りた表情であった。

一九八〇年十月、我々はトムの追悼会を麻布国際文化会館でもった。出席されたトムの御両親は、彼の日本滞在は短かったとはしても、それはトムの人生にとって最も充実した輝やかなしい日々であった筈だと話された。私もトムの友人の一人として、また山の仲間として、そうであったであろうことを切に祈っている。

略 歴

- 一九五四年五月十四日 アメリカ合衆国ロードアイランド州ナラガンセットで誕生。
- 一九七二年 シカゴ大学入学。
- 一九七六年 シカゴ大学卒業。
- 一九七九年九月 訪日、トレンダム入社。
- 一九八〇年五月 日本山岳会入会（会員番号 八七三二）。
- 一九八〇年八月 日本山岳会学生ブリグパント遠征隊々員としてインドに向う。
- 一九八〇年九月二十一日 ブリグパント峰東南稜第二キャンプで雪崩のため遭難。死亡、享年二十六才。

山 歴

- 一九七八年七月 ロングス・ピーク、ダイアモンドフェイス。
- 一九七八年七月 グランドティントン北壁直登。
- 一九七八年八月 ロブソン（カナダ）。

- 一九七九年九月 クレマンソー(カナダ)。
- 一九七九年九月 シイル、Vノツチクロワール。
- 一九七九年九月 チーフス・ヘッド、シツクルルート。
- 一九七九年九月 来日。
- 一九七九年十月 丹沢(同行、山本良三)。
- 一九七九年十一月 乳頭山(同行、山本良三他)。
- 一九七九年十一月 富士山(同行、山本良三他)。
- 一九七九年十二月 後立山(五竜岳―白馬岳)縦走(同行、一橋大学針葉樹会)。
- 一九八〇年二月 八ヶ岳(二回)。
- 一九八〇年二月 八ヶ岳横岳西壁(単独)。
- 一九八〇年五月 硫黄尾根―槍ヶ岳。
- 一九八〇年五月 屏風岩東壁ルンゼ(同行、黒田明久)。
- 一九八〇年六月 谷川岳幽ノ沢(同行、藤本敏行、三辺夏雄)。
- 一九八〇年六月 谷川岳一ノ倉沢(奥壁中央カンテ、衝立岩正面雲稜第二ルートで落石のため負傷)(同行、塚原道夫、坂井広志、今野善郎、糸永、藤本、三辺)。
- 一九八〇年七月 栗駒山産女沢(同行、永田秀樹、三辺)。
- 一九八〇年七月 北岳バットレス(同行、奥原、坂井)。
- 一九八〇年九月 インドヒマラヤ・グリグバント東南稜で遭難、死亡。

(三辺夏雄)

村上金吾氏(一八九三―一九七九)

私の父村上金吾が本会に入会したのは、昭和二十五年九月、既に五十八才のときです。父の生れは一ノ関で栗駒山の麓に住んでいたので幼い頃から兄弟と共に野山を歩きまわっていたことでした。私も年少の頃ワラジを作ってもらい五葉山や愛染山、片羽山に登り植物の名など教えられたことをおぼえています。

父は地元の五葉山に登った回数を意識していましたが、その理由を、以下のように記しております。

「もともと私の場合、何ということなしに登りたいと思うときに登ってきた。そのままつづけていたら、何回登れたかわからないし、また、途中でやめていたかもしれない。ところが、あるとき山頂に近い五葉山神社の石祠で、三十三回登山記念と刻んだ青銅の破れた鰐口を発見した。三十三回という登山回数を重ね得たことを自ら喜び誇り、その挙句奉納されたものと思うが、自分だってそれ位の回数はすでに登っているし、できれば百回登ってみようかと思った。そのころ四国の石鎚山に同地の山岳家が百回あてに登っているということ、本会の会報が何かで知った。高さは彼に及ばないが、五葉山百回登頂を自分は自分なりにやって遂げようと決心した。幸い古いメモが散逸せずに残っているので調べてみ

たら、すでに五十回を越していた。もうわけはない。あらゆるコースを登り沢を登り、尾根を登り、苦労はしたが楽しかった。そうして山に興味を持つようになると、自然五葉山だけに嚙りついているわけにゆかなくなつた。付近の名のある山、おもに千メートル以上をめざして、折があれば遠隔地の山にも足を延ばしているうちに、「五葉山百回」のキャッチフレーズは、北海道から九州までの山に変わっていき国内の名の知れた山という山を登り歩いてみたかったので、高い山、険しい山、遠い山から先に登ろうと決心した。富士山にもいったし、槍、穂高、乗鞍などにもいった。北の端利尻島の利尻岳、南の薩摩半島の鼻の開聞岳にも登つた。四国の石鎚山、陰の伯耆大山などへもいったが、おもに上信の山、関東、東北、北海道、ことに東北の山は千五百メートル以上を全部登つた。従つて五葉山には、その間の足ならしに登ることになつた。

五葉山登山はそれから百回を越え、二百回目は昭和四十三年九月十五日七五才の時でした。その後も五葉山を中心に歩き続け、昭和四十五年十月に心臓病で倒れた時までには二百三十二回を数えました。

病後は早池峰、秋田駒、栗駒山等を家族とともに登り、最後の登山は昭和五十年六月の五葉山でした。山開きと私のカラコルム行の壮行を兼ねた登山でしたが、実に二百三十三回目の五葉山であつた訳です。

その後五十一年五月に今西鏡司会長と五葉山に同行した時、

次の様な会話があつたと佐藤敏彦氏よりお聴きしました。今西会長が、初対面の父においくつですかと尋ねられ、父が八十三才ですと答えると、今西会長は、ゴッウーですな、私はまだ七十五才だから私よりも八才も多いとびっくりされたとのことです。

父は人前に出るのをきらう方で、あまり物を言わなかつたが、山のことになると非常に熱心に、止まるところを知らない程におしゃべりになつたものです。またあやふやなこと、賛沢なことを非常に嫌いました。静かな一面頑固なところもあり、たわいないことで友達と口論をしていることもありました。

五葉山の標高については父の持論があります。五葉山は、一三四一・三メートルと国土地理院の地形図、その他すべての地図に書かれているが、これは五葉山の三角点の標高であつて山の最高点ではなく、最高点は三角点から東北東へ約三百メートル離れた地点、コメツガの密林を超出して堆積する岩石のピークで、三角点より約九メートルほど高い。水平器で実測したもので多少の相違があるかもしれないが、とにかく五葉山の標高は一三五〇メートルとして、大差がないと信じていました。もともと三角点は、他の三角点との距離、ヘリオトロープの回照などに支障のないところを選んだものだから、必ずしも山頂と限らない。これは、五葉山に限つたことでなく、ほかにも沢山の例があり、三角点すなわち山頂の誤解する人がかなり多い。せっかく登つても山頂に行かないで下山する人のことを思うと気の毒な気がすると話していたものでした。

父は書き物が好きでしたから、登った山の記録を克明に残しており、昭和二十三年頃の食糧不足時、代用食の弁当で腹を空かして歩いたことなどが、随筆集『旅と山旅』と題して、第六巻まで製本してあります。いずれ、じっくりと読んでみたいと思っております。また父と同じ年代に、同じ山を歩いてみたいと密に思っております。

また父は自然を題材とした俳句を、昭和三十年頃より始め、十七万句位作っており、句集として、山桜、渡鳥、山道、山霧、蔓手毬と題して五巻に収録しております。いずれも製本はしてあるが印刷頒布はしてないので、いつの日か日の目を当てることが出来れば、なによりの供養になるものと思っております。

昭和二十五年九月、日本山岳会入会。
会員番号 三三三四

(村上 力)

一竹中 昇氏（一九五二～一九八一）

竹中がエヴェレストで滑落死した、という知らせを受けたのは、私が米国カリフォルニア州のスタンフォードという小さな町に住んでいる時だった。山岳会学生部のブラマー峯遠征隊長だった伝田克彦君から、突然かかって来た国際電話を今でも良

く覚えていた。「あの、ひどく慎重で、氷雪をこなすのが得意だった竹中が、冬のエヴェレストがいかにか厳しかったとしても、ウェスタン・クウムあたりで滑落するわけが無い、何かの間違いだろう」、すっかり頭に血が上ってがなり立てる私に、伝田君は、今、朝刊を見て知ったことだけど、記事から判断して遭難は間違い無いと思う、とあきらめた様に答える。私はやれきれない気持と、言い様の無いいらだたしさで、一日中仕事も手につかなかった。竹中が、なんであんなところで、と。

やせた体、肩までもある長髪、無精ひげを延ばした血色の悪い顔、うすよごれたセーターとズボン、ぼそぼそとしたしゃべり方。一九七五年の暮、山岳会学生部のガルワル・ヒマラヤ遠征の準備会で初めて竹中に会った時、私が受けた印象はあまり好ましいものでは無かった。学生部の連中に聞くと、竹中は早稲田の仙人とよばれ、学生の間では有名だと言う。その風貌もさることながら、早稲田大学にもう五、六年ごろごろしているのに、山岳部に顔を出さだけで、一向に授業に出席する気配は無い。その間、親に頼っている風にも見えない。ひょうひょうとして、かすみでも食って生きている様な生活態度が、また仙人のイメージを与える、と言う。

学生部の遠征計画は年が明けて急速に具体化した。目標の山はポスト・モンシーンのニルカンタと決まり、私は引き込まれて隊長をやらされるはめになった。遠征の準備を通して竹中と接する機会が多くなるにつれ、彼の素顔が見えて来る。大勢に押し流されず、彼独自の山登りを創り出そうという強い意志を

彼が持っていることをまず知った。そしてその意志は、身近かな日本の山の中に自分の原点を見出したいという彼の「土着」への哲学と不可分に結び付いていることも知った。その伝統の中でいい山登りをしたい。彼の黒部に対する執着がその表われであった。

遠征の準備が忙しくなり始める三月、彼は黒部へ出かけてしまった。恵秀機氏と二人で黒部別山のダタテガビン第一尾根から剣岳八ツ峯三稜の連続登攀を行うためである。この時点で彼は迷っていた。ヒマラヤ遠征が自分の山登りとなり得るのかどうか、黒部周辺でヒマラヤよりもっといい山登りができるのではないか。別山―八ツ峯の連続登攀は成功であった。そしてその時彼の胸の中に、もっと長く困難なルート、鹿島槍北壁―赤沢岳猫の耳―黒部別山南尾根―剣岳八ツ峯四稜をつなげたいという計画が出来上がる。五月になって彼は正式に遠征参加の意志を決めた。その時彼は、ニルカンタ遠征は来年春の鹿島槍から剣のためのトレーニングのつもりだ、と私にもらしたことがある。

七月になって一つの事件があった。インド政府からニルカンタの許可は出せないと断られて、やむなく遠征目標をドゥナギリに変更したのだが、その時竹中は、ニルカンタ以外の山なら行かない、と言い出した。一度決めた目標を変更するのはいやだ、それなら鹿島槍―剣の計画に全力を集中したい。彼の決意を変えさせるには、まわりの仲間の強い説得と長い時間が必要だった。隊長として、こういっただけではたいへん困りものなの

だが、腹が立った覚えは一度も無い。むしろ好ましく思える時もあった。彼の頑固さも迷いも彼の、本当に納得出来る自分の山登りを見出そうという真摯な姿勢から生れて来るものであることが私には良く分かったし、同時に彼の誠実な人柄によるところもあった。

ドゥナギリでは、彼はずば抜けて強かった。六人の隊員の中で高度の影響を全く受けなかったのは竹中一人だけである。彼は六〇〇メートルを越えても荷上げの時はいつも重い荷を率先して背負った。七〇六メートルの頂上を踏んだ後C4へ下りて来た彼は、アタックはもっと厳しいと思っていたがあっけ無くて、むしろもの足りなかったと、拍子抜けの様に言う。最終キャンプを出すまで悪い岩稜帯で連日つらい行動をしていながら、なおかつそう言える余裕があった。また、彼は氷雪の悪い壁をこなす能力に勝れていた。C4とアタック・キャンプの間に垂直に近いスラブに雪がひどく不安定に張り付いた壁がある。彼はそこにルートを開いた。フィックスド・ロープにすがって私も上り下りしたけれど、踏んでも固まらず足をのせるとすぐに崩れる足場と、その下がガンナクイ氷河までずばっと切れ落ちている高度感、頭を押えられる様な急傾斜の圧迫感と、何度通ってもいやな所だった。彼に良く登ったなあ、と言ったら、僕はこういうのは割と得意なんですと言う。彼の不安定な雪壁を登る独特の身のこなしは、彼の極端なほどの体のやわらかさにあったのだろう。ヨガの行者の様に、自分の足をひよいと肩にかついで私達を驚かせたことがある。

もう一つ私が感心したのは、彼の安全性に対する気の配り方だ。フィックスト・ロープの状態を、いつも荷上げの時に確かめて置き、下りにキンクを直したり、ハーケンを打ち足したりして、小まめに修理する。別にそれが彼の役目ではないのに、彼はそんな箇所が気になって自分では居られなかったのだ。

ドゥナギリ登頂は、彼の山登りにとって重要な意味を持つものだった。一つは高所で十分動けるという自信を持ち、同時に自分の登山を創造できる場がヒマラヤにもあることをはっきり感じとったこと。以後彼の目は黒部周辺だけでなくヒマラヤにも向けられる様になる。もう一つは山岳会学生部に対する愛着がより一層強まったこと。

彼は走り出した。遠征前に彼の中に渦巻いていた迷いやこだわりがふっ切れたのだろう、彼は次々と困難な山行を実行して行く。まず鹿島槍から剣の連続登攀。ドゥナギリが終るとどこへも寄らず彼はまっすぐ帰国し、黒部へ直行した。三月の連続登攀の荷上げのためにである。

もう一つ彼がすぐ手がけたのは、学生部発行の雑誌『年報』第六号の編集である。あしかけ三年かけて、一九七八年二月彼はそれを完成させた。二七〇頁に及ぶすっきりとした装丁の本は、企画、編集、原稿依頼から出版費用の工面までほとんど竹中一人の尽力によっており、従来年の年報の枠をはるかに越えたものであった。少し長くなるが編集後記に彼が書いている文章の一部を引用したい。そこには編集にあたっての彼の姿勢、言

いできれば彼の山登りに対する基本的な考え方、彼の、大学山岳部・山岳会学生部に対する愛着がはっきり述べられているからである。

* 昨今、「大学山岳部の低迷化」なる言葉をよく耳にしたりに目にする。その度に、大学山岳部で育った僕は、言い知れぬくやしさと寂しさを感じずにはいらなかった。確かに最近では、大学山岳部関係者の好山行記録は少ないが、基礎体力・技術は過去とそんなに変わっていないはずである。足りない(劣る)のは、おもしろい山行をしようとする意欲ではないか。もっと、もっと現役諸君におもしろい山行を考えて貰いたい。そんな思いを込めて、特集「大学山岳部の原点を探る」を組んだ。

* 学生部の海外登山記録を二つ掲載した。稚拙で未熟な登山隊であったろうが、Light Expedition Style で伸び伸びと山登りを行って来ている。冬の剣や穂高に登るような気持で、海外の峰々を登ってくれば良いと思う。しかし、出掛ける前の国内での山行は大切にしたものだ。国内の山行の延長線上に海外登山がある、というあたりまえのことを、僕は強く思う。

ここに書かれている通り彼は「おもしろい」山行を次々と計画し、驚異的な行動力でそれをなして行て行く。一体あのやせた体のどこにそんなエネルギーが秘められていたのだろうか。一九七七年三月鹿島槍―剣、七七年十二月から翌年二月にかけて親不知から槍への縦走、同年八月山崎裕和氏と二人でテイリチ

・ミール山群の六六〇メートル峰、一九七九年三月再び鹿島
 槍―黒部別山―剣―僧ガ岳までの連続登攀、同年秋キシトワ
 ール・ヒマラヤのシツクル・ムーン（六五七四メートル）及び
 ブラマー一峰（六四一六メートル）の登頂と息をつく間も無い。
 そして、一九八〇年の七月にバツラ一峰（七七八五メー
 ル）に駒宮博男君と二人で挑み、駒宮君の下山後は単独で七五
 〇メートルまで達した。天候さえ良ければ、と悔し涙をうか
 べながら吹雪の中を一人下山した、と彼は手紙に書いている。
 こうした山行を続けるうちに、彼の意識は「土着」に対する
 こだわりからますます解放されて行く。彼はクルト・ディーム
 ベルガーの評伝を書くためにバツラ下山後すぐオーストリア
 に飛ぶ。ディームベルガー及び彼をめぐる人々に会うためであ
 る。同時に新しい学生部の遠征を計画。カラコルムのユクシン
 ・ガルドン・サールの許可を取得するため動き始める。彼はこ
 の遠征隊に、彼と親交の深かったトーマス・ルゴ、ロバート
 ・シャウアー、ナジール・サビブなどの参加を考えていた。学
 生部国際隊である。彼にしてみれば山登りが好きで、一緒に登
 れる人なら、国籍は問題でなかった。

竹中を中心にして、山岳会の学生部は開けたものになった。
 山登りの好きな若者が活発に出入し、人の輪が広がる。そして
 その中から海外遠征がいろいろな形で飛び出して行く。

一九八〇年秋オーストリアから帰って間も無く竹中は植村直
 己氏を隊長とする冬期エヴェレスト登山隊の隊員として旅立っ
 た。そして二度と彼は帰って来なかった。私にはいまだに、ど

うして竹中があんなどころでと、思い出す度に胸の中が熱くな
 る様な悔しさととらわれる。竹中はドゥナギリ以後、総て彼の
 山行は自分で創って来た。エヴェレストだけがその範ちゅうか
 ら外れるものであった。悔しさの中には、どうして彼が最後ま
 で頑固に自分の山登りを通さなかったのか、という思いがあ
 る。

山 歴

一九七二年四月 早稲田大学山岳部入部。

一九七三年二月 日高山脈北部縦走（山岳部春合宿）。

一九七五年五月 日本山岳会学生部で活動を始める。

十二月 白馬岳主稜単独登攀（一九七四年九月の山岳部遭難事
 故以後悩んでいたが再起、自分の山登りを始めた）。

一九七六年三月 大タテガビン第一尾根と八ツ峯一峰三稜、主稜連続登
 攀。

五月 東大谷駒草ルンゼと剣尾根連続登攀。

九月と十月 ガルワル・ヒマラヤ、ドゥナギリ（七〇六六メートル
 北稜初登攀―（日本山岳会学生部））。

一九七七年三月 鹿島槍天狗尾根と赤沢岳西北尾根と黒部別山南尾根と
 八ツ峯一峰三稜、主稜と剣岳―積雪期飛驒山脈の横
 断。

八月 日本山岳会学生部年報第六号の編集に従事。

十二月 日本海、親不知と槍ヶ岳―積雪期飛驒山脈の縦走

一九七八年一月 『山岳』第七十三号参照。

五月 日本山岳会『山岳』編集委員

八月

ヒンズー・クシユ、テイリチ・ミール(七七〇六メートル)を六五〇〇メートルまで偵察・試登、グル・ラシュト・ゾム東峰(六六一一メートル)登頂(山岳同人まほろぼ)

一九七九年一月

赤沢岳西稜猫の耳登攀

三月

鹿島槍天狗尾根、赤沢岳西稜、大タテガビン第一尾根、八ツ峯一峰三稜、主稜、劍岳、北方稜線、宇奈月——積雪期飛驒山脈の横断

九月、十月

キシユトワール・ヒマラヤ、シツクル・ムーン(六五七四メートル)、南東稜初登攀、ブラマーI峰(六四一六メートル)、南東稜登攀(日本山岳会学生部)

一九八〇年七月

八月

カラコラム、パツラI峰(七七八五メートル)、南面より二名によりライト・エクスペディションで七五〇〇メートルまで試登(日本山岳会学生部——『山岳』七十六年英文サマリー参照)

一九八一年一月十二日 日本冬期エヴェレスト登山隊員として登山中、

午後三時、六八〇〇メートル付近で滑落し死亡。

(牧野内昭武)



圖書紹介

わが登高行（上・下）

三田幸夫著 菊版 本文（上巻）四七〇ページ 下巻 五〇八ページ
写真（上巻）：八葉 下巻 二四葉
一九七九年六月（上巻） 一九八〇年十月（下巻） 茗溪堂刊 定価上巻三八〇〇円 下巻四五〇〇円 他に限定特装本あり

『わが登高行』は昭和五十五年十月に待望の下巻が発行され上下二巻が完成した。正味九七八ページは、年間一〇〇冊以上にのぼるといわれる山の出版物のなかで、ひとときわ光芒を放つ本である。

三田さんには本書を出されるまえに『山なみはるかに』（昭和二十九年）、『遠い山遥かな旅』（昭和三十年）、『山のがき大將たち』（昭和三十七年）の三冊の旧著がある。これら三冊におさめられているもののほか、上巻の第一部を飾る『僕の少年時代』は本書上梓にあたって新たに書きおろされたものであり、下巻の最終章「底倉記」は旧著以降に執筆された長篇である。

る。旧著以降に書かれたもので、「底倉記」のほか、雑誌・新聞の類に寄稿されたものがたくさん再録されていることは言うまでもないが、本書を編集された一人の島田巽氏の話を聞くこと、今回の上下二巻におさめきれず割愛したものが、ゆうに一冊分をつくるに相当するくらいの分量であった、ということからして、三田さんがいかに筆力旺盛な人であるかがわかるし、割愛せざるを得なかったための取捨選択には編集者は少からず苦心されたことだろうと推察する。しかし、版元の事情によるのであるが、これが割愛するを余儀なくされたことを惜しむのはひとり私ばかりではないと思う。

三田さんはアルピニストとして自伝をのこしておいてほしい人にふさわしい岳界の長老である。本書は必ずしも著者による自伝としてまとめられたものではないが、たまたま上巻第一部の「僕の少年時代」と下巻最終章の「底倉記」をつなぎ合せて読むと、三田さんの生いたち、山への思慕、どういうふうにして積雪季の穂高や剣岳の登攀等からアルパータのような峻険な未知の岩峰に向ったか、そしてヒマラヤの山々へと並々ならぬ執念を燃やすことになる三田さんの辿った軌跡を、読者もまた辿ることができるにちがいない。この二つの文章には著者の自叙伝ともいふべきものが巧まずして組みこまれていることを読者は知るだろう。

慶応山岳部の『登高行』、日本山岳会の『山岳』や『会報』をはじめとして、一般の山岳雑誌類は言うまでもなく、その他随分いろいろな雑誌類に求められるまま著者は執筆寄稿してい

る。編集者が整理した初出一覧からひろってみると、山岳雑誌以外のものとして、『プレスサービス』、『婦人之友』、『改造』、『仔馬』、『隨筆』、『三田評論』（八篇）、『文芸春秋』（三篇）、『放送文化』、『東京新聞』、『日本経済新聞』、『神奈川新聞』、『興信ニュース』等がみられる。こうしてみると、今回割愛された分のなかにも、山岳雑誌以外で、ちょっとわれわれが気がつかないでいるようなものがあつたのではないかと想像されるだけに、せめて巻末に著作目録一覧でものせておいてもらいたかつたような気がする。

かつて藤島敏男氏の『山に忘れたパイプ』に、歴大な登山年譜がのつていて、藤島さんの登山を知るためのこの上ない資料を提供していたことを考えると、将来「三田幸夫における著作の研究」というようなことをやろうとする篤志家のために、割愛分を補充する意味の、全著作目録があればよかつたと思う。本書については、既上巻を川崎精雄君が会報四一四号に、田口二郎君が下巻を通じて四三一号に紹介している。いずれも著者に対して厚意あり、かつ正鵠を得た評である。したがつて、私が再びその内容をくわしく紹介するまでもないので、ただ本書をひもどく機会のない会員のために、上下二巻の構成の概略と、いささか書評を逸脱するところもあつて恐縮だが、思いつくままを述べてみることにしたい。

まず上巻は、第一部 青春の山々（十二篇）、第二部 アルパタ遠征（五篇）、第三部 インド時代とその回想（十五篇）とからなり、下巻は、引き続き第四部 マナスル遠征とその後

（十一篇）、第五部 山の仲間たち（二十篇）、第六部 随想（二十四篇）、第七部 底倉記で終つている。

青春の山々の第一篇「僕の少年時代」が交響曲にたとえればプレリユードであり、それに対し下巻第七部の「底倉記」はフィナーレにふさわしい。この導入部にあたる少年時代ほか青春の山々各篇や、終曲になる底倉記がなんともいえなくよい。感傷でもなく詠嘆でもない。淡々とした語りよりのうちに人間三田幸夫が深いほりて浮彫りされ、読後いつまでも心に残り、あたかも古い窯元から出る名人芸の気韻と色合いに似たものがただよっている思いがする。八十年の体験というか、年輪の厚みからくる枯淡の味わいと、あるいは優れた文章力によるものであることに間違ひはないが、山岳雑誌にとどまらず文芸雑誌などからたびたび寄稿を求められるのは、やはり一般の読者をも魅了するそのような文章の巧さがあるからなのであろう。

三田さんくらい多くの会員から敬愛されている長老は少い。慶大で活躍した人だから、同輩の人達からは当り前のことであるにしても、そういう同門意識を離れ、三田さんのファンが多いのには実は驚くのである。この三田さんの持つ魅力、秘密はなんだろうか。飾り気のない人柄、時には村風子然とした風貌、豊富な経験をもちながら少しも指導者ぶらない、淡々とした人とのつきあい、そういったことが混然一体となって凝縮し、アルピニストとしての三田さんの人柄を形成しているのではないかと私は考えている。本書のなかにひきあひに出される人物の多いのにもその一端は物語られていよう。

酒仙と言っても過言でないほど酒を好む著者は、その片鱗を下巻第六部の「猪の只酒」に実にあざやかに語っている。しかし、最近はあるほど好きな酒にも節度をもたれているのをある機会に発見してびっくりした。さる日愛鷹山へ登ろうと気の合った仲間たち数名で出かけた時であった。東名高速道を目的地に向って走った。世話役の小原勝郎君が気を利かして三田さんのために高速道路を出てからのレストランで昼食をとることに計画した。というのは、高速道路内では酒を飲ませないからである。ところが三田さんは酒を飲もうとしない。運転をしている太田敬君や金坂一郎君が飲みたいのを我慢しているのに自分だけ飲んで是不まないと言われるようなのだ。

また、無類の愛飲家でありながら甘味も好む。いつか本書の版元の坂本矩祥君と私と三人で一杯やったあと、どこかで甘いものをやろうということになり、ちよつと洒落た甘味店を見つけて酔余の口直しにはいった。その店で猛烈に濃厚なしるこのおかわりをする三田さんに、思わず坂本君と私は顔を見合わせたものだ。酒にまつわる話は本書のいろんな場面に出てくるが、甘味については出てこない。あんパンやしるこの話ではさすがにテレクさいからなのであろうか。

近年山のアプローチが便利になり、登山技術もなにかと人工化されたため、山登りにロマンがなくなりがちである。しかし、三田さんの文章にはほのぼのとしたロマンが漂っている。

マナスル登山の隊長としては人知れぬ苦勞もあったのだと思うが、「マナスル遠征とその後」を読むとヒマラヤ登山の楽し

さが生き活きと描写されている。元来長期の登山中、隊員相互の間には、よかれあしかれ感情のズレや、功名争いや、ジェラシーに似たものが起りかねない。しかしこのマナスルの記事にはそのような陰の面がまったくと言ってよいくらいない。一つにはマナスル遠征が、初めての日本からの本格的エキスペディションで、隊員みんなが遠征ズレせずに、献身的に隊の行動に奉仕していたからなのかもしれないが、一つには隊長である三田さんの人間性による統率力がなによりも大きく作用したのではないかと想像する。かなり克明に述べられている下巻第四部のマナスルに関する各篇には、それでいて愛犬ロンの話や、ベースキャンプの即席蒸し風呂の話などがさり気なく、しかも軽妙なタッチではさまれており、読者を飽きさせない。

与えられた紙数で私に述べられる感想のあらまは以上のようなことになってしまいが、それはそれとして、本会十一代會長、名誉会員の出した大冊とあれば『わが登高行』は会員諸君の書架に欠かすことのできないものと言うべきであらう。

なお掲載の写真四十二葉は大変珍らしいものばかりで資料的価値も高い。一例をあげれば、鹿子木員信先生渡欧送別会（一九二三年）、青島に赴任される榎、中條両氏の送別会（一九二四年）とかどれも三田さん、早川種三、佐藤久一朗、大島亮吉等の諸氏が学生服姿で写っているのも珍らしく、アルバータ遠征隊献送会（一九二五年）には大島亮吉、伊集院虎一両氏の軍服兵隊姿が異彩を放ち、浄土山頂の記念写真は秩父宮、榎さんほかみんな揃いの巻ゲートルに山靴アイゼンで当時の慶応の古

典的スタイルもなつかしい。

これらは、三田さんとは切っても切れない関係にある横有恒氏の『山行』その他の著書や、慶応の『登高行』にも発表されていない著者五十数年秘蔵の歴史的写真である。本書の出版がなければ永久にわれわれの眼にふれる機会がなかったものだろうと思う。

ただ写真説明の人名に校正上の誤りと思われるのが散見されたことを惜しむ。

(織内信彦)

折々の山

望月達夫著 B6判 三三七頁 写

真四葉 一九八〇年七月 茗溪堂刊

定価一九〇〇円

一九六八年刊行の『遠い山近い山』に次ぐ著者二冊目の著書である。前著以後の、『針葉樹会報』、『いろりばた』、雑誌『アルプ』などに発表された三十八篇に、書きおろし四篇を加えた四十二篇の紀行を包含する。

著者の山は、柔軟にしてしかも一本芯がとおっている。本書には、それによって長年培われた眼が光っており、人柄がにじみ出ている。

著者は、自分の紀行はガイドブックとしても役立つように心がけている、と言う。従って、その記述は終始綿密に、撫でるように及んでいて、欠けるところがない。たとえば、山の帰りにどの店で幾らのそばを食べ何時発のバスに乗った、というような一見平凡な事柄が、著者の淡々とした話し方にかかるど、実に生き生きしてくる。

このように著者は、山行きの折りのどんな些細なことでも、手数をいとわずにメモを取る。会った人、路傍の石仏の年代、咲いていた花、道をたずねた家の様子、さては宿の夕食の膳に並らんだ茸や山菜の類まで、何でも吸収して余すところがない。これらの集成が快著となっているわけで、風景や山の状態にも深い洞察が払われているのは、言わずもがなである。

たとえば「只見線の発車は一時四十五分なので、駅でそばの立食いをやり、ブリッジから遠くの山をカメラに収め、会津川口から奥はやつと昨日から通じるようになったという、その只見線に乗り込む。」「博士山」などでも、そばやカメラがその場の情景をほうふつとさせる。そして「その年は春になって雪が多かった―飯豊連峰は三月の山を思わせるように山麓まで真っ白、線路の脇にも残雪が―」と続いて、景色を伝えている。

目次を見ると、一般に知られていない山がずらりと並んでいて、著者の幅広い登山活動に一驚させられる。会津布引山、飯森山、藤里駒ヶ岳、荒島岳、神室山、池口岳、大川入山、等等である。転石峠や沼越峠、吉尾峠などにしても、そこを越えた登山者の数はそう多くあるまい。『月山』の一文を読むと、肘

折温泉までの古く長い道をよくも歩いたと感心させられると同時に、あまりに開け過ぎた月山であるが故に、こうした古道を辿る気になった、という著者の心情が読む人に共感の念を起こさせるに違いない。著者の真骨頂というべきであろう。

今は亡き日本山岳会員の先輩諸氏との楽しかった山行も、何篇か載っている。藤島敏男氏との『博士山』。村尾金二氏との『阿武隈の冬の旅』。川喜田壮太郎氏との『早春の峠越え』。深田久弥氏との『深田さんとの山歩き』。

著者は、当然と言えば当然だが、山の本をよく読んでいて、紀行の中に先人たちの文や名が出てきて効果を高めている。『藤里駒ヶ岳』の菅江真澄や『秋山郷と鳥甲山』の鈴木牧之。『虎毛山と神室山』の「今井雄二氏の『続心の山』を見ると同氏は既に四十一、二年頃この山に―」。『阿武隈の冬の旅』の「古い日本山岳会々報を見ていたら、故行方沼東氏の『蓬田岳』の一文が―」。また神流川や稲含山の紀行には高畑棟材氏や、『日本山嶽志』が引用されている。

著者が、その山行に力を貸してくれた友人たちに対し、文中で感謝の言葉を忘れていないのは実に気持ちよく、敬服する。佐藤敏彦（和賀岳）、中西章（丸山岳）、松井辰弥、高木碕男、同泰夫（荒島岳）、室次雄（阿武隈の晩秋）、牧野衛、石間信夫、水野公男（池口岳）、などの会員諸氏である。

著者が、山行の終りの部分を大切にしていることは、次の文でも知られる。「邑のはずれにある十五社神社に旅の無事を感じて頭をたれ、取つきの巨きな農家の戸をたたいて電話を借

り、水窪からタクシーに来てもらうことにした。待っている間にも、山奥の人々の心のあたたかさが感じられるような邑であったし』『ある正月の旅』。「われわれのためにわざわざ餅を搗いてくれたが、そんなにまでしてくれただけ暖い心づかいが、この山の最後をこの上なく心たのしくしてくれただけ、忘れがたく思うことのひとつである」『会津朝日岳』

私事に亘って恐縮だが、私は著者と無慮百回は同行の山登りをしていのに、無精者であるから日帰りの山行などの場合、駅の出発と帰着の時間を書く程度で、肝腎の山での記録をさぼることが多い。著者と正対だから、本書を読んで、そうだからなこととも有ったつけ、と思ひ出し、反省させられる点が多い。ともあれ、著者の紀行は完璧で、ここはどうなっているか、などの疑義をもたせない。ちょうど読者も一緒に山行をしている気分になる。一読をすすめる所以である。

写真は、もっと入れたかったが値段を低くするため四葉にした、とのことで、著者は写真の出来上りに少々不満らしいが、この程度ならよいのではないか。しかし本当はもっと傑作なのに違いない。

装丁はブルーの布地に白い線を散らしたもので、青空をたなぼほの絮が飛んでいるような明るさがある。

著者の登山は、いよいよ数を増し、とどまるところを知らない。次の文が著者の山の傾向を物語っているので、次回もこんな好著が出るにちがいない。それを期待して、拙い紹介文を終る。

「年齢を加えると共に私は、常に自分にとって未知の山ばかりを、能う限り広い範囲で求めてきた。しかもできるだけ人に会うことのない山道をとって……。心の山とは、人によってはある特定の山の場合もある。しかし、私の場合は常に新しい山であり、新しい山道であった。それがあつた限り、それによって心のふくらみが与えられる限り、私の山の遍歴は終わるまで。」

(川崎精雄)

STONES OF SILENCE

: Journeys in the Himalaya

by George B. Schaller

ANDRE DEUTSCH 1980, London

pp. 288 14 Color Plates 26.95

ジョージ・シャラーは登山家ではない。なぜなら登山活動を行なっていないからである。彼はごく一般には動物学者であると思われている。しかし彼はけっしてアカデミーの学者ではなく、いふなればフィールド・ナチュラリスト、それも精力的な活動家といふべきである。

シャラーの動物観察記はすでに幾冊かが翻訳されているのでご存じの方も多いであろうが、それらの本を読んでも他の

著者による動物の本と大いに違っているところがある。それはテーマとなる動物の記述にうつる前に必ずその動物の住む土地の環境やその性格をきわめて正確に、ていねいに記載しているという点である。なぜそうなるかというところが地理的センスを持っているということと、自然をトータルにとらえようとする姿勢を持っているためである。対象の動物がゴリラであるのと、あるいはユキヒョウであろうとその動物の住んでいる土地及び環境と、その動物の生活や行動とを切りはなしてしまつては意味がない、ましてフィールド・ワークであればなおのことであるところをえているのであろう。彼はそのような視点でもう二十数年にわたつて次々と興味深い観察と研究を實踐している。一九五〇年代の後半、ウィスコンシン大学の学生の時に、アラスカ最後の秘境ブルックス・レンジへ入り、鳥や哺乳類の記載を行なつた。それを皮切りに、以後有名ないくつかの活動をあげると、一九六〇年にザイルの森林地帯でのマウンテンゴリラの観察。これは京大の今西錦司氏のグループのアフリカ研究と同じころである。また同じアフリカではタンザニアのセレンゲティでライオンと草食獣の生態観察を行なつた。ライオンと並ぶ肉食獣の王者トラに関しては今までほとんどくわしい観察がなされていなかったが、中部インドのカナナの森でトラをじっくり観察しシカなどのえものとの関係を明らかにしていった。次にヒマラヤ地域に入り山地の動物相の調査と観察を行なつた。ヒマラヤ地域の動物の生態はほとんど知られていない。本書はこの期間(一九六九—一九七五年)の調査の副産物として

の紀行編である。(研究書としては、『Mountain Monarchs』 Chicago Univ. 1977 が上梓されている)。ヒンズークシユではユキヒョウ、カラコラム、ネパールヒマラヤ及び南インドのニルギリ山地では野生のヤギとヒツジを調べており進化の問題にも言及している。その後も精力的活動は続いており、ブラジルの深い森林中でジャガーと捕食獣を追い、また現在では中国四川省の山中でジャイアントパンダの観察を続けている。

シャラーの対象となつてゐる動物達はけつして珍らしい動物ではない。それではその動物について我々は良く知っているのかと問われても何も知らないと答えるであらう。ましてその動物の住む土地へ行き、実際に生活する姿を知つてゐる者は少数に限られてゐる。それらの動物達の住む土地は日々狭ばめられ、森林の奥へ、山の奥へと追い込まれ、数を減らしてゐる。そのような動物の本当の姿を求めて観察地へ入り込むだけでも多大の困難が伴うだろことは容易に想像されるが、さらにその場所では強い観察を続けて学問的な成果をあげるのには並大抵ではあるまい。ある対象を終えて次々とテーマを変え、場所を変えてゆくのであるが、それはいづれも先人のいないパイオニアワークである。そしてこれらの観察の計画から準備をも含めてすべて彼は一人で行なつてゐる。このような行動力と広い行動範囲を持つシャラーと比べられる研究者も登山家もそう多くはないと思われる。

彼のダイナミックな行動力と場所や動物達の生きざまを描く筆力が多くの読者を引きつけるのは当然であらう。この本は対

象地域がヒマラヤということでは登山者とも大いに重なるものを持つはずなので登山者の書いたものと比較してみるのも面白いからう。

先にも書いたようにヒマラヤのような険しい山岳地帯へ入り、しかもそこで成果をあげるといふことは並大抵のことではない。それゆゑに研究者達の大部分は高山や、熱帯の森林地帯などを対象の外に置いていたのであるが、シャラーはその苦勞を自ら進んで受け入れていたのである。従来ヒマラヤの自然についての情報は探検家や登山家によつてもたらされてゐた。しかしその情報は断片的なものであり今も十分には解明されてゐるとはいえない。ヒマラヤに接する機会の多い登山者としてぜひ知識をもち、見方を知つてヒマラヤの自然の解明に寄与したいものである。

ところでめづらしい土地へ行つたにもかかわらず土地感覚ともいふべき探究精神が欠除してゐたならば、もたらされる情報は微細にとどまるであらう。その良い例が日本人登山者である。めづらしい土地へ大挙して出かけていながらいつころに情報が増えない。登山が多様化したとは言つても、「登山者」ばかりが目立つようになり、現地の情報は彼らの記録や報告からはほとんど期待できない。そこでシャラーのように注意深い観察者の本から我々は山の知識と情報とを得ることになる。

シャラーの記述は行動中の観察が細かいばかりではなく、めづらしい土地へ入つた理由や方法にも言及されてゐる。またそ

の土地へ入った先人達のことも良く調べており引用も多い。彼はそのような書き方をする事によって自分の行動の意味をはつきり位置づけている。先人としてあげられている登山家は我々になじみ深い人々である。コンウェイ、ブルース、ニープ、ロングスタッフ、メイスン、デジオ、シプトン等々。彼らはいずれも登山者であると同時にすぐれた自然観察者でもあったのである。また行動途中で出会った動物や植物についての説明がその都度書かれていることはいうまでもない。

順を追って内容を記しておく、ヒンズークシユではチトラル・ゴルと呼ぶチトラルのミールの御獵場であった谷間へ入り、野生のヤギのマルコールとユキヒョウの長期観察をしたあと北部へ旅行をする。季節は冬であり、登山者のほとんど知らない季節の様子が観察されていて興味深い。カラコラムではキリク峠とクンジュエラブ峠という外国人には鎖されためざらしい場所へ特別の許可を得てマルコポーロシープを尋ねにゆく。このあたり一帯は後にシャラーの提案によって国立公園となり、動物達をハンターから守ることができるようになった。一九七五年にはバルトロ氷河地域へ入っている。この地域の動物相はそれほど豊かではないという。丁度この時アメリカのK2北西稜パティと出合っている。次にパキスタン北西部のソルト・レンジの岩山と、南インドのニルギリ山地のめざらしい記述がある。ネパールでも二ヶ所めざらしい地域を歩いており、そのいずれもがチベット国境に近いところで記録としても興味深

い。ポテコシの支流カンチュー地方と西ネパールのカンジロバ・ヒマールの北東側である。ここでは主にパールルとヒマラヤンタルを観察する目的を持っていた。これらヒマラヤの各地方を尋ね注意深い観察によって幾種類かの動物を調べることができたのだが、ヒマラヤの山奥とはいえ今では開発の波は押し寄せ、残り少ない自然も消えてゆこうとしている。登山者としての我々ももっと広い目でヒマラヤとヒマラヤの現実をながめるようにしなければならない。

(児玉 茂)

A Quest of Flowers

: The Plant Explorations of F. Ludlow
and G. Sherriff

by Harold R. Fletcher

Edinburgh University Press 1975,

Edinburgh pp. 387 £ 14.50

本書はその副題にもあるように、フランク・ラドロウ(Frank Ludlow)とジュージ・シェリフ(George Sherriff)が、一九三三年から一九四九年まで、七回に亘って、ブータン及びチベット南西部を植物調査旅行した紀行である。著者のフレッチャーは、イギリス、エディンバラにある王立植物園長であつて、ラドロウ、シェリフ両氏の友人であり、二人から直接話をきい

たり、文通したりしたが、題材の大部分は、この七回に亘る大旅行中に刻明に書いたシェリフの日記と、ラドロウが何回かに分けて寄稿したヒマラヤン・ジャーナルの記事や、園芸評論 (Gardening Chronic) の文章を参照している。

二人の登場人物のうち、ラドロウは一九〇八年にケンブリッジ大学を卒業し、自然科学の修士となったが、植物学については、マーシャル・ウォード教授の指導を受けた。このウォード教授というのは、一九〇九年から一九五六年にかけてアジア大陸内部を二十三回も踏査し、一九二四年にはブータンからチベットに入り、ツアンポ河を下降した植物学者キングドン・ウォードの父親であった。ラドロウは植物学者、園芸学者として著名であったのみならず、英文学にも通じ、特に詩に関しては業績もあった。一九二二年からしばらくの間、チベットのギャンツェに開設された英国系の学校の校長として勤務し、一九二七年以降、北インドのスリナガルに二年滞在し、二九年にはトルキスタンのカシユガルにある英国領事館に勤務しながら、天山山脈にも足を伸ばして植物や鳥の採集を続けていた。

このカシユガルの領事館で巡り会ったのが、もう一人の登場人物であるシェリフであり、ここで二人の交遊が始まり、互に生涯の無二のパートナーとなる発端となった。ラドロウはギャンツェ、スリナガル、カシユガルの経験を通じ、シェリフと二人で、ブータンやチベット西部の探検を夢見たのであった。シェリフは職業軍人であったが、機械や電気に関しても豊富な知識と技術を持っていた。植物や鳥についてはもとより専門家

ではなかつたが興味はもっていたらしく、また二人は音楽やスポーツの面でも共通の趣味を持っていたといわれる。シェリフはラドロウより十五才年少であったが、カシユガルに滞在していた一九三二年までには副領事から領事へと榮進した。

一九三〇年の末にラドロウは天山山脈などで採集した鳥の剝製八〇〇点、六、七百個の鳥の卵、二千匹の蝶、それに膨大な植物標本を持ってスリナガルに戻り、一方シェリフは一九三二年にソビエトについての数々の有益な情報を持ってカシユガルを離れた。そして、二人は一九三三年にブータンの探検に出発するが、この本は、そこからスタートしている。

第一章は、一九三三年のブータン旅行の記録で、ブータン西端のハから出発して、幾つかの峠、北から流入する川を越えながら、東部国境近くまで横断し、北に向ってチベットに入り、チベット領内を大きく迂回して、チョモラリ山群を眺めながら、ヤトン(亜東)に戻るまでの五ヶ月の旅である。第二章はその翌年一九三四年に行なわれたブータン東部の植物調査であり、このときも国境を越えてチベットの領域へも足を踏み入れている。この行程も四ヶ月に及ぶ徒歩旅行で、鳥の観察と、植物の新発見にすばらしい成果を挙げている。

第三章は一年置いた一九三六年の旅についての記録で、東部ブータンを北上して、チベットにはいり、チベット領の山岳地域を三〇〇キロメートルも東進して、ツアンポ河に達するという長大な旅行で、本書の圧巻でもある。この地域の高峯タクパ・シリ(約七〇〇〇メートル)については、その写真も含め

て本書以外では見られないものであろう。第四章はブータン中央部の山岳地帯を植物を求めて縦横に歩きまわる一九三七年の記録で、ブラック・マウンテンと呼ばれる五千メートル級の山地を、幾多の困難に耐えながら四月から八月に亘って探査している。

第五章はその翌年、つまり一九三八年に、それまで誰も訪れたこともなく、地図上の空白地となっていた、ツァンポ河の大弯曲点の北側の調査探検で、この地域の最高峰であるナムチャ・バルワ（七五五メートル）ギャラ・ペリ（七一五〇メートル）の両峰にはさまれた、登山対象としても興味ある部分が記述されている。この章では珍しく、シェリフとラドロウが一緒に行動しない場合が多く、シェリフが単独で行動している間には、ラドロウは本書の序文を書いているジョージ・テイラーと一緒に行動して、ある地点で三人が合流したり、逆にシェリフとテイラーがパーティとなって、ラドロウが単独に行動したりしている。一九三八年の旅は十か月に及んだが、その年に第二次世界大戦が起り、高山植物の標本や種子の本国への輸送が難しくなり、次の二人の探検旅行は一九四六年に再出発することになってしまふ。したがって第六章は一九四六年のツァンポ峡谷の旅となっているが、第五章と第六章との間に、特別の一章が挿入されている。それは第二次大戦中の一九四二年から四五年までの間、チベットのラサに滞在していたシェリフ夫人のパーティ・シェリフの生活記録である。これは他の章とまったく趣を異にするが、女性らしい文章で身のまわりのことが書か

れており、興味深い。最近、ラサまでは自動車道路が完成し、飛行機が乗り入れ、中国の支配が確立して、生活のすべての面に亘って急激に変貌をよびあげている。したがって、このシェリフ夫人の観察が、数千年来続けてきたチベット人のラサの生活の最後の場面かも知れない。

第六章は戦後間もない一九四六年から翌年にかけての、ツァンポ川及び南西チベットの旅行記である。四六年の暮に、ラドロウ、シェリフ、シェリフ夫人、それにエリオットがカリンボンに集ったところから始まっている。カリンボンからラサまでの道路は彼らにとつては散歩同様であり、やはり、ギャラ・ペリを眺めながら未知の部分に入っていくところが迫力がある。ラドロウはときにはエリオットと組み、ときには単独で、ツァンポ河のゴルジュを徹底的に歩きまわる。終章である第七章は、一九四九年の紀行で、ラドロウとシェリフは三たびチベットとツァンポ河の探検を目指したが実現できず、ブータン国内の旅行にとどまってしまった。しかし彼等のすさまじい探究心は、通常の旅では飽き足らず、ラドロウは西ブータン、シェリフは中央ブータン、シェリフ夫人とヒックス医学博士は東ブータンとわかれ、全員がバムタン村で出遇うことを約して、それぞれ行動した記録である。

本書は登山記録でもなく、案内記でもない。本書には八千メートル級の高峯はもとより、著名な山の名は一つも出てこない。やや有名な山といえ、ナムチャ・バルワ、ギャラ・ペリ

ぐらいであるが、この名前も多くの人を知っているわけではない。しかし敢えてこの本について紹介するのは、恐らくこれが地球上最後の探検の名にふさわしい旅であるし、そのすばらしいパイオニア精神が旺盛しているからである。

チベット南西部、ツァンポ河あたりは二十世紀になっても最も未知な土地の一つであり、一九一三年に初めて地を訪れたベ伊利ーとモーズ・ヘッドによって、ツァンポ河がブラマプトラ河の上流であることが、やっと確かめられたという土地柄である。それまではツァンポ河はイラワジ河に注ぐと思われていたのがあった。一九二四年、イギリスの植物学者キングドン・ウォードはやはりブータンからツァンポ河流域を歩いている。ウォードはイギリスの産んだ最大の探検家の一人で、一九〇九年から五六年までに亘る生涯の大半を探検に費し、アジア大陸内部だけでも二十三回に亘って踏査している。とはいえ、ベ伊利ーとウォードの二人の探検だけでは、その成果は充分でなく、ラドロウとシェリフの二人によって初めて、その未知の部分のベールがはがされたといつてよいだろう。

二人の旅行はすべて徒歩である。歩いた距離は何千キロメートルに達するだろう。この二人はただひたすら未知の土地と未知の植物を求めてその情熱をたぎらせ、野宿に野宿を重ね、嵐に襲われ、食糧の絶えたときもあった。驚くべきはその闘志と体力である。四千メートル以上の高地を何日も歩いているうち、熱病の症状に悩まされたかと思うと翌日はもう治っている。食中毒で死ぬほど苦しんだときも、盲腸炎のような痛み

襲われたときも何となく元気になってしまふのである。そして一九四九年のブータン旅行のときは、ラドロウは実に六十三才という年令であった。

この本の文章には、二人の会話はほとんどない。周囲の風景の描写もあまりない。ただあるのは二人のすざましい探究心と、珍種を発見したときの喜びだけである。この本には植物の学名が非常に多い。サクラソウ属だけでも一三九種、シヤクナゲ属が一〇九種、そのほかリンドウ属など、すべて文中にラテン名で書かれてある。学名の苦手の読者には読みづらいかも知れないが、多くの植物の属名は日本の高山植物の属と共通であるから、学名を読む代りに、サクラソウの一種というように理解して読めばよいと思う。

なお、この本に限らないが、英国の特に大学出版社の出版物は索引が見事である。植物名、地名などすべてに亘って、索引を見ればそれが何ページに見られるか詳細を極めている。細かい活字で索引だけで二十ページを占めていて、極めて便利である。私は世界に三匹しか標本のないブータンティス・ラドロウという学名の蝶について知りたいと思っていたが、索引から本文のページがわかり、何月何日にどこで採集したかを知ることができたのである。

カラー写真七枚、モノクロ写真一〇六枚も本書を読む上で大いに参考になるし、見ているだけでも楽しい。また各章毎に添付されている地図は、将来、この地域の登山が可能になった場合には、またとない参考になるであろう。

(春田俊郎)

カラコルム探検史(上・下)

スウェン・ヘディン著 水野 勉

(上) 雁部貞夫(下) 訳 A5判

〈上巻〉本文三七〇ページ・索引八

ページ・写真八ページ・図版一八

〈下巻〉本文三七七ページ・索引六

ページ・写真八ページ・図版六一

九七九年二月(上巻) 九八〇年一

月(下巻) 白水社刊 定価上・下各

三八〇〇円

スウェン・ヘディンの中央アジア探検の記録は、その一般向の旅行記のいくつかが戦前から邦訳され、更に、一九六五年前後に、主要な著作の大部分が完訳されて、世界で初めての『スウェン・ヘディン中央アジア探検紀行全集』全十一巻として刊行された。今回、同じ出版社から、更に三篇の紀行が追加された新しい全集が出て、その別巻として刊行されたのが、本書『カラコルム探検史(上)(下)』である。

ヘディンは、良く知られる通り、その大探検の度毎に、一般旅行記とは別に大部の科学報告書を刊行してきたが、本書の原典は、彼の第三回中央アジア探検の科学報告『南チベット』中の『カラコルム探検の歴史』と題する論文であって、本文九

巻、地図二巻、パノ라마一巻の中の中の第七巻にあたる。この第三回探検の内容は、既に一般向には『トランス・ヒマラヤ』の著作で多くの人々に親しまれており、往路のペルシャ砂漠の横断を除いて、一九〇六年八月から一九〇八年八月にかけて行なわれた。その学術的な成果をまとめた『南チベット』の内容は、探検の主要目的とされたツァンポー河の水源、サトレジとインダス河の水源問題、彼の発見になるトランス・ヒマラヤが主題となっている。インド測量局に対する献辞を付したこの歴大な著作の第一巻の序文に、今回の報告書は、その紀行を科学的に羅列した従来の形式をあらため、チベットに関する古代から現代に到るあらゆる知識と研究の歴史を論じながら、その中で自分の学問的成果を比較させるという新しい形式をとった意図が述べられているが、正にその通り、全巻に、彼がこれを執筆した一九一〇年代までのチベットに関するあらゆる知識が網羅され、集積されており、読者には正に一軒の図書館を備えた豊富な知識を与えてくれるものとなっている。この訳書の原典である第七巻も同じ形式で、チベット西部の現在のカラコルム山脈や西部コンロン山脈を含む地域、これはとりもなおさず、インド北西部と東トルキスタンの間で古くからもたれた交渉のルートにあたるのであるが、その地方に関する知識が歴史的に如何に発展してきたかを、歴大な文献を適所に引用しながら論述したものである。したがって、現代の登山家のもつ感覚でそのタイトルを鵜呑みにしない方がよい。メイスンやダイネリの探検史とは大分内容の違ったものである。

本書の内容を簡単に紹介するというのは難題であるが、全五十四章の本文は上、下二巻に分けられ、それぞれ巻頭の口絵として、比較的よく知られた古典的紀行のさし絵の複製と、関係する探検家、学者などの肖像が集められている。中に珍しいものもないではないが、何よりも本書にふさわしいのは、本文中に折りこまれた古地図の複製で、原書にある七十四枚のうち、上下巻を通じて二十四枚が入れている。上下巻共、巻末には監修者の解説と、人名のみの索引がある。

まず本文第一章は、古代インドのヴェーダ文献にあらわれたヒマラヤ、宗教的宇宙観にもとづくスメール山からはじまり、カルピニ、ルブルク、マルコ・ポーロなどの古い時代の旅行者たちの記録でわずかに触れられたカラコルムを探る。ミルザ・ハイダルでは、おそらくカラコルム峠を越えた最初の記録をのこしていると思われる歴史書『タリフ・イ・ラシディ』が論じられ、第三から第七章は、モンセラテ、ゴエス、アンドラーデなど、十六―七世紀のイエズス会士、ベルニエなどの旅行家の記録にふれる。アジアの古地図に興味をもつ者には、前半の各章、特に第八章、十三章が重要である。主題のカラコルム山脈は、古地図の上では十八世紀前半になって、わずかにそれらしきものがあらわれる。

近代のヨーロッパ人によって、直接カラコルムの知識が得られはじめたのは、一八〇八年のカール使節団のエルフィンズトーンや、一八一二年、ニティ峠を越えてマナサロワール湖に達したムーアクロフトのあたりからであろう。それにつづくの

が、バーンズ、ヴィーニユ、ジェラード、ウッド、カニングム、トムソン、ストレイチーなどである。それら英国人たちの活動がはじまると共に、アジアの地理学者に偉大な礎をきずいたクラブロート、フンボルト、リッターなどの学者達が、その成果をふまえて、盛んに論争をくりひろげた。地図史の上では、クラブロートによって、同時代の中国の知識が、ヨーロッパのものよりも如何にすぐれていたかを理解することができた。明瞭な記録のあるものとしては、カラコルム峠に初めて達したヨーロッパ人はトムソンであるが、その一八四八年の頃でも、この大分水嶺の峠はコンロン山系の中にあると考えられていた。カラコルムとコンロンがはつきり区別されたのは、一八五六年のシュラーギントワイト兄弟の探検である。カラコルム山脈の本体、いわゆるムスターグの高峻山岳は、一八六一―二一年のゴッドウィン・オースティンによって初めて明らかにされた。登山の方では、ここがカラコルムの黎明にあたる。

第二十五章は、ヘデンがカラコルム山系の東部延長とみなす、東部チベットのタン・ラを越えたユックとカベの旅行に触れる。下巻に入って、第二十九章からは、ロバート・ショウ、ヘイワード、二回に亘るフォーサイス使節団のもたらした成果について論じられている。これらの成果をもとにしたモントゴメリー、ローリンソン、ユールなどのカラコルムに関する様々な見解は興味深い。アジアの自然地理学でもっとも傑出した科学者リヒトホーフエン、ストリックカやドリュエーなどの成果をうけついでジュース、リデッカーらは、十九世紀の後半から二十

世紀の初めにかけて、アジアの地理学のレベルを大きく飛躍させた。その間には、チベット東部におけるブルジェワルスキー、ヤングハズバンド、グロムチエフスキー、パウアー、デュトルイユ・ド・ランス、グルナール、インド側からは有名なパండిット達の重要な探検があり、未知のアジア奥地の新しい知識が着実に加えられていった。第四十三章のあたりからは二十世紀に入る。アーサー・ニーヴは、長期の滞在でカラコルム山岳の探検史上、非常にすぐれた成果を残した人である。ツークマイヤー、スタイン、クロスビーなどは西部コンロンでの業績について取り上げられている。

第四十七章からは、ヘディンの探検と同時代のカラコルム山岳の探検と登山が扱われる。コンウエーの探検は、カラコルム登山の夜明けとして意義深い。一九〇二年のエッケンシュタイン、数回にわたるワークマン夫妻の探検、ロングスタッフとアーサー・ニーヴ、一九〇九年のアブルツィ公とつづく一連の探検と登山は、既に我々にはなじみ深いものばかりであるが、ここにとりあげられるのは当然、自然地理学的な成果であつて登山ではない。最終章のシドニー・バラードは、一九〇七年に、有名な『ヒマラヤ山脈とチベットの地理地質概要』を刊行した。ヘディンの言うトランス・ヒマラヤは、結局英国の地理学界にもインド測量局にも認められなかったが、彼が歴大な資料を駆使してこのカラコルム探検史を著述した目的も、彼のトランス・ヒマラヤが、山岳誌学上でカラコルムと如何なる関連をもつかということを明らかにすることにあつたと思われる。

ヘディンのこれに関する結論は、本書の原書である『南チベット』第七巻の、本書に訳された部分のあとの章で論及されている。

本書を通読してまず感じるのは、その徹底した文献渉猟ぶりからもわかる通り、この報告書にかけたヘディンの情熱と気迫である。探検を終えたあと、一九〇九年二月にロンドンで行なわれたヘディンの講演と討論会では、英国の地理学界を代表する探検家達から執拗な反発をうけた。同年四月号の王室地学協会誌に載つたその討論の内容を読むと、そのへんのヘディンの気持がよく理解できる。公式報告の形式を変えたこともそれに関係があるかも知れないし、ヘディンにとっては、論理的に一分のスキも与えない内容と構成でこの報告書を仕立てねばならなかつたのである。本書の訳者の一人が、「ストーリーのおもしろさではなく、論理のおもしろさである」と評していたが、学術論文では一般的なことではあるが特にその辺の理解もあつての言葉だろうと思う。

このような大著を訳された二人の訳者に対しては、まず深い敬意を表さずにはいられない。単にヨコのをタテに直すだけでは到底追いつかない、中央アジアの歴史や地理に関する豊富な知識と教養が不可欠であろう。解説にもある通り、駆使された資料の広汎さから多くの外国語についての精通も必要である。また、二人の適切で有能な訳者を得て、この書を全集に加えた出版社の英断にも賞讃を送りたい。

しかしながら、正直に言つて、これを読む方の苦勞もまた大

変である。訳者と同じ水準の素養があればよいが、少くともそれに近づく努力は惜んではならない。その意味で、原書にありながら訳書で省略した多数の地図の複製は、是非全部入れてほしかつたと思う。本文中に割注も加えられて、いくらかの配慮もみられるが、もともと原書の第七巻だけを単行本としたためにおきた無理もあるうと思う。例えば、「一七三〇年にストラールレンベルクがイマウス・モンスを描いている」といきなり言われても、彼がどんな人物でどんな地図を描いたのか、本書では一言もふれられていない。原書では第一巻に詳述されているからである。ストラールレンベルクと同じように重要なダンヴィルについても、やはり第三巻にあり、適切な複製地図が挿入されている。本書の地図の選択にも、そこまでの配慮がほしかったと思う。それに原著で一頁大の複製地図も、訳書では半分の大きさになっていることも不満である。地図は少しでも大きい方がよい。訳文については、固い内容にかかわらず読み易く、これは二人の訳者の功績によるものであろう。下巻にいくつか文脈の整わない箇所も見受けられるが（一〇四頁後段、一一〇頁中段、三六四頁文末など）、これらは些細な校正ミスによるものだろう。通読中気づいたことを二つだけあげておきたい。第四十五章前後に頻出する「輝ける湖」(Lake Lichten)は、ウェルビーの紀行を読むと、いささか違った意味をもたせているように思える。ライトン湖でよかつたのではないか。リテイーン湖（二〇七頁、二三〇頁）というのは全く賛成できない。ちなみに現在の中国名は郭扎錯である。いずれこの湖畔を日本

人が通る日もそんなに遠くないだろう。いま一つは、これも下巻に関連して申訳ないが、原書(『南チベット』第七巻)の巻末に、補遺として一九一三―四年のデ・フィリップの探検の一章が加えられている。これは、ヘディンが特に注記しているように、「彼自身の嘆かわしい、ミステイクによって正しい位置に入れ洩らした」ものなので、著者の意思を尊重するならば、当然第五十四章の位置に訳出すべきだったと思う。多分訳者が見逃がされたのではないかと思うが、故意に削ったものならば解説中にも注記が必要であらう。これらの指摘は、この本が二度と訳される種類のものでないだけに残念に思い付記しただけで、この訳業を見事に果された訳者に対する尊敬の念をいささかも損うものでないことを特にお断わりしておきたい。

(吉永定雄)

ヘディン著書目録

- 金子民雄編 A5判 IV・一〇一ペ
 一ジ・写真二二ページ 一九八一年
 一月 日本山書の会刊 頒価三五〇
 〇円

世の中には、普通、一般的に考えると、狂気としかいいようのないことが多々ある。探検や登山もその最たるものといえよ

うか。アジアの核心部の探検に一生を賭けたスウェーデンの大探検家スヴェン・ヘディンは、まさしく、そんな狂気の第一級の保持者だったにちがいない。

そしてヘディンは長い探検行から帰るや、雑誌への寄稿、一般向け紀行本、さらに膨大な学術書と、次々に書きまくった。一生のうちにどれぐらいの字数、ページ数を活字にしたものかは、見当もつかないが、探検界にあって、もつとも多数の著作を残しているのがこのヘディンである。それも原本のスウェーデン語版が英語、ドイツ語などへ、さらにそれからの重訳と、各国語に翻訳され、またタイトルの同じいダイジェスト版などと、冊数を数えているうちに、どれがどうなるのやら、わからなくなってくる。ヘディンの著述活動もまた、狂気に貫かれた、博覧狂記というほかないような気がする。

わが国にも、このヘディンの愛好者、信奉者が意外に多いようだ。戦前には、その時勢もあってか、十数冊の邦訳が見られるし、また近年には全十五巻・別巻二巻の『ヘディン探検紀行全集』（白水社）がファンの書架を飾っている。まことに御同慶の至りといったところである。だが、これらは小説とは異なり、ノンフィクションであるから、数次にわたる探検行の時代や様々の背景を把握しておいたほうがよい。白水社の全集などには解説が付されているものの、ヘディンの全体像をつかむことはむずかしく、そして、ただの読者にとっては、著作を通じてその脈絡を追うことは容易ではない。

そんなことを一人思索していたとき、ちょうど、金子氏の

『ヘディン著書目録』が上梓された。これを喜んだのは自分だけではなかったらう。すでに氏は『ヘディン研究』（私家版、一九六九年）を五十部限定、五十七ページの小冊子をタイプ印刷で公にし、さらに『ヘディン伝』（新人物往来社、一九七二年）の一本をまとめて、ヘディン・ファンに贈ってくれた。前者の後半部はヘディンの著書の解説、後者の巻末には著作目録が加えられている。

私はこの『ヘディン伝』で、その内容はいうまでもなく、著者自身のヘディンへの傾倒振りに痛く感じ入ったものだった。日本でもこれだけのものができるのかと、畏怖の念さえ抱いたのである。同時に、その背後には徹底的な文献資料の考証がある。これは原典を見ていなければできないことであり、当時、金子氏の手元にはヘディンのオリジナル本がほとんど揃っていることを耳にしていた。ヤジ馬ながら、これにも脱帽せざるを得ない。

私がヒマラヤ関係の図書目録をまとめたとき、W・ヘスの『スヴェン・ヘディン著作目録』（Willy Hess: Die Werke Sven Hedins. Stockholm, 1962）を参考にしたが、そこでは原典を第一に掲げねばならないのに、スウェーデン語は一般的でないからと独断し、ドイツ語、英語版をリスト・アップした。金子氏の前掲『ヘディン研究』をまだ知らず、また、ヘスの目録はタイトルの羅列だったので、それを十分に消化しきれなかった。原書もほとんど手元になかったから、各国語版の比較、評価はもとより、各著作の前後のつながりなど、よくわかって

いかなかった。したがって、ヘディングの項目に関しては、改訂のさいになんとかしなければならぬ。

そんなわけで、ヘディング研究の第一人者であり、ヘディング本の第一級の蒐集家である金子氏には、今度は書誌学的な蘊蓄を語ってもらいたいと思っていた。そして幸い、いまそれが果された。

収録されている原著は、A 旅行記 (20点)、B 青少年・成人向本とF A B 叢書 (8点)、C 政治地理 (13点)、D 伝記・人物研究 (8点)、E 自伝・書簡 (9点)、の合計五十八点に、何巻にもなっているF 科学報告が六種類である。この分類の仕方は、著者 (编者) が本目録を献呈している、上述のW・ヘスのものに準じているが、これはあくまで便宜的なものだと解する。

そして、本目録の真骨頂は書名解題にこそ發揮される。まずスウェーデン語のオリジナル・タイトルが紹介され、それに盛られた内容を解説、ついでドイツ語訳、英訳、日本語訳などが述べられ、各版の図版や装丁の比較までが行われる。手元に各版がなければできない芸当であり、加えて、巻頭に集められた写真による書影でもって止めを刺される。

金子氏は編集ノートの最後に「私は書誌を作るために本を蒐集したのではなかった。必要に迫られて本を蒐めているうち、本が揃ったから出来上ったまでである」とさらりという。しかし、それまでに二十年の歳月を費やしている。古書の蒐集を多少でもやっている、時間と金、それに幸運が必要だとわかっ

てくるが、月並みないい方になるものの、金子氏の努力、執念に改めて頭が下がる。キザないい方を加えれば、ヘディングの狂気が乗り移ったとさえ、いえようか。

ただの偏執狂、マニアならば、そこで背文字をなでまわし、一人ほくそ笑んで、コレクションを公にすることはしない。ところが氏は、それらをわれわれ万人のものにしてくれた。おかげでヘディングの著書の全貌は「一時間かからず」に知ることができる。ありがたいことで、大いに利用させてもらおう。

本書は書名の示すように単行本だけを扱っている。学術雑誌類に寄せられた多数の論文については、前述のヘスの文献目録を参照しなければならぬが、両者はそれぞれ目的を異にするから、二つを単純に比較することはできない。本書はいわゆる Annotated Bibliography (注釈付き目録) であるけれど、その範疇をはるかに越えており、一冊の読み物となつて、ヘディングの生涯、人間像までも浮き彫りにしてくれる。

しかし、普通一般の文献目録の類は、書名や題名、著者名などを羅列した、あまり味のないものだ。正確さを第一としているわけだが、特定の調査や目的でもなければ、ページはなかなか開かれない。ほんの一時、重宝がられるけれど、それ以外は書棚の隅で埃をかぶるのが宿命のようである。出る部数も少なく、単価は高くなるから、こんな目録類の刊行は、通常、営利のための出版社は引き受けてくれない。学会や財団などのスポンサーでもつかなければ、なかなか活字にならないわけで、目録作成者の苦勞は長期間にわたる資料調査、原稿の作成から、

さらに出版資金、頒布にまで続いていく。

つまり、損得抜きに、好きでなければできないのである。わが国では目録の作成・編纂は閑人の余技ぐらいにしかみない向きもあるが、そんなことをやったことのある一人として、金子氏の苦勞のほどは身にしみてわかる気がする。幸いにして、同人組織の同好会、日本山書の会がサポートし、本書が日の目を見た。私は、いい仕事を世に贈ってくれたと、山書の会にも拍手を送りたい。そして、怒られるかもしれないが、編者、発行者とともに道楽の極致をいつているといいたい。自分流にいえば、失礼ながら、これも狂気の一つの具現であろう。こういう狂気は世の中にくらあってもよいのではないか。

最後に、本書のような目録がヘーデンの生国スウェーデンではなく、日本で刊行されたことはたいへん興味深いところだ。すでに紹介したW・ヘスはスイスに住んでいる。そしてオリジナルのスウェーデン語版を第一にしてその書影を掲げ、次にドイツ語、英語、日本語の訳本を並べる。わが国ではよほどの好事家でもない限り、チェコ語訳だとかポーランド語訳は必要だから、以上でもってほぼ完璧な目録になったといつてよい。これが英訳されれば、世界的な評価を受けることは間違いないだろうし、将来、これをしのぐものはそう簡単に現われないだろう。

なお、本書18頁、A 15の英訳 Riddles of the Gohi (1933) はドイツ語版からの重訳となっている。私の見た原書も自分の資料カードもスウェーデン語からの訳となっている。一体、ど

ちらなのだろうか。ご教示を仰ぎたい。

(葉師義美)

ヒンズー・クシユ、カラコルム研究誌

ヒンズー・クシユ、カラコルム登山探検誌

(日本ヒンズー・クシユ、カラコラム会)

議設立10周年・田中栄蔵古稀記念文集)

高木泰夫編 B5判《研究誌》一四

三ページ《登山探検誌》二四一ページ

ジ 一九八〇年一二月 日本ヒンズ

ー・クシユ、カラコルム会議刊

日本では、学問研究というものは、それぞれの専門家が、それもその筋の研究機関に所属している人がやることになっていて、それ以外の人がやる場合は、趣味とか遊びとそうことになる、一段低くみなされることが多い。

ところが外国、とくに西欧には、遊びと学問研究を区別してない、と私たちにはおもわれる人たちがたくさんいる。西欧の博物学の長い歴史がそうさせているのか、あるいは学問とか遊びとかいうものは、すべて紳士(ジェントルマン)に属するもので、その立場からすれば、もともと学問と遊びは区別する必要のないものなのかもしれない。

この『研究誌』『登山探検誌』は、殆んどが、いわゆるその筋の研究の専門家ではない人たちによってつくられたものである。日本の高度経済成長から安定成長期にはいつてきた余裕が、それをなさしめるようになってきたのだろうか。私たち日本人が、新しいジェントルマンを形成しつつあるとすれば、これはまことに愉快な事態である。

西欧諸国では、日本製の自動車やカメラが目につき、百貨店は日本のほうが立派だとおもう。しかし、もう少し冷静に眺めていると、彼らのもつ彼らの文化の厚みを感じてくる。たとえば、チューリッヒの本屋へ樹木図鑑を買いにいき、一〇種類に及ぶきれいなカラー印刷の図鑑がならんでいるのに、私は驚いた。一部の工業とか経済とかでは、西欧に追いつき追い抜いたけれど、文化の厚みという点では、まだまだ追いつき追いつぬける部分がたくさんあるように思った。しかも、それにはかなりの時間と努力が必要である。楽しみは、まだたくさんある。

その遊びと研究の混然一体となったものを立派にしあげるためには、切磋琢磨が必要である。きびしい相互批判が必要である。素人芸にしてはよくできているとか、専門家ではないのだから、そのへんは許されるだろう、といった甘やかしや甘えは許されない。一見、専門家風に書くことによって、適当にお茶を濁すような態度は、厳につつまねばならない。悪感情の介在しない相互批判は、実際には、かなりむづかしいことである。私たちは、それはつまらない、やり甲斐のないこととする、つまりいらぬお節介はやかぬ文化をもっているのではない

だろうか。しかしその上で、なおかつ、批判は諸刃の剣であると承知の上で、批判しあえるようになるれば、すばらしいものできてくるだろう。

内容の紹介にうつる。

『日本ヒンズー・クシュ、カラコルム会議設立一〇周年・田中栄蔵古稀記念文集』は〈Ⅰ〉と〈Ⅱ〉よりなっている。

Ⅰは『ヒンズー・クシュ、カラコルム研究誌』、Ⅱは『ヒンズー・クシュ、カラコルム登山探検誌』である。一九八〇年十二月十日発行、編集 高木泰夫、発行者 吉沢一郎、発行所 日本ヒンズー・クシュ、カラコルム会議、岐阜県養老郡養老町 一五七、〒503-113。B5版。Ⅰの『研究誌』は一四三頁、Ⅱの『登山探検誌』は二四一頁。Ⅰ・Ⅱ合計四八〇〇円、送料三〇〇円を前記「日本ヒンズー・クシュ、カラコルム会議（高木泰夫気付）」に送れば入手できる。

『研究誌』は十一人の論文集である。一、「ヒマラヤを中心とした山名考」吉沢一郎 二、「アルパイン・クラブ会員登録録簿から」田中栄蔵 三、「カラコルム・K2の岩石」松本健夫 四、「カラコルムの植物」塚本圭一 五、「ティリッチ・ミール南面の地形」津田文夫 六、「羯師 (Chirra) 地名・山名考」雁部貞夫 七、「カラコルムの言語」高橋正治 八、「Characteristics of Nomadism in Badkhashan」藤井 洋 (英文) 九、「印度・アフガニスタン国境—その紛争と民族—」有本朋子 十、「コーエ・バニダカー登攀史」木村郁夫 十一、「K2

登頂「新貝 勲 よりなつてゐる。

すべて、「H・K・T」(Hindu Kush Karakorum Tagung) 一〇周年の記念論文にふさわしい力作であるが、とくに高橋の「カラコルムの言語」と藤井の「Characteristics of Nomadism in Badkhschan—Brief notes of observations, questions-and-answers and estimations obtained by contacts with the Pushtu nomads—」は興味をかく。

高橋らは、ピアフォ氷河、スカルドゥ、スリナガルで採取したチベット語系のバルティ語、ラダック語を英語、ウルドゥ語さらにはカプルの牧師だった A.F.C. Read … “Balti Grammar” によるバルティ語、H.A. Jaschke “A Tibetan-English Dictionary” によるティベット語と対比させた語彙集をつくつた。それは、時間、副詞・後置詞、形容詞、動詞、疑問詞、接続詞、その他、食品・炊事、輸送、数字、家族、代名詞、身体・病氣、衣類、天候、地形・地質、方向、の一八項目、語彙数五七〇に及ぶ力作である。

カラコルムやヒンズー・クシュを旅する日本人の大部分が登山隊に属する人たちであり、彼らが村人たちをその生活を通じて理解する可能性は極めて小さい。言葉を探ねるといふこのよるな地道な行動こそが、相互の理解の上になつての友好につながるものであろう。このつぎまた東部カラコルムに行くときには、私は必ずこれを持参するつもりである。

高橋は「おわりに」で、調査者の思いつきで作製されたものであり、言語学の専門家ではないので、正確な音韻学的調査が

待たれる、としてゐる。私も日本語の五〇音の発音しかできないし、その上かなりの音痴だけれど、ウルドゥ語にもバルティ語にも、私たちの五〇音では現わせない音があるらしいことはわかる。しかし、「専門家の調査がまたれる」などといわないで、ここまでやった以上、自分でやっていたきたい。日本語の場合五〇音に濁音や促音を加えてせいぜい数十音、バルティ語もそれほど多くはあるまい。採録したテープをもとに、少し「専門家」から学んでいけば、専門家がみてもはずかしくない立派な、貴重なものになるにちがいない。私がこの短文でいいたいのは、このところである。

藤井は、自ら工夫をこらし苦労して、バダクシヤンの遊牧民への潜りこみに成功し、テント生活をする。その過程は詳述されていなが、興味をそそる。遊牧民の生活の記録は「観察」「質問と回答」「判断」の三項目に明瞭に区別されている。この区別は調査においてもっとも重要である。通訳の判断に依存しつつ、調査者が上述の三項目を混乱させたため、とんでもない結果をひき出すことがよくある。その点、この報告は短期間のものだから、まだまだ充分ではないだろうが、情報源をはっきりさせることによって、予備調査であるにもかかわらず、すぐれた報文となつてゐる。学ばねばならないところである。

内容も面白い。私もかねがね、遊牧民の男はタバコを吸うばかりで何もしてないとは思っていたが、テントの組み立て、ラクダの世話、水くみなど、皆女の仕事という。テント地の決定、外交、買物や客の接待が男の仕事らしい。つまり男は、責

任者として行動するということであろう。私たちにとって示唆するところ深いものがある（寝る前にテントをたたんでしまふ、というのもし知らなかった）。

最後に藤井は、遊牧という生産手段は、乾燥のための単位面積あたり、生産力の小さいステップでの優れた蛋白質の生産手段であり、遊牧民を定着させることに性急であつてはならないだらう、としている。湿潤地帯の住民である私たちには、體質的に理解しにくい、しかし夢をそそる課題である。

記念文集Ⅱは、日本人によつてまとめられた優れたヒンズー・クシュ、カラコルム登山探検のクロニクルである。Ⅰ「外国隊の部」は馬場勝嘉が、Ⅱ「日本隊の部」は高木泰夫が担当しており、Ⅲ「索引」は五十音順の山名・峠名の索引である。

山城ごとに編集されていて、ヒンズー・クシュを西・中・東部に、ヒンズー・ラジ、スワート・ギルギット山群、カラコルムを西・中西・中東・東部の九項目に分けている。記載項目は、年度、主要成果、隊名、隊長名、概要、典拠および参考文献よりなっている。「一八二二年秋、カラコルム峠（五五七〇米）を越す。Said Mir Izzet Ullah」がいはん古い記載で、一九七七年までをおさめている。

「日本隊の部」は、地域分類にバダフシャン・セルセラの一項を加えて、一〇項目よりなっている。記載項目は、外国隊の部よりさらに精しい。隊名、隊員氏名・住所、リエゾン・オフィサー氏名、人夫氏名（出身地）、隊荷総量、往路・登山の概要・帰路、報告文献、印象・感想、よりなり、地図と一部には

写真がついている。

大変な労作である。深田久弥『ヒマラヤの高峰』、メイソン『ヒマラヤ』、デーレンフルト『第三の極地』などととも活用させてもらつつもりである。

文中、敬称を省略させていただいた。

（岩坪五郎）



会 務 報 告

昭和五十五年（一九八〇）七月〜昭和五十六年（一九八一）六月

◇七月理事会 七月七日（月）ルーム

出席者 西堀、折井、渡辺、宮下、中島、飯野、中川、鈴木、中村、小倉、倉知、川上、嵯峨野、山口、越田、菅沢、岡沢、山崎、河野、村木、大塚、小原（晴）

▽議事・報告

一、日本山岳会静岡支部規約の一部改正の件
二、ユクシン・ガルダン・サール（七五三〇メートル）都立神代高校

山岳部OB会、登山計画推薦の件

三、オデール氏（英）来日の件

四、各委員会報告（集会、婦人、自然保護、山研）

（詳細は「山」四二二号参照）

◇八月理事会——休会

◇九月理事会 九月十六日（火）ルーム

出席者 西堀、折井、渡辺、中島、飯野、中川、中村、小倉、山口、高本、岡沢、嵯峨野、高橋、菅沢、小原（勝）、鳴原、小原（晴）、大塚、村木、金坂、山崎

▽議事・報告

一、シシヤパンマ（ゴザインタン）日本女子登攀クラブ、一九八一年の登山に対して、推薦の件

二、エベレスト、明治大学、一九八一年の登山に対して推薦の件

三、エベレスト、立教大学、一九八五年の登山に対して推薦の件
四、ガネツシユ・ヒマールIII峰、日本大学理工学部（ネパールと合同登山）、一九八一年の登山に対して推薦の件

五、秩父宮記念学術賞候補の推薦について 名古屋大学ネパールヒマ

ラヤ氷河学術調査隊（樋口敬二隊長）の調査報告を推薦する

六、韓国山岳会創立35周年記念事業として「日韓合同高所医学と登山

セミナー」に参加の件（10月中旬、韓国に於て）

七、各委員会報告（山研・山日記・海外連絡）

（詳細は「山」四二四号参照）

◇十月理事会 十月六日（月）ルーム

出席者 西堀、折井、渡辺、中島、飯野、中川、鈴木、山口、岡沢、高橋、高本、嵯峨野、中村、菅沢、川上、鳴原、山崎、小原（晴）、金坂

▽議事・報告

一、チョモランマ北壁フィルム貸出の件

二、日本山岳会学生部インドヒマラヤ登山隊、遭難の件

三、秩父宮記念学術賞候補推薦手続完了（樋口敬二氏グループ）

四、委員会報告（山研）

（詳細は「山」四二五号参照）

◇評議員会 十月二十九日（水）ルーム

出席者 朝比奈、山本、水野、太田、金坂、大塚、村木、山崎、織田、小原、佐藤、木下、河野、高遠、西堀、折井、渡辺、飯野、中島

▽議事・報告

一、名誉会員推薦の件

二、永年会員の件

三、本会の運営について

(詳細は「山」四二六七号参照)

◇十一月理事会 十一月十日(月) ルーム

出席者 西堀、折井、渡辺、飯野、中川、中村、鈴木、山口、高本、
嵯峨野、大森、小倉、越田、嶋原、金坂、小原(晴)、山崎
▽議事・報告

一、日本ヒンズークシユ、カラコルム会議(吉沢一郎氏)より「山」
二八五号掲載の地図転用につき依頼の件

二、「K2」早稲田大学の一九八一年の登山に対して推薦の件

三、今西名誉会員より提案、仮称「山名保存委員会」設置について

四、本年度名誉会員、永年会員の件

五、各委員会報告(総務財務、集会、科学、図書、学生部、医療、山
研、婦人懇談会、青年懇談会、遭難対策)

(詳細は「山」四二六号参照)

◇支部長会議 十二月六日(土) ルーム

出席者 兼平(北海道)、村上(山形)、佐藤(岩手)、中島(福島)、
齋藤(越後)、中田(富山)、蒲生(信濃)、山本(静岡)、中世古
(東海)、藤井(岐阜)、今西(関西)、野口(東九州)、西堀会長、
折井、渡辺両副会長、飯野、中島、中川各常務理事、金坂、小原、
佐藤各評議員、小原監事

▽議事・報告

一、会務報告

二、各支部活動について

三、本部、各支部との事務調整について
(詳細は「山」四二七号参照)

◇十二月理事会 十二月八日(月) ルーム

出席者 西堀、折井、渡辺、飯野、中島、中川、鈴木、中村、大森、
嶋原、金坂、村木、山崎

▽議事・報告

一、昭和五十五年年度年次晩餐会の件

二、チョモランマ報告書の件

三、秩父宮記念学術賞の内定(樋口グループ)の件

四、支部長会議報告の件

五、東大山の会50周年記念文集について、「山岳」記事転載の件

六、各委員会報告(集会、財務
総務、海外連絡、遭難対策、科学、医療)

(詳細は「山」四二七号参照)

◇一月理事会 一月十二日(月) ルーム

出席者 西堀、折井、中川、川上、越田、岡沢、山口、中村、鈴木、
高橋、嵯峨野、大森、小原(勝)、嶋原、山崎、村木、小原(晴)、
金坂

▽議事・報告

一、ヒマルチュリ、日本大学、一九八一年の登山に対し推薦の件

二、ソ連パミールキャンプと交換登山についての協議書交換の件

三、東大山の会創立50周年記念文集に「山岳」20年の「冬の朝日岳」
他転載の件

四、次年度新役員候補者推薦について

五、大野俊夫氏未亡人より寄付金の件

六、飯野常務理事、福岡へ転任に伴う、事務処理の件

七、各委員会報告(集会、遭難対策、指導、会報編集、婦人懇談会、
青年懇談会、科学、海外連絡、他)
(詳細は「山」四二八号参照)

◇評議員会 二月五日(木) ルーム

出席者 大塚、織内、小原(晴)、近藤、佐藤、田口、太田、高遠、山本、望月、水野、山崎、村木、西堀、折井、渡辺、中川、川上、高橋

▽議事・報告

一、次年度(昭和五十六年～五十七年)理事及び監事候補者推薦の件

◇二月理事会 二月十六日(月) ルーム

出席者 西堀、折井、渡辺、中川、中島、中村、川上、越田、鈴木、小倉、岡沢、山口、高本、小原(勝)、鳴原、大塚、山崎

▽議事・報告

一、次年度、評議員候補者推薦の件

二、昭和五十六年度予算案作成の件

三、昭和五十六年度事業計画案作成の件

四、フィルム委員会(仮称)設置の件

五、日韓交流登山計画の件

六、其他各委員会の報告

(詳細は「山」四三〇号参照)

◇三月理事会 三月九日(月) ルーム

出席者 折井、渡辺、中川、中村、岡沢、菅沢、山口、高本、鈴木、

鳴原、山崎、村木

▽議事・報告

一、昭和五十六年度通常総会日程の件

二、昭和五十六年度予算案及び事業計画案承認の件

三、日中文化交流協会より寄付依頼の件(25周年記念事業のため)

四、製品安全協会より「山岳75年」記事転載許可願いの件(記事、ア

イゼン破損について)

五、「チヨモランマ登山報告書」の件

六、各委員会の報告

本理事会の議事録の署名は岡沢、高本両理事を選任

(詳細は「山」四三〇号参照)

◇評議員会 三月十三日(金) ルーム

出席者 田口、山崎、織内、望月、河野、大塚、山本、水野、佐藤、近藤、村木、西堀、折井、渡辺、中川(理事)

▽議事・報告

一、昭和五十六年度事業計画案の件

二、昭和五十六年度収支予算案の件

三、次期役員(会長、副会長他理事及び監事)候補者推薦の件

四、通常総会、五月十五日(金)決定の件

(詳細は「山」四三〇号参照)

◇四月理事会 四月六日(月) ルーム

出席者 折井、渡辺、中村、小倉、菅沢、山口、岡沢、越田、高橋、山崎、金坂、小原、村木、鳴原

▽議事・報告

一、昭和五十六年～五十七年度、評議員推薦の件

二、昭和五十五年事業報告および収支決算、財産目録等承認の件

三、監査結果報告の件

四、昭和五十六年度除籍者の件

(詳細は「山」四三一号参照)

◇評議員会 四月九日(木) ルーム

出席者 大塚、望月、河野、田口、織内、村木、水野、太田、金坂、小原、高遠、山本、山崎、西堀、折井、渡辺

▽議事・報告

- 一、總會提出議案の件承認
- 二、次期役員候補者推薦の件再度確認

(詳細は「山」四三二号参照)

◇支部長会議 五月十五日(金) ルーム

- 出席者 西堀、折井、渡辺、中川、大塚(北海道)、小野寺(岩手)、村上(山形)、伊達(宮城)、中島(福島)、齋藤(新潟)、蒲生(信濃)、山本(静岡)、松井(岐阜)、若松(富山)、楠(石川)、今西(関西)、西沢(熊本)

▽議事

- 一、会務報告の件
- 二、支部の現況報告の件

◇昭和五十六年度通常總會 五月十五日(金) 於 東京都千代田区九段

北四の二 私学会館)

出席者 西堀会長以下

一三一名(他委任一五〇〇名)

▽總會次第

- | | | |
|-----------------------|----|-------|
| 一、会長挨拶 | 司会 | 中川 武 |
| 二、会務報告 | | 西堀栄三郎 |
| 三、物故会員に対し黙祷 | | 折井 健一 |
| 四、昭和五十五年度事業報告 | | 渡辺 兵力 |
| 五、昭和五十五年度収支決算及び財産目録報告 | | 渡辺 兵力 |
| 六、監査報告 | | 小原 勝郎 |
| (右、承認) | | |
| 七、昭和五十六年度事業計画 | | 渡辺 兵力 |
| 八、昭和五十六年度収支予算案 | | 渡辺 兵力 |
| (右、原案通り承認) | | |

九、次期、理事、監事、評議員選任の件

(理事、昭和五十六年度～五十七年度)

(監事、昭和五十六年度)

(評議員、昭和五十六年度～五十七年度)

(承認、別記)

十、昭和五十五年除籍者の件

十一、總會議事録署名人選任の件

◇五月理事會 五月二十五日(月) ルーム

- 出席者 田口、渡辺、神崎、河村、菅沢、伊丹、田村、中村、小倉、水野、大倉、西村、赤松、高橋、岡沢、松家、嶋原、太田、大塚、村木

▽議事・報告

- 一、業務担当、分掌の件
- 二、新設の委員会、検討の件
- 三、東海大ネパールヒマラヤ登山隊推薦の件

(詳細は「山」四三三二号参照)

◇六月理事會 六月八日(月) ルーム

- 出席者 佐々、田口、渡辺、神崎、河村、菅沢、川上、小倉、赤松、大倉、松家、西村、中村、鈴木、高橋、岡沢、田村、太田、嶋原、小原、大塚、村木

▽議事・報告

- 一、会務報告
 - 二、委員会検討の件
 - 三、会の運営、活動検討の件
 - 四、常務理事會についての検討
- (詳細は「山」四三三三号参照)

◇小集会

▽第三九一回 昭和五十五年六月十七日(土) ルーム

山菜山行写真交換会

▽第三九二回 八月二十二日(金) 私学会館

チョモランマ登山隊報告会

▽第三九三回 八月二十八日(木) アメリカンクラブ

ノエル・オデル氏来日歓迎会

▽第三九四回 八月二十九日(金) 第一生命ホール

ノエル・オデル氏来日記念「映画と講演の夕べ」

▽第三九五回 九月十一日(木) ルーム

ノエル・オデル氏送別会

▽第三九六回 十月十日(金) 十二日(日) 上高地、山研

スケッチ山行

▽第三九七回 十月二十一日(火) ルーム

スケッチ山行作品批評会

▽第三九八回 十一月二十三日(日) 二十四日(月)

会津那須山群の秋山行

▽第三九九回 十一月二十三日(日) 二十四(月) 丹波篠山にて

現地支部長会、懇親会(関西支部主催)

▽第四〇〇回 十二月十九日(金) ルーム

忘年会兼ソ連モナルティスキー氏歓迎会

▽第四〇一回 昭和五十六年一月十五日(木) 十八日(日)

スキー懇親会、八方尾根中大山荘

▽第四〇二回 二月三日(火) ルーム

スキー懇親会写真交換会

▽第四〇三回 二月二十八日(土)、三月一日(日) 温泉とスキーの

会、野沢温泉

▽第四〇四回 三月二十四日(火) ルーム

小西政継氏講演会

▽第四〇五回 三月二十八日(土) ルーム

新入会員のためのオリエンテーション(第七回)

▽第四〇六回 三月二十八日(土) ルーム

ニュージーランド山岳会歓迎会

◇主なる行事と集会

▽チョモランマ登頂祝賀会

本会、日本山岳協会、日中文化交流協会読売新聞社、日本テレビ放

送網社共催

昭和五十五年五月二十六日(月)

高輪プリンスホテルにて開催

▽ガルワル・ヒマラヤ登山隊報告会

昭和五十五年七月二十三日(火) ルーム

▽チョモランマ登山隊の科学調査

講師 渡辺兵力、斎藤惇生、横山宏太郎

昭和五十五年七月十八日(金) ルーム

▽カメラの使い方、講師 渡辺正臣

平ヶ岳について、講師 中村純二

昭和五十五年七月二十五日(金) ルーム

▽平ヶ岳高山植物探検行

昭和五十五年八月九日 十日(土 日)

▽紅葉の北八ヶ岳を登る会

昭和五十五年十月四日 五日(土 日)

▽燃料と燃焼の話、講師 小西奎三

- 昭和五十五年十月十六日(木) ルーム
- ▽ネパール、ニュージールランドの話、講師 佐藤テル
- 昭和五十五年十月二十三日(木) ルーム
- ▽第三十五回山岳図書交換会
- 昭和五十五年十月二十五日(土) ルーム
- ▽婦人懇談会、南会津密閉山登山
- 昭和五十五年十一月二日〜三日(土〜日)
- ▽空中地形写真の話、講師 大森弘一郎
- 昭和五十五年十一月十四日(金) ルーム
- ▽北アルプス空中撮影行
- 昭和五十五年十一月三十日(日)
- ▽雪崩研究、遭難対策委員会、学生部共催
- 講師 金坂一郎、若林隆三
- 昭和五十五年十二月一日(月) ルーム
- ▽スキートの滑降、回転性能と機械的特性、講師 松丸秀夫
- 昭和五十五年十二月十一日(木) ルーム
- ▽女性のための高所登山セミナー 婦人懇談会、高所登山委員会共催
- 講師 金坂一郎、川上 隆、松永敏郎、雨宮 節、高橋通子、神崎 忠男
- 昭和五十五年十二月〜昭和五十六年三月の間に三回開催
- ▽昭和五十五年度、年次晩餐会
- 昭和五十五年十二月六日(土) 京王プラザホテル、出席者二七〇名
- 併せて、「この一本展」を開催
- (詳細は「山」第四二七号参照)
- ▽忘年会、ソ連パミールキャンプチーフ、モナルテイスキー氏来日歓迎会

◇其他

- 昭和五十五年十二月十九日(金) ルーム
- ▽青年懇談会、丹沢研究会
- 昭和五十六年二月七日〜八日(土〜日) 丹沢 寄居小舎
- ▽シヤパンマの話、講師 田部井淳子
- 昭和五十六年二月二十六日(木) ルーム
- ▽第十二回山岳図書を語る夕べ「イタリヤの本」 講師 牧野文子
- 昭和五十六年三月十日(火) ルーム
- ▽第九回山岳史懇談会「大正期の積雪期登山」 講師 三田幸夫
- 昭和五十六年三月三十日(月) ルーム
- ▽第二十六回山スキーと雪崩について講習会 二王子岳にて 指導委
員会、遭難対策委員会、高所登山委員会及び越後支部の共催
- 昭和五十六年三月十九日〜二十三日(木〜日)
- ◇各支部活動
- ▽熊本支部 懇親山行「阿蘇高岳北面」
- 昭和五十五年七月二十七日(日)
- ▽東海支部 支部創立二十周年記念ネパール国際親善隊派遣
- 昭和五十五年七月〜八月
- (詳細、「山」第四二九号〜四三〇号参照)
- ▽宮城支部 懇親山行「北太郎・オボコンベ」
- 昭和五十五年十月二十六日〜二十七日(土〜日)
- ▽静岡支部 第二十三回紅葉会、大平部落東海自然歩道
- 昭和五十五年十一月八日〜九日(土〜日)
- ▽越後支部 西堀会長を囲んで懇談会
- 昭和五十五年七月六日(日) 新潟市

▽上高地山岳研究所開設

昭和五十五年五月～十一月中旬

▽夏山診療所開設

各医大山岳部に依り、槍ヶ岳、五色沼、唐松岳、三俣山荘、白馬、立山、尾瀬、合戦小屋にて

◇海外登山界との交流

▽学生部インド・ヒマラヤ登山隊（隊長、塚原道夫）

昭和五十五年八月下旬～

ガルワール・ヒマラヤ、ガンゴトリ山群の峻峰ブリクパント（六七七七メートル）

▽中国登山友好代表团来日

团长 喬加欽（中国登山協会首席）

史占春（同副主席）王富洲（同秘書長）張俊岩（同委員）羅則（同職員）通訳・季友林（中華全国体育総会職員）

九月二日（火）ホテル・ニューオータニにおける歓迎パーティーに臨んだ外、各地山岳関係団体と懇談及び見学旅行をした

▽ノエル・オデル氏（アルパインクラブ）来日 本会招待

昭和五十五年八月二十四日～九月十二日の間、東京・大阪にて講演会開催、秩父宮妃殿下を御訪ねし、上高地等国内旅行を愉しんで帰国

（詳細「山」四二四号～四二五号参照）

▽韓・日合同高所医学セミナー

昭和五十五年十一月二十四日（月）大邱市啓明大学校病院講堂に於て開催 大森董雄、住吉仙也、中島道郎、斎藤惇生、長尾悌夫、竹田寛治会員が参加

▽UIAA（国際アルピニスト連合）一九八〇年総会、十月八日

ユネーブにて開催 丹部節雄会員が出席

（詳細「山」四二七号参照）

▽ニュージーランド山岳会

中国登山の途次、来日、ルームにて観迎会開催、昭和五十六年三月二十八日（土）

▽印度登山財団、パタック教授来日

昭和五十六年五月十二日（火）ルームにて観迎会

其他 各国山岳団体と情報及び機関誌の交換を行った

一九八一年度役員・評議員・支部長

会長 佐々保雄

副会長 田口二郎、渡辺兵力

常務理事 田村俊介、神崎忠男、西村政晃、伊丹紹泰

理事 川上 隆、中村純二、赤松功也、大倉昌身、小倉 厚、高橋 聰、菅沢豊蔵、松家 晋、岡沢祐吉、高本信子、

水野 勉、鈴木雄二

監事 太田 敬、鳴原啓佑

常任評議員 小原勝郎、佐藤テル、村木潤次郎、松丸秀夫、大塚博美

評議員 望月達夫、折井健一、辰沼広吉、朝比奈英三、木下是雄、

柴田均二、岸田権二、山田二郎、西沢健一、飯野 亨、

蒲生明登、河野幾雄、細川沙多子、高遠 宏、片岡 博

支部長 大塚 武（北海道）、佐藤敏彦（岩手）、柴田均二（秋田）、

村上勝太郎（山形）、伊達篤郎（宮城）、中島正夫（福島）、

齊藤平七（越後）、奥原敦永（信濃）、大沢伊三郎（山梨）、

山本朋三郎（静岡）、尾上 昇（東海）、松井辰弥（岐阜）、

中田清兵衛（富山）、増江俊三（石川）、今西寿雄（関西）、

織田 収（山陰）、末松大助（福岡）、野口秋人（東九州）、

西沢健一（熊本）



SANGAKU

The Journal of the Japanese Alpine Club

Vol. LXXVI 1981

Issued in December 1981

Contents

In English (also in Japanese, pages in parenthesis, except "Batura by Two")

- Alpine Literature in Italy.....Fosco Maraini... 1(1)
On the Life and Travels of Rafail Danibegashvili.....Tamio Kaneko... 5(22)
The North Face of Kangchenjunga, 1980.....Naoe Sakashita... 7(64)
Baruntse in Midwinter 1980/1981.....Haruhiko Nakamura... 9(86)
The Ascent of Panwali Dowar and
 Vaski Parbat, 1980.....Keisuke Nakae...10(94)
Ganesh Himal V, 1980.....Yoshio Nagao...11(101)
The Ascent of Lamjung Himal from
 the North Ridge, 1980.....Hitoshi Hagiwara...13(107)
The North Face of Shivling, 1980.....Masayuki Fujita...14(130)
Batura by Two, 1980.....Noboru Takenaka...15
A Talk with Prof. N.E. Odell.....Tsunemichi Ikeda...17(164)

In Japanese

- The First Ascent of Jutmar Sar, 1980.....Tadao Sugimoto.....(115)
The North Face of Awa Dablam, 1980.....Hisao Fukushima.....(124)
On Free-Climbing.....Naoki Toda.....(139)
The Life of H.W. Tilman.....Jiroh Taguchi.....(147)
In Memoriam.....(171)
Book Reviews.....(213)
Club Notes : July 1980-June 1981.....(234)

Editor : Tsutomu Mizuno

Assistant editors : Akio Horiuchi, Toshiyuki Fujimoto,
Shigeru Kodama, Keisuke Takano

The Japanese Alpine Club

(Founded 1905)

Address : Sun-View Heights, 5-4 Yonban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo

Office Bearers and Committee

1981 (May 1981-April 1982)

President : Yasuo Sasa

Vice-Presidents : Hyoriki Watanabe, Jiroh Taguchi

Honorary Secretary : Tadao Kanzaki,

Honorary Editor : Tsutomu Mizuno

Honorary Librarian : Yasuji Yamazaki

Honorary Treasurer : Masaaki Nishimura

Auditors : Keisuke Shigihara, Takashi Ohta

Committee

Shunsuke Tamura	Tadao Kanzaki	Tsuguyasu Itami
Masaaki Nishimura	Takashi Kawakami	Atsushi Ogura
Satoshi Takahashi	Toyozoh Sugawara	Suke Yoshi Okazawa
Nobuko Takamoto	Kōya Akamatsu	Masami Ohkura
Kenji Kawamura	Susumu Matsuka	Tsutomu Mizuno
Yūji Suzuki	Junji Nakamura	

Council

Junjiro Muraki	Hiromi Ohtsuka	Katsuro Ohara
Teru Satoh	Hideo Matsumaru	Tatsuo Mochizuki
Eizo Asahina	Koreo Kinoshita	Ikuo Kōno
Hiroshi Takatoh	Ken'ich Orii	Kōkichi Tatsunuma
Kinji Shibata	Gonji Kishida	Jirō Yamada
Ken'ich Nishizawa	Tōru Iino	Akinobu Gamoh
Sadako Hosokawa	Hiroshi Kataoka	

Chairmen of Local Sections

<i>Hokkaido</i> : Takeshi Ohtsuka	<i>Iwate</i> : Toshihiko Sato
<i>Yamagata</i> : Katsutaro Murakami	<i>Akita</i> : Kinji Shibata
<i>Fukushima</i> : Masao Nakajima	<i>Miyagi</i> : Tokuro Date
<i>Shinano</i> : Norinaga Okuhara	<i>Echigo</i> : Heishichi Saito
<i>Shizuoka</i> : Tomosaburo Yamamoto	<i>Yamanashi</i> : Isaburo Ohsawa
<i>Toyama</i> : Seibe Nakata	<i>Takai</i> : Noboru Onoe
<i>Gifu</i> : Tatsuya Matsui	<i>Ishikawa</i> : Toshizo Masue
<i>Kwansai</i> : Toshio Imanishi	<i>Fukuoka</i> : Daisuke Suematsu
<i>San'in</i> : Osamu Oda	<i>Higashi Kyushu</i> : Akito Noguchi
<i>Kumamoto</i> : Ken'ichi Nishizawa	

Alpine Literature in Italy

Fosco Maraini

Alpine literature in Italy has the distinction of initiating its course with a very great name, that of Francesco Petrarca, the poet (1304-1374). On April 26 1336, Petrarca, together with his brother and some servants, climbed Mount Ventoux (the name means "Windy Hill") in Provence, in the South of France. This mountain is by no means high (1,912 m.), but in those days all hills were considered dangerous and abominable because they were thought to be haunted by ghosts, goblins, demons, and Petrarca's excursion was a real pioneering feat. Petrarca later wrote down his impressions of the climb; his emotions and thoughts, in front of such vast and solemn natural splendour, have a distinctly modern attitude, and show few traces of medioeval fears and superstitions.

Another interesting and unusual document is a paper written by Francesco de Marchi, who in the year 1573 climbed the Gran Sasso (2,914 m), the highest peak in the Appennines, and quite a rough ascent even today.

Unfortunately after this promising start, Italian mountaineering literature failed to keep up with the conspicuous developments in this field, which took place in Europe starting with the late XVIIIth Century. It must be said that nearly all Italian spiritual energies, during the early part of the XIXth Century and up to 1860, were concentrated on the political movements and the wars intended to free the country from foreign domination, so as to achieve national independence and unity.

After 1860 climbing became very popular, at least in Northern Italy. Soon an Italian Alpine Club was founded by Quintino Sella (1863), a noted statesman and an energetic climber himself. With 1870 the Club started to publish a yearly Bulletin, and for many years, up to World War I, most Italian literature concerning exploration, and the study of the Alps and other mountain chains, appeared in this periodical. From 1882 a monthly magazine, the Rivista Mensile del C. A. I. was added to the Club's publications; the Rivista Mensile has encountered constant favour with the public, and soon it will celebrate its hundred-thanniversary.

Here I would like to mention another very important collective work, still in course of publication : the Guida dei Monti d'Italia (Guide to Italy's Mountains).

When this collection will be completed it should count 49 or 50 volumes ; up till now 33 volumes have appeared, each one describing in detail, with illustrations, all known routes to every single mountain. I would like to mention, as outstanding examples of this great work, the two volumes on Monte Bianco (Mont Blanc), the eight volumes on the Dolomites, the volumes on Monte Rosa and the Pennine Alps.

True Italian alpine literature was born in 1904 when Guido Rey published his work Il Monte Cervino, which had great success in Italy and was also translated into other European languages. Between 1897 and 1911 the Duke of Abruzzi, a cousin of the King of Italy, organized and led a number of important expeditions to distant mountain groups, in Alaska, in Central Africa, in the Karakorum. The reports of these expeditions were written by Filippo De Filippi, originally a medical doctor, but later a renowned historian of geography, who contributed much to the development of Italian literature in this field. De Filippi also organized an important expedition to the Karakorum range in the years 1913-1914 ; the results of this journey were later published in 15 large volumes (Bologna, 1921-1927).

A very active collaborator of De Filippi was Professor Giotto Dainelli of Florence University. Not only did he write most of the scientific reports of the De Filippi expedition, but he undertook travels on his own and contributed greatly to the knowledge of Kashmir, Ladakh, Baltistan and the Karakorum, in the fields of geology and human geography. Unfortunately most of his many books are in Italian, a fact which has limited the international impact of his studies. During the years at the beginning of the century, Vittorio Sella (cousin of the founder of the Club Alpino) made a great name for himself as a photographer of mountain scenery ; his views of the Karakorum have been widely published up to very recent times. In 1913 C. Calciati and M. Piacenza organized an expedition which managed to climb Mt. Kun (7,086 m), in the Kashmir Himalayas, an outstanding feat for those times; the report of the expedition ("Himalaia Cashmiriano"), which appeared in 1924, was an important addition to Italian literature in the field of exploration.

During the years between the two wars (roughly 1920-1940) Italian climbers were very active all over the Alps. The names of Tita Piaz, Riccardo Cassin, Emilio Comici, Giusto Gervasutti, Gabriele Boccasatte, just to mention a few, became internationally famous. The general public started to take much interest in mountain exploration, and a number of good books were written on this

subject: the names of Antonio Berti, Giuseppe Mazzotti, Eugenio Fasana should be mentioned here. Books by the great climbers of the midwar years were published, however, much later: let me mention here Mezzo Secolo d'Alpinismo (Half a Century as a Climber) by Tita Piazz (1952), Alpinismo Eroico by Emilio Comici (1961), Scalate nelle Alpi, by Giusto Gervasutti (1961), and Cinquant'anni d'Alpinismo by Riccardo Cassin (1977); only the writings of G. Boccalatte, Piccole e Grandi Ore Alpine, appeared in 1939.

The activities of some explorer-writers extended over the pre-war and post-war years. Father Alberto De Agostini published many works describing his explorations and climbs in Patagonia, since 1923. His last book, Trent'Anni nella Terra del Fuoco, appeared in 1958. Professor Ardito Desio, of Milan University, published his celebrated work La Spedizione Italiana al Karakorum in 1929; this is a veritable encyclopaedia of geographical and geological knowledge concerning the Baltoro glacier and neighbouring districts. In 1954 Desio led the expedition which reached the unclimbed summit of K2 (8,611 m), and subsequently he published a report: La Conquista del K2 (1954). Professor Desio has written many other specialized studies on the Karakorum mountains.

Mention should also be made, here, of Professor Giuseppe Tucci, of Rome University. He never was strictly speaking a climber, but his journeys and expeditions in all parts of Tibet and Nepal, from the early thirties to the late sixties of this century, took him very often over unknown and difficult ground. His works are a precious mine of information concerning Tibetan religion, art and folklore. Apart from his major specialized studies on Tibetan civilization, the following works may be mentioned here: Cronaca della Missione Scientifica Tucci nel Tibet Occidentale (1933), Santi e Briganti nel Tibet ignoto (1937), A Lhasa ed oltre (1952), Tra Giungle e Pagode (1953), Alla Scoperta dei Malla, (1960).

The younger generation, active exclusively after World War II, has given us some outstanding names; those of Walter Bonatti, Cesare Maestri, Carlo Mauri, and more recently, Reinhold Messner, are internationally known. Bonatti recorded his extraordinary exploits in two books, I giorni Grandi (1971) and Le Mie Montagne (1978); Maestri wrote a controversial autobiography by the title Arrampicare è il mio Mestiere (1961); Mauri addressed himself mainly to the young in his charming book of souvenirs Quando il Rischio è Vita (1975). As for Messner (who belongs to the German speaking minority of Alto Adige, or South Tyrol, in the Dolomites) he has been recently as active in breath-taking

solo climbs all over the world, as in publishing books mostly with excellent photographic illustrations. Among his works let me mention: Il Manaslu (1973), Settimo Grado, Scalando l'Impossibile (1974), Vita tra le Pietre (1976), Due Ottomila, dal Lhotse allo Hiden Peak (1977), Arena della Solitudine (1977), Pareti del Mondo (1978), Nanga Parbat in Solitaria (1980), Everest (1979), and a recent report on his ascent of K2 (1981).

During this period many good and useful books were also written by climbers with less dazzling records. Mario Fantin should be mentioned for his untiring activity extending over thirty years. His historical study I Quattordici Ottomila has been widely acclaimed and translated (there was also a Japanese edition of the book). Other geographical and historical studies of his concern the Matterhorn (Il Cervino 1865-1965), Greenland (Montagne di Groenlandia, 1969), the Andes (Le Ande, un Secolo di Alpinismo, 1979), the mountains of Asia (Himalaya e Karakorum, 1978), the peaks of North Africa (Tuareg, Tassili, Sahara, 1980). Alfonso Bernardi has published three excellent historical surveys: Il Gran Cervino (1963), Il Monte Bianco (2 vol., 1965-1966), La Grande Civetta (1971).

On a more national level Severino Casara should be remembered for his loving, poetic, descriptions of the Dolomites, and Spiro Dalla Porta-Xidias for his personal, intelligent essays on mountaineering and mountaineers. Adolfo Balliano and Giuseppe Zoppi, active at a somewhat earlier period, wrote widely on the Western Alps. Balliano was for many years chief editor of a series of books on the Alps, called La Piccozza e la Penna (17 volumes); Zoppi edited another similar collection called Montagna (28 volumes).

This very brief survey may be concluded with the name of Aurelio Garobbio, a prolific writer for many years in the field of alpine literature. His main work, Alpi e Prealpi (in course of publication), plans to offer the reader a complete encyclopaedia of alpine folklore. This work (six volumes have appeared so far) will constitute a precious repository of ancient traditions now swiftly disappearing or being forgotten, the spiritual legacy of farmers, wood-cutters and shepherds living in the valleys of the Italian Alps.

On the Life and Travels of Rafail Danibegashvili

Tamio Kaneko

The Georgian Traveller and diplomat Rafail Danibegashvili, who was generally called Denibegov in Russia, is not yet known well in the geographical world except in Russia. For most of his introductions have been appeared in Georgian, partly in Russian, so it is difficult to know of the biography of Rafail Danibegashvili.

Danibegashvili was certainly a vigorous traveller, and he travelled widely in the Asiatic districts from the end of the 18th to the beginning of the 19th Century. Today, from some sources we can get valuable informations and know of his five journeys to the South and Central Asia; in 1795-1799; 1797-1798; 1799-1813; 1815-1820; and 1822-1823. It is, however, to be regretted that we do not know how many journeys he had accomplished all through life.

Although we do not know when he was born or died, what condition of his family was or what he looked like, there is not a way except to guess it from his travelling descriptions or notes. But Danibegashvili might be born in Tiflis (Tbilisi), a fascinating town of Georgia (Gruziya) in the Caucasus. In 1795, he started out on his early career of a traveller, a diplomat and a merchant. It is said that people of the Caucasia were traditionally merchants, and at that time many of Georgian or Armenian merchants had travelled to India to search for curious commodities. Perhaps he might have often travelled to distant lands with his father prior to his own travellings and gained many experiences from it. As it already states before, we do not know when and where he died, but he might have spent in Russia proper after he had returned from his third, fourth, and fifth journey, and it seems that he died after 1827, because we cannot trace his career in any kind of documents.

The Book of Danibegashvili's journey was firstly translated from Georgian into Russian and published in 1815. Since then, the results of his unique travels have been attracted attention by some scholars, but its informations were not so complete but fragmentary manuscripts or notes which were incidentally discovered. Some articles on Danibegashvili had appeared or been introduced at times in the newspapers or publications before the Russian Revolution (1917). Especially, among them it is worthy of remembrance that the famous Russian ex-

plorer G.E. Grumm-Grzhimailo contributed a short article of Danibegashvili to the Brockhaus Encyclopedia (the edition of 1893) printed in Germany.

In 1922, a part of his fifth journey was introduced by Sven Hedin in his "Southern Tibet", vol. VII. And in 1925, V. V. Barthold also mentioned on Danibegashvili's journey in his splendid work. It is, however, sorry to say that they were neither enough nor satisfactory.

The study on Danibegashvili in Russia has made rapid progress after the World War II. A new document was discovered in the Brosset Archive in Leningrad, in 1949. The 2nd edition of Danibegashvili's travel was published in Tbilish, in 1950, and also the new edition was compiled in 1961 and 1963. In addition to this, an important document on Danibegashvili appeared in the Orenburg Archives in 1964, which came to light various unknown facts that he had made his fifth journey to India and other countries he had never visited before.

Danibegashvili's first two journeys were made on orders from the King of Georgia Irakli II. The main purpose of these journeys was not a trade but to deliver the deed of Irakli II to Shakhmiryan, a wealthy and famous Armenian patriot residing at Madrass, in the east coast of India. But Shakhmiryan had already passed away, in 1797, when he at last arrived at Madrass after many dangerous adventures.

These journeys still remain a mystery because of lacking his detailed accounts, and it is impossible to trace his routes but the two points—Tbilishi and Madrass.

The third journey was the most and longest one in his life, which lasted nearly 14 years and covered large areas of the South Asia including Ceylon, Burma, the Kara-Koram Mountains and Chinese Turkestan. He was surely the first person in Russia who visited the farthest country—Burma. It is happy to say that the story of this journey was and recorded by Danibegashvili himself in his book—The Travel. During this long travelling, it is supposed that he spent 450/500 days on the road and that he covered total distance of more than 20,000 km. The Russian edition of the Travel was firstly published in Moscow, in 1815, translated from the Georgian by J. A. Dvigubsky, a professor of Moscow University. In the Travel, Danibegashvili wrote and recorded his experiences or episodes, the natural features of many countries or the life and manners of the different peoples he had observed along the routes. It should be interesting that he gave some vivid descriptions on climate, flora and fauna in India.

The fourth journey is now unknown in detail.

The fifth journey was begun from Russia. The journey was quite unique and continued five years. Danibegashvili sailed across the Caspian from Astrakhan and then he went further away Persia to India. And, on his way back to Russia, he travelled through Lahore, Srinagar, Kabul, Bukhara, Orsk and Orenburg. In Orenburg, he happened to meet G. F. Gens, the chairman of the Orenburg Frontier Commission, who had a chance to record his strange story. This document was recently discovered in the Orenburg Archives. Gens' Record is short but contains rather important description of a famous British traveller William Moorecroft as the name of 'Muryan-Murkryan', who was one of early pioneers exploring in the Himalayas, Tibet and Afghanistan.

It is hard to say that the life and travels of Rafail Danibegashvili is understood well in the West World, but nobody will deny he was one of the most celebrated travellers in the South Asia, in the 18-19 Century. The text of this translation into Japanese is based upon the 1969 Russian edition printed in Moscow.

The translator's note mainly owes the excellent biographical outline by L. Maruashvili to whom he wishes to express his hearty thanks.

The North Face of Kangchenjunga, 1980

Naoe Sakashita

Kangchenjunga had been climbed by three parties; the British party, led by C. Evance by Yalung Glacier side in 1955, the Indian Army party led by Col. N. Kumar by the North-East Ridge in 1977, and again British party led by Doug Scott by the North Ridge in 1979, which was a new alpine style climbing.

The object of Sangaku-Doshikai Kangchenjunga expedition 1980 was to make the first ascent of the North Face of this mountain without using oxygen equipment.

They planned to climb the one of the most massive and dangerous face in the Nepal Himalaya. It stands 3,500 m above the head of Kangchenjunga Glacier with two huge rock bands and the summit rock face sandwiching three big hanging glaciers. They would try to depend upon least artificial aids and minimum advance camps on the face. They expected that the steep, mixed section at 6,700-7,300 m, the rock step above 7,300 m and the summit rock wall

above 8,000m would become the crucial points for their climb. Generally speaking, however, it might not be so difficult technically as the steep North Face of Jannu (7,710m), which they had made the first ascent in 1976. The true challenge for them would be the hard climbing above 8,000m without using oxygen equipment. It certainly would demand them without the extreme durability both physically and mentally.

Their attempt would be a true adventure for every member.

After a long approach march and an acclimatisation practice, they reached the Base Camp at Pang Pema (5,500m) on March 19. They spent 10 days there for the arrangement of the gear and food, and an acclimatisation practice. The siege started on March 29. Three pair teams were rotated to push up the route the North Face. The leader, Konishi moved freely to assist any pairs, and 11 Sherpas led by Ang Phurba carried loads to camps. Camp I (5,800m) was established on April 1, where was the same place of the British '79 party's Camp II. Camp II (6,500m) was made on the first snow field on April 7.

Although the condition of the "ice building" between Camp I and Camp II was much better and stable than expected one, it demanded some difficult and insecure climbing for them due to the potential danger of avalanche and collapse of hanging glacier. It took 10 days to fix ropes for 450m on the "rock band" which was the most crucial section in this route. Camp III (7,300m) was made on the second ice field, and the final Camp IV (7,900m) on the third ice field was made on May 1 by 4 aggressive Sherpas while all member descended to the lower camps due to the heavy snow fall.

Two summit-bid teams were decided on April 30, and the first go team were Ryoichi Fukada, Haruichi Kawamura, Naoe Sakashita, Syomi Suzuki, and Ang Phurba. The second go team were leader, Konishi, Motomu Omiya, Toshitaka Sakano, Pemba Tsering Sherpa and Dawa Norbu Sherpa. First team went up to Camp IV on May 5 and 6 for an acclimatisation and descended to Base Camp. The second team also did same practice on May 7 and 8. After rested in Base Camp for three days, the first team set out Base Camp on May 11, and reached Camp IV on 13th. Next day at 5:00 the five members set out Camp IV with gear on each back (5-8kg). They were not tied by ropes each other. 250m of rope were fixed in the snow couloir above Camp IV for the secure of descent. The knee depth snow and the thin air demanded the arduous effort and frequent rest. The five members in turn led a pitch. At last, they reached the summit at 16:15. Ang Phurba carried up the 5kg 16mm-movie-camera to the top. It

was cloudy and could see only heads of Yalung Kang and Central and South peak of Kangchenjunga. They began to descend at 17:00 and returned to Camp IV at 19:50 in the heavy snow fall.

On 17th second party set out Camp IV at 3:30. Dawa Norbu took the lead all way up to the top in knee depthsnow for 12 hours. And Pemba Tsering Sherpa carried movie-camera. The four members except Konishi reached the summit on 17:40. Konishi on the way at 8,400m deteriorated his condition and returned to Camp IV alone. The second team found the snow bar with Indian national flag which had been left by Indian Army party of '77 very near the summit. They returned to Camp IV at 22:00. They removed all the ropes, pegs and tents on the face in the next two days.

They evacuated Base Camp on May 25 and reached at Dharan Bazar on June 6 and backed to Kathmandu on June 7.

This is the first light weighted style ascent of eight thousander by Japanese. The oxygen-less ascent of eight thousander also is the first by Japanese.

Baruntse in Midwinter 1980/1981

Haruhiko Nakamura

This expedition sent commemorating jubilee of the Academic Alpine Club of Hokkaido (AACH) was our second attempt for the Himalayan seven thousander in midwinter season, after the first but unsuccessful attempt on Mt. Trisli in 1974/1975.

Since 1975, we have continued scientific study to realize the second attempt in success. Judging from the weather record in winter at Hajun (near Mt. Everest) which was obtained by AACH members and high altitude data by radiosondes flown at Kathmandu, the ambient temperature at 7,000 meter altitude on Mt. Baruntse in midwinter was anticipated to be as low as -50°C taking the effect of strong jet stream under consideration. To overcome such severe weather conditions, many climbing equipments and protective garments were newly developed and improved after thorough tests conducted in cold room laboratory at the Institute of Low Temperature Science of Hokkaido University and other refrigeration facility, where the temperature could be lowered to -50°C . Equipments

and garments adopted by the expedition through those tests were insulated boots, sleeping bogs made of synthetic fabric but conventional down, face masks, chemical warm sheets, thermos bottles for battery, 150 watt wind power generator system with battery charger and so on. They were proved as quite satisfactory in actual use through the expedition.

On 3rd November, 1980, climbing leader H. Nakamura and his nine associates, Liaison Officer, Lt. Uttam Shin Kharki of Nepal Army and six Sherpas started Tumlingtar for 2 weeks' caravan with some five tons of load carried by 170 local porters. They passed Shipton Pass (4,200m) without any fear of avalanche, and established the Base Camp on 17th at 5,000 meters point along Barun Khola. By the end of November, over two tons of load were successfully deposited at the 5,130 meters point. On 1st December, the first day of the winter season, the Camp 1 was established. This followed by the establishment of Camp 2 on 3rd, and of Camp 3 on 5th. Final attack camp was advanced at 6,700 meters point on 13th.

In the morning of 15th December, 7 members including 2 Sherpas left for the summit from the Attack Camp. 4 members returned from the half-way, but Ikegami, Hamana, and Ang Pemba reached the summit of Mt. Baruntse (7,220 m) at 13:30 in very fine weather. The second attack was tried by 7 members on 23rd, however, they were forced to give up the climb at 7,000 meters point due to bad weather.

The Ascent of Panwali Dowar and Vaski Parbat, 1980

Keisuke Nakae

Ritsumeikan University Alpine Club party made the first ascent of Panwali Dowar (6,663 m) by South-East Ridge. Base Camp was made on May 4th, Camp 1 (4,600 m) on 8th, Camp 2 (5,450 m) on 15th and Camp 3 (6,150 m) on 24th. Nakae, leader and Kobayashi reached the summit on 30th. Two days later on June 1st, M. Nomura and H. Nomura made the second ascent.

After Kobayashi return Japan the three members left headed for Vaski Parbat (6,792 m). Having waited for three months until post-monsoon season

coming, they established Base Camp (4,700 m) on Chaturangi Glacier, north of Bagirathi II on September 5th. And they marched into Sundal Glacier to East Face of the mountain. Advanced Base Camp (5,100 m) on East Face was made on 10th, and ropes were fixed up to 5,700 m next day. On 12th, they set out Advanced Base Camp with 15 kg on each back (seven days foods, and a tent), and the following three nights at 5,650 m and 6,300 m on the snow slopes, and at 6,550 m on the North Ridge. On 15th, they reached the top and the South Peak (6,750 m). After two more bivouacs at 6,550 m and 5,400 m on the snow face they safely returned Advanced Base Camp.

Ganesh Himal V, 1980

Yoshio Nagao

In the year 1980, Jikei University School of Medicine celebrated its 100th anniversary. In commemoration of this centennial anniversary, we sent an expedition to the Nepal Himalaya.

Originally, we had in mind Ganesh Himal II (7,150 m), the climbing of which had only recently become permissible, and obtained the necessary government permission. This peak, however, was also marked by the Okayama University expedition party who made its first ascent in the post-monsoon season in 1979, therefore we changed our target to Ganesh Himal V (6,950 m).

Since the climbing of the as yet unconquered peaks of the Ganesh Himal range was not allowed to parties consisting only of non-Nepalese, we formed a joint Japan-Nepal expedition party inviting two Nepalese to our party.

We successfully scaled this virgin peak; on April 21st, by our first team consisting of two Japanese, one Nepalese and two Sherpas, and on April 22nd, by the second team consisting of four Japanese, one Nepalese and three Sherpas.

Leaving Kathmandu on March 7th, our party started caravan from Trisuli Bazar on March 8th with 144 porters. March in through Dhunche and Syabru Bensi, and then along Chilime Khola, we reached Mesanje Kharka, 3,800 m high, where we set up a Base Camp on March 20th. A few days prior to this, on March 15th, we had crossed the snow line at which point two thirds of our porters returned to Kathmandu. So it was after March 22nd that we finished to

carry up all the supplies to the Base Camp.

We had in mind to take the North Ridge as a climbing route. A wide glacier drops off almost vertically from the ridge, therefore, we sought a route on the glacier. Dominating our path along the lower part of the ridge, on the other hand, there was a gigantic rocky outcropping which we named 'Sting Fish'. After reconnaissance of three alternative routes to get to the base of Sting Fish, we finally decided to take the path up the North Ridge starting from the base. We set up Camp 1 (4,330 m) on March 26th.

We set up Camp 2 (4,930 m) on March 31st. Camp 2 was at the base of Sting Fish. Then we tried to look for a safe route to right of Sting Fish, but unable to find one. In order to set up Camp 3 atop a col on Sting Fish, we had to traverse the glacier to the left of Sting Fish, where there were crevasses, and then climb a steep couloir with dangers of avalanches and blocks of ice falling from the over-hanging glacier above. This we somehow managed to do and succeeded in reaching a col on Sting Fish on April 6th.

However, the col was very narrow. Besides, as it was set up apart from the glacier by a gigantic crevasses, which was impossible to climb. We, therefore, traversed to the left from the middle of the couloir and by going around the base of gigantic ice formation on its left side, we succeeded in getting to the edge of the glacier. We set up Camp 3 (5,300 m) at the edge of the glacier on April 14th. At this camp, four of our members started showing signs of high altitude sickness one after the other, and they had to be sent down to Camp 2 temporarily. Fortunately, it did not affect their physical condition too much, so we were able to resume our activities soon.

On April 20th, we set up Camp 4 (6,400 m) cutting a terrace on an ice wall where, Sasaki, Komori, Lhakpa and two Sherpas, spent that night for the final assault on the peak. The next day, April 21st, the weather was beautiful. The five left the camp at 6:50 a.m. and climbed on a rock ridge which led to the peak at 10:00 a.m., finally reached the top of Ganesh Himal V at 11:52 a.m.. The following morning, April 22nd, the weather was again clear. The second team of eight, including Okabe, Hamaguchi, Shinohara, Saito, Zimba and three Sherpas, started Camp 4 and reached the summit at 8:45 a.m..

On April 23rd, we returned to the Base Camp and started the caravan back to Kathmandu on 26th. We separated into parties taking a different route passing through Gasainkund, all arrived Kathmandu safely on May 5th.

We had no trouble among members and porters, and kept a good relationship

among Japanese and Nepalese members, Sherpas and Liaison Officer throughout the expedition. The expedition was a great success of 13 members to reach the summit without accident and also conducting a medical research.

Members of this mountaineering expedition;Yoshio Nagao, M.D. (50), leader;Norimasa Okabe, M.D. (40), Kinichi Hamaguchi, M.D. (38), Takeshi Shinihara, M.D. (32), Tatsumi Sasaki, M.D. (30), Saburo Saito (26), and Akihiko Komori (23), Japanese;Lhakpa Dorjee (29) and Zimba Zangbu (23), Nepalese.

The Ascent of Lamjung Himal from the North Ridge, 1980

Hitoshi Hagiwara

- March 20th. Caravan march was started from Dumle with 106 porters.
- April 5th. Base Camp was established at 3,800m. Two deposit camps had to be made between Bhartan, the last villedge we passed, and Base Camp.
- 9th. Camp 1 (4,650m) was made at a branch ridge of the North Ridge. Followed the branch ridge, which was easy and short, until on the 5,300m peak on the North Ridge. From Camp 1 to Camp 2, nine pitches of 50m rope were fixed.
- 14th. Camp 2 (5,200m) was made on the North Ridge. From Camp 2 to Camp 3, a steep ice ridge at first, and easy rock, then a snow ridge, led us to snow plateau.
- 17th. Avalanche accident was happened. Ueno was hit and hung down from the North Ridge near the snow plateau. As he broke his leg, he descended the ridge and spent the night in snow cave with three members.
- 21st. The injured was carried down to Base Camp by all other members.
- 26th. Camp 3 was made on the snow plateau (5,800m). From Camp 2 to Camp 3, twelve pitches of the rope were fixed. Camp 3 to Camp 4 was the most difficult climb. A snow wall which we took for clearing hanging glacier, then ice-snow mixed sharp ridge with

- the dangerous cornices. At the last part of North Ridge we faced a big cornice.
- May 10th. Two members broke through the big cornice and stood on a big snow field which extend to Annapurna II.
- 12th. Camp 4 (6,500m) was made on the snow field. From Camp 3 to Camp 4, 22 pitches of the rope were fixed.
- 13th. The first attempt to the top was made by Kazusa, Nishimura and Jambu Sherpa, from Camp 4 at 7:40 a.m.. The route was through flat and broad snow slope. At 11:50 a.m. they reached the summit of Lamjung Himal. Second bid was abandoned due to shortage of time.
- 17th. Base Camp was removed.

Team : The Hosei University Lamjung Himal Expedition 1980.

Personnel : Hitoshi Hagiwara (56), leader; Kozo Kashiwagi (44), deputy leader; Kenjiro Oka (34), Kikuo Kazusa* (30), Yoshinori Ueno (26), Hisashi Sugihara (24), Satoshi Nishimura* (23), Naoki Ito (21), Yuji Matsuda (20), Yasuhiko Iwasaki, M.D. (34), Japanese; Sange Sherpa (43), sirdar; Norbu Jambu Sherpa* (27), Ang Ritha Sherpani (34), Sherpa. (* : summiters)

The North Face of Shivling, 1980

Masayuki Fujita

Shivling means 'penis of Shiva' and its North Face looked to provide one of the most beautiful routes in the Himalayas for the author. The mountain had been climbed three times by West Ridge. All the five members of the party had been in Alpine Club of Tokyo Univ. for four years and planned a Himalayan expedition before graduation.

Base Camp was made at Tapovan at 4,350m on July 20. They carried 4,000m of ropes and 300 of pegs, and foods for 40 days. The route was taken on the North Ridge to the foot of the huge overhanged wall. Then they intended to traverse west along the ice ramp on North-West Face, then to follow

another ice ramp to the summit snow cap.

It was in the midst of the monsoon. They had incessant rains for two weeks in late July-early August. Advanced Base Camp was made on July 27 at 4,750 m on a plateau, and Camp 1 (5,350 m) on a col of North Ridge was made on August. 4. Two weeks were consumed to climb small rock peaks on the ridge above Camp 1. Camp 2 (5,600 m) was made on 18th. Camp 3 (5,800 m) was made on 22nd above a steep couloir and fragile snow for two pitches. Steepness increased to the foot of the huge rock headwall. The thin hard ice forced members ceaseless tension because such acute feeling of exposure in the air had never been experienced on the Japanese mountains. Camp 4 (6,200 m) just under the head wall by cutting the arete for 3 m was made on 30th.

The traverse under the overhanged head rock demanded intensive exposure and the mixed ramp that encircles the head rock was steeper than expectation. Climbing became slow by fatigue and members were always menaced by the dreadful exposure. The summit was reached by Masayuki Fujita (23), Isaoh Kubo (22) and Masayoshi Yamamoto (23) at 17:30 on September. 4.

The party fixed ropes for 3,000 m, but evacuated all the four advanced camps. The newcomers tenaciously stuck to the steep slopes for a month on the unclimbed route. Although threatened by exposure, they were relaxed to get the summit. "We had not expected to reach the point where we set our Camp 4. We imagined the club's o.b.s. who contributed a half of our ¥5 million budget might not have expect it, also".

Batura by Two, 1980

Noboru Takenaka

Batura (7,785 m) was our truth and poem. We, Komamiya and I were the only two to attempt the ascent of Batura from the Muchichul Glacier, but we had to return on reaching the high of 7,500 m.

The Japanese Alpine Club Karakorum Expedition 1980, consisted of Noboru Takenaka (27), leader; Hiroo Komamiya (25), Japanese; Captain Ashrad Rafique (25), liaison officer, Pakistan Army.

We arrived Ali Abad, Hunza on July 15th through Karakorum High Way

and left there with 18 porters on July 17th. We needed eight days to reach the Base Camp at 4,000 m on the Muchichul Glacier where no expedition ever entered before. It was a very comfortable camp site on a morain hill with grass. In front of the Base Camp we could enjoy a overpowering view of Batura Mass and at the left-hand a gracefull mountain, Sangemar Mar.

We began to climb the glacier which extend to Batura Col Peak. We set up Camp 1 at 5,000 m on 27th, then Camp 2 at 6,100 m on unbelievably wide snow plateau on August 3rd. In front of Camp 2 there was a gigantic ice face. The first ascent of Batura awas acomplished through this gigantic ice face from the Batura Glacier in 1976 by West German Party.

Although the gigantic ice face looked so dangerous, on August 7th, after staying at Camp 2 for three days due to heavy snow, we began to climb it and set up Camp 3 at 7,000 m in the gigantic ice face on August 14th. Between Camp 2 and Camp 3 we had very steep and hard ice climbing. In the midnight of August 14th our tent was seized by an avalache, and we had to move Camp 2 to 7,100 m on the left end of the gigantic ice face next day. On August 16th while we descended to 6,700 m to pick up the deposited food stuff and climbing equipments, I dropped my crampon below the snow face. So we had to go far down to the Base Camp to fetch up another one.

On August 19th, we returned to the Base Camp after taking tremendous amount of time due to a heavy snowfall. Komamiya already spent his holiday schedule by this time and had to go back to Japan to attend the university examinations. Left alone, however, I decided to aim at the top of Batura by myself.

Solitarily, I proceeded to Camp 2 again on August 21st. I reached Camp 2 again on August 25th and started there for the summit on August 27th.

It was snowing on 27th, but I did not care of it. I could not climb so fast due to heavy snow. I reached at 7,300 m at 1:00 p.m.. Now I knew that I had to give up the summit, however, wished to do my best until the last minute to climb Batura, I continued to tackle the ice face. At 4:00 p.m. I reached at 7,500 m. After making about, 300 m distance more, I could not proceed any more. It was the highest point reached in this Batura expedition. Looked up onward but I could not see the summit of Batura due to snow. I returned to the Base Camp on August 30th.

A Talk with Prof. N.E. Odell

Tsunemichi Ikeda

Prof. Noel E. Odell was invited by the Japanese Alpine Club to spend three weeks from August 24. Born on the Christmas day in 1890, nearly 90 years old, he remains unbelievably hale and hearty, easily made lectures in Tokyo and Osaka, and visited Kamikochi in the Northern Japanese Alps for four days. Kamikochi is the place connected with Walter Weston, whose lecture he listened in London in his early days.

He pleasantly accepted two hours interviews twice. He said, "I think Mallory and Irvine may have reached the summit of Mt. Everest. They reached the summit late and it getting dark then.....". He suspects that the body that had been found by a Chinese climber at 8,100m on the Northeast Ridge must probably be of a Russian climber, not Mallory or Irvine. More than that, the author got precious episodes from Prof. Odell who knows the 20th century's vivid history of mountaineering.



世界のスポーツ総合メーカー

asics

株式会社アシックス

雪と、 風の血統。

モンクレール登山用羽毛服

ダウンの代名詞になった、フランス生れの名品モンクレール。
極寒の雪を、風を、ドラマの名バイプレイヤーにしてくれる。

MMQ 3
標準小売価格
75,000円

MMQ 1
標準小売価格
95,000円



●ご質問・苦情・その他お問い合わせは、株式会社アシックス消費者相談室まで
〒564 大阪府吹田市豊津町2番3号 ☎(06)385-1111 (大代表)

学研の山岳基本図書



日本山岳地図集成 全2集

吉沢一郎他編

第1集

北海道→
中部山岳(北部)編
●B4判・全202P(収録
地図51図・解説及び解
説図99P)

第2集

中部山岳(南部)→
九州編
●B4判・全190P(収録
地図38図・解説及び解
説図81P)

好評発売中

[地形図]+[ルート図・解説]の山岳検討図書。

●国土地理院 1:50,000地形図に含む1,500m以上の山岳を1:50,000で収録し、コース、キャンプ地等を記入。●概念図、行程図、ルート図、宿泊、交通、人文、動・植物、参考文献等を詳解。

●全2集セット(分割払もあります)
現金価格(定価) 28,000円

ヒマラヤ編

〈縮尺=約1:200,000〉
●B4判全328P(地図25
点・カラー32P・解説19
6P)

〔ブータン・ヒマラヤ・エ
ヴェレスト・マナスル・ヒ
マールなど25図収録〕

●全2集セット(分割払もあります)
現金価格(定価) 40,000円

カラコルム・ヒンズークシュ編

〈縮尺=約1:180,000〉
●B4判全350P(地図24
点・カラー32P・折込6
P)

〔カラコルム・カシミール・
ヒマラヤ・ヒンズークシ
ュ・パミール・天山の
主要山岳24図収録〕

吉沢一郎編

世界山岳地図集成 全2集

学研 学習研究社 〒145 東京都大田区上池台4-40-5
☎東京(03)720-1111大代表

●内容見本ご希望の方は下記宛に請求ください。
株式会社学研美術販売
〒145 東京都大田区上池台4-40-5 ☎東京(03)720-1111R0

TOP BRAND OF WORLD

—世界のトップ・ブランドをご愛用ください—



スカルパ登山靴／イタリア

スカルパ登山靴はイタリアの名門、世界の最高水準をゆく高級登山靴です。遠征隊用から一般用まで揃っています。



アルバータ羽毛製品／中国

アルバータ羽毛製品を中国と取組んで6年、すでにヨーロッパと同品質のレベルにまで達しています。遠征隊用から一般用まで数多くの品種を扱っています。



エイダー ダウンジャケット・サムフレック スパーク・シンサレートパーカ／フランス

フランスの世界的アルピニスト、イヴオン・ジラルディニ。本場アルプスの北壁を登った体験がエイダー社のパーフェクトな製品に生かされています。



ハンガロテックス毛織手袋／ハンガリー

ハンガリー原産毛を脱脂しないで編みあげた伝統ある毛織手袋は世界の登山家に愛用されています。



ヤーヌス靴下／ノルウェー

80年余の伝統から生まれたヤーヌスの毛織製品は北欧独特のジャガード柄。高品質を誇る名品です。



マウンテンハウスFD食品／米国

米国のアポロ計画で開発された超軽量、ハイカロリー、保存期間80年の夢の食品です。

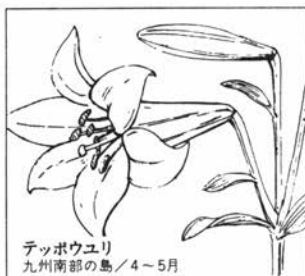
— 総輸入元、発売元 —



(株) キヤラバン

〒170 東京本社	東京都豊島区巢鴨1-25-7	☎ 03 (944) 2331
〒564 大阪支店	大阪府吹田市豊津町54-4	☎ 06 (386) 0451
〒062 札幌営業所	札幌市豊平区美園一条6-3-1	☎ 011 (822) 8664
〒812 福岡営業所	福岡市博多区堅粕4-23-16	☎ 092 (472) 0980

日本全国で 一年じゅう咲いている花



テッポウユリ
九州南部の島／4～5月



ササユリ
本州中部以西の山地／6～7月



オトメユリ
東北地方の山地／6～7月



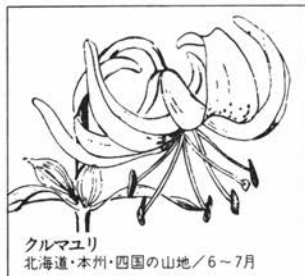
ヤマユリ
近畿以北の山地／7～8月



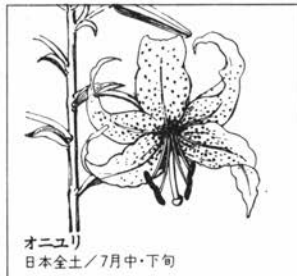
イワトユリ
紀伊半島以北の太平洋岸／7月上旬～下旬



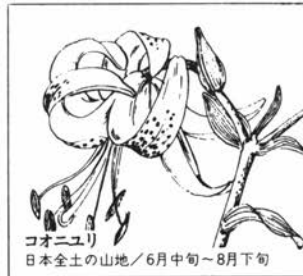
ヒメユリ
本州・四国・九州／6～7月



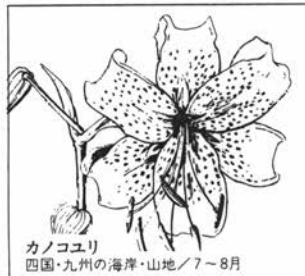
クルマユリ
北海道・本州・四国の山地／6～7月



オニユリ
日本全土／7月中・下旬



コオニユリ
日本全土の山地／6月中旬～8月下旬



カノコユリ
四国・九州の海岸・山地／7～8月

協和の支店は全国で230余の店。
それぞれの地域で、みなさまの暮らし、
みなさまの事業の
よきアシスタントとして、
いっしょうけんめい努力しています。
シンボルはユリの花。
協和は、清潔で明るい銀行を
めざしています。



いつもこいっしょ
協和銀行

信頼されて50年

山とスキー用品専門店



山友社 たかはし

四谷本店 〒160新宿区三栄町3番地 TEL (351)7432・1912
八重洲口店 〒103中央区八重洲1-5-11 TEL (271)1560・8575
新宿店 〒160新宿マイシティ5番街 TEL (352)6 5 6 4



山とスキーの専門店

クレッターザック
キスリング
夏冬用テント
門田ピッケル
// アイゼン

片桐

東京都文京区湯島3-38-9
☎113 片桐盛之助
電話 東京 (831) { 1794番
6680番

海外の山と旅

シエラブランカ

アラスカ・カナダ・USA
メキシコ・南米・ニュージーランド
ヨーロッパ

トレッキングからエクスペディションまで

シエラブランカはアラスカからパタゴニアまで
南北アメリカ大陸とニュージーランド、ヨーロッパの
山岳関係のツアーやインフォメーションを用意しております。
バックパッキング、トレッキングからエクスペディションの
パッケージはもとより遠征隊のための航空便や
地上手配、地図、エアタクシー、登山申請、保険などに関し
私達は豊富な知識と経験をもとにご相談に応じることができます。
どのようなことでもお問合せ下さい。答えることも私達の仕事です。

黒川 恵 (JAC・ACC・中大山岳部OB)
貫田宗男 (JECC・カモシカ同人)
佐藤芳夫 (露草登高会)



プレイガイドツアー
シエラブランカ・デスク
108 東京都港区高輪3-13-3
ホテルパシフィック3階
☎03-445-7533

講演社

世界初のチョモランマ北壁ルート
登頂を果たした日本山岳会
登山隊が、北東稜登頂記・
秘境チベットの報告を
豊富な写真と手記で
綴る記録集

チョモランマ・チベット

日本山岳会 珠穆朗瑪登山隊 公式報告書 ●定価=5,400円



雨宮 節 登山とスキーの店

代々木 **山幸**

〒151 東京都渋谷区代々木1-21-9

☎ 03(370)1100

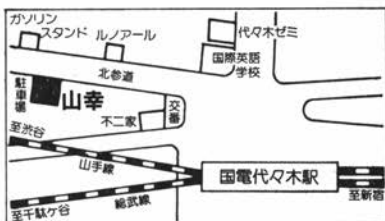
●年中無休 AM11:00~PM9:00(日・祭日PM8:00) (下車徒歩3分、駐車場もあります。)

●初心者への山案内

常設登山相談室

<山幸登山学校>

年間を通じての登山教室を開講いたします。
新緑の頃の親子参加のキャンプ教室、清流の沢登り、植物観察山行、アルプスの夏山教室、岩登り、新雪の雪山教室等を企画しています。又、ガイド付きのコース案内もいたしますのでご相談下さい。



山と旅の本

東京銀座1-3-9
振替東京1-326
実業之日本社

きたぐにの動物たち

本多勝一
A5変型判・1200円

山を考える

本多勝一
四六判・1200円

山のパンセ

串田孫一
A5変型判・1500円

若き日の山

串田孫一
A5変型判・1500円

山菜記

片岡博
B6判・980円

冒険と日本人

〈改訂新版〉
本多勝一
四六判・1200円

心の歌う山

串田孫一
A5変型判・1800円

はるかな尾瀬

朝日新聞前橋支局編
B5変型判・1500円

谷川岳 ヒゲの大將

高波吾策
B6判・1200円

旅の山菜

片岡博
A5変型判・1500円

剣岳の大將 文蔵

佐伯文蔵
B6判・1200円

上高地の大將

木村殖
B6判・1200円

炉辺山話

岡茂雄
四六判・1300円

私たちの シルクロード

平山美知子
四六判・1400円

山の博物誌

西丸震哉
A5変型判・1500円

山菜譜

ブルーガイドL
780円

北アルプス

カラー写真集
日本山岳写真集団
A4判・8000円

K2登頂幸運と 友情の山

広島三朗
A5変型判・1300円

ヨーロッパ ・アルプス

ブルーガイド海外版
880円

東京付近の山

〈改訂新版〉
ブルーガイド編
A5変型判・1600円

ネパール・パキスタン ヒマラヤ・ トレッキング

ブルーガイド海外版
1380円

この広告の価格は、い
ずれも定価で昭和56年
11月現在のものです。

自然を愛する心がポールワーズを生んだ。

大自然は、厳しさと優しさを教えてくれた。
マナスルもK2もチョモランマも南極観測隊も
数々のエクスペディションで実証された羽毛製品

ダウンパーカー	¥ 58,000
ジャンボシュラフ	¥ 68,000
スタンダードシュラフ	¥ 54,000
アンダーウェア(上・下)	¥ 34,000
パンタロン	¥ 32,000
フード	¥ 7,500
ミトン	¥ 7,500
シューズ	¥ 8,000

株式会社

 **ガンター**

東京都世田谷区野沢2-20-1 TEL. 03-410-8808(代) 〒154

梓書房版
復刻

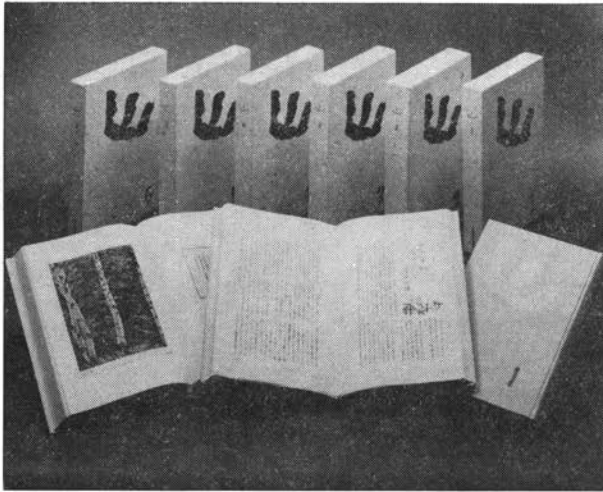


30号全6巻

〔自 昭和9年1月創刊号〕
〔至 昭和11年7月終刊号〕

各巻兩入・上製製本
菊判・総頁2500余頁

全6巻揃 35,000円(分割あり)



内容見本 無料送呈(はがき・でんわでどうぞ)

本書を「推せん」くださる方々

西堀栄三郎(日本山岳会会長)・今西錦司(前日本山岳会会長)・
桑原武夫(京大文学名誉教授)・今井田研二郎(日本山岳協会会長)・
串田孫一(随想家)・近藤信行(評論家)・石原巖(山編集長)・
山崎安治(日本山岳会常任評議員・日本山岳協会理事)

永遠を超え、先人の息吹きを伝える、「岳人の詩」

「山」は、ごくつろいだ墟辺談叢誌である。それは、登山家をはじめ
山に関心をもつ諸家の隨筆文苑として、香り豊かな山を、多面的に再
現する事を生命とする。

〈本誌全三〇号の執筆者の一部〉

足立源一郎・麻生武治・石川滋彦・今井喜美子・今井邦子・今西錦司・今村信吉・岩波茂
雄・宇野浩二・大島亮吉・屋崎喜八・片山敏彦・河東碧梧桐・兼常忠雄・河田楨・冠松次
郎・金田一京助・串田孫一・国塩(今井田)研二郎・黒田正夫・黒田(村井)米子・桑原
武夫・木暮理太郎・小島鳥水・児島勘次・小林秀雄・斎藤茂吉・坂本直行・佐々保雄・佐
佐木茂堂・島田巽・新村出・関口泰・千家元麿・相馬御風・高橋喜平・武田
久吉・田部重治・谷口嘉作・辻村太郎・中川一政・中島健藏・中西悟堂・中
谷吉郎・中屋健一・額田敏・野尻抱影・野村光一・長谷川如閑・初見一
雄・早川孝太郎・林美美子・久松潜一・平野長英・深田久彌・袋二平・藤本
九三・藤原咲平・正木不如丘・松方三郎・三上次男・水原秋桜子・三好達治
室生犀星・矢田津世子・柳田国男・結城哀草果・横山又次郎・若山喜志子・
渡辺公平

●眼ざまし草(桑原武夫)

私はかつて「登山の文化史」という小論を書いたことがある。登山は文化的な活動とならざる立場から、世界
の登山史をたどって見たのだが、いま雑誌「山」の復刻という喜ばしいニュースを聞いて、よと昔の拙文を思
い出した。自分勝手な理想かも知れない。
しかし、「山」の右原巖、岡茂雄の両氏もまた、山岳雑誌の出版は文化的な活動とならねばならぬと考えて精
進されたのではなからうか。
登山は登頂を究極目的としなければならぬ。しかし、成功のためには何をしてもよい、頂上さえ到達すれば
万事完了という訳のものではなからう。勇気にして文化的な行動が望まれるのである。そして、山好きという中には、
山を通過して楽しむ人も、中までを通過する人もあってよいはずだ。恐らくは山が生まれ、山は広義
における山の文化雑誌として創られたのではなからうか。そこからは、気品の高い紙面の高い紙面が生まれたのだ。
あの雑誌「山」の復刻時刻がたんに老練のスタイルをみただけでなく、近時がさつさつと登山界、
原産の相を示している出版界へのすがすがしい眼ざまし草となることを期待して、再撰をおくる。



株式会社 出版科学総合研究所

〒101 東京都千代田区神田小川町2-3みどりヤビル
電話 東京03(233)3241-3番

豊かな

生活環境を築きあげる……………

(建 材)

- カーテンウォール
- サッシドア
- 取替サッシ
- 用途別サッシドア
- 各種間仕切
- アルミ発色NKカラー

(機 器)

- 工業用フィルター
- 水処理装置
- 熱交換器
- フィンチューブ
- 各種精密金型

(電 機)

- 電気洗濯機
- 衣類乾燥機
- ウォータークーラ
- 冷凍・冷蔵ショーケース
- 各種ショーケース
- アイスクリームストッカー

日本建鐵株式会社

取締役相談役 早川 種三

東京都千代田区大手町2-6-2 〒100

TEL 東京 (03) 270-6511(大代表)

飼料・肥料配合プラントのコンサルタント

飼料・肥料製造用諸機械及び部
品の販売・関連機器の斡旋取扱

株式会社橋エンジニアリング

名古屋市中区橋一丁目27番8号

〒460 ☎名古屋052(321)1501(代)

山の総合誌へ岳人へ四〇〇号記念出版

登山の基礎から実用まで、
一貫して役だつ山岳書の決定版。

新岳人講座

全9巻

「岳人」200、400号に掲載されて好評を博した、珠玉の紀行文、論文、画文、研究、記録などを全9巻に収録。各巻、現代登山界の趨勢に適した分野別とし、権威ある監修者を得て多彩に編集。わかりやすい平明な解説と内容の豊富さ、くわしい登山史年表などを含む。いま、登山家及び山の愛好家に大好評を博す山岳書。

全巻完結！この機会にお揃えください。

第1巻 アルピニズムⅠ

●日本登山史を中心に

第4巻 技術と用具Ⅱ

●食糧、遭難など

第7巻 世界の山Ⅱ

●アンデス、アラカ、アルプス他

第2巻 アルピニズムⅡ

●登山思潮の変遷について

第5巻 日本の山

●登山記録、現状と展望について

第8巻 山と文学

●随想と紀行、画文

第3巻 技術と用具Ⅰ

●入門、岩登り、山スキー

第6巻 世界の山Ⅰ

●ヒマラヤ、カカス、ヒマラヤ、ヒマラヤ

第9巻 山の科学

●気象、雪氷、地形、地質、動植物、医学

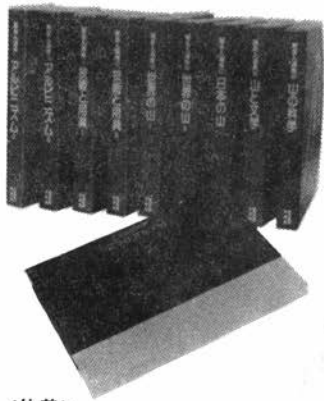
●監修

徳久球雄

塚本珪一

湯浅道男

雁部貞夫



<体裁>

●A5判・上製本函入り

●定価各3000円(千300円)

東京新聞出版局 (中日新聞) 東京都港区港南2-3-13 ☎(03)471-2211(代)振替/東京5-5497
書店で発売中。東京新聞・中日新聞販売店でも取りつぎます。

ニッチの

登山・ハイキングシリーズ

定評ある著者陣容!
全56巻
定価各500円

※登山・ハイキングシリーズにはこれだけの仲間が揃っています。

- | | | |
|--------------|----------------|---------------|
| ① 奥武蔵 武甲・雲取 | ②③ 蔵王連峰 | ④ 金剛山 葛城・岩湧山 |
| ② 奥多摩 大菩薩 | ④ 八幡平 岩手山・駒ヶ岳 | ⑤ 六甲・摩耶 |
| ③ 奥秩父 | ⑤ 霧ヶ峰 白樺湖・蓼科山 | ⑥ 比良連山 |
| ④ 陣馬・高尾 秋川渓谷 | ⑥ 雲ノ平 | ⑦ 大峰・吉野 |
| ⑤ 丹沢山塊 | ⑦ 妙高・戸隠 野尻湖・黒姫 | ⑧ 大台ヶ原 大杉谷 |
| ⑥ 富士・五湖 ミツ峠 | ⑧ 南アルプス北部 | ⑨ 赤目・青山 室生寺 |
| ⑦ 箱根 熱海・湯河原 | ⑨ 中央アルプス | ⑩ 鈴鹿連峰 御在所・伊吹 |
| ⑧ 奥日光 奥鬼怒 | ⑩ 南アルプス南部 | ⑪ 大山・蒜山 |
| ⑨ 尾瀬 銀山湖 | ⑪ 北アルプス | ⑫ 三瓶山 帝釈峽 |
| ⑩ 軽井沢 妙義山 | ⑫ 加賀白山 白川郷 | ⑬ 秋吉台 三段峽 |
| ⑪ 伊豆半島 大島 | ⑬ 飯豊・朝日 | ⑭ 九重山 久住高原 |
| ⑫ 三浦半島 鎌倉 | ⑭ 大雪山 層雲峽・然別湖 | ⑮ 英彦山 耶馬溪 |
| ⑬ 美ヶ原 霧ヶ峰 | ⑮ 槍・穂高 アルプス銀座 | ⑯ 阿蘇山 |
| ⑭ 谷川岳 | ⑯ 立山・剣 黒部渓谷 | |
| ⑮ 八ヶ岳 蓼科山・ | ⑰ 東海自然歩道Ⅰ | |
| ⑯ 那須・塩原 鬼怒川 | ⑱ 東海自然歩道Ⅱ | |
| ⑰ 磐梯・吾妻 安達太良 | ⑲ 東海自然歩道Ⅲ | |
| ⑱ 志賀高原 草津白根 | ⑳ 入笠山 守屋山・高遠 | |
| ⑲ 上高地 乗鞍岳 | ㉑ 苗場・鳥甲 清津峽 | |
| ㉑ 黒部・白馬 鹿島槍 | ㉒ 越後三山 奥只見・巻機山 | |
| ㉒ 房総半島 | ㉓ 御岳 木曾路 | |
| ㉓ 浅間・菅平 | | |



雷鳥マークのカラー表紙
に衣替えて新発売!!

※保存用には

日本登山地図集

I 中部山岳・信州篇

II 関東・上越篇

をどうぞ——定価各4,800円

地図の 日地出版

本社 東京都千代田区西神田2-2-15
東京 03 (261) 5126
支店 大阪府南区安堂寺橋通り3-60
大阪 06 (252) 7421

や
ま

志村烏嶺 共著
前田曙山
★特装本 B6 限定二〇〇〇部
一〇〇〇〇〇部

高橋喜平著 四六判上製函入一六〇〇円

雪と人生

加納一郎著 四六判上製一七〇〇円

山・雪・森
霧藻庵雑記

岩科小一郎著 四六判上製一八〇〇円

山村滞在

岳 (ヌプリ) 書房

東京都千代田区神田神保町1-34 高瀬ビル 03(233)3909

■豪華写真集■

アムネマチン

上越山岳協会 / A4変型判上製 / 定価4,800円

“幻の山” “謎の山”と呼ばれた、中国青海省のアムネマチン。かつてはエベレストより高いといわれていた、このいわく付きの山に初登頂した上越山岳協会隊の記録写真を中心にアムネマチン峰のすべてを余すところなく紹介する。また青海省の民俗(チベット族、ラマ教、人々の生活)をも紹介する、楽しい登山アルバム。



山岳名著選集 ■各巻 A 5判

プモ・リ 《世界で最も美しい山》

ゲルハルト・レンザー著/橋本信他/定価2500円

冬のアイガー北壁 初登攀

トニー・ヒーベラー著/横川文雄訳/定価1200円

エヴェレスト登頂記

J・アルマン著/丹部節雄訳/定価2500円

遙か天山 《天山に魅せられた探険家セミョーフ伝》

A・セミョーフ著/田村俊介訳/定価2500円

“遠い頂”ヌプツェ

登歩溪流会編著/定価2500円

ダウラギリ登頂

M・アイゼリン著/横川文雄訳/定価1500円

パミール 《シルクロードの城塞》

田村俊介編著/定価2500円

中央ア高峯 《パミール速攻日本》
《シヤの高峯》 《シヤの山岳会隊の記録》

原真、田村俊介編/定価2500円

近刊 **アムネマチン初登頂**

上越山岳協会編/予価1800円/57年1月下旬刊行予定
謎の山征服の貴重な登頂記

中国登山ハンドブック

上越山岳協会編/A5判/定価1800円
未知、秘境、未踏の山総ガイド。中国登山に必要な規則、日中両国会話も併せて収録する。

登山ハンドブック・シリーズ 全6巻

■山岳研究会編■ A5判 ■各巻定価980円

- ▲ 登山教本
- ▲ 登山技術
- ▲ 世界の山岳
- ▲ 山の心
- ▲ 山の自然科学
- ▲ 山の資料

ベースホール・マガジン社

〒101 東京都千代田区神田錦町3-3 ☎03(291)7901

柏瀬祐之・岩崎元郎・小泉弘編 ●発売中

日本登山大系 全10巻

本邦初のバリエーション・ルート・ガイドの集大成
岩場・沢・冬期尾根ルート約四千を完全収録
豊富なルート図・概念図と詳細な解説
全国百数十に及ぶ精鋭山岳会、山岳部による執筆

- 1 北海道・東北の山 2回配本 定価三二〇〇円
- 2 南会津・越後の山 8回配本 定価二二〇〇円
- 3 谷川岳・奥利根 3回配本 定価二六〇〇円
- 4 東京近郊の山 4回配本 定価二五〇〇円
- 5 剣岳・黒部・立山 5回配本 定価二八〇〇円
- 6 後立山・明星山・海谷・戸隠 7回配本 定価二八〇〇円
- 7 槍ヶ岳・穂高岳 1回配本 定価二五〇〇円
- 8 八ヶ岳・奥秩父・中央アルプス 6回配本 定価二八〇〇円
- 9 南アルプス
- 10 関西・中国・四国・九州の山

A5判 概念図・ルート図多数・口絵写真6〜8頁

101東京都千代田区神田小川町三一二四
振替東京九一三三二二八電二九一七八一

白水社

ヨーデルの調べと山賊料理をお楽しみ下さい

Restaurant
FONDUE Brigand STYLE
山賊フォンデュ

山賊料理

自然を愛する
人達のお店です

仔豚の骨付肉……………¥1680
仔羊の骨付肉……………¥1980
牛肉のロースティー…¥1480
スイスフォンデュ…¥2980~
営業時間 12:00 PM ~ 23:00 PM

Restaurant
Brigand

レストランブリガンド

東京都港区西麻布4-5-2 ☎03-407-3009

Mizuno
THE WORLD OF SPORTS

背中と語る。

自然は、曲線ザックに強さを求めた。

摩擦・摩擦に強く、天然の風合い、しかも防水。

曲線ザックに科学の布(コーデュロン)採用。

山から降りて気がつくことが多い、ザックの擦り切れ、縫い目の破れ。そこで登場したのが、科学の布と呼ばれ、欧米のアルピニストの間で評価されているナイロン100%の(コーデュロン)。軽いけれど、とにかくヘビー・デューティ。

背中のかたちに合わせてボディ曲線。

ムダな力を使わないから歩行がラク。疲れにくい。

美津濃く(ベルグ)アタックザックは、身体との接点を徹底的に調査した結果、ボディ曲線を採用。肩の丸味に合わせたカーブ状のショルダーストップ、丸味のついた背革、サイドカーブなどもすべて曲線になっています。

背中の汗と熱を気化して放散する溝つきパッド。

クッション効果もある曲線ザック自慢のアイデア。

曲線ザックは、荷を安定させるため、背、腰、肩に密着させたわけですが、そのぶん汗が乾きにくいというデメリットが生まれます。そこで開発されたのが、この溝つきパッド。溝のついた特殊発泡体を布で包んだもので、歩行中の汗を気化し、この溝から熱も放散させます。



重心をつねに高く保つためヒップアップライン。

前傾姿勢がラクにできるウエストバンド。

ヒップアップラインは、形くずれをガードし、重心の位置をつねに高く保つための工夫です。



また、ウエストバンドは、腰骨をつつむ位置に設置。前傾姿勢を容易にし、歩行中のバランスくずれを防ぎます。

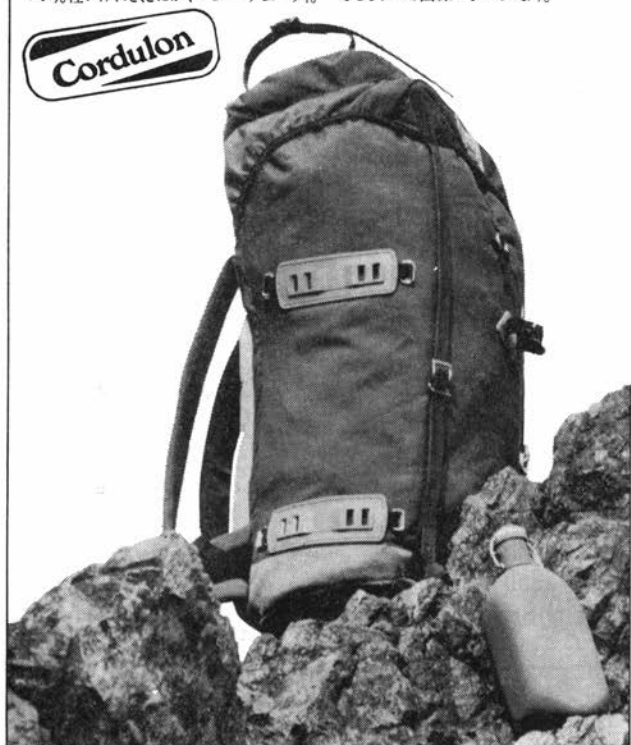
曲線ザックは全7タイプ、5カラー。

サイズ、容量、好みの色に応じてお選びください。

今シーズンは、ひとさわヘビー・デューティになって全7タイプ、5カラー(紺、ブルー、ベージュ、Rオレンジ、パープル) 厳しい大自然の友に、曲線ザックをお選びください。

BERG

〈ベルグ〉アタックザック



山の本

茗溪堂

電話 〇三—二九一—
振替東京八—二四七二三
東京都千代田区神田駿河台二—

山なみ帖

小谷隆一 3,200円

わが登高行 上巻 3,800円
三田幸夫 下巻 4,500円

静かなる山 正篇 1,700円
川崎精雄ほか 続篇 1,800円

登山史の発掘
山崎安治 2,500円

快晴の山
織内信彦 2,500円

森林・草原・氷河
加藤泰安 2,500円

山に忘れたパイプ
藤島敏男 3,200円

折々の山
望月達夫 1,900円

山を見る日
川崎精雄 2,900円

山は満員
渡辺公平 2,200円

山・人・本
島田 巽 2,400円

すこし昔の話
初見一雄 1,200円

我がスキュープール
麻生武治 3,400円

小さな頂
一原有徳 2,900円

北の山 続編
伊藤秀五郎 2,700円

詩集山の風物詩
伊藤秀五郎 1,400円

日高山脈
北大山の会 2,400円

わたしの草と木の絵本
坂本直行 1,200円

雪原の足あと 画文集
坂本直行 3,800円

山日記 昭57年

日本山岳会編 1,400円

原野から見た山 画文集
坂本直行 4,200円

山・原野・牧場
坂本直行 1,500円

開墾の記
坂本直行 1,400円

坂本直行 淡彩画絵はがき
1集、2集、3集 各300円
4集 400円

ランタン紀行
エーデルワイス・クラブ 1,500円

ナンダ・デヴィ縦走1976
ナンダデヴィ登山隊 3,900円

マナスル1974
日本女性マナスル隊 3,400円

登頂ゴジュンバ・カン
高橋 進 900円

遙かなる未踏の尾根
日本山岳会東海支部 4,800円

グリンデルヴァルトの山案内人
ブラーヴァン 3,800円

続ブータン感傷旅行
小方全弘 1,500円

年報 第6号
日本山岳会学生部 3,600円

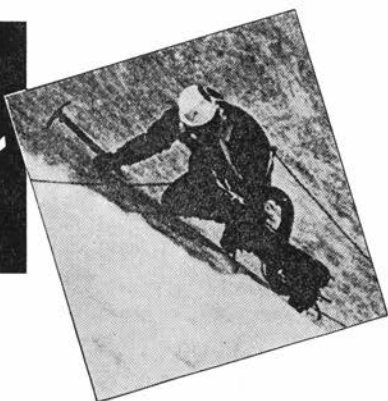
山岳 日本山岳会
62年、64年、65年各2,000円
63年2,000円、66年2,300円
67年、69年各2,500円
68年、71・72年合併号、73年、
74年、75年各3,000円
山岳総索引 1,000円
(第26年第1号から第60年まで)

低山高蹠
神谷恭遺稿と追悼 2,900円

山ひとすじ
中村謙遺稿と追悼 3,400円

苛酷な大自然に闘いを挑んだ男たちの
 栄光と悲劇——その行動と孤独な内面
 にスポットをあてて贈る迫真のドキュメント

山溪
 ノンフィクション
 ブックス



狼は帰らず アルピニスト・
 森田勝の生と死

佐瀬 稔著

B6判●980円

孤独なクライマー森田勝は、グランド・ジ
 ョラス北壁に散った。死と隣り合わせる岩
 壁に彼をかりたてたのは何であつたのか。

栄光の叛逆者 小西政継
 の軌跡

本田靖春著

B6判●980円

現代日本の登山界を代表するスーパース
 ター小西政継の生い立ちから岳界への登
 場、そして現在に至るまでを詳細に描く。

頂は誰がために ラトックI峰
 初登頂の記録

服部孝司著

B6判●1200円

ラトックI峰に立った高田直樹隊長率いる
 『日本のポニントン隊』の誕生から初登頂
 までを追った生々しいドキュメント。

北壁の七人 カンチエンジュンガ
 無酸素登頂記

小西政継著

B6判●1300円

無酸素で未踏の北壁からカンチの頂に立つ
 た山学同志会隊「七人の男」の苦悩と喜び
 の日々を隊長小西が描くドキュメント。

続刊予定!

RCCIIの群像 (仮題)

私たちのシシヤパンマ (仮題)

〒105 東京都
 港区芝大門1-1-33



山と溪谷社

☎03(436)4021
 振替・東京8-60249

昭和初頭からの山村民俗誌



あしななか

●山村民俗の会・会誌 第一輯〜第一六〇輯復刊

今西錦司先生——「あしななか」復刊に寄せて

『あしななか』には、山で生まれ、山とともに暮らしてきたひとびとの生活、なかんづくその生活技術に関して、有形無形を問わず、つねに懇切なレポートが充満していた。そして、そういつたレポートを読んでいるうちに、なにか郷愁のような想いに駆られたのは、私ひとりではなからう。どの山村とはいえないけれど、山への往復にしばし足をとどめた山村のたたずまいのよさと、そこに住みついていたひとびとの人のよさ。しかし、そうしたわれわれと山とを結ぶ貴重な媒体としての山村も、またそこに生活していたひとびとも、時勢とはいえ急速にその姿を消しつつある。『あしななか』の復刻は、滅びゆくこうしたよきものになりたい、回向と見せないこともない。

(前日本山岳会会長)

■第一期／第1輯〜第100輯 全5冊(完結)
 総三、一六〇頁 揃定価五七、八〇〇円
 ■第二期／第101輯〜第160輯十会報・総目次他 全4冊
 好評刊行中 揃定価三七、二〇〇円

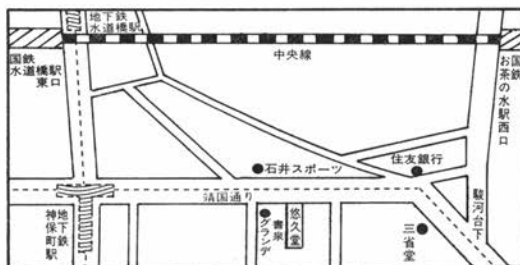
堅牢瀟洒な愛蔵版
 B5判・上製・麻布表紙
 カラー口絵―各号表紙
 最終巻配本時に付録
 第一輯〜160輯総目次・
 分類目録・執筆者別目録
■限定三〇〇組

発行 名著出版 〒112 東京都文京区小石川3-10-5 ☎03(815)1270(代表)

山岳書・動植物書

古本の買入と販売

関係書の御相談もどうぞ一地方出張も致します

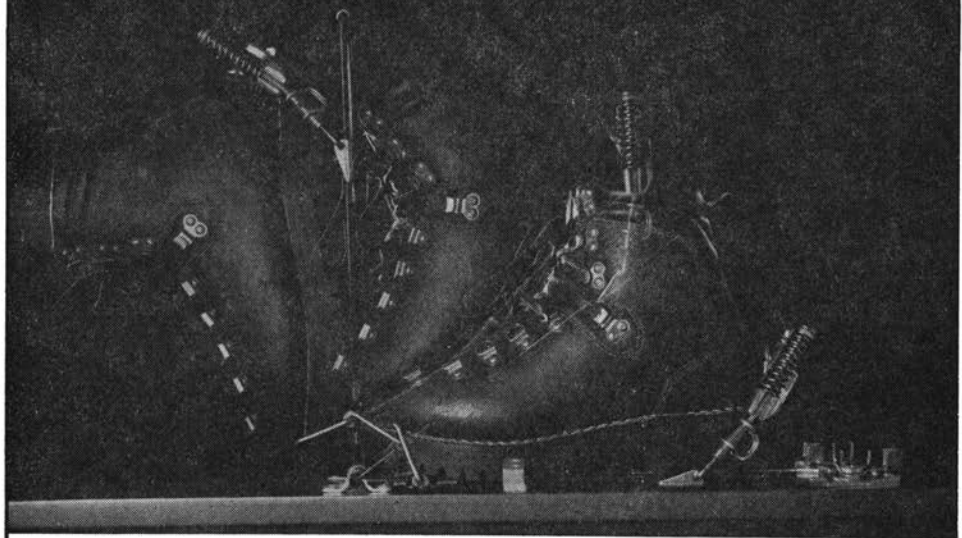


(有)悠久堂書店

〒101 東京都千代田区神田神保町1-3

☎03 (291) 0773・0920

SNOW TREKK



処女雪が待ってるぞ。

真っ白な世界。

誰かがやってきた形跡は何もない。

どうやら一番のり。

俺のあとに2本のシュプールが続く。

風の音と、スキーの音のみが仲間だ。

今日、大自然はすこぶるご気分。

俺も最高の気分。

登山・スキーツアー用ビンディング スノートレック
¥22,000

固定プレートを解放すれば、踵は180°自由に動き登行が楽に行なえます。固定すれば思うままに雪の原野の滑降が楽しめます。歩行の時は前プレートの強力なバネがスキーの推進力を高めるため、行程は従来の2~3倍ははかどります。

tp
NEW TOP

株式会社 ニュートップ

東京都台東区台東1-37-7
〒110 ☎03-834-5521

よりよきテントの最高峰を めざす吉田テント!

- 1978年 植村直己北極点単独旅行
- 1978年 日本大学北極点遠征隊
- 1980年 植村直己アコンカグア登山隊
- 1981年 北海道大学バルンツェ登山隊
- 1981年 植村直己冬期エベレスト登山隊
- 1981年 明治大学エベレスト登山隊
- 1981年 早稲田大学K2登山隊



夏山用テント

冬山用テント

テントの専門メーカー

小さな店の大きな自信! 吉田テント 東京都杉並区桃井1-3-3
☎(399)2548・夜間(398)8469



〒102. 東京都千代田区3番町14 TEL 262・0525

図説百科

山と自然を愛するすべての人々に贈る

山岳の世界

山の自然と文化のすべてを語る山岳ワイド百科!!

B4変型判・上製函入・表紙布クロス装・310頁・写真、図版600枚 定価18,000円



著者

アルベルト・バウムガルトナー
ハンス・ビーベルリッター
ノーマン・デーレンファース
エルヴィン・グレッツツバハ
ハンス・ハイエルリ
トニー・ヒーペラー
ギュンター・シュワイツァー
日本語版 監修者
西塚栄三郎
宮下啓三

翻訳・校訂者

石井不二雄
大井正一
岡沢祐吉
小野有五
喜多尾道冬
木村武二
中村純二
畑中信一
宮下啓三
山崎安治
若林隆三
渡辺勝
(五十音順)

特色

- 世界の山岳界第一線の著者陣七名による卓抜な内容
- 美術的にも、科学的にも貴重な600枚におよぶ写真と図版類

- 斬新なレイアウトの紙面に、世界の山岳のあらゆる側面をわかりやすく解説
- 地球上のさまざまな山岳を網羅し、その地理的・地学的な説明を示す

主要目次

世界の山々／山岳の生成と消滅／山岳の気象／山岳の植物と動物／山岳の自然災害／山岳の生活と文化／山岳の開発

推せんします

- 山岳知識の普及に貢献今井研二郎
- 自己研修のために……今西錦司
- 視野の広い魅惑の写真…風見武秀
- 専門的知識が容易に理解できる竹内均
- 山の未来を拓くもの……式 正英
- 世界の山岳博物館……平林国男
- 山への思いを深める本…今井通子
- 創造への道を教える山岳書塚本圭一

遙かなりエヴェレスト

—マロリー追想—



島田巽著

自然を愛する人々へ贈る……

G・L・マロリーがエヴェレストに消えてからすでに半世紀余り……。その若きアルピニストの偽ざる素顔を明快に描いた全十二章。

四六判・フランス装・10ボ組・290頁 価1,500円

11月末刊

大修館書店

〒101 東京都千代田区神田錦町3-24 振替／東京9-40504 電話294-2221<大代表>

『編集後記』

じつにあわただしい。やっと編集が終りそうになったら、もう初校刷りが出る。めまぐるしい限りだ。今年は着手が遅れたので、ゆっくり発行しようと腰を据えたつもりだったが、長い間のサラリーマン生活から、つい年内にやる気になってしまった。悲しい性格である。

はじめての編集であるためか、あるいは急いだせいか、編集上のミスが自分にも気がつくくらいある。たとえばメートル、m、月日、時間の表示方法など不揃いである。また地名の表記が統一されていない。そのほかにもカタカナ表記の不揃いが目立つ。これらは急いだせいもあるが、編者の決断の悪さもあつた。はつきりいえば、編者としてまだ一人前でないのである。

しかし、とにかく短期間に一応形ができたのは、多くの会員の協力によるものである。また、編者がいくらか編集に集中できる時間が持てたためである。「山岳」編集というのはいかにへん気骨の折れるもので、完成までにはまだ多くの時間をかけねばならない。

さて、内容であるが、あわただしく原稿を依頼したせいもあつて、思うようにはいかなかったが、巻頭のマライーニ氏、次の金子民雄氏のものなど、記録ではないが珍しいものと思う。金子氏の研究・紹介は登山には無関係であるが、ヒマラヤ、中

央アジアに関わるもので、興味を持って読まれる方も多いと思う。また、戸田氏の文章はじつにユニークで、山登りのさまざまな拡がりを考えさせてくれる。そのほかでは、日本の山に関するものが一つもないのがいささか残念である。

編集し終えて考えたことは、これからの当会の向うべき方向とか「山岳」の内容をどうするかということだった。ある岐路に立っていることは確かである。山岳界において、当会がどういう位置にあるのか、その位置を確定させたいうえで、「山岳」をどういう内容にしていくかを考えねばならない。A JやA A JやH Jでさえ、方向をさがしあぐねているように編者には思える。任期はあと一年であるが、編者にはその解答をそれまでに出す自信はない。もう一年迷いつつやらざるを得ないが、会員諸兄の御協力を得て、可能な限り良い「山岳」を作りたいと思う。くどいようであるが「山岳」は編者が勝手に作り上げるものではなく、会員全体がつくりあげるものである。会そのものが「山岳」にそのまま反映するものだと思う。(水野)

編集委員

水野 勉・堀内 章雄
藤本 敏行・児玉 茂
高野 啓介

廣告目次

表 2	日に日に、心は冬山……………好日山荘
1	モンクレール登山用羽毛服……………アシックス
2	日本山岳地図集成……………学習研究社
3	TOP BRAND OF WORLD……………キヤラパン
4	シンボルはユリの花……………協和銀行
5	信頼されて50年……………山友社たかはし
6	山とスキーの専門店……………片桐
7	海外の山と旅……………シエラブランカ
8	チヨモランマ・チベット……………講談社
9	常設登山相談室……………山幸
10	山と旅の本……………実業之日本社
11	ポールワーズ羽毛製品……………ザンク
12	梓書房版復刻「山」……………出版科学総合研究所
13	豊かな生活環境作り……………日本建鉄
14	飼料・肥料配合ブランド……………橋エンジニアリング
15	新岳人講座……………東京新聞出版局
16	登山・ハイキングシリーズ……………岳(ヌアリ)書房
17	山村滞在 他……………日地出版
18	山岳名著選集 他……………ベースボールマガジン社
19	日本登山大系……………白水社
20	ヨーデルの調べと山賊料理……………ブリガンド
21	背中与語る、曲線ザック……………美津濃
22	山なみ帖 他……………茗溪堂
表 3	山溪ノンフィクションブックス……………山と溪谷社
	山村民俗誌「あしなな」……………名著出版
	山岳書・動植物書……………悠久堂
	ペンディング・スノートレック……………ニュートリップ
	テントの最高峰をめざす……………吉田テント
	手造りトロフィー・オブジェ……………ラマーノ
	図説百科山岳の世界……………大修館書店
	ヒマラヤン・ジャーナル……………丸善

山岳 第七十六年(通巻一三四号)

一九八一年十二月十日発行

価三〇〇〇円

発行人 佐々保雄

編集人 水野勉

印刷所 株式会社 技報堂

電話 東京二六一局四四三三番

振替口座 東京三一四八二九番

電話 東京二六一局四四三三番

振替口座 東京三一四八二九番

電話 東京二六一局四四三三番

振替口座 東京三一四八二九番

電話 東京二六一局四四三三番

振替口座 東京三一四八二九番

電話 東京二六一局四四三三番

振替口座 東京三一四八二九番

電話 東京二六一局四四三三番

振替口座 東京三一四八二九番

電話 東京二六一局四四三三番

振替口座 東京三一四八二九番

電話 東京二六一局四四三三番

振替口座 東京三一四八二九番

電話 東京二六一局四四三三番

振替口座 東京三一四八二九番

電話 東京二六一局四四三三番

振替口座 東京三一四八二九番

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載を禁じます。

The Himalayan Journal

(Records of the Himalayan Club)

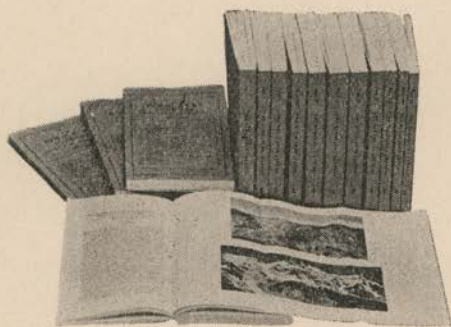
Edited by

K. Mason, C. W. F. Noyce and H. W. Tobin
Vols. 1-15 (1929-1949)

Oxford at the Clarendon Press
Reprint edition

Set price (Paper-bound) ¥85,000

- 300部限定版
- 体裁：原本と同じです。
- 分売はいたしません。
- 本復刻版をお買い上げくださったお客様には、国立国会図書館所蔵の「深田久彌旧蔵書目録」(九山山房蔵書)を無料進呈いたします。
- ヒマラヤン・クラブ会員は10%引きにてご購入いただけます。



〈ヒマラヤン・ジャーナル〉は、1929年の4月にヒマラヤン・クラブの機関誌として創刊され、以来50年にわたりヒマラヤ研究の基本的文献として高い評価を得てきています。そのなかでも、初期に出された〈ヒマラヤン・ジャーナル〉は、ヒマラヤ登山をつくりあげた過去の業績を集大成し、ヒマラヤ高峰登頂の名誉を担うべき先駆者たちの偉業をしるすものとして、永く古典としての地位を保っています。ヒマラヤの綿密な探査研究・登攀技術をはじめ、ヒマラヤ登山の先達となる貴重な研究・記録が殆ど本誌に圧縮され、結果として1950-1960年に築かれたヒマラヤ高峰登頂の黄金時代の足懸りをつくったことは衆知の事実です。

このたび弊社が刊行致しました復刻版は、世界の秘境といわれ、数々の未知の分野を残すヒマラヤ・内陸アジアに関する重要な内容を含み、また入手のむずかしくなっている第1-15巻を、ヒマラヤン・クラブのご許可を得て刊行したものです。斯界の皆様のご研究の資料のひとつとして、ぜひご購入くださいますようおすすめ致します。

発売元

M丸善

東京本店：〔〒03〕東京都中央区日本橋2-3-10 ☎(03)272-7211 振替東京7-5番

支店・営業所—東京(お茶の水・丸の内・内幸町・浜松町)・新潟・八王子・甲府・横浜・札幌・旭川・仙台・弘前・秋田・盛岡・山形・郡山・茨城・名古屋・静岡・岐阜・三重・金沢・富山・福井・京都・滋賀・大阪・奈良・神戸・姫路・岡山・松山・広島・山口・福岡(唐津町・天神)・長崎・鹿児島・沖縄

ニューヨーク・シンガポール

●丸善洋書コーナー：新宿伊勢丹

The Journal of
The Japanese Alpine Club

S A N G A K U

Vol. LXXVI

1981